

平成28年度 文部科学省 指定
スーパーグローバルハイスクール
研究開発実施報告書
〈第4年次〉



令和 2年 3月

学校法人 大阪医科薬科大学

高槻高等学校・中学校

ごあいさつ

高槻高等学校・中学校 校長 工藤 剛

本年、創立80周年を迎える本校は、学校法人大阪医科薬科大学の一翼を担う中等教育学園として「次世代グローバルリーダーの育成」をスクールミッションに掲げ、先進的なグローバル教育とサイエンス教育を特色教育の2軸とし、SGH・SSHの両指定校として文部科学省が主導する探求型教育を精力的に推進しています。本報告書は、SGH指定4年目の足取りをまとめたものですが、着実に教育内容が深まってきた手応えを感じています。

今年1月25日には、昨年度開催した「グローバルヘルス高校生フォーラム」を継続すべく、「第2回グローバルヘルス高校生フォーラム」を、昨年同様、京都大学グローバルヘルス学際融合ユニットのご支援の下、開催しました。フォーラム開会に先立ち、WHO 神戶センター所長サラ・ルイーズ・パーバー博士に基調講演をお願いしました。本行事は、準備から運営までほぼすべてを生徒が担当し、本校を含め5校の高校生、計約90名が8つのテーマに分かれて分科会をもち、同ユニットからの8名の若手外国人研究者が分科会のファシリテーターとなって英語で討議を行い、討議内容はフォーラムの最後で分科会ごとに発表されました。参加高校生の真剣な取り組みの姿勢、ユニークな発想と堂々とした発表を見て、昨年より一段ステージが上がったことを実感しました。

またSGH指定4年目となった今年度は、SGH事業での活動実績を難関大学の進学に活かす生徒が大きく増え、この点も喜ばしく思っております。

上記の他、本報告書に記載の通り、関係の皆様から厚意的なご支援・ご協力を頂き、本校SGH事業の内容が着実に深化し、指定4年目を終えられますことを心から感謝いたしております。

ここに指定4年目の報告書をまとめましたが、まだまだ改善すべき点があることは関係者一同自覚いたしております。ご高覧の上、皆様のご意見、ご指導をお願い申し上げる次第です。

【目 次】

研究開発構想図	1
I. 令和元年度 SGH 研究開発完了報告（別紙様式 3）	2
II. 令和元年度 SGH 研究開発の成果と課題	14
III. 実施報告書	
1. 構想調書の概要	18
2. 令和元年度 年間活動 概要	21
3. 研究開発単位 I の実施報告書	
(1) 「グローバル課題研究」の設置について（全体）	《(I)－a》[事業計画⑤⑥⑰] 28
(2) 「グローバル課題研究」の設置について（高 1）	《(I)－a》[事業計画⑤] 30
(3) 海外連携校との協働活動・課題研究の成果発表会の企画・運営	《(I)－a》[事業計画⑪] 37
(4) 「グローバル課題研究」の設置について（高 2）	《(I)－a》[事業計画⑥] 54
(5) 連携大学の支援によるアジア・フィールドワークの企画・運営	《(I)－a》[事業計画⑪⑫] 68
(6) 「グローバル課題研究」の設置について（高 3）	《(I)－a》[事業計画⑰] 85
(7) 他校との共同発表会への出場	《(I)－a》[事業計画⑲] 89
(8) 国内高大連携事業の実施	《(I)－c》[事業計画⑨⑭] 91
(9) 「SGH 特別セミナー」	《(I)－c》[事業計画⑨⑭] 92
(10) 「グローバル課題研究」独自教材について	《(I)－a》[事業計画⑳㉔㉕] 93
4. 研究開発単位 II の実施報告	
(1) 総学「グローバルスタディーズ入門」「グローバルスタディーズ」の設置について （高 1・2・3）	《(II)－a》[事業計画①⑦⑧⑱] 96
(2) 「グローバル英語表現 I」の設置について（高 1）	《(II)－b》[事業計画②] 109
(3) 「グローバル英語表現 II」の設置について（高 2・3）	《(II)－b》[事業計画③⑯] 115
(4) 「グローバル時事英語」の設置について（高 1）	《(II)－c》[事業計画④] 120
(5) 「グローバルリーダーシッププログラム（英国研修）」「次世代リーダー養成プログラム プレコース（米国研修）」	《(II)－d》[事業計画⑮] 123
IV. 関係資料	
1. 運営指導委員会記録	135
2. 高槻高等学校版 SGH ルーブリック	153
3. 本区 SGH 事業の研究開発組織	157
4. 本校教育課程表	158

学校法人 大阪医科薬科大学 高槻高等学校・中学校 SGHの概要図

医科大学と一体化したアジア圏の人々の健康を支える
グローバルリーダーの育成

I. 令和元年度SGH研究開発完了報告（別紙様式3）

令和 2 年 3 月 31 日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

大阪府高槻市大学町2番7号
学校法人 大阪医科薬科大学

理事長 植 木 實 印

令和元年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成31年4月1日（契約締結日）～令和2年3月31日

2 指定校名

学校名 高槻高等学校・中学校

学校長名 工藤 剛

3 研究開発名

医科大学と一体化したアジア圏の人々の健康を支えるグローバルリーダーの育成

4 研究開発概要

本校 SGH 事業は、同一法人下の大阪医科大学との一体的な高大連携により、「グローバルヘルス」に問題意識を持ち、様々な方向から、歴史的にも日本と関係の深いアジアの人々の健康問題に取り組む人材を育成し、さらに思考力・コミュニケーション力・リーダーシップを高めることによりバランス感覚あるグローバルマインドを育成する教育システムの開発を目的としている。併設型中高一貫校であることから中学3年から4年をかけ本事業を推進している。中学3年生にその入門となる学校設定科目「グローバルスタディーズ入門」を開設、高校2年生は「第5回アジア・フィールドワーク」（パラオ共和国）を実施、年度末には「第4回 SGH 公開発表会」を開催、SGH コースの高校生全員が口頭発表やポスター発表を行った。本年はスタンフォード大学より Gary Mukai 博士と大阪医科大学名誉教授 河野公一氏2名の研究者を招き、「SGH 特別セミナー」を開催した。また、本校も実践を近隣校へと普及させるために「第2回グローバルヘルス高校生フォーラム」を開催し、近隣4高校15名の他校生を招いて協働活動を行えたことは、本研究開発にとり有意義な事業となった。尚、高校1年生は「第6回海外課題研究中間発表会（台湾研修）」（2月・台北市・私立延平高校等）については、実施に向け努力を行ったが新型コロナウイルスの影響のためやむなく中止となった。また、年度末に参加を予定していた関西学院大学主催「WWL・SGH×探求甲子園2020」、京都大学主催「京都大学 ポスターセッション2019」も前述の理由から中止となり、生徒の発表の場が確保できずに残念であった。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①SGH コース事業に資するキャンパスレイアウト新構想に基づく新校舎群の建設												
②大阪医科大学との教学面での高大接続推進		○	○	○	○	○	○	○			○	
③SGH コース事業に資する教員の積極的採用											○	
④本校とケンブリッジ大学関係者が共同主催するリーダーシップ研修への財政支援	○											○
⑤本校とスタンフォード大学が共同開催するオンラインコースのための財政支援				○								
⑥中学「英会話」授業推進への財政支援												
⑦アクティブラーニング推進のための教員研修の開催の財政支援											○	
⑧本校主催「グローバルサイエンスフォーラム」(7 高校参加) 開催の財政支援												○
⑨運営指導委員会					○						○	

(2) 実績の説明

① SGH コース事業に資するキャンパスレイアウト新構想に基づく新校舎群の建設

- ・平成 28 年度から約 5 年をかけ、特色ある理科教育、実効性のあるグローバル教育を行うためのハード面での充実を図るため、新校舎の建設を含むキャンパス整備事業を推進している。
- ・平成 29 年 3 月に第 1 期工事を終え、理科実験室 7 室を擁する新校舎が完成し、SGH と並び本校が指定を受けている SSH 事業の推進に大きく寄与した。
- ・第 2 期工事は平成 30 年 8 月に終了し、新図書館やアクティブラーニングコモンズ、300 名程度を収容できるコナコピアホールも完成し、SGH の活動に大きく寄与した。
- ・第 3 期工事が行われ、職員室、その他国際教育に資するセミナールーム等各種施設が、2020 年 3 月に完成予定であり、更に SGH 活動に弾みをつけることとなる。

② 大阪医科大学との教学面での高大接続推進

- ・SGH、SSH 事業における教育内容を高度化するため、同一法人下の医科大学の関係教員の指導を受ける機会を徐々に拡充している。平成 31 年度は、「大阪医科大学基礎医学講座」を約半年にわたって開講し、高校 1、2 年生の医学部医学科への進学希望者計 66 名が受講修了書を受け取った。「生命科学系の次世代リーダーの育成」を目指す本校 SSH 事業と「グローバルヘルスに資する次世代リーダーの育成」を目指す SGH 事業の双方にとって極めて有意義なものとなった。生理学、衛生学・公衆衛生学、微生物学、法医学、解剖学、病理学、薬理学、生化学の 8 講座が開講された。

③ SGH コース事業に資する教員の積極的採用

- ・ 特色ある SGH 事業を展開するため、課題研究の指導に対応できる若手の高校教員、また高校生への指導も期待できるパブリックヘルス、グローバルヘルスに精通した医科大学の教員の採用に努めた。

④ 本校とケンブリッジ大学関係教育団体が共催するリーダーシップ研修への財政支援

- ・ SGH コース (GA コース) 生徒の英語運用力とリーダーシップを高めるため、英国ケンブリッジ大学関係者で組織される教育団体 (BlueBridge Education) を本校に招き、3 日間、校内ですべて英語による研修を実施した。研修会運営費用の一部を法人が負担した。

⑤ 本校とスタンフォード大学が共同開催するオンラインコースのための財政支援

- ・ 平成 27 年度にスタンフォード大学国際異文化教育プログラム(the Stanford Program on International and Cross-Cultural Education (SPICE) at Stanford University)と高槻高等学校が共同で開設したインターネットによるオンライン講座を平成 31 年度も継続開講した。これは 9 月から 3 月までの 7 ヶ月間に 8 回のオンライン授業をライブで行うものである。本講座の正式名称は、"The SPICE/Stanford e-Course on Global Health for Takatsuki Senior High School" であり、グローバルヘルスを中心に据えた本校生徒の課題研究に十分資するものである。今年度の講座運営費 (人件費を含む) も、これまでと同様にすべて法人が負担した。

⑥ 中学「英会話」授業推進への財政支援

- ・ SGH 事業を実効性あるものとするため、早い段階から高い英語運用力育成を目指して、法人として外部英会話学校 (ベルリッツ・ジャパン株式会社) と契約し、中学 1 年から 2 年生までに、週 2 ～ 3 時間の英会話授業を実施した。また、外部英語教育機関 (ウェブリオ株式会社) と契約し、中学 3 年生に週 2 時間のフィリピンの現地講師との 1 対 1 のオンライン英会話授業を実施しているが、週 1 時間分の受講料は法人が負担している。平成 31 年度は中学 3 年生 (在籍 267 名) では 133 名が 2 級以上を取得している。高校 1 年生 (在籍 260 名) は 123 名が 2 級を、準 1 級を 4 名が取得、高校 2 年生 (在籍 235 名) は 5 名が準 1 級を、1 名が 1 級を取得した。学年により差はあるが、年々一定の成果をあげてきていると言える。

⑦ アクティブラーニング推進のための教員研修会の開催の財政支援

- ・ 2 月 15 日 (土) に、全国から約 160 名の高校教員、教育委員会関係者等が本校に集い、「第 4 回アクティブラーニング研究会」を実施した。京都大学の松下佳代教授、新潟大学の斎藤有吾准教授による講演もあり、大変な盛会となった。開催に際し、法人として会場設営等、必要な支援を行った。全体会では、本校の SGH コースの生徒 (高 1) 1 グループと SSH コースの生徒 (高 2) 1 グループ、および中学 1 年生がそれぞれの課題研究、夏期研究発表を披露し、多数の参加教員から評価を頂いた。

⑧ 本校主催「グローバルサイエンスフォーラム」開催の財政支援

- ・ JST (科学技術振興機構) の SSH 交流会支援事業として始まった H27 年度「近畿圏高校生サイエンスフォーラム」を引き継ぐ取り組みとして、平成 31 年度「グローバルサイエンスフォーラム」を開催し、法人としてフォーラム開催に向け財政支援を行う予定であったが、コロナウイルスの影響のため中止となった。

⑨ 運営指導委員会の開催

- ・第1回を8月23日に、第2回を2月22日に実施した。第1回運営指導委員会では本校のSGH事業の4年目にあたり、3年次の運営および第4年次前半の事業について本校SGH事業各責任者と委員との間で意見交換を行い、委員より指導・助言を頂いた。第2回委員会は、同日に開催した本校の「SGH事業公開発表会」について委員に見学して感想をいただきや本年度の事業について、評価や今後の改善点等について指導をいただいた。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間 (31年4月1日 ~ 32年3月31日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①総合学習「グローバルスタディーズ入門」の設置												→
②高1「グローバル英語表現I」の設置												→
③高2「グローバル英語表現II」の設置												→
④高1「グローバル時事英語」の設置												→
⑤高1「グローバル課題研究」の設置												→
⑥高2「グローバル課題研究」の設置												→
⑦高1「グローバルスタディーズ」の設置												→
⑧高2「グローバルスタディーズ」の設置												→
⑨京都大学グローバルヘルス学際融合ユニットとの高大連携事業の実施												→
⑩スタンフォード大学とオンライン講座共同開設						→	→	→	→	→	→	→
⑪海外の連携大学・高校との協働活動・課題研究の成果発表会								→	→	→	→	→
⑫海外の政府の支援によるアジア・フィールドワーク（パラオ共和国）の企画・実施							→	→				
⑬ケンブリッジ大学関係機関とリーダーシップ集中研修共催	→											
⑭「SGH 特別セミナー」「グローバルセミナー」の継続的实施												→
⑮夏期「英国・米国グローバルリーダーシップ研修の実施					→							
⑯高3「グローバル英語表現II」の設置												→
⑰高3「グローバル課題研究」の設置												→
⑱高3「グローバルスタディーズ」の設置												→
⑲他校との共同発表会への出場									→	→	→	→
⑳「グローバル課題研究」に関する「独自教材」の開発												→
㉑「グローバルヘルス高校生フォーラム」の開催												
㉒「アジア高校生架け橋プロジェクト」受入								→	→	→	→	→
㉓他校教員との「グローバル課題研究」等公開授業と研修会						→	→	→	→	→	→	→
㉔探求的な社会科授業の確立												→
㉕「独自教材」を使用した学習活動の実践												→

(2) 実績の説明

① 総合学習「Gスタディーズ入門」を設置 [中3 GA コース]

私立中高一貫校の利点を生かすため、中学3年生を対象に開設する。国際人に求められる教養や論理的な思考力の習得、グローバルヘルスの基本的理解、ツールとしての英語を活用したグローバルイシューの学

習を通して、バランスのとれたグローバルマインドを身につけるよう指導した。ここでの経験が文化祭の発表や2月の公開発表会における英語プレゼンテーションにも繋がった。

② 「グローバル英語表現Ⅰ」設置 [高1 GA コース]

学習指導要領の「英語表現Ⅰ」に加え、英語で発表を行うにあたって必要な英語力を培い、2月実施の台湾での現地高校（延平高級中学）・大学（台湾大学・台北医学大学）における発表を目標として、英語での発表力の強化訓練を行った。特別セミナー・文化祭、そして近隣SGH指定校での発表会での発表に3グループが参加し、ここにおいて生徒の成長が大きく見られた。

③ 「グローバル英語表現Ⅱ」設置 [高2 GA コース]

高校2年のGAコースの生徒を対象に標記の学校設定科目を開講。11月に設定している海外フィールドワーク（パラオ共和国）を目標とし、通常の「英語表現Ⅱ」の内容に英語で発表する力や英語で議論する力を養うための内容を加えた指導を行っている。海外フィールドワークでは、訪問国の様々な立場の人々（離島の島民、同年代の高校生と保護者、現地の環境保護NPO）や政府（保健省・教育省）職員から、全生徒が英語で聞き取りや質問、アンケート調査を行い、課題研究の現地調査や資料収集に資する研修ができた。

④ 「グローバル時事英語」設置 [高1 GA コース]

高校1年のGAコースの生徒を対象に、標記の学校設定科目を開講し、世界の様々な出来事についての英文を読み、要約発表や、自分の意見を述べられるようにネイティブ教員から指導を受ける機会を設けて、対象生徒の英語運用力向上に寄与している。

⑤⑥ 「グローバル課題研究」の設置 [高1・2 GA コース]

高校1年の課題探究A、高校2年の課題探究Bを、それぞれ週に2時間配当し実施した。Aにおいては、まずグローバル 이슈、とりわけグローバルヘルスに関する講義を通して問題意識を持たせ、課題研究テーマを決定。3学期の台湾研修での発表を目標として位置づけ、2年次におけるより高度な研究の足掛かりとなるよう研究を進めさせた。Bにおいては、1年次の学習を深化させ、パラオでのフィールドワークを通してそれぞれの研究課題に関する問題意識を深め、実際に現地での調査や資料収集を実施して、3学期にそれぞれの課題論文を完成させた。本校のSGH事業公開発表会やスーパーグローバルハイスクール(SGH)全国高校生フォーラム、WWL・SGH×探求甲子園などで発表を実施することを予定していた（コロナウイルスの影響のため中止）。また、グローバルヘルス高校生フォーラムでは主体的に運営を行う重責を果たした。

⑦⑧ 「グローバルスタディーズ」の設置 [高1・2GA コース]

高校1年・2年のSGHコース生徒を対象に週1時間標記の総合学習の時間を設けた。授業ではグローバル 이슈、グローバルヘルスに関する英文を読み、英文での情報収集方法を実践させた。また近現代の日本とアジアの関係、特に日台関係、日パラオ関係等についての学習をした。併せて日本人の海外での活躍等についても学ぶ機会を設けた。海外で学ぶことや海外から見た日本人の姿について、意識が高まったことが生徒への調査から明らかとなった。

⑨ 国内の高大連携事業の実施（京都大学グローバルヘルス学際融合ユニットを中心に）

本校が SGH アソシエイト校となる前年の平成 26 年度から大阪医科大学、京都大学、大阪大学、神戸大学、関西学院大学等と高大連携を学部や研究室のレベルで推進してきた。中でも本校の中心テーマであるグローバルヘルスに関して生徒の専門的な学習に寄与しているのが京都大学グローバルヘルス学際融合ユニットとの高大連携である。平成 31 年度に関しては以下の通りの連携事業を行った。

- （１）京都大学在籍の海外からの若手研究者を本校に招聘して実施するグローバルセミナーを実施
[コンゴ、インド、ボツワナの研究者がゲスト講師として来校し、３回実施]

⑩ スタンフォード大学と online 講座 共催

"The SPICE/Stanford e-Course on Global Health for Takatsuki Senior High School 2019" スタンフォード大学国際異文化教育プログラム(the Stanford Program on International and Cross-Cultural Education (SPICE) at Stanford University)と本校が共同開講。令和元年 9 月から令和 2 年 3 月までに米国西海岸からの 8 回のオンライン授業をライブで実施。5 期目の今年度は高 1 生計 45 名が受講し、修了証書を授与された。

⑪ 海外の連携校との協働活動・課題研究の成果発表会（コロナウイルスの影響のため中止）

「2019 年度 高 1 GA コース 第 6 回 海外「課題研究」中間発表会（台湾研修）」

日程：令和 2 年 2 月 25 日（火）～ 2 月 28 日（金）

生徒：高校 1 年 45 名 教員：4 名

場所：私立延平高級中学、国立台湾大学 公共衛生学院、私立台北医学大学公共衛生学院

グローバル企業訪問：台湾富士ゼロックス株式会社、みずほ銀行台北支店

⑫ 連携大学の支援によるアジア・フィールドワークの企画・実施

「2019 年度 高 2 GA コース 第 4 回アジア・フィールドワーク（パラオ研修）」

日程：令和元 年 11 月 10 日（日）～ 11 月 15 日（金）

生徒：高校 2 年 41 名 教員：3 名

場所：パラオ共和国内（コロール市、ガラルド州オール村、ペリリュウ州ペリリュウ島）

会場：私立ミンゼンティ高等学校、国立パラオ高等学校、パラオ政府保健省、パラオ政府教育省、
国立ベラウ病院、在パラオ日本国大使館 など

指導：京都産業大学 国際関係学部 三田 貴 教授、

現地 NPO（Palau Conservation Society）職員

⑬ 海外機関との共催によるリーダーシップ集中研修開催

「2019 年度インターナショナル ヤングリーダー育成プログラム」

（正式名称：International Young Leaders Advancement Programme 2018）

日程：平成 31 年 4 月 1 日（月）～ 4 月 3 日（水）

生徒：高校 1 年 45 名 教員：4 名

実施場所：本校内

指導：ケンブリッジ大学関係者による教育会社（BlueBridge Education）講師、大学生

※BlueBridge Education は Cambridge 大学 Homerton College で、大学の正規プログラム Homerton International Programmes の運営・指導を委託されている。

⑭ 「SGH 特別セミナー」「グローバルセミナー」等の継続的实施

「SGH 特別セミナー」の開催

(1) 第5回 10月1日(火) [使用言語: 英語]

講 師: スタンフォード大学 Gary Mukai 教授

テーマ: Early Japanese-American History and Global Mindsets

黎明期の日系アメリカ人の歴史とグローバルマインドセット

(2) 第6回 11月19日(火) [使用言語: 日本語]

講 師: 大阪医科大学 名誉教授 河野公一 先生

テーマ: グローバル社会における感染症のアウトブレイク ―パブリックヘルスの役割―

「グローバルセミナー」の開催

(1) 第17回 7月2日(火) [使用言語: 英語]

講 師: 京都大学大学院 医学研究科 助教 Patou Musumari 氏 (コンゴ)

テーマ: Global Health in Armed Conflict Zones: Case of Ebola in D.R. Congo

武装化された紛争地域のグローバルヘルス: コンゴ共和国におけるエボラ出血熱の事例

(2) 第18回 9月24日(火) [使用言語: 英語]

講 師: 京都大学大学院 医学研究科 Swati Mittal 氏 (インド)

テーマ: Smoking and its Effects 『喫煙とその影響』

(3) 第19回 10月29日(火) [使用言語: 英語]

講 師: 京都大学大学院 薬学研究科 Mpumelelo Ntlogwa 氏 (ボツワナ)

テーマ: Lessons learnt from Botswana's HIV/AIDS treatment programs

―ボツワナにおけるエイズ治療計画からの教訓―

⑮ 海外連携機関との「次世代リーダー養成プログラム」「同プレコース」の実施

(1) 「2019年度次世代リーダー養成プログラム」(英国: 7/25(木) ~ 8/4(日))

参加生徒: 40名(高1: 40名) 引率教員: 2名

(2) 「2019年度次世代リーダー養成プログラムプレコースボストン夏期語学研修+ホームステイ」

(米国: 7/26(金) ~ 8/5(月)) 参加生徒: 44名(中3男女各22名) 引率教員: 3名

⑯ 「グローバル英語表現 II」の設置 [高3GAコース]

高1・高2の英語表現でこれまで学んできた表現法をもとに、自らの意見を、説得力を持って伝えられるよう、また切り口を変えて意見を出せるように指導を行った。

⑰ 「グローバル課題研究」の設置 [高3GAコース]

SGH 指定校として取り組んだGAコースのグローバル課題研究の集大成として設置。「グローバルヘルス・アジアの健康問題」について高校2年次にそれぞれがまとめた研究論文の成果を、「アジアの人々の健康を支えるための提言書」としてまとめて公表する。(別冊生徒作品集)

⑱ 「グローバルスタディーズ」の設置 [高3GAコース]

コミュニケーション英語・グローバル英語表現で養成した英語力を元に、国際関係、国際保健、比較文化、環境など、多分野にわたるトピックスを取り上げ、実践的な英語力と思考力を養成していく。社会問題に関心を持つことを通じて、日本と英語圏との比較をし、自分の意見を表現し、自分の考えを発展させて、

議論を深める方法や技術を身につけることを目的として行った。

⑲ 他校との共同発表会への出場

(1) SGH 全国高校生フォーラム 12月22日(日) 東京国際フォーラム

参加生徒：8名(高2：6名 アジア架け橋留学生：2名)

発表タイトル：Japanese Countermeasures against Water Shortage in Times of Disasters

— From Cases in Japan and Palau —

(2) 高校生のためのポスターセッション 3月20日(金) 11:30～15:30 京都大学

参加生徒2名(高2：1名、高1：6名) 発表は高2生

発表タイトル：伝統料理が肥満を減らす—太平洋の島国におけるタロイモの課題と可能性—

(3) SGH 甲子園 3月21日(土) 関西学院大学

参加生徒：中3・高1・高2GAコース生(約10名) 発表は高2：7名

発表タイトル：プレゼンテーションセッション部門

Higher Education in Developing Countries with Using Radio

- a Basis for Trinity Innovation -

ポスターセッション部門

Sustainable Solutions for Waste Problems in the Pacific Islands – From Investigation in Palau, the Most Ecologically-Minded Country in the Pacific Islands —

ディスカッションセッション部門

男性の育児休暇取得をさらに促進するための課題と解決策

※(2)(3) コロナウイルス感染防止の為、開催中止

⑳ 「グローバル課題研究」に関する「独自教材」の開発

指定4年目の取り組みとして、SGH アソシエイト校時代(平成27年度)を含め、過去4年間における課題大研究の指導実践をもとに、本校オリジナル教材集を編纂し、主要なグローバル 이슈をカバーしつつ、健康や公衆衛生の問題に焦点を当てた内容となっている。それを本年度は使用することによって、教材自体のブラッシュアップを図っていくことを行った。

㉑ 「グローバルヘルス高校生フォーラム」の開催

本校の行う実践を近隣高校へと普及させるための取り組みとして昨年度に引き続き行い、また高大連携の事業として京都大学グローバルヘルス学際融合ユニットの後援で開催した。高校生が協働活動を通じて社会課題として顕在化しつつある「グローバルヘルス」を意識し、高校生の視点から世界の人々の健康問題や健康の向上を考える機会を設定することを通して、バランス感覚の優れた次世代グローバルリーダーを育成する目的で行った。招待校4校15名の生徒が参加した。

㉒ 「アジア高校生架け橋プロジェクト」入れの受け

8月末から翌年3月まで「アジア高校生架け橋プロジェクト」による留学生2名の受け入れを行った。1名はベトナム、1名はラオスからの生徒で高校1年に編入在籍させた。昨年に続いての留学生の受け入れとなるが、このことからグローバル教育として異文化体験として学ぶことも多々あり、今後の活動に有意義に活かしていくものとした。

②③他校教員との「グローバル課題研究」等の公開授業と研修会

今年度より、関西学院高等部 WWL の連携校として、本校教員も近隣校とともに拡大会議に参加しており、AI を活用した教材の開発などに取り組んでいる。次年度も引き続き活動を継続していくとともに、合同での取り組みに繋げていきたい。

②④探求的な社会科授業の確立

本校社会科のカリキュラムでは GA コースには高 1～高 3 次に GA 課題探究、GS、GL コースについては高 3 次に日本史探究、世界史探究、地理探究の授業が設定されている。GA 課題探究についてはかなり充実してきたので、今後は GS、GL コースでの取り組みについても充実させていきたい。

②⑤「独自教材」を使用した学習活動の実践

昨年度、本校独自教材を作成し、今年度は主に高校 1 年生を対象にして、独自教材を使用した学習活動の実践に取り組んだ。今年度は作成メンバー以外の先生方にも積極的に独自教材を活用してもらい、意見を吸い上げてブラッシュアップを図っていきたい。

7 目標の進捗状況、成果、評価

(1) 研究開発 I に関して

本校の SGH 推進部が作成した独自のルーブリックを用いて検証を行っている。

〔高 1〕SGH 事業も 4 年目を迎え、本コースの研究活動や学習内容が全般的に周知・浸透してきており、その取り組みを理解した上で、このコースを選択した生徒であるため社会問題・国際問題などに高い関心を持っている。その為、全ての項目において、評価 3 ないし評価 4 を選んだ生徒が多く、平均値も 3.5 を超えている。指導教員が想定していた自己評価ラインに達しており、おおむね順調に取り組むことができたと考えている。『課題設定』の「グローバルヘルスと関連付けられているか」について、評価 1 ないし評価 2 をつけた生徒が 5 名いるが、題材としてはグローバルヘルスに関連しているのに、聴講者に理解しづらかった点を反省している。『資料の収集・分析』については、先行研究もしっかりしており、十分に資料の収集・分析ができていることをうかがわせる。『課題解決』については、より具体的な解決策を創出しようとしたが、納得できる結論に入っていないという評価がやや高かった。また、全体として、『課題解決』『課題発表』については過年度比較では低い数値となっているが、コロナウイルスの影響のため海外課題中間発表会（台湾研修）が中止されたため準備はしたものの、達成感はなくその意識が数値となって表れたと推測される。

〔高 2〕ルーブリック評価を実施しているので、ここでも過年度との比較を行う。

全体的に高い水準で高止まりをしているが、特に「グローバルヘルスとの関連」「課題解決案の創出」「課題発表」「海外研修の成果」の項目で高い数値が出た。過年度においては課題研究テーマの設定で研修やフィールドワークの内容にそぐわないものもあったが、台湾研修やパラオフィールドワーク研修に行くことを前提に教員側が指導することで、しっかりとしたテーマ設定が可能となったことが、高い数値となった要因であると考えられる。特に、課題研究のロードマップを生徒・教員がともにしっかりと把握することが授業・研究を円滑に進める重要ポイントであると考え。一方、「社会科学的または統計的資料収集・分析」「結論に厚みのある記述」については評価 3 とする生徒が多かったが、課題設定後の調べ学習・解決案の創出には時間をかけなければならないことを再認識することとなった。

また、過去 4 年間の中で、今年度の平均値は全体的に高い水準となっているが、これは SGH 事業の深化に伴い、生徒にもその内容が理解・浸透していることが表れている。「課題設定」「課題解決案の創出」「課

題発表」「海外研修の成果」で、平均値が4を超えたことが特徴的である。また、本校で実施した「グローバルヘルス高校生フォーラム」「SGH事業 公開発表会」などが、適切な時期に大きな舞台で発表する行事があり、それに向け生徒が目標を設定しやすい環境の中で課題研究に取り組めたことにより、このような数値が出たと考えられる。今年度は、指導教員が多く配属され、多くの目で生徒を指導することができたこともその要因である。

〔高3〕これまで研究してきたことへの提言書を作成することから、GAコースの中でこれまで行ってきた課題研究をまとめている。そして、その評価として高1・高2で使用したループリックではなく、「GAコース課題研究自己評価表」による自己評価を実施している。問1では5つの観点、①調べ ②発表 ③まとめ ④提案 ⑤英語の活用 であるが、これらをクラス構成がほぼ同規模である70期生と比較すると②③以外の項目ではすべて上回った数値となっている。これは、GAコースの学習内容等が周知・浸透していることから意識的にも高い生徒がこのコースを選択して取り組んでいることに由来すると考えている。その点からすると、もっと高い数値で推移しても良いとも考えられる。そこで高い数値が出なかったことと、②③においては70期に下回ったことに関して、次のように考察している。高3生にとっての進学の為の学習を進めなければならないことと課題論文や提言書作成に十分な時間を掛けられないこととのジレンマに陥っている生徒が少なからず見受けられたことが、その原因に挙げられると考えている。高1・高2で課題研究に取り組み、更にもっと深く取り組みたいが、進学のための勉強が気になって十分に取組みないところがあったと推察できる。今後、この点についての解決策を考えていかなければならない。また問2「GAコースでの課題研究での経験は、あなたにとって有用であったと思いますか」問4「課題研究を通じて自己の変化や成長を実感できたと思いますか」の評価は高く、生徒がGAコースを選択して良かったと考えている証であり、本事業の目的の達成につながることでとらえている。しかし、問3「GAコースの課題研究は、新名の卒業後の進路決定や将来の目標形成に影響をあたえたと思いますか」では、やや評価が低かったのは、現実に進路選択を迫られ、その進路選択にGA課題研究が役立ったかはどうかと考える余裕がなかったように思われる。今後、課題研究でのまとめの取り組みを全体的にどのような形で行うのか、更なる改善に取り組んでいきたい。

（2）研究開発Ⅱに関して

〔高1〕本校のループリックに基づき過年度比較を行う。『テーマ選定』、『英語表現』のうちの「語彙・語法・文法」「構成力」、『プレゼンテーション』の「内容」についてはどの生徒も評価4ないし評価5を付けた生徒が70%以上おり、プレゼンテーションを行う上での基本的な部分についてこれらの項目については達成感を得ている生徒が多くいることがうかがえる。しかし、特に『プレゼンテーション』の「ツール及び資料」「話し方」「動作」においては昨年度よりも8%から5%程度下回っており、プレゼンテーションの実践的な練習を行いながら、そのスキルを高めることが必要になってくる項目については自己評価がやや低く留まっていると思われる。これは、今年度は台湾研修が中止となり、実践的なプレゼンテーションの取り組みをする機会を失ったことが、数字の上にも表れていると推測できる。今後の指導において海外研修前にこれらの項目に即して更に充実度を上げていく指導が求められる。

〔高2〕昨年度生徒と今年度生徒の比較を行った。昨年度生は英語の実力は低くないのに、『英語表現』の項目で評価4・5で6割を超えない結果となっている。今年度の生徒も同じような結果となっている。これはこのGAコースの課題研究の発表が最終的には英語での発表を行うことになり、このことが生徒にはかなり高いハードルとなっていることがわかる。本格的な課題研究を行い、その内容に伴うような英語での発表ということで、英語科教諭の協力もこれまで以上に得ながら進めてきているが、生徒の自己評価はそれなり

の数値は出てきているが、より高い数値結果となるようにしていくことが今後の課題となってくる。一方、『テーマへの取り組み』『プレゼンテーションの力』では80%近くが評価4・5をつけている。研究のテーマについて高1での研究を受け、高2での確かなテーマを選択していることは主に社会科教諭の指導が一定の成果として表れてきているためである。また、プレゼンテーションについては、何度か発表の場を校内・校外において得て、その実践によって生徒が発表に対して自信をつけていることの結果であると言える。

[高3]ルーブリック評価について、①テーマへの取り組み具合 ② 語彙・文法・語法 ③構成力 ⑤話し方や動作 の項目でそれぞれ評価4・5をつけた生徒が平均で75%を超えており、高い自己評価となっている。しかしながら、④発音・抑揚などは英語でのプレゼンテーションを行う際に、自分の意見を正確に伝える場合に非常に大切な要素になることを身をもって知ることとなり、結果としてそれほど高い数値とはならなかったようである。また、『ディベートの基本スキル』については、クラス内での取り組みとして行ったが、基本スキルを示すことはできたが習熟するまでのレベルに扱うことはできなかった。この点についての取り組みを少ない授業時間数の中でどのように行っていくかが今後の課題となる。

8 次年度以降の課題及び改善点

(1) 教育課程の研究開発の状況について

グローバルな問題を自己の問題として捉え、それに対して現状を認識し分析を行い、その問題解決策を考え、提言を行うことができることがグローバルリーダーとしての資質の1つであると考えられる。それに対して、本校の課題研究のカリキュラムにおいては、[高1次] 1. グローバルイシューとは何か 2. グループによるグローバルイシューについての研究 3. その発表の機会としての台湾研修 [高2次] 4. グループから個人による課題研究 5. その資料収集のためのパラオフィールドワーク 6. 課題研究論文の完成 7. それに基づく提言書の完成 という一連の課程を完成させることができ、そこで用いる独自教材も作成することができた。これによって、このカリキュラムを担当とする教師誰もが、一定レベルの授業を行うことができるようになった。今後は、この課程のさらなるレベルアップを図るように実践していくことが課題である。

また、各学年を通して、①ICTを利用して探究活動を進めたこと、②課題研究の進め方として、生徒・教員ともに計画性を持って進めたこと、③JICAを含め外部機関を活用して課題研究を進めたことが、特に今年度定着してきており、本校の課題研究の取り組みとして1つのパターンができつつある。しかしまだ不十分な部分も多いので、生徒たちが満足いく研究活動ができるように、更なる環境づくり、指導体制づくりを進めていきたいと考えているところである。

課題研究をまとめるにあたり、論文作成上の形式の指導は昨年度の蓄積を経て形式はまとまってきたが更なる充実化を図るため、独自の教材・既成の教材等を用いて一層体系的な指導を進めていく必要がある。昨年度は、独自教材の作成が完成した為、本年度にその実践と検証を行った。それをもとに、更に改善点を見つけ、完成度を上げていく予定である。

(2) 高大接続の状況について

本校における取り組みの成果が表れてきていると考えている。今年度の大学入試において、この教育課程で学んだことを活かし、特色入試や推薦入試によって進学希望を実現させた生徒が出てきたことである。京都大学 薬学部1名、東京外国語大学 言語文化学部1名、筑波大学 医学部1名、既卒者であるが京都大学 教育学部1名が、合格を果たし入学の予定である。また、この課程で学んだことを更に大学において専門的に学ぼうと考え志望大学を選考した生徒の数も他のクラスに比べて多い数となっている。

大学の単位履修制度については、スタンフォード大学オンライン講座について行っているが、国内の大学のものはない。

(3) 生徒の変化について

本校は、SGH とならび平成26年度よりSSH の指定も受け、現在2期目の指定を受けていること、

全員が大学進学を目指す男子校であったことから、理系志望者が多く、SGH コースを希望する生徒の規模が安定しにくい状況にあった。この人数の確保が課題であるが、この課程を履修することを中学入学から認識している生徒が平成 26 年 4 月より入学し、また平成 29 年 4 月より中学 1 年に女子生徒の入学が始まったことから、この点については改善が見込めると考えている。このコース自体への希望生徒数が増加し、一定レベルの生徒数が確保できるようになってきており、このコースに対する期待が大きくなってきていることも見られる。それによって、生徒の SGH に対する興味関心が高くなった分、そこに求めるレベルも高くなり、その意識を見るアンケート結果では単なる数字では読み取れない部分が表れてきていると思われる。(資料参照)

また、本校の公開発表会を利用し中学 1・2 年生約 400 名に対しても、高校生がポスター発表を行い、SGH 事業の活動を紹介していることも、生徒の意識変化に良い影響を与えている。

また、学校として資金や時間数を確保し、英語力の育成を推進してきた。その成果は過去 5 年間の GTEC の平均スコアの上昇や英語検定試験の結果からも明白だが、海外の高校生との協働学習に及んだ場合、まだまだ力量に大きな差があることは否定できず、生徒もこの点を自覚している。また、ルーブリックの観点である英語表現に関して、文法的正確さや正しい発音・アクセントへの意識付けが一層必要である。また、課題研究に関する語彙について計画的に習熟させていく必要性についても、研究が進むにつれて更に感じる場所である。これについても、どのように進めていくか考えていかなければならない課題であると同時にこのようなことに生徒自身が意欲的に取り組もうとする態度も見られるようになってきている。

(4) 教師の変化について

当初 SGH コースに係わる教師は社会科、英語科あわせて 4~5 人程度であったが、昨年度から公務分掌の中に WG(ワーキンググループ)を設け教員の約 1/3(23 名)が、本コースの課題研究をはじめ、その発表に向けての英語原稿の添削などに携わることとなった。このようなことから、SGH 事業が学校全体としての動きとなって来ていると言える。しかしながら、大勢が係ればその連携をうまく継続させるよう工夫していくことが非常に重要になっていくことにも留意しなければならない。そうすることによって一層の全校協力体制が確立されていくことと思う。

(5) 学校における他の要素の変化について

課題研究に係わる教師が、アクティブラーニング研修にも積極的に参加し、その手法を課題研究の授業にも取り入れて行っている。また、現代社会の授業の中で 1 単元 2 時間ではあるが、課題研究担当教諭がチームティーチングで普段の授業に参加し実践することを行った。

(6) その他課題や問題点について

年度が進むにつれて、課題研究に対する生徒の認識が深まり、成果としてより高いレベルのものを求めるようになってきている。その研究を進化し深化させるためには、それを実現するための時間確保や適切な助言などをどのように行うかということに苦慮している。また、進学のための学習時間の確保との兼ね合いもあり、生徒の課題研究をいかに計画的に進めていくことができるかをこれまで以上に提示していかなければならないと考えている。

また、上述したことではあるが、係る教師が多くなることはプラスであるのだが、その連携をスムーズに進めていくための方法をしっかりと確立していかなければ、充実した連携内容とならないとも考えている。

国内での協働活動の展開については、SGH 事業の取り組みが偏ったものにならないように、他の指定校やアソシエイト校との協働活動の場を持つことが効果的であると考えている。その為、清風南海高校での発表会に参加発表している。また、昨年度より本校で行った「グローバルヘルス高校生フォーラム」を更に充実したものにしていく予定である。関西学院大学高等部で行っているWWLの連携校として、関西学院大学で行われている講座などに参加し、このことについて今後の取り組みについても検討しているところである。このように協働活動を展開してきているが、SGH 事業の完了とともに指定校が少なくなっていることもあり、今後の連携をどのように進めていくか検討中である。

また、課題研究や専門的指導において大阪医科大学と連携を進めてはいるが SGH 事業に特化した形では十分に取れていたとは言えず、次年度以降一層充実した高大連携の深化を図る必要がある。

IT 機器の充実について、調べ学習にインターネットは不可欠であり、購入分も含めてパソコン使用に関する課題は改善してきている。また、生徒一人一人がデバイスを所持しているので、更に Wi-Fi 環境を整えることが必要である。

プレゼンテーション機会の確保について、週に2時間の課題研究の授業の多くは、資料の収集・分析やパワーポイントや原稿の作成に費やされる。セミナーや講演会を行う場合もあるが、プレゼンの機会を今年も増やすようにしているが、更に確保する必要が感じられた。しかし、時間には限りがあり、課外時間に行うこととなることが多く、課題研究の計画性が更に求められる。さらに、英語プレゼンテーション機会の確保については、プレゼンの基本的な知識や技術についてはこれまでの経験も踏まえて指導を進めてきている。毎年グローバル英語表現の授業やネイティブ担当の授業でもプレゼンテーションの機会を増やしていくようにしてきたが、それにも決められた授業時間数の中では限りがある。また、生徒が自然に行えるようになるための自主練習を確保することも十分ではない。しかし、限られた条件の中でできる限りその指導を行っていく必要性を感じている。また、プレゼン後の Q&A についての指導には、ディベートやディスカッションの授業で扱っているが改善をする余地は残り、更に基本的なスキルの習熟までを目指し、その為の実践的な機会の確保がそれを確実なものとするために必要である。

(7) 研究会は完了後の持続可能性について

本校においては SGH 事業で研究してきた教育課程を行うコースが設定されており、本事業の指定終了後についても基本的にこれまでに確立されてきた教育課程を継続・発展させていく予定であり、管理機関についてもそれをバックアップしていく体制はこれまでの通りである。

【担当者】

担当課	中学・高校事務部	T E L	072-671-0001
氏 名	佐塚琢司	F A X	072-671-0081
職 名	事務部 部長	e-mail	satsuka@takatsuki.ed.jp

Ⅱ. 令和元年度 SGH 研究開発の成果と課題

(1) 研究開発単位Ⅰに関して

本校SGH事業での「課題研究」の実践では、グローバルヘルスをテーマとした活動を進めている。指定2年目の活動のキーワードとして「高次の自発的な学びの姿勢」「地球共同体への帰属意識」「高校卒業後の自発的な学究心」の育成を挙げてきた。テーマ設定としては、生徒の進路を考えた場合、文系からも理系からも接点を作ることができるため、機能し易くなる。SGH コース (GA コース) は、文系・理系の生徒が混在するクラス構成となっており、生徒間相互の刺激が生まれ、以前よりも進路実現についての意識が高まっているように思われる。今年はSGH 指定の4年目であるため、その最終的な事業の目的までの距離は縮まりつつあるが、成果としてもまだ限定的である。しかしこれまで行ってきたことを検証し、継続と改善を加えながら事業を進めてきている。後述する各学年での課題研究の現状からも分かるとおり、仮説(1)にあつては、外部専門家による刺激の影響は大きく、またグローバルヘルスに関する問題意識は着実に醸成されている。過去4年間において、①京都大学の国際保健学教室との連携により継続的に海外の若手研究者に本校で指導して頂いていること、②半年にわたりスタンフォード大学とグローバルヘルスに関するオンライン講座を共同開講していること、③高1の3学期の課題研究中間発表において国立台湾大学公共衛生学院で生徒が教授陣の前で研究発表を行い、専門的な指導を受ける機会を設けていること、④台北医学大学の公共衛生学院でも指導を受ける機会を確保していること(本年度はコロナウイルスの影響のため中止)、⑤高校2年の11月のパラオフィールドワークでは、現地政府保健省で健康問題に関する調査・聞き取りを、次席クラスの4局長から直接行えることや現地高校生にアンケートを行い現地での生の声を聴くことができること、⑥京都大学が主催するグローバルヘルスに関する国際学会に見学・参加させて頂いていること(本年度は開催されなかった)など、関係機関のご支援により理想的な環境ができています。これらは仮説(2)(3)の前提ともなると考えており、事業の推進者としては、今後、生徒自身の評価などを通して、仮説の検証を継続的に行いたい。評価にあたっては、本校独自の課題研究評価用ルーブリックを関係教員で作成し、利用することとしており、更に自己評価が上がるように指導を改善していく必要があると認識しているところである。

本年度末の「SGH事業コース間アンケート調査結果」から過年度に引き続き、一定の成果が見られたといえよう。例えば、「将来、留学をしたり、仕事で国際的に活躍したいと考えていますか」中学3年で86.5%、高校1年で54.5%、高校2年で56.1%といずれも5割を超える数値を示しており、将来の進路設計について一定の方向性を示しているといえよう。

【参考】研究開発課題(単位)Ⅰの仮説

(1) 国内外の大学や企業などの外部専門家との定常的な連携により、グローバルヘルスに関する諸問題について、様々な観点からその重要性を体系的に学ばせ、問題意識を持たせることができる。これによって、課題研究の個人テーマの設定やアプローチの仕方がより実効性のあるものとなり、高次元の自発的な学びの姿勢を身につけさせることができる。

(2) 課題研究への取り組みを通して地球共同体への帰属意識を持たせることにより、創造的な方法で、地球環境の維持にコミットすることの重要性を身につけさせることができる。

(3) 国際化に重点を置く大学との定常的な連携により、大学教員、外国人研究者、大学院生、大学生から高い専門性を伴う学問への知的好奇心を喚起することができ、これによって高校卒業後の大学での学びへの憧れ、自発的な学究心を育てることができる。

(2) 研究開発単位Ⅱに関して

本校SGH 事業の「研究開発単位Ⅱ」は、「課題研究」以外の実践によって、バランスのとれたグローバルマインドセットを持つグローバルリーダーを育てることを狙う仕組みとして設置しているものである。設定した7つの仮説においてキーワードとなるのは、「グローバルイシューの知見」、「アジアと日本の歴史、グローバルジャスティス」、「主体性」、「コミュニケーション力」、「リーダーシップ」、「英語力」、「留学」である。本校としては、仮説を機能させるため、前提環境を整備する必要があるが、先の研究開発単位Ⅰで述べたいくつかの機会もこれらを相当程度カバーしていると考えている。詳述すれば、①グローバルイシューの知見については、総合学習「グローバルスタディーズ」の設定、②「コミュニケーション力」、「リーダーシップ」に関しては、ケンブリッジ大学関係者（Blue Bridge Education）による英語での3日間の集中研修、③英語力育成においては、学校設定科目「グローバル英語表現Ⅰ・Ⅱ」の設定、④英検等の英語の資格取得に向けた講習の機会、⑤「主体性」に関しては、パラオでのフィールドワークにおける自発的な資料収集・調査、⑥「アジアと日本の歴史、グローバルジャスティス」に関しては、パラオ・フィールドワークに先立つ、JICAなどの外部講師の指導も含めた現地の現状を知る学習とアジアを中心とする日本の近現代史の学習、⑦「留学」に関しては、「次世代リーダー養成プログラム」での英国・米国のトップ大学への訪問と大学生との交流の機会設定など、関係機関のご支援により、ある程度理想的な環境が整いつつあると考えている。

今年度もこれまでの経験やそこから得た知見を重ねて校内学習（①②③④⑤⑥）・校外学習（⑤⑦）の両方で更なる充実化をはかり、英語を用いてコミュニケーションを取るという指導の継続が浸透してきているところであると思われる。知識面では本校の研究開発テーマであるグローバルヘルスに関する学習も進めた。本校では私立中高一貫校としての利点を生かし、中学3年次よりGAコースを進めており、授業・研修を通じて高校時でのGAコースで必要な素養（生徒が課題を見つけて解決するための方策としての授業やセミナー、上級生の発表を聞く機会・英語で講演を聞き、その内容に則して発表者に質問をし、事後のレポートにまとめる等）を学んでいる。それらの経験が高校からの本格的な活動に大きく寄与していたことが後述するアンケート結果の資料から見ることでできると考えている。年度末に行ったアンケート（中学3年・高校1年・2年で実施）を比較してみるが、高校1年生は今回海外研修である台湾研修が中止となり、彼らにとっての今年度の課題研究の集大成となるものができなかったため、数値としては例年に比べ低いままで推移している。その為、例年の通りの結果にはなっていないことがこれまでの結果からも読み取れる。しかしながら、入口と出口であると考えられる中学3と高校2年とを比較してみると、この事業による成果があることを読み取ることができる。「①国際人としての教養」でプラスの評価をしたのが中学3年65.6%、高校2年85.4%である。「②地球環境の多様性理解」でプラスの評価をしたのが中学3年83.2%、高校2年82.9%である。グローバルイシューなどの社会問題・環境問題を幅広く扱いながら、それを深化させていく学習の結果が表れている。また、「⑦プレゼンテーションの自信」でプラスの評価をしたのが中学3年72.9%、高校2年85.3%である。年を経るごとにプレゼンテーションの機会を得て、その習熟にある程度の自信をもって対応することができるようになってきていることの証であると考えている。また、「⑩国際共通語としての英語」では中学3年75.6%、高校2年78.0%であり、課題研究を英語で発表することへの自信とともに、英語を教科としてだけでなく道具として使用することへの意識が見受けられる。また、大きな開きのあるものとして、「⑤リーダーシップ」と「⑧海外大学に対する興味・関心」については、それぞれ中学3年56.7%と75.6%、高校2年48.9%と41.5%と学年が進むにつれて低くなっている。⑤についてはリーダーシップの内容を分かっていることとそれを発揮することの違いが、学年を経るごとにいろいろな経験を伴いながら理解でき、発揮することに重きを置くためにこのような結果となっていると思われる。⑧については、進路決定に時間のある中学3年と、もう間近に迫りそれなりの判断を出して具体的に進めていかなければならない高校2年生との立ち位置の違いが数字になって表れている。

(3) 成果と課題

本校のSGH事業の成果として、4年目にしてやっとはっきりとした形で示せるものが出てきた。すなわち、高大接続の分野で、本年度はGAコースのクラスから特色入試や推薦入試によって進路を決定したものが出来たことである。京都大学薬学部1名、筑波大学医学部1名、東京外国語大学1名、過年度卒であるが京都大学教育学部1名（併せて、慶応大学法学部推薦入試でも合格）という生徒が出てきたことである。GAコースでの課題研究に真剣に取り組み、その成果を活用して難関大学の入学を果たしたことになる。また、これだけではなく、本コースで学んだことで課題研究のテーマからその解決には、経済、政治、法律、社会制度など多方面のことが関係していることが分かり、その中でも自分の興味・関心のあることが学べる学部を持つ大学への進路選択を考えている生徒が、他のコースと比べ多い傾向となっている。

本校はSGH事業だけでなく、SSH事業も展開していることから、生徒の関心が2分化する傾向がある。もともと理系進学者が3分の2を占める本校では、自然科学への生徒の親和性は大きく、グローバル課題への取り組みの意義について生徒の理解を得るのは少しハードルが高いのが現実であるが、ここに来てこれまでのSGHの活動を通して生徒にも認識させるようになってきたため、やっとそのハードルの高さも緩和されてきている。今年度も昨年度の課題を踏まえ、年度末の研究発表会を合同で行い、双方に所属する生徒が発表に触れる機会を作り、お互いに刺激しあう関係が研究活動に良い影響を与えるよう、今後もこの協力関係を維持していくことが必要であるように思われる。また、今年度も中学生1・2年生に対してもSGH事業の発表に参加してもらい、高校生からポスター発表を受けている。このような活動だけではなく、様々な機会を利用して、この事業内容を校内に更に深めたものにし、周知していくよう今後も推進していく必要がある。また、研究開発単位Ⅰにおいては、課題研究の本校のパターンはできており、それに沿って活動を行えばそれなりの結果も得られるようになってきているが、生徒が研究を更に深化させるための時間や何に重点を置き、何は軽く済みますのかという内容の精選について、これまで以上一層留意して進めなければ生徒の自己評価向上につながらないことになる。

研究開発単位Ⅱについては、やはり生徒一人一人の英語運用能力をどのように上げていくかは大きな問題として常にある。本校では、独自のカリキュラムで英語教育を行っているおり、何か新しいものを始めるのではなく、これまで行ってきたことを常日頃からどのように生徒に定着させていくかという観点から、これまで以上に丁寧に実施し、細かく検証していくことが必要である。

【参考】研究開発課題（単位）Ⅱの仮説

(1) 大学や企業などの外部専門家との連携により、主要なグローバル 이슈に関する基礎的知見を体系的に学ばせることができ、これによって問題意識を高めることができる。

(2) 大学や企業との連携によって、アジアと日本の関係、アジアの歴史に関する理解を深め、さらにグローバルジャスティスについて具体的かつ多角的に学ぶことにより、グローバルリーダーに必要とされるバランス感覚のあるグローバルマインドセットを育成することができる。

(3) 国際化を推進する提携大学の協力によって、ワークショップ、セミナー、討論会などさまざまな形態で、生徒に自己啓発を促し、将来の主体的な進路設計を導くことができる。

(4) 国内の連携大学、NPO、海外の連携高校などの協力によって、英語によるコミュニケーション力向上のための実地研修の場として、ワークショップ、セミナー、討論会、交流会などを設定することにより、生徒に探求意欲の向上、自己啓発を促すことができる。

(5) 海外のトップ大学を訪問し、現地教員や学生の積極的な支援の下、ワークショップ、セミナー、フィールドワークを実施することによって、英語によるコミュニケーション力、国際的なリーダーシップを身につけさせ、将来の進路選択に対する前向きな姿勢、海外への「外向き」の姿勢、等の自己啓発を促すことができる。

(6) 外部の連携機関、留学生などの支援を得て、海外の大学事情について生徒が知る機会を設けたり、本校が独自に世界のトップ大学の1つであるスタンフォード大学とオンライン講座を開設し、生徒がそれを通

して学びをすすめることにより、進路選択における積極的な姿勢を育て、将来の留学志向を高めることができる。

（７）グローバルな舞台で活躍するための前提となる「国際共通語としての英語力」を養成するための英語・英会話授業を、中高一貫教育の中で効果的に設定することにより、早い段階から各種英語検定での一定の資格を取得させ、海外の大学への進学も視野に入れさせることが可能となる。

Ⅲ. 実 施 報 告 書

本年度の実施報告を記すに際し、まず本校SGH 事業の掲げる構想、目的・目標、それを達成するために本校が設定した研究開発課題（Ⅰ・Ⅱ）と研究開発課題を解決するための仮説について、構想調書から一通り概観した上で、実施状況について検証する。

1. 「構想調書」の概要

① 研究開発構想名

医科大学と一体化したアジア圏の人々の健康を支えるグローバルリーダーの育成

② 研究開発の概要

大阪医科大学との一体的な高大連携により、グローバルヘルスに問題意識を持ち、環境、貧困、教育など様々な方向からアジアの人々の健康問題に取り組むグローバル人材を育成し、さらに思考力・コミュニケーション力・リーダーシップを高めることにより、バランス感覚あるグローバルマインドを育成するための教育システムを開発する。

③ 研究開発の目的・目標

〔目的〕

本校のSGH事業は、スクールミッション“Developing Future Leaders With A Global Mindset”の具現化の様態である。同一法人下の大阪医科薬科大学、さらに京都大学グローバルヘルス学際融合ユニットとの緊密な連携により、社会課題として顕在化しつつある「グローバルヘルス」という視点を意識づけ、海外の同世代の若者との協働活動を通して「アジアの人々の健康を支える」ことに挑む、バランス感覚に優れた次世代リーダー育成を目的とする。

〔目標〕

- ① グローバルヘルスに関する諸課題について深い理解と問題意識を持ち、創造的な手法をもって、この向上と持続可能な地球環境を生み出すことに貢献できる人材を育成する。グローバルヘルスに係る課題研究への取り組みを通して得られた知見と体験が、GA コース（SGH コース）在籍生徒にとって、進路選択の積極的な動機づけとなることを目指す。
- ② グローバルイシューについての理解やアジアの歴史に関する理解を深め、思考力、コミュニケーション能力、リーダーシップを高めることにより、バランス感覚に優れ、海外の同世代の若者と協働活動ができるグローバルマインドセットを持った人材を育成する。GA コース（SGH コース）在籍生徒がこのマインドセットを身につけ、将来、国際舞台での活躍を志すことを目指す。

④ 研究開発課題

〔研究開発課題（単位）Ⅰ〕

「グローバルヘルスに関する諸課題について深い理解と問題意識を持ち、創造的手法をもってこの向上と持続可能な地球環境を生み出すことに貢献できる人材を育成するための教育課程の研究・開発」

〔研究開発課題（単位）Ⅱ〕

「グローバルイシューについての問題意識、アジア圏の歴史に関する深い理解を持ち、思考力、コミュニケーション能力、リーダーシップ、語学力を備え、海外の同世代の若者と協働活動ができる次世代リーダーとしての素地の育成のための教育課程の研究・開発」

⑤ 研究開発の仮説

[研究開発課題（単位）Ⅰの仮説]

- (1) 国内外の大学や企業などの外部専門家との定常的な連携により、グローバルヘルスに関する諸問題について、様々な観点からその重要性を体系的に学ばせ、問題意識を持たせることができる。これによって、課題研究の個人テーマの設定やアプローチの仕方がより実効性のあるものとなり、高次元の自発的な学びの姿勢を身につけさせることができる。
- (2) 課題研究への取り組みを通して地球共同体への帰属意識を持たせることにより、創造的な方法で、地球環境の維持にコミットすることの重要性を身につけさせることができる。
- (3) 国際化に重点を置く大学との定常的な連携により、大学教員、外国人研究者、大学院生、大学生から高い専門性を伴う学問への知的好奇心を喚起することができ、これによって高校卒業後の大学での学びへの憧れ、自発的な学究心を育てることができる。

[研究開発課題（単位）Ⅱの仮説]

- (1) 大学や企業などの外部専門家との連携により、主要なグローバルイシューに関する基礎的知見を体系的に学ばせることができ、これによって問題意識を高めることができる。
- (2) 大学や企業との連携によって、アジアと日本の関係、アジアの歴史に関する理解を深め、さらにグローバルジャスティスについて具体的かつ多角的に学ぶことにより、グローバルリーダーに必要とされるバランス感覚のあるグローバルマインドセットを育成することができる。
- (3) 国際化を推進する提携大学の協力によって、ワークショップ、セミナー、討論会などさまざまな形態で、生徒に自己啓発を促し、将来の主体的な進路設計を導くことができる。
- (4) 国内の連携大学、NPO、海外の連携高校などの協力によって、英語によるコミュニケーション力向上のための実地研修の場として、ワークショップ、セミナー、討論会、交流会などを設定することにより、生徒に探求意欲の向上、自己啓発を促すことができる。
- (5) 海外のトップ大学を訪問し、現地教員や学生の積極的な支援の下、ワークショップ、セミナー、フィールドワークを実施することによって、英語によるコミュニケーション力、国際的なリーダーシップを身につけさせ、将来の進路選択に対する前向きな姿勢、海外への「外向き」の姿勢、等の自己啓発を促すことができる。
- (6) 外部の連携機関、留学生などの支援を得て、海外の大学事情について生徒が知る機会を設けたり、本校が独自に世界のトップ大学の1つであるスタンフォード大学とオンライン講座を開設し、生徒がそれを通して学びをすすめることにより、進路選択における積極的な姿勢を育て、将来の留学志向を高めることができる。
- (7) グローバルな舞台で活躍するための前提となる「国際共通語としての英語力」を養成するための英語・英会話授業を、中高一貫教育の中で効果的に設定することにより、早い段階から各種英語検定での一定の資格を取得させ、海外の大学への進学も視野に入れさせることが可能となる。

⑥ 課題研究

【← 研究開発課題（単位）Ⅰの仮説の実証のために実施】

（１）「課題研究《（Ⅰ）－①》」の概要

「感染症」「水」「食料」「教育」「紛争」「貧困」「自然環境」「災害」「経済支援」のテーマから１つを選択し、アジアの国の「健康問題」と関連させた課題設定を行い、約１年半をかけ課題研究を行う。高１の年度末には、台湾研修を実施し、同年代のアジアの次世代リーダーとの協働活動を行い、英語による「課題研究」の中間発表を行う。高校２年では、京都産業大学国際関係学部 三田 貴教授の支援の下、「アジア・フィールドワーク（パラオ共和国）」を実施し、資料の収集やアイデアの実効性の検証等を行う。

（２） 実施方法・検証評価

学校設定科目「（総合学習）グローバル課題研究」（２単位：高１・２）（１単位：高３）を設置。ルーブリック法により検証評価する。ルーブリックは、校内SGH 推進部で作成する。

（３） 「課題研究」活動を支えるための重要な付随的取り組みとして、以下を実施する。

- 《（Ⅰ）－②》スタンフォード大学(SPICE)とグローバルヘルスに関するオンライン講座の共同開講
- 《（Ⅰ）－③》外部講師による「グローバルセミナー」「グローバル進路講演会」等の開催
- 《（Ⅰ）－④》「京都大学グローバルヘルス学際融合ユニット」の学外会員としての活動
- 《（Ⅰ）－⑤》国際的な機関への見学、外部支援大学でのワークショップやセミナー

※ 尚、上記は「課題研究」の付随的取り組みであるだけでなく、研究開発単位Ⅱのアプローチとしても複合的に機能している点に留意して報告させて頂きたい。

⑦ 課題研究以外のアプローチ

【← 研究開発課題（単位）Ⅱの仮説の実証のために実施】

（１） バランス感覚あるグローバルマインドセット、教養、思考力、コミュニケーション能力、リーダーシップ、語学力育成のため、下記の学校設定科目を設置する。

- | | | | |
|---------|------------------------|---------|---------|
| 《（Ⅱ）－①》 | 「（総合学習）グローバル スタディーズ入門」 | （35 時間） | （中３） |
| 《（Ⅱ）－②》 | 「（総合学習）グローバル スタディーズ」 | （１単位） | （高１～高３） |
| 《（Ⅱ）－③》 | 「（外国語）グローバル 英語表現Ⅰ」 | （２単位） | （高１） |
| 《（Ⅱ）－④》 | 「（外国語）グローバル 英語表現Ⅱ」 | （２単位） | （高２・高３） |
| 《（Ⅱ）－⑤》 | 「（外国語）グローバル 時事英語」 | （１単位） | （高１） |

ルーブリック法や質問紙法（アンケート）により検証評価する。ルーブリックは、本校英語科・SGH 推進部で作成する。

（２） 上記目的のため、教育課程外の取り組みとして、以下を実施する。

- 《（Ⅱ）－⑥》「グローバルリーダーシッププログラムin UK（夏期英国研修）」
「次世代リーダーシップ養成プログラム プレコース（夏期米国研修）」
- 《（Ⅱ）－⑦》ケンブリッジ大学教員による３日間集中の英語リーダーシップセミナーの実施
- 《（Ⅱ）－⑧》国際的・全国的なイベント・大会への積極的な参加

2. 令和元年度 年間活動 概要

SGH 指定 4 年目 事業記録

① 《(Ⅱ) - ㊸》 インタナショナルヤングリーダー育成プログラム 2019 4 月 1 日 (月) ~ 4 月 3 日 (水)

International Young Leaders Advancement Programme(IYLAP) 2019 [言語: 英語]

高 1GA コース生を対象に英国ケンブリッジから来校した BlueBridge Education (Cambridge 大学 Homerton College で国際教育プログラムを委託開講) との共催で、新高校 1 年生 45 名を対象に英国人教員 4 名がオリジナルのカリキュラムに基づき全て英語によるリーダーシップ研修を実施した。研修の最後には参加者が英語でのプレゼンテーションを行い、修了証が授与された。

② 《(Ⅰ) - ㊸》 若手外国人研究者によるグローバルセミナー

「京都大学グローバルヘルス学際融合ユニット」との高大連携事業として、過去 5 年間に亘り、京都大学 医学部 国際保健学講座に在籍されている若手研究者を本校に招聘し、Global Health に関するセミナーを実施している。

(1) 第 17 回 7 月 2 日 (火) [言語: 英語]

講 師: 京都大学大学院医学研究科助教 Dr. Patou Masika Musumari (コンゴ出身)

テーマ: "Global Health in Armed Conflict Zones: Case of Ebola in D.R. Congo"

『武装化された紛争地域のグローバルヘルス: コンゴ共和国におけるエボラ出血熱の事例』



(2) 第 18 回 9 月 24 日 (火) [言語: 英語]

講 師: 京都大学大学院 医学研究科 Swati Mittal 氏 (インド出身)

テーマ: Smoking and its Effects 『喫煙とその影響』

(3) 第 19 回 10 月 29 日 (火) [言語: 英語]

講 師: 京都大学大学院 薬学研究科 Mpumelelo Ntlogwa 氏 (ボツワナ出身)

テーマ: "Lessons learnt from Botswana's HIV/AIDS treatment programs"

— 『ボツワナにおけるエイズ資料計画からの教訓』 —



③ 《(Ⅱ) - ㊸》 2019 年度 Takatsuki Global Leadership Programme in United Kingdom

(GA コースの生徒だけでなく一般生徒も参加可)

日程: 7 月 25 日 (木) ~ 8 月 4 日 (日)

場所: イギリス連邦 Cambridge 大学 Selwyn College

参加生徒: 40 名 (高 1...40 名) 引率教員: 2 名

7回目となる英国でのリーダーシップ研修は、44名の希望者から選抜された意欲ある40名が、校内での4回の研修の後、ケンブリッジ大学 Selwyn College を会場として、下記の5つをテーマとするプログラムに参加した。①英語集中授業 ②グループディスカッション ③個人プレゼンテーション ④レクチャーやワークショップ ⑤ケンブリッジ・オックスフォード・ロンドン市内観光

出発便の遅延から航空会社を変更し、1日を移動のために使ったことになり、予定していたプログラムを省略しなければならないかと憂慮していたが、何とか隙間時間などをうまく利用しすべてのプログラムを実施することができた。参加生徒の意欲は高く持ち、進んで研修に取り組んでいた。そのために、各自が大きな成就感を得て、将来の進路を考える上で非常に貴重な研修を経験したことになる。



④ 《(Ⅱ) — ④》2019年度 次世代リーダー養成プログラム プレコース ポストン語学研修+ホームステイ

日程：7月26日（金）～8月5日（月）

場所：アメリカ合衆国 ポストン、ニューヨーク

参加生徒：44名（中3…44名 男女各22名） 引率教員：3名

今回から男女共学学年初で4度目となる次世代リーダー養成プログラムのプレコースを下記の8つをテーマとしてアメリカ ポストンにて実施した。①世界屈指の文教都市ポストンでのホームステイ ②ホームステイ先からの公共交通機関（地下鉄・バス）による通学 ③英語研修と英語での個人プレゼンテーション ④世界トップ大学（ハーバード大、MIT）への訪問及び学生・院生との交流 ⑤外部講師による英語でのレクチャー ⑥ポストンでのアメリカ建国史の学習 ⑦ニューヨーク観光 とハードスケジュールにも拘らず、参加した生徒は何事にも自ら進んで取り組み、各自が大きく得るものを持ってプログラムを終了することができた。本プログラムが本校のミッションを成すにあたり大いに資することが、更に実証されつつあると見受けられる。



⑤ 《(Ⅱ) — ①》2019年度『アジア高校生架け橋プロジェクト』来日留学生受け入れ

『アジア高校生架け橋プロジェクト』（主催：文部科学省、実施：公益財団法人AFS日本協会）で来日したベトナム・ラオスからの留学生2名を、8月26日（月）～翌年3月21日（土）まで本校に受け入れる予定である。

留学生2名は充実した日本での日々を過ごすことができ、在校生にとっても多様性や異文化理解の良い機会となった。特に、日本語講座については本校講師による授業を可能な限り確保し、実施した。



所属高1学年 歓迎会にて自国の紹介

⑥《(I)－⑥》2019年度 第5期スタンフォード大学オンライン講座 9月26日(木)～3月13日(金)

Stanford e-Course on Global Health for Takatsuki Senior High School 2019

今年度で5期目となる本校とスタンフォード大学国際異文化教育プログラム(SPICE)[代表: Gary Mukai 博士]が共同開催する本講座では、受講生は同大学の研究者による国際的な取り組みの実践を通してグローバルヘルスの重要性を学んでいる。今年度も定員を超える参加者の応募があり、現在、高校1年生45名が受講している。

【2019年度 VC(ヴァーチャルクラス)の日程】

校内オリエンテーション [9月26日(木)]

受講心得、評価、講義予定などについてオリエンテーションを行う

第1回 VC [9月28日(土)]

講師: Sabrina Ishimatsu オンライン講座担当講師

テーマ: 『コースガイダンス』

第2回 VC [10月5日(土)]

講師: スタンフォード大学 客員研究員 Phyu Thin Zaw 先生

テーマ: 『Maternal Health and Poverty (母親の健康と貧困)』

第3回 VC [11月2日(土)]

講師: スタンフォード大学臨床学教授 Nancy Morioka-Douglas 先生

テーマ: 『Asian American and Pacific Islander Health Disparities (アジア系アメリカ人と太平洋諸島住民との健康格差)』

第4回 VC [11月16日(土)]

講師: スタンフォード大学 医学センター准教授 Phillip Yang 先生 (心臓血管内科)

テーマ: 『Stem Cells Research (肝細胞研究)』

第5回 VC [12月14日(土)]

講師: スタンフォード大学 臨時臨床指導医 Mari Ormiston 先生

テーマ: 『Global Mental Health (世界の心の健康)』

第6回 VC [1月11日(土)]

講師: スタンフォード大学リサーチアソシエイト Fumiaki Ikeno 先生

テーマ: 『Entrepreneurship of Medical Devices (医療機器をめぐる起業)』

第7回 VC [2月22日(土)]

講師: スタンフォード大学 小児科教授 Paul Wise 先生

テーマ: 『Child Malnutrition and the Guatemala Rural Child Health and Nutrition Program』

（子供の栄養不良とガテムラの地方の子供の健康と栄養摂取プログラム）』

第8回 VC [3月13日（金）]

講師：SPICE ディレクター Gary Mukai 博士、Sabrina Ishimatsu オンライン講座担当講師

テーマ：『総括と修了証の授与』



⑦ 《(I) - ②》第2回 パラオフィールドワーク事前セミナー 10月8日（火）

テーマ：『①課題研究の深化を目指して ②JICA の先生に聞いてみよう』

講師：・三田 貴 先生 京都産業大学国際関係学部教授

・田村 太喜男 先生 JICA 講師 派遣国マーシャル諸島共和国 上下水道

・吉田 梨枝 先生 JICA 講師 派遣国マーシャル諸島共和国 看護師

・野口 元 先生 JICA 講師 派遣国ミクロネシア連邦 小学校教育

1学期に続き、さらに自己の課題研究の内容を深めるため、上記の先生方から講義とそれに続く質疑応答を行い、パラオにおけるフィールドワークに資するための準備が十分にできる当初の目的が十分に達せられたセミナーとなりました。



⑧ 《(I) - ③》高校2年・第5回パラオ フィールドワーク 11月10日（日）～11月15日（金）

【言語：英語】

各自が進める課題研究について、パラオ共和国にて5回目のフィールドワークを実施した。今回も例年と同様の協力を各機関より得ることができた。

- (1) 現地連携校（Mindszenty High School）での学校交流とホームビジットによるインタビュー
- (2) パラオ政府機関（保険証・国立病院・教育省）への訪問とセミナー・インタビュー
- (3) 在パラオ日本大使館 表敬訪問と特別セミナー
- (4) 現地のライフスタイルを理解するための山村フィールドワーク
- (5) 太平洋戦争激戦地ペリリュー島訪問と島民との対話集会・インタビュー・フィールドワーク



保健省



教育省



ミゼンティー高校



伝統的家屋「バイ」

⑨ 《(I) - ⑥C》「SGH特別セミナー」の開催

(1) 第5回 10月01日(火)〔言語：英語〕

スタンフォード大学国際異文化教育プログラム (SPICE) ディレクターの Gary Mukai 博士が来校され、GA コースの生徒を対象に特別セミナーを実施した。日系3世の博士だからこそご存知の日系アメリカ人の歴史と、そこから考えられるグローバルマインドセットについてお話しいただきました。グローバルリーダーを目指す生徒にとって非常に有益なセミナーとなった。

講師：スタンフォード大学 Gary Mukai 教授

テーマ： ” Early Japanese-American History and Global Mindsets”

ー 黎明期の日系アメリカ人の歴史とグローバルマインドセット

(2) 第6回 11月19日(火)〔言語：日本語〕

本校と同一法人である大阪医科大学より、公衆衛生学を専門とされる河野公一名誉教授をお招きし、高大連携事業の一環として、世界の感染症について、その基本知識、グローバル社会におけるパブリックヘルスの役割等についてお話しいただきました。グローバルヘルスがメインテーマである GA コースの生徒にとっては極めて有意義なセミナーとなった。

講師：大阪医科大学 名誉教授 河野公一 先生 (公衆衛生学)

テーマ：グローバル社会における感染症のアウトブレイク ーパブリックヘルスの役割ー



⑩ 《(I) - ③》《(II) - ①》文部科学省・全国高校生フォーラム 12月22日(日)

会 場：東京国際フォーラム ホールE・ガラス棟G

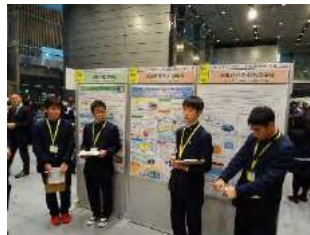
発表者：平松大知 谷口拓海 植松大翔 田崎隼平

ボランティア：内田康太 坂口佳史

アジア高校生架け橋プロジェクト留学生：Trinh, Duc Duy (ベトナム)・Phonpaseuth, Anouska (ラオス)

このフォーラムは、文部科学省が行っているスーパーグローバルハイスクール(SGH)事業、WWL(ワールドワイドラーニング)コンソーシアム構築支援事業、地域との協働による高等学校教育改革推進事業(グローバル型)に関係する全国の高校生が一堂に会し、英語でのポスター発表により日頃取り組んでいる成果を発信する場として開催されるものです。

残念ながらポスターセッションでの賞獲得とはならなかったが、全国レベルでのポスター発表と英語を使用する発表・ディスカッションを行うことができ、参加生徒にとっては次へとつながる良い経験ができた。留学生にとっては全国に散らばっていた留学生が一堂に会したことで旧交を温める機会ともなり、楽しく充実した一日を過ごすことができた。



⑪ 《(Ⅰ)－㉔》 グローバルヘルス 高校生フォーラム 1月25日(土)〔言語：英語〕

昨年度に引き続き本校のSGH事業の柱となる事業の一つとして、本校の行う実践を近隣校へと普及させるための取り組みとして行ったものであり、また高大連携の事業として京都大学グローバルヘルス学際融合ユニットの後援で開催した。高校生が協働活動を通じて社会課題として「グローバルヘルス」を意識し、高校生の視点から世界の人々の健康問題や健康の向上を考える機会を設定し、バランス感覚の優れた次世代グローバルリーダーを育成する趣旨で行った。

最初に、WHO 神戸センター サラ・ルイーズ・バーバー所長より基調講演をしていただいた。続いて招待校の高校生と本校生が8つのテーマに基づきグループに分かれ、それぞれのテーマについてその問題点と高校生としての解決策をディスカッションし纏めるワークショップを行った。グループ協議には京都大学の上記ユニットから外国人研究者8名がアドバイザーとして加わり、生徒たちはその内容をパワーポイントで纏め発表を行い、外国人研究者の方からテーマ毎に講評をいただいた。参加した高校生は、大阪府、兵庫県、京都府の4校15名であった。最後に、京都大学名誉教授 木原正博先生から全体講評をいただき閉会となった。

使用言語が英語であるということで高いハードルではあったが、運営委員の生徒が中心となり、しっかりとプログラムを進めることができ、また他校の生徒の皆さんと共に意見を交換しながら提言をまとめるという普段の活動では得ることのできない貴重な経験をすることができたフォーラムとなりました。



⑫ 《(Ⅰ)－㉔》《(Ⅱ)－㉔》本校 SGH 事業 公開発表会 2月22日(土)

外部の関係者を招待し、第4回となる本校SGH事業の発表大会を校内にて開催しました。中学3年から高校2年までの各学年のSGHコースの代表生徒による口頭発表と高校1年・2年の生徒80数名によるポスター発表を実施した。例年同様、SGHコースの生徒全員が発表会で発表を行い、それを中学3年生も含め生徒間で評価を行った。これも生徒にとっては発表を行う良い機会となっている。また、午後からは、2019年度スタンフォード大学オンライン講座の第7回VC(ヴァーチャルクラス)を一般公開し、オンライ



ン講座の実際の様子を見ていただいた。

⑬ 《(Ⅰ)－①》高校1年 第6回「課題研究」中間発表 (台湾研修) 2月25日(月)～28日(木)

⑭ 《(Ⅰ)－①》《(Ⅱ)－②》「高校生のためのポスターセッション in 京都大学」 3月20日(金)

⑮ 《(Ⅰ)－①》《(Ⅱ)－②》WWL・SGH×探求甲子園 関西学院大学 3月21日(土)

⑬～⑮の行事は、本校 SGH 事業を推進していくにあたって非常に重要な意義を持つ校外における発表の機会となるものであるが、コロナウイルスの影響のため中止となった。事前準備のためかなりの時間や労力をかけて準備をしていたために、生徒の失望もかなり大きいものであった。何らかの機会を設けて、発表する場を作っていければと考えている。

3. 研究開発単位 I の実施報告

(1) 総合学習「グローバル課題研究」の設置について（全体）

《(I)－a》[年間事業計画⑤⑥⑦]

報告者：松村栄太郎（社会科主任）

(本年度の取り組み)

社会科としては、昨年に引き続き高校1年における課題探究A（担当：松村・後藤・森田・重見・山口・磯崎・増井）、高校2年における課題研究B（担当：吉水・磯崎・増井・松村・後藤・森田・重見・加藤廣）、高校3年における「課題研究論文作成者グループによる提言書作成」（担当：磯崎・森田・松村・三浦・小原）に取り組んでいる。昨年以上に多くのスタッフが関わっており、また大変が複数の学年に関わって指導している。その分、3年間を見通した、より体系的な指導が出来ていると感じる。今年度からワーキンググループ体制ができたことにより、英語科の先生による英語の論文やポスターの添削指導などを、これまで以上にきめ細かくおこなうことが可能になった。また今年はとくに図書館の協力をいただいております、新聞資料を電子データ化して調べ学習に活用したり、図書館を利用した調べ学習について、直接、司書教諭から講義を受けるなど、従来にはなかった取り組みがなされている。

課題探究A（高1）

本時のねらい：前半はグローバル 이슈、とりわけグローバルヘルスに関する講義を通して生徒たちにグローバルヘルスに関する問題意識を持たせる。その際、調べ学習やグループ学習を通して生徒が能動的に学ぶ姿勢をつくる。後半は各自に課題研究のテーマを決定させ、班に分かれて調べ学習をおこなわせる。その際、3学期の台湾研修でのプレゼンテーション（英語）発表を目標として位置づけ、中間発表等をさせる中で研究を深めさせ、2年次におけるより高度な研究の足掛かりとする。

1 学期：グローバルヘルスに関する講義とグループ学習。

取り組んだテーマ：グローバルヘルスとは、貧困肥満（食糧問題）、SDGs、ファストファッションとフェアトレード、感染症、ジェンダー、観光と環境問題

夏休み課題：2 学期からはじまる課題研究で自分が取り組みたいテーマを考え、概要をまとめる

2 学期前半：1 学期に引き続き、グローバルヘルスに関する講義とグループ学習

2 学期後半：それぞれの課題研究のテーマを決定させ、調べ学習を開始させる。

台湾研修における発表に向けての中間発表をおこなわせる。

3 学期：台湾研修に向けての準備。台湾での発表（英語）。

研修後の報告レポート完成。

課題探究B（高2）

本時のねらい：1 年次に学んだことを深化させ、より高度な課題探究に取り組ませる。パラオでのフィールドワークを通して、実際に現地での調査や資料収集に取り組ませ、それぞれの研究課題に関する問題意識を深めさせる。3 学期には、それぞれの課題論文を完成させ、本校 SGH 課題研究発表会や全国 WWL・SGH 課題研究発表会「WWL・SGH×探究甲子園」での発表を通して課題探究を完成させる。

1 学期：今年度の課題研究のテーマを決定させ、研究計画書を作成させる。

夏休み：パラオフィールドワークに向けての事前学習。

2 学期：それぞれの課題研究に関する中間発表。

パラオフィールドワークの事前準備。

パラオフィールドワークの実施とその後の報告レポート作成。報告会の実施。

『グローバルヘルス高校生国際フォーラム』に向けての準備。

3 学期：課題研究論文の完成。

本校 S G H 課題研究発表会、「WWL・SGH×探究甲子園」に向けての準備。

高校 3 年における取り組み

課題研究論文のテーマに基づき「アジアの人々の健康を支えるための提言書」（日本語版・英語版）を作成

（その他の取り組み）

5 月 7 日 学校長講話（中 3 ～高 2）

5 月 2 8 日 アイセックによる外部講師授業（高 1）

6 月 4 日 京都産業大学教授 三田 貴先生によるパラオ事前研修（高 2）

6 月 1 5 日 オープンキャンパスで G A コースの取り組みを紹介

7 月 2 日、9 月 2 4 日、1 0 月 2 9 日 外国人研究者によるグローバルセミナー（コンゴ、マレーシア、ボツワナ）

6 月 1 5 日 オープンキャンパスで G A コースの取り組みを紹介

8 月 1 日 WWL 拠点校・連携校のワークショップ（関西学院）に高 1 生が参加

9 月 1 5 日 文化祭で G A コースの取り組みを紹介

1 0 月 2 6 日 京都産業大学での学生ワークショップに高 1、高 2 生が参加

1 1 月 9 日 清風南海高校での S G H 発表会で高 1 生が発表

1 1 月 1 9 日 大阪医科大学名誉教授 河野 公一先生による S G H 特別セミナー

1 2 月 2 0 日 元パラグアイ大使 神谷 武氏（本校 O B）による S G H 特別セミナー

1 2 月 2 2 日 S G H 全国高校生国際フォーラムで高 2 生が発表、留学生 2 名も参加

1 月 2 1 日 J I C A による外部講師授業（高 1）

1 月 2 5 日 グローバルヘルス高校生フォーラム

近隣他校（4 校、生徒 1 5 名）を本校に招き、京都大学木原研究室より外国人講師の方をアドバイザーとしてワークショップと発表をおこなう。

2 月 1 5 日 A L 公開研究会で高 1 生が発表

2 月 2 2 日 S G H 事業公開発表会

3 月 2 0 日 「高校生のためのポスターセッション in 京都大学」で高 2 生が発表

3 月 2 1 日 「WWL・SGH×探究甲子園」で高 2 生が発表

(2) 総合学習「グローバル課題研究」の設置について（高校1年）

《(I)－⑤》[年間事業計画⑤]

実践・研究報告書

事業責任者：松村栄太郎・後藤陽・磯崎陽介・重見高德・森田朱理・増井邦廣・山口晃子

1 グローバル課題研究（高校1年次）について

1. 概要

本校のGA（グローバルアドバンスト）コースは特色として「グローバルヘルスの向上」「アジアの人びとの健康問題」を共通テーマに掲げて課題研究を行い英語でその成果発表を行う。

グローバル課題研究の第1年目として国際社会の抱える様々な問題を学習し、生徒一人一人が興味関心を持ったグローバル 이슈と健康問題について研究テーマを設定し、班ごとに課題研究を行う。また各班で英語によるプレゼンテーションとポスター発表を行うための準備を進め、3年間の課題研究の中間発表として台湾で課題研究発表を行うことを目標に取り組む。

2. 履修対象者

高槻高校74期生 GAコースに所属する1年1組45名

3. 指導教諭

課題研究指導

社会科：松村栄太郎、後藤陽、磯崎陽介、重見高德、森田朱理、増井邦廣

英語科：山口晃子

英語指導（SGHワーキンググループ）

英語科：山口晃子、黒田勇人、鈴木優子、明翫吉宜、加藤廣汰、野村聡一、前田愛、
藤田和也、菅沼直子

4. 高校1年次の取り組み

1学期 グローバル 이슈の講義、外国人講師によるグローバルセミナー

夏休み レポート提出、課題研究テーマを考える

2学期 生徒の課題研究（班別の探究）、日本語によるプレゼンテーション大会

3学期 英語によるプレゼンテーション大会、台湾研修（課題研究中間発表）

2 年間授業一覧

1 学期

- 4月16日（火） グローバル課題研究ガイダンス／SDGsについて（担当：重見）
- 5月 7日（火） 校長講話／グローバルヘルスについて（担当：重見）
- 5月14日（火） ファストファッションとフェアトレード（担当：松村）
- 5月28日（火） アイセック外部講師授業 JIZOKU プログラム
- 6月11日（火） 食糧問題（担当：磯崎）
- 6月18日（火） グローバルヘルスと感染症（担当：後藤）
- 6月25日（火） ジェンダーについて（担当：松村）
- 7月 2日（火） グローバルセミナー／図書館の利用（担当：鬼丸）

2 学期

- 9月 3日（火） 観光と環境問題（担当：森田）
- 9月10日（火） 文化祭展示物作成「私たちの課題研究羅針盤」

- 9月14日(土) 15日(日) 文化祭展示発表
- 9月24日(火) グローバルセミナー／調査研究について
- 10月 8日(火) 先行研究・リサーチクエスチョン／ポスター作製
- 10月29日(火) グローバルセミナー／ポスター作製
- 11月 5日(火) スライド作成・原稿作成・資料作成
- 11月 9日(土) 清風南海高校「未来を考える国際シンポジウム」で代表班が発表
- 11月12日(火) スライド作成・原稿作成・資料作成
- 11月19日(火) S G H特別セミナー／スライド完成・配布資料作成
- 11月26日(火) プレゼン練習・発表資料作成
- 12月 3日(火) 日本語プレゼンテーション大会

3学期

- 1月14日(火) 3学期ガイダンス・英語化／インタビュー調査準備
- 1月21日(火) 特別授業「JICAの先生に聞いてみよう」
- 1月25日(土) 第2回グローバルヘルス高校生フォーラム
- 1月28日(火) 英語化・ポスター製作
- 2月 4日(火) 英語プレゼンテーション大会
- 2月15日(土) A L公開研究会で代表班が発表
- 2月18日(火) 中国語講座
- 2月22日(土) S G H事業公开发表会で代表班が発表
- 2月25日(火)～28日(金) 台湾研修(課題研究中間発表会)

3 実践報告

1. 1学期の取り組み

1学期は課題研究の入門期間としてグローバルイシューの講義を行った(一部は2学期)。また京都大学の学生団体に出前授業を依頼し「JIZOKU プログラム」特別授業を行い、SDGsにも理解を深めさせ、国際社会の諸問題と健康の関係について視野を広げる学習を展開した。

I ガイダンス(担当:重見)

GAコースの3年間の諸活動の流れについて、72期生の成果物や彼らの海外研修の映像などを示しながらガイダンスを行った。

II グローバルイシューの講義

・SDGsについて(担当:重見)

SDGsとは何か、どのようなゴール(目標)があるのか講義した後、グループに分かれてそれぞれのゴールがグローバルヘルスに関わる問題かということとその理由について議論させた。

・グローバルヘルスについて(担当:重見)

本校のSGH事業とも関わりの深い木原正博・雅子ご夫妻の監訳による『グローバルヘルスー世界の健康と対処戦略の最新動向』の「第1章」の抜き刷りを配布し、「グローバルヘルスと公衆衛生の違いは何か」「グローバルヘルスの課題にはどのような例があるか」「なぜグローバルヘルスの課題に我々が関心を持つ必要があるのか」「天然痘根絶の鍵となった事実は何か」といった問いに対し各自に考えさせ、またマンダラートを用いてそれぞれの問いに対する理解を深めさせた。

- ・ファストファッションとフェアトレード（担当：松村）

ファストファッションを足掛かりとして、先進国と発展途上国の経済格差について考えさせる授をおこなった。まず生徒に身近なファストファッションのブランドを挙げさせ、自分たちの生活とファストファッションがいかに密接に関わっているかを気づかせた。さらに映画『ザ・トゥルー・コスト』を紹介し、ファストファッションの工場のある発展途上国でどのような悲惨な状況があるかを知らせ、ファストファッションの低価格は先進国と発展途上国の経済格差によって実現していることを理解させた。またこうした問題はファストファッションのみならず、コーヒー・カカオ・スポーツ用品・油など多岐にわたっており、ファストファッションの問題はその一例に過ぎないこと、経済格差を解消する取り組みの一つとしてフェアトレード運動があることを紹介し、生徒に経済格差解消のため自分たちに出来ることは何かを議論させた。

- ・食料問題（担当：磯崎）

食料問題を足掛かりとして、広く貧困問題を考えさせる授業をおこなった。最初に様々な国の1つの家庭の1週間分の食料を紹介した写真を見せ、世界には慢性的に飢餓の問題に直面している国から飽食・肥満の問題を抱える国まで様々な国があることを理解させ、その格差はどこから生じるのかを考察させた。またアメリカの抱える貧困肥満の問題を紹介することで世界一の経済大国であるアメリカにも貧困や格差の問題が存在することを理解させ、日本の抱える諸問題についても考えさせた。

- ・グローバルヘルスと感染症（担当：後藤）

グローバルヘルスとは何かについて、先述の木原ご夫妻監訳の『グローバルヘルスー世界の健康と対処戦略の最新の最新動向』なども参考にしながら概論の講義を行った。その後、厚生労働省監修の映像教材などを見せて理解を深めさせた。

- ・ジェンダーについて（担当：松村）

日本も含めた先進国と発展途上国がそれぞれ抱えるジェンダーの問題について考察させる授業をおこなった。最初に生徒一人一人に今まで体験したジェンダーに関わる体験を挙げさせることで、ジェンダーは生まれつきのものではなく社会や文化の中で培われるものだということを理解させた。更に身近にある様々な例を挙げることで自分たちが知らず知らずに持っている固定観念について気づかせた。またマララ・ユスフザイさんの活動などを紹介し、世界には様々なジェンダー問題があることを伝えた。最後に男女共同参画社会の構築に向けて自分たちに出来ることは何かをグループで話し合させた。

- ・観光と環境問題（担当：森田）

初めにツアーコンダクターの仕事のあらましを紹介し、生徒にグループごとにツアーコンダクターになったと仮定して旅行のプランを作成させる作業を行った。これには生徒たちも興味を持って取り組んだ。次に環境問題という観点からそれぞれのプランを検証することで私たちが観光の際に何気なく行っていることが如何に環境問題に関わっているかを理解させた。最後にもう一度グループに分かれて「環境に優しい観光」について考えさせた。

III アイセック出前講義「JIZOKU プログラム」

本校卒業生が所属しているアイセック（AIESEC）京都大学委員会に協力していただき「JIZOKU プログラム」と銘打った授業を展開した。アイセックは「一人でも多くの若者に社会課題に関する関心を与え、より多くの若者の共創性を生み出し、主体的な行動を起こす人材になるための経験を提供する」をテーマとして、高校生を対象にグローバルイシューに関する講義を行っている。このプログラムは目線の近い大学生と肩肘張らずにSDGsを中心とした問題を共に考えるという企画で、これから課題研究を始める高校1年生には非常に効果的なものとなった。

2. 夏休みの課題

夏休みには次の2つの課題を生徒全員に課した。

(課題1)「健康問題・SDGs、または台湾についてのレポート作成」

健康問題・SDGs、または台湾に関わる8つのテーマを提示し、そのうちの1つを生徒に選ばせレポートにまとめさせた。

1. 感染症の健康に対する影響と感染拡大を防止するための方法について
2. 環境汚染と人間の健康被害について
3. SDGsの17のゴールの現状
4. 海水を淡水化する技術・装置・方法について
5. 台湾における台風での被害と対策について
6. 台湾で有名な日本人の業績や影響について
7. 台湾について
8. 1学期の授業のうち、興味をもったテーマについて

(課題2)「2学期の課題研究で取り組みたいテーマについて」

「グローバルヘルスの向上」と「アジアの人びとの健康問題」を共通テーマとし、その中で取り組みたいテーマを考えてくることを課題とした。1テーマ、2具体的な事例(どんな健康問題か)、3動機、4調べてみたいことの概要の4項目に分けた用紙を配布した。この課題は、夏休み明けの校内模試でも出題し、生徒たちが考えたテーマを文化祭で展示発表した。また昨年度にはなかった試みとして校内模試でグローバルイシューに関する講義からも出題し、定着を図った。

3. 2学期の取り組み

2学期は、班ごとに分かれ探究活動を開始した。各班で関心のある問題についてインターネットを使って資料を集め、調べ学習のなかで課題研究にとって大切なリサーチクエスチョンを明確にしていた。他校でのポスター発表や2学期最後の日本語プレゼンテーション大会でその成果を発表した。

I 文化祭展示発表「私たちの研究羅針盤」

9月14日(土)・15日(日)に高校1年生一人一人が、上記課題2の作業を通じて、2学期の課題研究で調べてみたいこと、興味・関心のあるテーマ・事例などをまとめ、「私たちの研究羅針盤」として展示発表した。

II 課題研究の指導

(班分けと指導体制)

夏休みのレポートと文化祭展示の内容、今後の課題研究との関連を考慮して指導教員が課題研究のテーマを8つ設定し、その中から個々の生徒が関心のあるテーマを選択した。8つの班(指導教員、メンバー)は以下の通りである。

1班 エボラ出血熱

指導教員：山口、松村(課題研究) 山口(英語)

班員：人見、荒川、熊木、白崎、藤井

2班 性病

指導教員：松村、山口（課題研究） 黒田、鈴木（英語）

班員：山田、親里、諏訪、安田、柳本

3班 経済格差と健康

指導教員：磯崎、森田（課題研究） 明翫、加藤（英語）

班員：戸口、泉、江本、奥山、田中佑、鳥取、丸山

4班 水と健康

指導教員：重見、森田（課題研究） 鈴木、黒田（英語）

班員：山本、上田、竹川、谷口、中間、中山、山崎

5班 食生活と健康

指導教員：後藤、重見（課題研究） 野村、前田愛（英語）

班員：高橋、岩城、北島、弓倉

6班 運動と健康

指導教員：重見、後藤（課題研究） 前田愛、野村（英語）

班員：柳、井上、前田、水橋、吉村

7班 食糧問題と健康

指導教員：松村、磯崎（課題研究） 藤田、菅沼（英語）

班員：池田、梅原、梅本、田中昂、鶴留、萩原、森田

8班 環境問題と健康

指導教員：森田、重見（課題研究） 菅沼、藤田（英語）

班員：三井、岡部、川島、長屋、橋詰

（研究手法・方法論の指導と中間目標の設定）

課題研究の進め方について、『課題研究メソッド』（啓林館）を用いて、「先行研究を踏まえ」「客観的データを用い」「他者と共有できる」ように探究すること、「問いを立てること」「何を明らかにしたいのかを明確にすること」を指導した。2学期は校外発表への参加（清風南海高校「未来を考える国際シンポジウム」11月9日）と校内日本語プレゼンテーション大会（12月3日）の2つを中間目標に設けた。2つの中間目標に向けやるべきことを明確化し、少しずつ段階を踏みながら課題研究を進めた。

Ⅲ 校外発表会への参加 ～清風南海高校ポスター発表～

初めての校外発表に向け、テーマや取り組む課題を明確化し、ポスターにまとめた。現時点で自分たちが漠然と抱えている問題・関心を言語化し、課題研究の核となるリサーチクエスションを設定できるよう自分たちで先行研究や問題点を整理することを目指した。

11月9日（土）の清風南海高校「未来を考える国際シンポジウム」へは1班・3班・6班が代表で参加した。ポスター発表の部でそれぞれ「NO MORE エボラウイルス」「脱！！不当労働！～外国人技能実習生の裏側」「アジアにいる肥満の「あなた」に伝えたい。高校生の考える健康な体への第一歩」の発表を行った。3班とも多くの聴衆の前で堂々と発表し、他校の生徒・先生の質問にも一生懸命答えていた。初めての対外発表の経験はとても多くの収穫となった。

Ⅳ 日本語プレゼンテーション大会の実施 12月3日（火）第5～7限

・参加生徒：高1・高2のGAコース生（中3GA生は6限のみ参加）

・目的：（1）これまでの探究活動の成果をまとめ発表する。

（2）教員・生徒の評価シートから発表内容を振り返り課題を発見する。

- ・発表時間：発表7分、質疑5分で計12分
- ・評価方法：教員と生徒全員が評価シートを用いて評価
- ・各班の発表テーマ
 - 1班 「NO MORE エボラウイルス」
 - 2班 「性病と教育」
 - 3班 「脱！不当労働～外国人技能実習生の裏側～」
 - 4班 「世界の水問題～安定的な水供給への第一歩～」
 - 5班 「アジアの小児肥満について」
 - 6班 「パラオにいる肥満の「あなた」に伝えたい。高校生の考える健康な体への第一歩」
 - 7班 「南スーダンにおける食糧問題」
 - 8班 「関西の観光問題を考える」

4. 3学期の取り組み

3学期は日本語プレゼンテーションの内容を英語化する作業の中で、課題研究の内容・構成の見直しと結論部分の推敲を重ね、2月はじめの英語プレゼンテーション大会を経て、2月末の台湾研修において課題研究中間発表（英語）を行った。

I 特別授業「JICAの先生に聞いてみよう」1月21日（火）

昨年同様、文献調査だけではわからない情報を得たり、専門の先生にしか聞けないことを質問したりするため、JICAで活動された3名の専門の先生をお招きし特別授業を開催した。テーマ別に3つのブースに分かれ、各ブース15名程度の小集団で学習活動（講義と質疑）を展開した。どのブースもスライドを多く用い、現地での活動の説明、問題点、日本との違いなどを分かりやすく講義していただいた。各班の課題研究にこの授業で得た情報が反映されるなど、よい学習の機会となった。

- *講師の先生 田上加奈先生（派遣国：ウガンダ）
溝内克之先生（派遣国：タンザニア）
柳澤沙也子先生（派遣国：インドネシア）

II 英語プレゼンテーション大会の実施 2月4日（火）第5～7限

前回の日本語のプレゼンテーションから2ヶ月の間、英語科の先生の指導を受けながら、スライドの再構成を行った。この間に各班とも課題研究の考えが整理され、スライドの内容や結論が洗練されかなり良くなった。プレゼンテーションでは各先生方から細やかなチェックと指摘を受け、公開発表会と台湾研修に向け、生徒たちの意識は一層高められた。

- ・参加生徒：高1GAコース生のみ
- ・目的：（1）台湾研修に向け英語によるプレゼンテーションの習熟をはかる。
（2）英語科の先生方による英語表記や表現のチェックを受ける。
- ・発表時間：発表7分、質疑9分で計16分
- ・各班の発表テーマ
 - 1班 NO MORE Ebola virus
 - 2班 STIs and Education
 - 3班 No More unfair labor practice～
 - 4班 Water Issues -What effect do water issues have on humans?～
 - 5班 Asian child obesity

6班 Obesity HEALTH Exercise -Exercise to prevent obesity in Palau Republic
- A small step toward the health promotion --

7班 Food scarcity in South Sudan

8班 The tourism issues in Japan

*なお、このプレゼンテーション大会の後、課題研究担当教員で会議をもち、2月15日の
AL公開研究会での発表班として1班、2月22日のSGH事業公开发表会での発表班として
6班と8班を選出した。

III SGH事業公开发表会（プレゼン発表、ポスター発表）2月22日（土）

本校GAコースの取り組みの成果を発表するため、第1部では中3・高1・高2の各学年から代表
が発表をした。高校1年生からは6班と8班がプレゼンを行った。第2部ではアリーナ会場に場所を
移して、全ての班がポスター発表を行った。各班は台湾での中間発表も見据えて英語での発表に努め
た。昼休みの下級生へのポスター発表では平易な日本語で課題研究の内容を紹介していた。

IV 台湾研修 2月25日（火）～28日（金）

高1の課題研究の成果発表を台湾で行った。この海外研修は3年間の課題研究の中間発表と位置付
けられる。別途、詳述する。

4 総括・今後の課題

今年度から教員のワーキンググループ体制がとられ、GA課題研究に関わる先生が格段に増えた。と
くに英語科のスタッフが大幅に増え、どの班も複数の英語科教員に英語指導をしてもらうことができ
た。また73期生から1人1台のパソコンを手元におき、いつでも調べ学習をおこなうことが可能にな
った。更に図書館に全面的に協力していただいております、毎回の授業で図書館をフルに活用することがで
きた。このようにここ数年間で学習環境は格段に整備されている。

74期のGAコース生を分析すると、彼らはいずれもGAコースを第1希望にして入ってきた生徒た
ちであり、成績の面でも上位層が多い。それゆえ全体的に見れば学習意欲が高く課題研究に取り組む姿
勢も真面目である。ただ中には早くも受験のことが気になり課題研究に身が入らない生徒も出てきてい
る。来年度は全員が課題論文に取り組むことになるので、このような意識の低い生徒のモチベーショ
ンをいかに高めていくかが課題となる。また74期生は全体的に自分たちの興味や関心のあることには積
極的に取り組むが、あまり関心のないこと、とくに上から押し付けられたと感じることについてはやら
ない傾向があり、今年1年の指導でも押し付けではなく、彼らのほうが意欲をもって取り組むように仕
向けることに労力を割いてきた。その一方で自分たちが面白いと感じ意欲的に取り組みだしたときには
期待以上の成果を出してくれる可能性を秘めた学年でもあり、楽しみな学年でもある。

(3) 「海外の連携校との協働活動・課題研究の成果発表会の企画と実践」

《(I) - ④》 [年間事業計画⑪]

実践・研究報告書

報告者：社会科教諭 重見高德

1. 予定概要

今年度の台湾研修については、コロナウイルスの流行により、総合的な判断として本年度の研修を中止することになった。予定されていた台湾研修の概要については、以下の通りである。

(1)実施予定概要

- ①実施日：2020年2月25日（火）～28日（金）
- ②研修地：台湾・台北市内
- ③参加生徒：高校1年1組（GAコース）・45名
- ④引率教員：工藤剛校長（団長）、明翫吉宜教諭（担任）、重見高德講師（課題研究担当）
山口晃子講師（課題研究担当）
- ⑤訪問先研修協力機関・支援者
 - a) 私立延平高級中学校 劉永順校長
 - b) 国立台湾大学公共衛生学院 詹長權教授、張書森助理教授
 - c) 台北医学大学公共衛生学院 郭乃文教授
 - d) 台湾富士ゼロックス株式会社
 - e) みずほ銀行台北支店
 - f) 元台湾日本人会・台北市日本工商会総幹事 山本幸男氏
- ⑥協力：株式会社JTB西日本 里村周亮氏（添乗員）、岡本宗高氏

(2)海外研修の目的

- ①延平高級中学校との学校交流
～同世代の高校生との交流からコミュニケーション力を磨く
- ②課題研究のプレゼンテーション発表
～3年間の課題研究の中間発表を英語で行う
- ③国立臺灣大学公衆衛生学院、台北医学大学訪問
～台湾の公衆衛生事情を学び、グローバルヘルスに関する学習を深める
- ④海外で活躍する企業の訪問
～世界を舞台に働くことはどういうものか最前線で学ぶ

(3)予定研修行程

1日目 2月25日（火）	午前 午後	関西国際空港出発⇒台北桃園空港到着 企業研修 富士ゼロックス株式会社 「現地で活躍するグローバル企業・日系企業で活躍される方からのお話を通じ、広い視野を吸収する」 講演 山本幸男氏 「今、台湾が大注目されているのはなぜか」 プレゼンテーション準備・練習
2日目 2月26日（水）	午前 午後	学校交流 私立延平高級中学校 a) 課題研究プレゼンテーション発表会 b) 文化活動 見学 中正紀念堂 大学訪問 台北医学大学 先生の講義 生徒課題研究プレゼンテーション発表（3班） プレゼンテーション準備・練習
3日目 2月27日（木）	午前	大学訪問 国立台湾大学全球衛生中心公共衛生学院 張書林先生講演「Global Mental Health」

	午後	生徒課題研究プレゼンテーション発表（3班） 医学人文博物館見学 企業訪問 みずほ銀行 台北支店 「台湾における日系企業の進出や台湾経済状況について」 見 学 国父記念館・台北 101
4 日目 2 月 28 日（金）	午前 午後	見 学 国立故宮博物院 台北桃園空港到着⇒関西国際空港出発

2. 研修中止について

(1)経緯について

1 月末よりコロナウイルスの影響により、延平高級中学・台北医学大学より上記行程の見直しが打診された

①延平高級中学での昼食会等の中止

※ 本校生による英語プレゼンは実施

②台北医学大学への訪問見合わせ

※ 同大学教授による滞在ホテルでの講義及び生徒プレゼンテーションを実施

特に①については、台湾政府が旧正月の冬休みを 2 週間延長し、24 日まで休校措置をとったため、実施が危ぶまれたが、幾度の交渉の結果、縮小ではあるが実施の方向で進めていた。延平高級中学校では劉永順校長先生の直接の指揮の下、最後まで本校受入れのため尽力をして頂きました。しかし、2 月 21 日に延平高級中學の彭敬淑學務主任より本校の訪問団受入によって発生するリスクに対して、台湾教育省、理事会、保護者等の不安や懸念を払拭することはできず、やむなく受け入れを中止せざるを得なくなったと連絡が入った。また、現在、新型コロナウイルスの感染終息のめども立たず、感染者増加も日々報道される状況下にあることから、学校として研修自体の中止を決定するに至った。延平高級中学校訪問は、この研修の基幹部であり、学校交流が中止となったため、断腸の思いではあるが研修を取りやめた次第である。

(2)中止に対する生徒たちの反応

生徒たちは、直前までプレゼンテーション及びポスターを作成していたため、肩を落とす生徒がたくさんみられた。これまで、日本語プレゼンテーション大会、英語プレゼンテーション大会を経て、スライド資料やポスターをブラッシュアップしてきたため、その反動は大きいものであった。

3. 今後の対応 ー発表映像を台湾へ

(1)概要

①目的

本来、台湾研修で発表する予定であったプレゼンテーションについて、校長を中心に担当者と協議した。その結果、プレゼンテーションを本校コナコピアホールで撮影し、映像を私立延平高級中学校などへ動画を配信し、交流ができたかと考えている。

②撮影について

- a) 日 時 : 2020 年 02 月 25 日（火）
- b) 場 所 : 本校コナコピアホール
- c) 撮影機材 : iPad
- d) 発表時間 : 標準 7 分（10 分以内に収めること）
- e) 条 件 : 発表の前に題名、自己紹介、私立延平高級中学校の生徒へのメッセージをつけること（英語）。

(2)撮影の様子

撮影には、課題研究担当の教員の他に、英語指導をしてくださった先生方、高校 1 学年の先生方などに参加していただき、プレゼンテーションの集大成として発表をおこなった。本来なら高校 2 年生や中学 3 年生など生徒たちを聴衆にすることも考えられたが、時間割の都合上、見送られた。発表者たちは、観客が少なく戸惑っている様子ではあったが、これまで練習してきた力を発揮して、発表に臨んだ。

発表の様子

Group1 No More Ebola Virus



Group2 STIs and Education



Group3 No More unfair labor practice



Group4 Water Issues -What effect do water issues have on humans?-



Group5 Asian child obesity



Group6 Obesity HEALTH Exercise -Exercise to prevent obesity in Palau Republic

- A small step toward the health promotion -



Group7 Food Scarcity in South Sudan



Group8 The tourism issues in Japan



4. 総括・今後の課題

台湾研修の中止は、高校1年1組にとって、課題研究の貴重な機会を失う結果となった。多くの生徒は、先輩たちからは台湾研修での経験の大切さを聞いている。例えば、台湾大学、台北医科大学の先生方の貴重な講演、課題研究プレゼンテーションの内容についての厳しくも直接指導していただける機会がある。延平高級中学校では、プレゼンテーションもさることながら同世代との異文化交流ができる。また、グローバル企業訪問では、世界という舞台で活躍する人たちから講演をいただき、見学することで、グローバルリーダーの資質、進路意識の向上を図ることができる。そして、この経験が、これからの課題研究活動の礎となっていることを、成長した高校2年生の発表などを通じて、1年生たちは体感している。

これからの課題として、2点ある。1点目は「準備」である。昨年度の状況を踏まえ、できるかぎり早い段階から進めてきた。また、生徒の課題研究がどこまで進んでいるかを「報告書」として指導の先生方へ配布したりするなど、課題研究担当および英語指導担当と連携を促すことで、生徒への指導を円滑にできるようにした。一定の効果はあったものの、もっと課題研究担当・英語指導担当・生徒たちが、同じ場で指導する回数を増やし、指導内容の共有を図っていくことが大切であり、次年度以降、そのような場を設けるよう考えている。2点目として、今年度だけにあてはまるが、中止となり落胆している生徒たちに対して、意欲的に取り組む環境、指導体制をいかに構築していくかである。台湾研修が契機となり、課題研究に前向きになる生徒も多い。そのため、この悔しい経験をバネにして、来年度の課題研究活動にとりくむための仕掛けをしていかなければならない。次年度に向けて担当者間で、授業プランを練っていくようにしたい。

「グローバル課題研究」ルーブリック評価について（高校1年）

《(I)－⑤》[年間事業計画⑤]

担当：社会科教諭 重見高徳

1. 概要

(1)調査日時：2020年2月28日（金）1限目

(2)調査対象：高槻高校1年1組GAコース（74期）

(3)調査人数：38名

※ クラスは45名ではあるが、欠席およびコロナウイルス流行の影響により休校のため、回収できた分で調べている。

(4)生徒観

SGH事業も4年目となり、GAコースの研究活動や学習内容が全校的に周知・浸透している。そのため、GAコースの取り組みを理解したうえで、このコースを選択した生徒であり、社会問題・国際問題などに高い関心をもっている。中学3年生からGAコースの取り組みに参加し、外国人研究者によるセミナーや先輩方の課題研究発表、研修報告など聴講している。課題研究では、班員で協力し合い、スライドやポスターを分担して作っている。

(5)目的と方法

- ・ 年度末に定点調査をおこなう。10の観点について生徒の自己評価の状況と数値の過年度比較により、生徒の変化や成長を読み取ることを目的としている。
- ・ 方法としては、課題研究用のルーブリックを用いる。
- ・ ただし、今年度は海外研修が中止となったため、項目10「海外研修の成果」は除外している。

2. 調査結果

(1)74期生高1・5段階評価の分布と平均値

評価基準			1	2	3	4	5	平均
課題設定	1	課題を的確に設定できたか	0	0	19	12	7	3.7
	2	グローバルヘルスと関連付けられているか	4	1	13	7	13	3.6
資料の収集・分析	3	先行研究を調べ、課題の背景や問題点を意識できているか	0	4	8	23	3	3.7
	4	社会科学的または統計的に資料の収集・分析ができているか	0	0	16	16	6	3.7
	5	信用にたつ資料分析ができているか	0	1	15	15	7	3.7
課題解決	6	課題解決案が創出できているか	0	1	14	18	5	3.7
	7	研究の結論が妥当であるか	0	0	17	13	8	3.8
	8	結論に厚みのある記述ができているか	0	3	19	7	9	3.6
課題発表	9	論文やプレゼンテーションを適切に発表できたか	0	5	15	13	5	3.5
海外研修の成果	10	海外研修を意義あるものにし、課題研究に活かしたか						

※ 生徒の選択した評価を5段階評価で示している。

※ 表中の平均値は「(評価点×選択した人数)÷全体の人数」のこと。

(2)高1段階の過年度比較

高校 1 年 G A コース			2019年度	2018年度	2017年度	2016年
			74期	73期	72期	71期
評価基準			38名	44名	43名	11名
課題設定	1	課題を的確に設定できたか	3.7	3.7	3.7	2.9
	2	グローバルヘルスと関連付けられているか	3.6	4.3	4.1	3.1
資料の収集・分析	3	先行研究を調べ、課題の背景や問題点を意識できているか	3.7	3.8	3.7	3.2
	4	社会科学的または統計的に資料の収集・分析ができているか	3.7	3.8	4.1	3.0
	5	信用にたる資料分析ができているか	3.7	3.7	4.1	3.0
課題解決	6	課題解決案が創出できているか	3.7	3.7	4.1	2.8
	7	研究の結論が妥当であるか	3.8	3.7	3.8	2.9
	8	結論に厚みのある記述ができているか	3.6	3.6	3.7	2.4
課題発表	9	論文やプレゼンテーションを適切に発表できたか	3.5	3.7	4.2	2.8
海外研修の成果	10	海外研修を意義あるものにし、課題研究に活かしたか	****	3.9	3.6	2.8

3. 分析

(1)74 期生高 1 ・ 5 段階評価の分布と平均値での分析

すべての項目において「評価 3」ないし「評価 4」を選んだ生徒が多く、平均数値も 3.5 を超えている。指導教員として想定していた自己評価ラインに達している。課題設定については、グローバルヘルスと関連付けられた課題設定ができている。ただ、「評価 1」ないし「評価 2」も 5 名いるが、設定した題材がグローバルヘルスと関連しているのに、聴講者にわかりづらかった点を反省している。資料の収集・分析については、先行研究をしっかりとおり、十分に資料を収取・分析できていることがわかる。しかし、課題解決については、より具体的な解決策を創出しようとしたが、なかなか苦心しており、納得できている結論ではないという評価となっている。

(2)高 1 段階の過年度比較の分析

過年度比較では、72 期・73 期と同様の結果である。ただ、全体として課題解決、課題発表の部分が過年度より低くなっている。これは、台湾研修の中止が大きくかかわっていると考えられる。プレゼンテーションの動画は撮影したものの、研修の達成感はなく、「発表を頑張れた」という意識にはなかなかならず、このような結果となったと推測される。

(3)全体として

昨年度と同様に授業内では以下の塔な取り組みをおこなった。

①「Google クラウド」の活用

各研究班のクラウドを開設し、そこで収集した資料を共有させたり、教員より指導の履歴を残したりするなど、ICT を活用した探究活動を進めた。

②「課題研究の進め方」講座

はじめておこなう課題研究について、見通しを立てさせるための初期指導をていねいにおこなった。特に、リサーチクエスチョン考え、そして妥当なものにさせるための指導に時間をかけた。

③外部機関・講師の活用

SDGs に関するワークショップを京大アイセックに依頼したり、JICA より出前委講座を利用し、海外支援を経験された専門家の方々のご指導を受けた。

これまで課題研究で培われた指導に関するノウハウを活用し、高槻高校GA課題研究で、どのようにすれば生徒に意識させることができるか、研究活動が円滑に行えるかなどの、指導の「型」が決まってきた。しかし、未だ不十分なところも多い。生徒たちが研究活動に満足ができるような環境づくり、指導体制づくりを進めていきたい。

(資料1) 課題研究での取り組みの風景

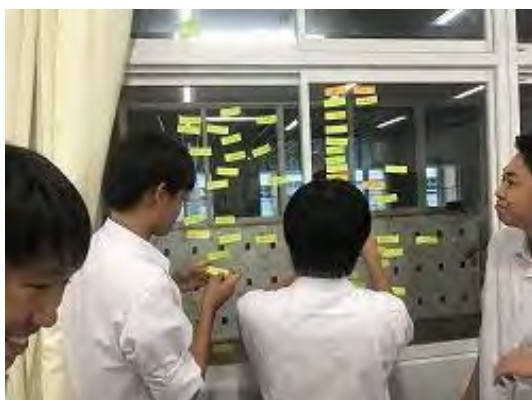
<5月>アイセック SDGs 講座



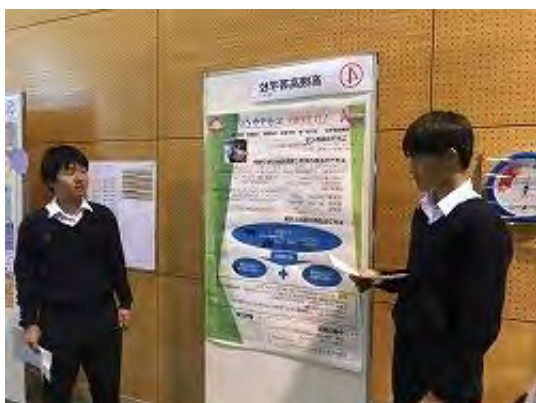
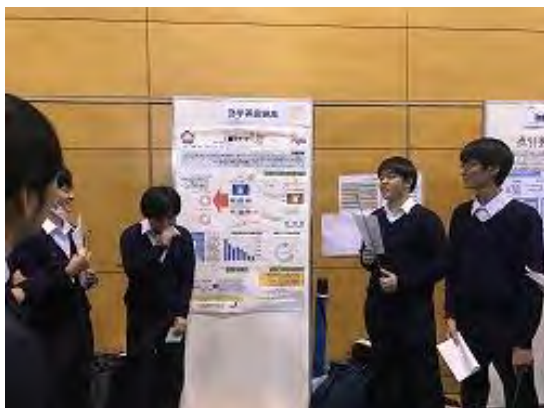
<9月>文化祭展示の様子



<10月>「課題研究のすすめ方」リサーチクエスチョンを設定する



<11月>清風南海高校「未来を考えるシンポジウム」ポスターセッション



<12月>日本語プレゼンテーション大会



<1月>JICAの先生に聞いてみよう



Summary

Group1 No More Ebola Virus	In 2020, the Tokyo Olympics will be held, and many tourists will visit Japan. Therefore, various infectious diseases might spread all over Japan, because some of foreign visitor might be infectious disease carriers. We focus on the Ebola virus, which has not yet been infected in Japan. As the number of foreign people coming to Japan is increasing, we want to study what kind of measurements we should take to prevent the Ebola Virus from spreading.
Group2 STIs and Education	Unlike other developed countries, the number of people infected with the sexually transmitted diseases is increasing in Japan. For example, syphilis is spreading among teens and twenties and we had a sense of crisis and chose this theme as our own problem. We would like to know how other countries tackle these problems and what kind of education is more effective to reduce infected young people. And then we would like to propose ways of solving the problem.
Group3 No More unfair labor practice	As an aging society with fewer children becomes more and more serious in Japan, Japan has begun to accept more foreign workers from Asia to make up for the lack of labor force. However, these workers are forced to work unfairly and get ill. We considered it as a top priority to solve the problem mentioned above, and we should try to find a way of making a good working environment in which foreign workers can work safely and without anxiety.
Group4 Water Issues -What effect do water issues have on humans?-	Water is essential to our daily life. We surely believe that a stable supply of water will lead not only to an improvement in health but also to a better quality of life. That is why we started this research. We are comparing water service business in developed areas with that of developing areas, and have been looking for what we can do now.
Group5 Asian child obesity	In recent years, obesity resulting in lifestyle-related diseases has become a social problem for along time. Among them, child obesity, which is directly linked to adult obesity, is spreading throughout Asia. That is why we study this problem to contribute to the reduction of obesity rate in the future.
Group6 Obesity HEALTH Exercise -Exercise to prevent obesity in Palau Republic - A small step toward the health promotion -	It is necessary to promote exercise for health and improve eating habits to eliminate obesity. We focused on one of them, "regular gentle exercise". We propose Japanese traditional style of doing gentle exercise which will help eliminate obesity in Asia, especially in Palau.
Group7 Food Scarcity in South Sudan	South Sudan, a recently dependent country, has the lowest capita GDP in 2017. We knew the current situation in South Sudan. We want to know more about food scarcity, which is a life or death problem in South Sudan, and decided to study how we could solve it.
Group8 The tourism issues in Japan	In the world, tourism pollution is just becoming issues. In Kansai, Japan, The number of foreign tourists is dramatically increasing and destroy the environmental resources around which people. That is why we would like to find the measures to solve the problem to promote a sustainable tourism which makes positive impacts on the environment, society, and economy.



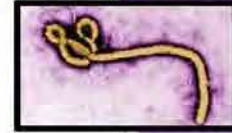
No More Ebola Virus

Takatsuki high school ☆ Arakawa Kumaki Sirasaki Hitomi Fuji



1、What is Ebola Virus?

- ① Infected area : Africa
- ② Infection routes : Only contact infection
- ③ Symptoms : High fever , Bleeding , Headache



2、Quarantine

→ In Japan, Ebola is defined as Class I infection.

Airport quarantine method



High

Low

Challenges

We only do thermography inspection



It is impossible to prevent all diseases.

3、If Ebola Virus enters Japan?

1、Lack of knowledge

- People tend to be anxious for an epidemic.
- What can we do to remove their anxieties ?

Short-term vision



Long-term vision



2、Lack of medical equipment

- Specific infectious disease medical institution ⇒ **only 4 medical institutions**
- First-class infectious disease medical institution ⇒ **only 52 medical institutions**



3、Government's response

- Many are lead death by **Corona virus**.

Get overseas infection status

Survey infection status

Isolated infected people to the hospital

4、Future cycle



5、References

No time to lose by Dr. Peter Piot

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansennohanas/342-ebola-intro.html>

<https://www.tepika.net/infection/ebola.html>

https://www.jstage.jst.go.jp/article/naika/103/11/103_2650/_article/-char/ja/

https://www.jstage.jst.go.jp/article/kansenshogakuzasshi/89/2/89_223/_article/-char/ja/

3 https://www.huffingtonpost.jp/2014/08/12/what-actually-happens-when-a-person-is-infected-with-the-ebola-virus_n_5673570.html





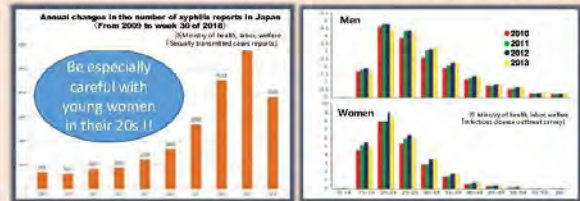
STIs and Education



Takatsuki High school GA course / Oyazato Suwa Yasuda Yanamoto Yamada

- ✓ It's necessary to improve sex education
- ✓ The increasing the number of infected students is Particularly series

Syphilis & Genital Chlamydial Infections by age group



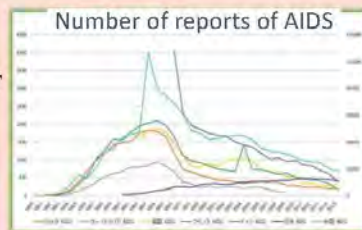
Early

In Japan
✓ Slow start
✓ Regulation

Children think light of sex education

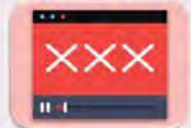


Educational video for children in the UK



Correct

Widespread use of the Internet
↓
Inappropriate sexual behavior
↓
Prevalence of STIs



Detailed

Which textbook do you think is better?



Many letters
Few images



Many real images
many pages on sexual content

Initiatives in Japan

- ▶Activities by the Ministry of health, labor, welfare
- ▶Activities by university students
- ▶package ingenuity



Future Prospects

1. Rethinking ideal forms according to the circumstances of other countries
2. Take action based on the ideal form

References

- ✓ http://apps.who.int/iris/bitstream10665/75181/1/9789241503839_eng.pdf
- ✓ <http://www.mhlw.go.jp/topics/2005/04/tp0411-1.html>
- ✓ <http://jomf.or.jp/report/kaigai/30/02.html#>
- ✓ WHO, Global incidence and prevalence of selected curable sexually transmitted infections-2008

Technical Intern system and its problems



- No time card
- No contract
- Unable to read contracts written in Japanese

- Foreign Interns' Small Contribution to Labor Unions
- Whether Foreign Interns Work Illegally or Not
- The Language Barrier

How can we create comfortable and enjoyable work environment for foreign workers?

What is required?

- Strengthening regulations
- Eliminate language barriers
- Improve a disadvantageous situation for foreign workers

let many people be aware of the work environment

Establish a group which act as an intermediary between foreign workers and administrator etc...

[illegible]



Asian child obesity



Keigo Takahashi, Tomohiro Iwaki, Satoshi Kitajima, Riku Yumikura

1. What is child obesity

Obesity of children is mainly evaluated using **the degree of obesity**.

Judgement	Thin	Usual	Mild Obesity	Moderate Obesity	Severe Obesity
The degree of obesity	Less than – 20%	– 20%~20%	20%~30%	30%~50%	Over 50%

2. Causes of Child Obesity

- ① Sleeping Time
- ② Eating Habit
- ③ Exercise Time



3. How about JAPAN?

- Westernization of lifestyle
- Population of obesity



about 23 million

4. How About Taiwan?

- Oily Taiwanese food
- No habit to exercise

Diet for prevention Child obesity

- ① Number of meals
- ② Nutrition balance

In the WHO European Region

1 in 3
11-year-olds is
overweight
or
obese



Future Outlook

- Need government intervention

Not only to promote exercise, but to force it by law

References

https://www.jstage.jst.go.jp/article/naika1913/84/8/84_8_1236/_pdf/-char/ja
<https://gyo-toku.jp/med-dept/pdf/gyoutoku-child-sick23.pdf>
<https://gyo-toku.jp/med-dept/pdf/gyoutoku-child-sick23.pdf>
<https://www.nichireifoods.co.jp/media/1231/>
<http://www.kanagawa.med.or.jp/ibukai/gakkoui/kodomonohiman.pdf>
<http://jspe.umin.jp/public/himan.html>
http://dl.med.or.jp/dl-med/doctor/ssi/sports25/sports25_k3.pdf



Obesity HEALTH Exercise



Exercise to prevent obesity in Palau Republic
 -A small step toward the health promotion-
 Soia YANAGI, Shoki MAEDA, Tomoya INOUE, Takuto MIZUHASHI, Rikizo YOSHIMURA

Motivation

LACK OF RESEARCH

WHY DID WE START TO RESEARCH?

GET FIT → BECOME OBESITY

IN Palau

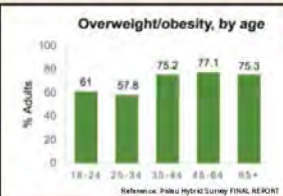
People in Palau...

- Exercise: do not want to do exercise
- Culture: do not think obesity is bad



Research

The current state of obesity in Palau



There many obese people in Every age

We have to introduce exercise that everyone can do.

What exercises are suitable for obese people?

In general



Too hard for obese people

In theory

1. Moderate load

Exercise

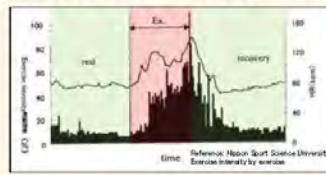
Easy Habitable

RADIO EXERCISE



ラジオ体操 第1

Merits of Radio Exercise



Exercise Intensity

Virtuous Circle

Slowly moving

→

Getting harder

How to spread radio exercises

Palau Republic people

Kids

Adult

Lifelong habit of "radio exercises"

Encouragement in local communities

What should we do NEXT?

For Kids

Background

- Do not understand meaning of Exercise

Solution

- Familiarize radio exercise with teachers
- Requests and follow-up to dispatch units such as JICA

For Adults

Background

- Car Society
- Due to the poor Internet environment, publicity activities on SNS are difficult.

Solution

- Promotion activities at places such as supermarkets where they drive.
- Make a video of the English version of radio exercises.

Conclusion



Exercise with friends

Intense exercise to prevent obesity

Have interest in healthy life

Radio exercise

Make exercise habits



START → **GOAL**

References

1. <https://doi.org/10.1016/j.amepre.2019.04.001>

2. <https://doi.org/10.1016/j.amepre.2019.04.001>

3. <https://doi.org/10.1016/j.amepre.2019.04.001>

4. <https://doi.org/10.1016/j.amepre.2019.04.001>

5. <https://doi.org/10.1016/j.amepre.2019.04.001>

6. <https://doi.org/10.1016/j.amepre.2019.04.001>

7. <https://doi.org/10.1016/j.amepre.2019.04.001>

8. <https://doi.org/10.1016/j.amepre.2019.04.001>

9. <https://doi.org/10.1016/j.amepre.2019.04.001>

10. <https://doi.org/10.1016/j.amepre.2019.04.001>

SGH Food Scarcity in South Sudan

What is food scarcity?

- Conflict
- Climate
- Rise in grain prices

Hunger spreads

Can't produce crops
Can't buy food

Background

Current situations in South Sudan

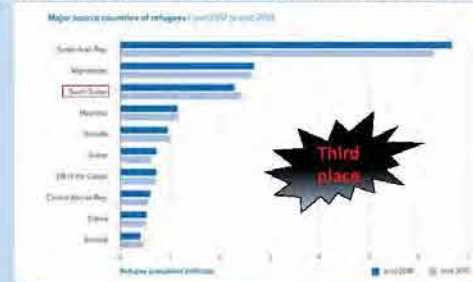
Economy

Nominal GDP per capita in 2019

Rank	Country	GDP per capita(\$)			
1	Luxembourg	113,196	~	~	~
2	Switzerland	83,716	24	Japan	40,846
3	Macao SAR	81,151	~	~	~
4	Norway	77,975	70	China	10,096
5	Ireland	77,771	~	~	~
~	~	~	191	Burundi	309.9
8	United States	66,116	192	South Sudan	275.2

Refugees

Major source countries of refugees from 2017 to 2018



Solution

Introduction of NERICA

What is NERICA?

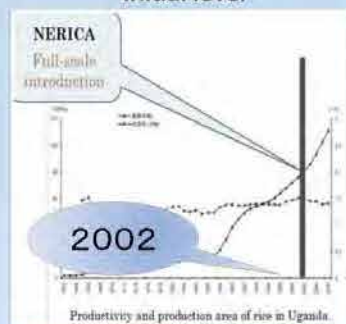
**Merit/Demerit**

- Short growth cycle
- High protein
- Being resistant to diseases and drought

Few instructors

Successful case in Uganda

Initial level



Start the promotion of Rice Development project

Hold workshop
in 57 prefectures
Nurtured 849
Ugandan people

Now

2008

2017

Future prospects

- Spread NERICA
- Send instructors

Future tasks

African people think...

We are
satisfied with
the present
condition

References

https://www.ica.go.jp/ica-/IFIC_and_IBCT-Studies/ica-2/publication/archives/ica/kenkyu/03_36/pot/36_1_2.nd 日本リカメの研究開発・普及の歴史と課題 (ICA国際協力専門員村田邦雄)

<http://foac.jp/chiba-1.jp/ica/curator/900056078/5411hortresearch.pdf> アフリカにおけるリカメ栽培技術の確立と技術普及 (ICA専門員 坪井達史)

The tourism issues in Japan

Takatsuki senior high school 1-1 No.8 Mitsui Hashizume Nagaya Okabe Kawashima

1.Reason for Research

Kansai International Airport
Visitors trends 2000 to 2018
From Airport management status reports (MLIT, Japan Civil Aviation Bureau)

What's over tourism?

Including tourist
Overdevelopment

NEGATIVE

IMPACT

Citizens

Visitors

Environment

(ex) Littering, Traffic jam, The noise...

✓ Tourist spot lose their attraction

Concrete Examples

Population has decreased

Venice

- Increasing demand for hotels
- Increasing number of hotels
- Reduction of land for housing
- Soaring house prices

DOTOMBORI

Many tourists visit here

L

L

CONCENTRATION

Our Solutions

1.Dispersing visitors

(ex)recommending other spots, promoting in low season.

2.Regulating visitors

(ex)setting admission fee, reservation system

Solutions in abroad①

•evaluate sightseeing facility that protect nature.

•issue coupon

SIGNING BLUE

A WWF INITIATIVE FOR RESPONSIBLY MANAGE TOURISM IN INDONESIA

✓Spreading tourists

✓Protecting nature

Solutions in abroad②

introduce rural sightseeing places

「Cicla Madrid」

✓Make countryside more attractive

✓Increase tourists in country side

Regional Revitalization with Tourists

インバウンド観光振興プロジェクト
BareTo project

Find tourists resources

Use the experience...

Promotion

Develop model city

Establish Big-Data

(4) 総合学習「グローバル課題研究」の設置について（高校2年）

≪ (I) - ④ ≫ [年間事業計画⑥]

実践・研究報告書

報告者：社会科教諭 吉水真人

1 グローバル課題研究（高校2年次）について

1. 概要と目標

本校のGA（グローバルアドバンス）コースは、特色として「グローバルヘルスの向上」「アジアの人々の健康問題」を共通テーマにかかげて課題研究を行い、英語でその成果発表を行う。

グローバル課題研究の第2年目は、11月にパラオ共和国での海外研修「アジア・フィールドワーク」を実施する。1年次の台湾研修と違い「班ごとの研究」から「個人の研究」にシフトし、生徒各人がパラオの政府機関へ直接英語で質問を行い「情報を獲得する」ことが目的となる。フィールドワークや学校交流を通じて現地の方々と交流し、自らの課題テーマについて探求活動を行う。フィールドワーク後は、研究論文（研究要綱）を作成し、ポスターによる研究報告を行う。

1 学期目標	パラオでの調査にむけ、太平洋の島国の公衆衛生・医療・教育・生活環境・食文化に関連する課題について調べ・考察し、自己の研究テーマを設定する。
2 学期目標	京都産業大学三田貴教授の講演と質疑からパラオに関する情報を収集し、リサーチクエスションを明確化して、パラオフィールドワークの現地調査に臨む。
3 学期目標	フィールドワークの成果を用いて、個人の研究テーマごとに課題論文（研究要綱）を作成し、ポスターにまとめ、発表する。

2. 履修対象者

高槻高校73期生 GAコースに所属する2年1組44名

3. 指導教諭

課題研究指導

社会科：磯崎陽介、重見高德、後藤陽、森田朱理、吉水真人

英語科：加藤廣太

4. 高校2年次の取り組み

1 学期 グローバル・ 이슈の講義、第一回パラオフィールドワーク事前学習セミナー

研究グループごとに調べ学習の成果をスライドで発表

夏休み 夏の課題「研究計画書」作成、パラオ政府機関への質問作成

2 学期 文化祭展示発表「私のパラオフィールドワーク羅針盤」（研究計画書）

第二回パラオフィールドワーク事前学習セミナー／JICA 出前講座

個人の課題研究の中間報告会

アジア・フィールドワーク（パラオ共和国）

3 学期 課題研究の「研究要綱」「ポスター」の作成、研究論文の執筆

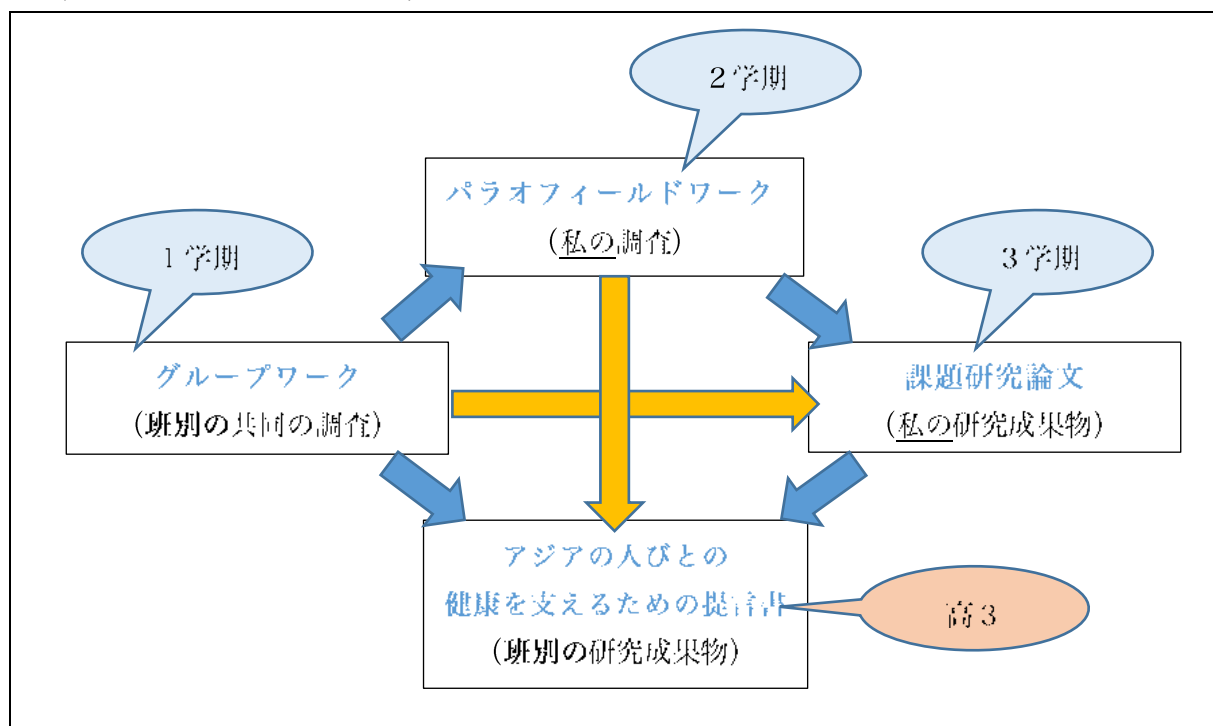
2 年間授業一覧

一学期	
4月16日(火)	高2ガイダンス「高2課題研究の進め方・研究テーマを考える」
5月7日(火)	課題研究と図書館利用術(鬼丸先生)／校長先生講話(GAコースについて)
5月14日(火)	「水をめぐる問題について考える」講義(磯崎担当)
5月28日(火)	「高齢化する世界」講義(吉水担当)／研究グループの決定
6月4日(火)	第1回パラオフィールドワーク事前学習セミナー 京都産業大学三田貴教授講演「パラオの歴史 開発パラダイムを中心に」
6月7日(金)	グループワークをはじめよう マンダラートの作成／新聞資料の活用
6月11日(火)	マンダラートから「問い」をみつける
6月18日(火)	課題研究 グループ課題の発表 調べ学習開始
6月25日(火)	課題研究 調べ学習・スライドの作成
7月2日(火)	課題研究 調べ学習のグループ発表／夏季課題発表
二学期	
9月3日(火)	2学期ガイダンス 企画運営委員の組織／パラオへの質問作成
9月10日(火)	課題研究 文化祭の展示物を作成しよう／研究計画書推敲
9月14日(土)	文化祭「私たちのパラオフィールドワーク羅針盤」を展示発表
9月24日(火)	課題研究 パラオ政府・日本大使館への質問文の完成
10月1日(火)	課題研究 中間報告会スライドの作成
10月8日(火)	第2回パラオフィールドワーク事前学習セミナー 第一部 京都産業大学三田貴教授講演「課題研究の深化を目指して」 第二部 JICAの先生に聞いてみよう 第三部 全体質疑応答
10月26日(土)	パラオ・日本外交関係樹立25周年記念ワークショップ 海でつながるパラオと日本のグローバル・イシュー 学生による市民アクション提案(京都産業大学)
10月29日(火)	中間報告会(1週目) スライド発表(対外発表代表選考会)
11月5日(火)	中間報告会(2週目) スライド発表
11月9日(土)	日本パラオ外交樹立25周年記念セミナー ～パラオと日本の未来を考える～(東京 世田谷美術館)
11月10日(日) ～15日(金)	アジア・フィールドワーク(パラオ共和国)
11月19日(火)	課題研究 パラオフィールドワークの次に向かって 課題レポート
11月26日(火)	課題研究 課題論文の作成に向けて
12月3日(火)	パラオフィールドワーク報告(高1日本語プレゼンテーションにて)
12月22日(日)	全国高校生フォーラム(東京国際フォーラム)
三学期	
1月14日(火)	3学期ガイダンス 論文・ポスター製作にむけて／研究要綱の作成
1月21日(火)	課題研究 研究要綱の作成 →25日(土) 研究要綱データ提出
1月28日(火)	課題研究 ポスターを作成する
2月4日(火)	課題研究 ポスターを作成する →11日(火) ポスターデータ提出

2月19日（水）	課題研究 ポスター発表練習 課題論文の執筆は各自で進める
2月22日（土）	SGH 事業公开发表会 教育班プレゼンテーション発表・パラオ海外研修報告／ポスター発表
2月25日（火）	ループリックアンケート調査 課題論文の執筆→提出は学年末
3月20日（金）	京都大学ポスターセッション2019
3月21日（土）	WWL・SGH×探求甲子園（プレゼン・ポスター・ディスカッション）

3 実践報告

1.73 期グローバル課題研究の指導方針



本校の課題研究は、高1は「班で」、高2は「個人で」課題研究を行う。

今年度は、上図のような指導構想を立て、高2の3学期のポスター発表や論文は、「私の課題研究」としてまとめるが、その過程で、グループでの共同活動の活用をめざした。

また、高3次の「提言書」を、具体的な機関に提案するよう意識付けを行った。

【**個人で研究**】班での共同学習と平行して、個人の課題研究の資料を集め、構想を練る。

2学期のパラオフィールドワーク調査、3学期のポスター作成・発表、研究論文の作成・提出

【**グループで研究**】テーマの共通する仲間グループを結成。

1学期、共同で「調べ学習」や課題の調査、1学期の「中間発表」を行う。

海外研修でも「テーマグループで班をつくり調査」、高3「提言書」もグループで活動予定。

【**高3提言書を“あなたに”届けたい**】具体的な相手に提言書を出すことを目的にかかげる

来年度のことだが、パラオ政府（保健省・教育省）、パラオ大使館、高槻市（市民科などの窓口）、文部科学省、厚生労働省などの具体的な機関に提言できることを生徒に提示した。

2. 一学期の取り組み

一学期は、まず本校教員によるグローバル・イシューの授業を行い、生徒各人が高校2年次に取り組む課題研究の探求テーマを決定するところから始める。次いで、テーマを共有できるメンバーでグループをつくり、グループによる調べ学習を行う。一学期は、パラオ共和国でのフィールドワークに向けた学習準備期間と位置づけ、ゴールデンウィークに、パラオの基本情報をまとめる課題を課し、6月には京都産業大学国際関係学部三田貴教授による事前学習セミナーを開催し、その後、指導教員が各グループに調査学習の課題を与え、各グループで調べ学習を行い、その成果をスライドにまとめ、プレゼン発表をした。

2-I グローバル・イシューの講義（高2）

① 「水をめぐる問題について考える」（担当：磯崎教諭 5月14日）

世界で水道水を飲める国は15カ国程度しかない。水汲みで一日が終わるアメリカの少女の例を参照して、安全な水に素早くアクセスできることがいかに希少かを共有した。また読めない言葉で書かれた水を飲むロールプレイを通じて、教育の必要性にも言及した。



② 「高齢化する世界」（担当：吉水教諭 5月28日）

多くの発展途上国において、2035年までに疾病構造の重心が感染症から非感染症に移り、健康水準も先進国に接近すると共に、高齢化の課題に直面する。世界で最も急速に高齢社会になった日本は、高齢社会に対応した福祉モデルが世界に示せるか。この現状を生徒と共有したい。

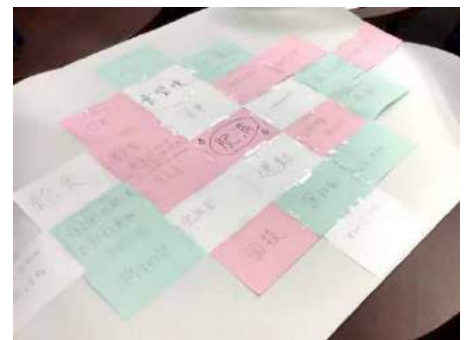
2-II 第一回パラオフィールドワーク事前学習セミナー（6月4日）とその後

京都産業大学国際関係学部教授三田貴先生をお招きし、事前学習セミナーを開催した。例年、パラオの渡航直前の10月の企画であったが、パラオ共和国についての基本的な情報を知り、フィールドワークへの興味・関心、問題意識を早期にもって準備を開始できるように、6月と10月の2回の開催とした。第一回は、6月4日に開催し、「パラオの歴史 開発パラダイムを中心に」と題して、パラオの歴史、自然、環境、現在の社会事情、アメリカとの関係などについて講演をいただき、生徒の質問に答えていただいた。



「マンダラート」作成（6月7日・11日）

4日のパラオフィールドワーク事前学習セミナーをうけ、グループワークの授業をおこなった。各グループの課題研究テーマとそれに関連するキーワードを配置する「マンダラート」を作成し、関連ワードから「問い」（リサーチクエスション）を設定するワークショップをおこなった。



2-III グループ課題の調べ学習と発表

① グループのテーマ・指導教諭・班員役割一覧

グループ	指導教諭		班長	副班長		データ		ファイル	清書
1 医療・衛生	吉水（主）	加藤	渡辺	坂口	田辺	高橋	川村	湯川	木原
2 教育	重見（主）	加藤	細川	原	弘野	田中	細川	弘野	原
3 生活・肥満	磯崎（主）	森田	北田	内田	津村	西田	前林	石田	徳野
4 経済・支援	松村（主）	吉水	田崎	平松	谷口	平松	谷口	森脇	青野
5 環境・ゴミ	重見（主）	吉水	植松	加藤	岡田	森	大槻	古川	加藤
6 環境・水	磯崎（主）	後藤	濱野	松本	武田	濱野	行田	黒木	井之上

② 各グループに調査学習の課題を与える

教員から生徒たちに調べさせたい「お題」を出題した。教員が課題を設定するねらいは、生徒に、正しく「ことばの定義」を理解することを意識させ、生徒が、視野を広げ深く考え、多様な視点で研究の「問い」を発見できるようにするためである。

- ・キーワードとなる「ことばの定義」を調べさせる。

例 教育問題 → 「初等教育・中等教育・高等教育」「生涯学習・教育格差」
生活・肥満問題 → 「生活習慣病」、「肥満の国際基準（定義）・各国の肥満基準」

- ・テーマごとに「しくみ」を調べさせる。

例 環境・水問題 → 「浄水場の浄水方法（飲み水ができるまで）」

- ・テーマごとに「課題」を2つ調べ、スライドにまとめさせる。

例 医療・衛生問題 → 「学校保健」のあり方をまとめなさい
「地域包括ケアシステム」を解説紹介してください

（課題一覧表）

	1 医療・衛生	2 教育	3 生活・肥満	4 経済・支援	5 環境・ゴミ	6 環境・水
定義	「社会保障制度」とは	「初等教育・中等教育・高等教育」（定義と区別）とは	「生活習慣病」とは	「ODA・二国間援助・多国間援助」とは	「環境汚染」と健康被害とは	「水ビジネス」とは
定義	「地域保健」・「学校保健」	「生涯学習」・「教育格差」	肥満の国際基準（定義）、各国の肥満基準	「貧困国」・「開発途上国」	「公害」の種類・原因・具体的事例	「水道インフラ」（上水道と下水道）
しくみ	「地域包括ケアシステム」	日本の「教員養成システム」	「健康日本21」	「JICA」（どのような組織か）	「ゴミ」の種類区分と廃棄処理の方法（自治体の配布するゴミ収集カレンダーを参考に）	「浄水場」の浄水方法（飲み水ができるまで）
課題	「学校保健」のあり方をまとめなさい。（君たちにもなじみ深い「学校」という具体的な社会集団における健康管理の方法・対処について調べなさい。たとえばインフルエンザになった場合どう対処する？）	日本における「自殺」に関して、年齢別・男女別（・地域別）の原因についてまとめなさい。とくに10代・20代の自殺の原因と教育（進路・いじめ・親子関係など）との関係があれば指摘してください。	日本の学校教育（家庭科・保健）では食事と健康の関係についてどのような学習（食育）をしているかまとめなさい。（教科書をみたり、家庭科・保健の先生に調査してまとめよう）	外務省HPや『ODA白書』を参考に日本のODA大綱・実績、支援の規模・地域・対象国などをまとめなさい。（戦後の日本の国際貢献・ODAの特徴（功罪）をまとめよう）	「観光（推進）の功罪」についてまとめなさい。（観光で栄える街の事例を取り上げ、地域にとっての良い点・問題になる点を調べなさい）	雨水をためて生活用水に用いる日本（や世界）での実践例をまとめなさい。（貯水設備や節水技術についても言及してください）
課題	「地域包括ケアシステム」を解説・紹介してください。（高齢社会の日本で目指される医療保健体制の姿です。調べてください）	アメリカHHSの「Head Start」を調べて、紹介してください。（公共の電波を用いた教育の例です）	日本の国民健康づくり運動としての「健康日本21」を解説・紹介してください。（日本の健康増進の取り組み、生活習慣病を予防する方策をまとめてください）	JICAがパラオでどのような支援活動を行っているか調べて紹介してください。（パラオにはJICAの事務所がありますので、HPをみたり、直接取材すると情報が得られるはずです）	「fukuoka method」というゴミ処理方法を解説・紹介してください。（パラオのゴミ処理事情の前提として知っておきたい知識です。詳しくは指導教諭の先生に確認してください）	海水の「淡水化技術」について調べて、紹介してください。（海の水が飲料水に使えたら…と思いますが、この技術の普及が容易でない理由や問題点を指摘してください）
コメント	まず君たち医療衛生班には、地域の健康を支えているシステムについて理解を深めてもらいます。この学習を経ずして、パラオでの医療体制について深く考察することはできません。参考テキストは医歯薬出版株式会社の『社会・環境と健康 公衆衛生学2018年版』を活用してみよう。	パラオでの調査を考えると、昨年の教育問題とは異なる問題にスポットをあてていかないといけませんね。初等教育後の教育問題や未成年の自殺や悩みの問題も考えられる新視点であると思います。またパラオは女性がよく働くそうです。ジェンダーと教育という視点もヒントになるかもしれません。SDGsの4・5に注目！	日本は平均寿命世界一の水準にあります。健康に年をとることが課題です。肥満はどんな病気の起因になるのでしょうか。肥満がなくなれば多くの病気を予防できます。まずは日本の状況をしっかり調べてください。参考テキストは医歯薬出版株式会社の『社会・環境と健康 公衆衛生学2018年版』を！	人口わずか2万人の国連加盟国のパラオ。日本にとってはかけがえのない親日国家の一つです。日本はパラオにどのような支援をしてきたのでしょうか。またそれはパラオの人々の暮らしにどう貢献できたのでしょうか。国樹立25周年の両国関係を支援という切り口で説明してほしいと思います。ODAに関する書籍はたくさんあります。図書館を活用しましょう。	パラオの産業でも観光業は重要な位置をしめます。観光は海外のお客さんがお金を落とすことで得られる利点がある一方で、地域住民にとっては喜ばれないこともあるようです。ゴミ処理では日本の処理様式をパラオが採用しているようなので、渡航前には是非理解しておきたいポイントです。環境と健康には密接な関係が見いだせそうです。	パラオでは、アメリカや日本・台湾の援助でさまざまなインフラが敷設されています。水の淡水化施設があるそうですが、現地で確認はできていません。水の淡水化技術とはどういうものか、まず知っておきましょう。多くが雨水の生活利用をしています。日本でも実は身近なところで雨水の活用をしています。確認してみましょう。
指導教諭	吉水・加藤	重見・加藤	磯崎・森田	松村・吉水	重見・吉水	磯崎・後藤

③ 各グループによる調べ学習の発表（7月2日）

各グループのメンバーで与えられた「お題」について調べ、その成果をスライドにまとめ、プレゼン発表をした。



3. 夏休みの課題

夏休みには、次の2つの課題を生徒全員に課した。

課題1 課題研究の「研究計画書」を作成する

400字以上800字以内で自分が調べたい研究の構想（研究動機・研究対象・リサーチクエスチョン・その手法）について文章を作成する。

課題2 「パラオ政府機関・日本国大使館への質問」（質問は一人2問つくること）

課題1で設定したテーマに関連する質問（パラオで行う質問）をつくる。

まず日本語で質問状を書き、英作文するところまでを課題とする。

4. 二学期の取り組み

二学期は、文化祭で「私たちのパラオフィールドワーク羅針盤」を展示発表した。また、海外研修に向けた準備として、パラオ政府への質問（英語）と、アンケート調査のための質問をまとめ、京都産業大学三田貴先生と JICA の先生3名をお招きしての第2回パラオフィールドワーク事前学習セミナーを開催した。その後、課題研究の中間報告会を開催し、各自が指導教諭の前でプレゼン報告をおこなった。

11月には、パラオ共和国でのアジア・フィールドワークを実施した。帰国後、フィールドワークの成果を、レポートにまとめ、下級生への帰国報告をおこなった。

4-I 文化祭展示発表（9月14日・15日）

本校文化祭にて、高校2年生は、台湾研修での発表ポスターのほか、11月のパラオフィールドワークに向けて何を調査するのかをまとめた研究計画書を作成し「私たちのパラオフィールドワーク羅針盤」として展示発表した。



4-II 第2回パラオフィールドワーク事前学習セミナー（10月8日）

パラオ渡航の約1ヶ月前、6月のセミナーに続き、第2回目の事前学習セミナーを開催した。京都産業大学の三田貴教授とミクロネシアの島嶼国で活動された JICA の先生を3名お招きし、三部構成のセミナーを企画した。

第一部では、三田貴先生に「課題研究の深化を目指して」と題して、生徒の関心事・テーマに即したパラオのトピックスについてお話いただき、第二部では、「JICA の先生に聞いてみよう」と題して、3つのブースに別れ、各先生に太平洋の島国事情の講義をしていただいた。生徒は自分の研究テーマに合わせて聴講し、太平洋の島国の具体的な情報や社会背景について学ぶことができた。第三部では、先生と生徒が一堂に会して、熱気あふれる質疑応答をおこない、生徒それぞれがフィールドワークに向けて「リサーチクエスチョン」を明確にすることができた。



（プログラム）

第一部（5時間目） 三田貴先生 第2回講演「課題研究の深化を目指して」（40分）

質疑①「三田先生に聞いてみよう」（15分）

- 第二部（6 時間目） 3 名に講師の先生紹介と企画説明（5 分）
 講義（準備 5 分・講義 30 分程度） 各ブース（A・B・C）
 質疑②「JICA の先生に聞いてみよう」（20 分） 各ブース（A・B・C）
 第三部（7 時間目） 質疑③「三田先生と JICA の先生に聞いてみよう」（35 分）
 まとめ：講師の先生からアドバイス（10 分）

（講師の先生）

- 三田貴先生 京都産業大学国際関係学部教授
 吉田梨枝先生 活動国：マーシャル共和国 活動内容：看護師
 野口元先生 活動国：ミクロネシア連邦 活動内容：小学校教育
 田村太喜男先生 活動国：マーシャル共和国 活動内容：上下水道



4－Ⅲ パラオ・日本外交関係樹立 25 周年記念事業に参加

① 京都産業大学ワークショップ（10 月 26 日）

三田貴教授にご案内いただき「海でつながるパラオと日本のグローバル・イシュー 学生による市民アクション提案」（京都産業大学）に本校生徒 8 名が参加した。パラオの海の問題について、海洋プラスチックごみ、台風の被害対策、海面上昇の問題、サンゴ礁の破壊など観光客による環境への影響について、大学生と高校生、ファシリテーターの先生等と総勢 30 余名が 5 グループにわかれ、ワークショップを行った。



② 日本パラオ外交樹立 25 周年記念セミナー（11 月 9 日）

東京の世田谷美術館にて開かれたセミナーに、植松大翔君が参加した。植松君は、京都産業大学の学生と一緒に、パラオ共和国の国務大臣、政府関係者、フランス・マツタロウ駐日パラオ大使の前で、パラオの環境問題についての提案をプレゼンテーションし、政府関係者の方々と議論するなど、貴重な体験を得ることができた。



4－Ⅳ 課題研究中間報告会（10 月 29 日、11 月 5 日）

事前学習セミナーのあと、パラオへの渡航まで、これまでの課題研究の調査状況をまとめ、報告するための中間発表会を設定した。中間報告会は 10 月 29 日、11 月 5 日の二週にわたって全員が行った。

第 1 週目は、コナコピアホールで行い、年度末にある課題研究の対外発表会に参加したい生徒の代表選考会を兼ねることにした。



（発表者とテーマ）

順	発表者	テーマ
1	森脇悠	ODA における被支援国の恩恵と日本の立場
2	谷口拓海	肥満問題は支援によって解決するのか
3	坂口佳史	パラオで活かす沖縄のドクターヘリ
4	弘野 田中 細川	高等教育普及に向けた“三位一体”の制度改革
5	石原叶大	島嶼国家における児童肥満とその対策
6	植松大翔	パラオをはじめとする島国で循環型社会を形成するには？

7	内田康太	食育の在り方～島国の健康のために～
8	平松大知	日本の災害時の水不足対策
9	田崎隼平	支援とは何か？

第2週目は、学校の公開授業期間に ALC（アクティブラーニングcommons）で行い、保護者の方の参観があった。全員が中間報告をまとめて、スライド発表し、万全の準備をしてフィールドワークに出発することができた。



4-V アジア・フィールドワーク（11月10日～15日）

パラオ共和国において、パラオ政府教育省・保健省、日本国大使館への訪問、ガラルド州フィールドワーク、学校交流とホームビジット、ペリリュー島戦跡見学などの課題研究のための調査・情報収集のためのフィールドワークを行った。詳細は後述する。

帰国後、パラオフィールドワーク報告を下級生に行った。



5. 三学期の取り組み

三学期は、生徒1人ひとりがパラオフィールドワークの調査結果をまとめて、「研究要綱」を作成し、その後、SGH 事業公开发表会（2月22日）に向けて課題研究ポスターを作成した。公开发表会ののちは、「課題論文」を執筆し、代表生徒が対外発表会でのプレゼンテーション発表、ポスター発表に出場する。

5-I 研究要綱作成／ポスター作成

1月末日を「研究要綱」の提出期限に定めて作業をし、2月に研究要綱をもとにポスターを作成した。「研究要綱」は、タイトル、研究者名、指導教諭を明記し、1研究背景、2研究目的・意義、3研究手法、4結果・考察、5結論・まとめ、6参考文献をまとめる体裁である。（A4で2枚程度にまとめる）

成果物の提出：Google Classroom、スプレッドシートなどを活用

伝統料理が肥満を減らす

田原汁 山口商船

1 研究背景



2. 研究目的

[illegible]

3 研究手法

[illegible]

4. 調查結果

(1) オオに於ける肥満の原因

ペラオの人はタロイサを食へる機会は減つてゐることはペラオの高出生へのアンケート調査や現地に住んでゐる人の訪ねたことを観察することから見て、断然の差取置日本とは比べ難きといふことが分かつた。ペラオの高出生に對關することを更に考察せしめると食生活にも炭やタロイサを用ひて食へる物といふものが、斷然の少くはなれ種子物の多きを飼育するといふことであり、ペラオにおける独自の伝統的メダエツの方法によつてそれを利用して解決せざるを得ないが、ペラオの民族性の方や島民の方にはペラオの人は昔は大抵いふことがないので、独自の伝統的なメダエツが存在しないといふことである。

(2) タロイモの問題点

[illegible]

(3) タロウモの可能性

[illegible]

500

[illegible]

⑥ 結論・まとめ

[illegible]

7. 引用文献·参考文献

CENTRAL INTELLIGENCE AGENCY 2016年 OBESITY-ADULT PREVALENCE RATE 令和元年1月29日
<https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/country-data/obesity/adult>
 京都道徳大学 三田貴教員による提供 令和元年8月、10月
 パナソニック省 Reinhold Meckhof パナソニック省 令和元年11月

5－Ⅱ SGH 事業公開発表会（2月22日）

第一部 代表生徒によるプレゼンテーション発表

高2は2組の代表が発表した。まず、課題研究の成果報告として、弘野君・田中君・細川君が、「Higher Education in Developing Countries -Trinity Innovation with Radio and TV-」の英語プレゼンテーションをおこなった。途上国における高等教育の普及問題について考察し、「ラジオ」による普及方法を提案した。また高2海外研修の「パラオフィールドワーク報告」を、西田君・徳野君・木原君・原君がおこなった。海外研修の成果を「1 英語力向上の実感 2 クラスの強い団結 3 実際に現地を訪れ調査した発見・意義の実感」とまとめ、研修に携わった方への感謝の気持ちで総括した。



第二部 GA コース生のポスター発表（アリーナ会場）

ABCの3組に分かれ、質疑を含めた10分の発表をおこなった。また昼休みは、下級生（中学1・2年）にもわかりやすく課題研究の内容を説明した。



5－Ⅲ 対外発表会への参加

10月29日の中間報告会にて、対外発表を希望する生徒10名の選考会を行い、プレゼンテーション発表の内容を審査・評価して代表者を決定した。その後、各発表会に研究要旨をまとめてエントリーを完了した。全国高校生フォーラム、京大ポスターセッション2019、WWL・SGH×探求甲子園について、発表タイトル・要旨等は別途後述。



4 総括（まとめ）

□73 期指導での新しい取り組み

1 グループワーク（共同作業）の積極的活用

- ・ 1 学期の調べ学習：教員がグループに「お題」を与え、グループで調べ、発表報告を行った
- ・ 2 学期の海外研修：課題研究の研究グループの単位で現地の活動を行った
- ・ 3 学期の対外発表：グループメンバーが共同発表者として参加した

（総括）

高校 2 年の課題研究は、個人の探究活動となるが、73 期は、昨年のようなグループでの探求活動を継続した。個としての研究よりチームでの作業は、1 年を通して、一体感のある探究活動（違う方向を向いている生徒がいない状況）が維持できたと思う。また、個人のポスター発表会に、グループメンバーがサポート参加したり、共同発表したりもできた。「個人」の研究だと対外発表の「枠」が少なく、意欲のある生徒が発表の場を得られないことが問題であったが、チームで関わったことも、クラスの一体感を生み出すことになったと考える。

2 「中間報告会」・「研究計画書」というハードルの設定

生徒たちは、報告するごとに考えをまとめ、整理し、無駄をそぎ、自分の考えを立体的にしてゆく。ぼんやりしていた問い（リサーチクエスト）を明確にするためにも、報告発表や研究計画書をまとめる作業を何度も行った。1 学期のグループ発表、2 学期の渡航直前の中間報告会を全員に課し、夏休みには、「研究計画書」を書かせ、数回書き直させた。パラオの帰国後には、「研究要綱」にまとめさせた。

（総括）

中間報告会のプレゼン発表は、生徒たちの考えがまとまり研究が進展していることを実感させた。一方、「研究計画書」や「研究要項」については、生徒が自分の考えを整理するよい機会にはなったが、40 名の書いた計画書を教員がきっちり細かく指導することには、若干の課題を感じた。よい計画書・ダメな計画書を公開で批評し考えながら指導するといいいのかもしれないが、次の指導の課題とする。

3 パラオの情報を得るための仕掛け～生きた情報を生徒に

- ・ 京都産業大学三田貴先生講演（パラオフィールドワーク事前学習セミナー）6 月・10 月
- ・ JICA 出前講座の活用「JICA の先生に聞いてみよう」10 月（高 1 の 1 月につづき 2 度目）
- ・ パラオ日本外交関係樹立 25 周年記念事業への参加（10 月・11 月）

（総括）

パラオに関する情報は、日本からではアクセスが容易ではない。生徒たちに、パラオでの課題研究に意欲を出して欲しい思いで、今年は京都産業大学の三田貴教授を 2 度もお招きし事前学習セミナーを行った。また、JICA の出前講座を活用して、3 名の講師をお招きする「JICA の先生に聞いてみよう」も開催した。ミクロネシアでの活動経験をお持ちの先生のお話は、生徒たちをすぐに魅了し、生徒の海外研修への興味関心は高まり、文献では得られない「生」の情報、太平洋島嶼国の具体的なイメージとともに獲得することができた。また JICA の先生方への質疑応答は、パラオで行うインタビュー調査の練習にもなり、73 期生は、現地で本当によく質問をすることができた。また、三田先生から日本パラオ国交樹立 25 周年記念事業への参加をご紹介いただき、有志生徒がそれに参加するなど、11 月の海外研修に向けた「よい仕掛け」がいくつもでき、生徒も楽しんで準備をすることができた。このような前向きな空気は、対外発表会の選考会やパラオの交流企画、海外研修の実行委員の活動などさまざまな点で生徒のやる気を引きだしてくれたように思う。

□全体総括

昨年、73 期生は、清風南海高校での課題研究ポスター発表や台湾研修でのプレゼンテーション発表などを通して、課題研究のいろはを学び、プレゼンの発表スキルを身につけた。何より、しっかり準備をして舞台上で成果を発表する緊張感と達成感を味わい、課題研究の楽しみを大いに感じ取ってくれた。その勢いのままに、高校 2 年次も、課題研究の活動には前向きに取り組み、パラオの研修に向けてしっかりと準備した。調べ学習の進展を目標に、三田貴教授の事前学習を二回開催として、1 学期のうちから、パラオの基礎情報に触れたこと、パラオ渡航前に、JICA の先生から太平洋の島嶼国の情報を得られたことは、大変有意義な事前学習となり、現地での調査も充実したよい研修になった。3 学期に研究成果を発表する SGH 事業公開発表会では、73 期高校 2 年生は、最高学年として後輩に手本となるようなポスター・プレゼン発表をおこなった。

73 期生の指導に関わっていただいたすべて先生方、関係機関・協力機関の皆様、パラオ共和国の皆様に感謝申し上げます。

「グローバル課題研究」ルーブリック評価について（高校2年）

《(I) - ①》[年間事業計画⑥]

報告者：社会科教諭 磯崎陽介

1、調査対象：高槻高校2年1組GAコース（73期）

2、調査人数：41名

3、調査実施日：2020年2月25日（火）6限目

4、生徒観

SGH事業も4年目となり、GAコースの学習内容が周知・浸透するなかで、先輩の歩んだ海外研修や課題研究の取り組みを理解しGAコースを志望した生徒が大半を占める。72期の先輩が、舞台上司会進行したり、発表したりする勇姿にも刺激をうけ、この1年間、非常に意欲的に探求活動や発表会に向けた準備を入念に行った。クラスメートの仲も良く、団結力に富み、将来、リーダーとして飛躍できる資質をもった生徒が多く存在する期待の持てる学年である。

5、目的と方法

- ・年度末に定点調査する。10の観点について生徒の自己評価の状況と数値の過年度比較により、生徒の変化や成長を読み取ることを目的とする。
- ・ルーブリックを用い、10の観点について自己評価を行う。（5段階）
今回の調査は、SGH校の指定4年目の調査である。

6、調査結果

- ・生徒の選択した評価を5段階の分布で示す。（以下の表を参照）
- ・表中の「平均値」は評価点×人数を平均した数値である。

（1）73期生高2 5段階評価の分布と平均値

GA課題研究ルーブリック評価

観点・評価点		1	2	3	4	5	平均
課題設定	1 課題を的確に設定できたか	0	0	11	20	10	4.0
	2 グローバルヘルスと関連づけられているか	0	0	4	17	20	4.4
資料の収集・分析	3 先行研究を調べ、課題の背景や問題点を意識できているか	0	0	13	20	8	3.9
	4 社会科学的または統計的に資料の収集・分析ができているか	0	0	17	13	11	3.9
	5 信用に足る資料分析ができているか	0	0	14	17	10	3.9
課題解決	6 課題解決案が創出できているか	0	0	14	11	16	4.0
	7 研究の結論が妥当であるか	0	0	13	21	7	3.9
	8 結論に厚みのある記述ができているか	0	1	16	14	10	3.8
課題発表	9 論文やプレゼンテーションを適切に発表できたか	0	0	11	13	17	4.1
海外研修の成果	10 海外研修を意義あるものにし、課題研究に活かしたか	0	1	7	16	17	4.2

（2）高2段階の過年度比較の結果

ルーブリック調査高2過年度比較

観点・評価点			2019年度	2018年度	2017年度	2016年度
課題設定	1	課題を的確に設定できたか	4	3.6	3.5	3.7
	2	グローバルヘルスと関連づけられているか	4.4	3.7	4	3.7
資料の収集・分析	3	先行研究を調べ、課題の背景や問題点を意識できているか	3.9	3.5	3.3	3.3
	4	社会科学的または統計的に資料の収集・分析ができているか	3.9	3.5	3.6	3.5
	5	信用に足る資料分析ができているか	3.9	3.6	3.6	3.4
課題解決	6	課題解決案が創出できているか	4	3.6	3.7	3.3
	7	研究の結論が妥当であるか	3.9	3.6	3.7	3.2
	8	結論に厚みのある記述ができているか	3.8	3.4	3.5	3.1
課題発表	9	論文やプレゼンテーションを適切に発表できたか	4.1	3.8	3.9	3.7
海外研修の成果	10	海外研修を意義あるものにし、課題研究に活かされたか	4.2	4	4.3	3.3

7、分析

①自己評価分布

全体的に高い水準であるが、特に「グローバルヘルスとの関連」「課題解決案の創出」「課題発表」「海外研修の成果」の項目で高い値が出た。過年度においては課題研究のテーマ設定の段階で「難民問題」「薬物問題」など研修やフィールドワークの内容にそぐわない内容もあったが、台湾とパラオに行く（つまり、その国に合った課題を設定する）という前提で教員側が指導することで、しっかりとしたテーマ設定が可能となったことが、高い値となった要因であると考えられる。課題研究のロードマップを生徒・教員がしっかり把握することが授業・研究を円滑に進める重要なポイントであると感じた。一方、「社会科学的・統計的に資料の収集・分析ができているか」「結論に厚みのある記述ができているか」では3の評価を行う生徒が多かった。項目の性質上、課題設定後の調べ学習や解決案の創出には時間をかける必要があることを再認識した。

②過年度比較

過去4年間を比較すると、今年度の平均値は全体的に高い水準となった。「海外研修の成果」以外の項目は、すべて今年度が過去最高の数値を出している。SGH事業の深化に伴い、生徒にも事業内容が理解・浸透していることが見て取れる。毎年高い値を示している「海外研修の成果」だけでなく、「課題設定」「課題解決案の創出」「課題発表」などで平均値が4を超えたのが特徴的である。本校で実施した「グローバルヘルス高校生フォーラム」や「SGH公開事業発表会」など、適切な時期に大きな舞台で発表するという行事があり、生徒自身が目標設定をしやすい環境の中で課題研究に取り組めたため、このような値が出たと考えられる。また、今年度指導教員が多く配属され、たくさんの目で生徒を見ることができたこともその要因であると考えられる。

(5) 連携大学の支援によるアジアフィールドワークの企画・実施

《(I) - a》[年間事業計画] ⑪⑫

パラオ・フィールドワーク実践・研究報告書

事業担当責任者：社会科教諭 吉水真人

2019年11月10日（日）～15日（金）高校2年第5回パラオ・フィールドワークを実施した。以下、パラオ共和国でのフィールドワークについて、事前学習・準備、実施、総括の観点に分け報告する。

[1] 準備・事前学習

今年度は、11月の海外研修に向け、①事前学習の充実、②渡航までの「準備」の徹底を意識して課題研究を指導した。また、2019年がパラオと日本の外交関係樹立25周年にあたり、企画されたワークショップにも参加した。（高2課題研究の実践報告を参照）

1. 事前学習の充実

- ・京都産業大学三田貴教授による事前学習セミナーを6月と10月の二回開催
- ・「JICAの先生に聞いてみよう」を企画・開催

2. 渡航までの「準備」の徹底

- ・報告のハードルを設定（1学期末の調べ学習報告会・渡航直前の中間報告会）
- ・GW課題「パラオについて調べよう」（→資料1）
- ・パラオ政府教育省・保健省、日本国大使館への質問文作成（→資料3）
- ・現地調査のためのアンケート質問の作成（→資料4）

3. パラオと日本の外交関係樹立25周年

- ・京都産業大学ワークショップに有志生徒が参加、東京で大学生と報告

5月	GW課題「パラオ研修にむけて」 京都産業大学三田貴先生訪問（重見教諭・吉水教諭）事前学習セミナーの依頼（22日）
6月	第一回パラオ・フィールドワーク事前学習セミナー開催（4日）
7月	グループ別課題発表
9月	三田貴教授とスカイプによる打合せ（重見教諭・吉水教諭）（10日） パラオ政府機関への質問文作成（日本語・英語） グループごとに現地調査のためのアンケート質問を作成
10月	第二回パラオ・フィールドワーク事前学習セミナー開催（8日） 「三田先生とJICAの先生に聞いてみよう」 学校交流企画の準備 パラオ日本外交関係樹立25周年記念事業ワークショップ（京都産業大学）（26日） 中間報告会1（29日）
11月	中間報告会2（5日） パラオ日本外交関係樹立25周年記念事業セミナー（東京世田谷美術館）（9日） パラオ・フィールドワーク（10日～15日）

[2] パラオ・フィールドワークの実施

1. 実施概要

- (1)実施日 2020年11月10日(日)～15日(金)
- (2)参加生徒 高校2年1組(GAコース)43名
- (3)引率教員 工藤剛校長(団長)・加藤廣太教諭・吉水真人教諭
- (4)支援機関・支援者

- ①パラオ政府教育省 学校管理部部長 Mr. Raynold Mechol
- ②国立パラオ高等学校 校長先生、生徒の皆様
- ③パラオ政府保健省 局長様、アドミニストレーター Mr. Omengkar D.Wally
- ④私立ミンゼンティ高等学校 校長先生、山上幸雄先生、生徒の皆様
- ⑤在パラオ日本国大使館 柄澤大使、荻野次席大使、百瀬書記官、アンナ職員
- ⑥前駐日パラオ全権大使 Dr.Minoru UEKI
- ⑦PCS (パラオ環境保護協会) Ms.Bernie Ngiralmu
- ⑧PCAA (パラオ地域社会行動局) Mr.Leonard Gork Basilius
- ⑨ペリリュー島島民の皆様

(5) 協力

東武トップツアーズ滝口秀人氏(添乗員)、ベラウツアー(現地旅行社)

(6) 実施プログラム

パラオ・フィールドワークの主要なプログラムは下記5つの柱で構成されている。

- (1) パラオ政府機関(教育省・保健省)、前駐日パラオ全権大使ウエキミノル氏による講義インタビュー調査
- (2) 現地連携高校での学校交流とホームビジットによるインタビュー調査
- (3) 在パラオ日本国大使館への表敬訪問と講義・インタビュー調査
- (4) 現地のライフスタイルを学習する山村フィールドワーク(ガラルド州)
- (5) ペリリュー島の戦跡学習フィールドワークと島民対話集会でのインタビュー調査

以下、この項目ごとに実施報告をまとめる。

2. 実施報告

(1) パラオ政府機関、ウエキミノル氏による講義インタビュー調査

① 教育省訪問・国立パラオ高校見学

教育省とのインタビュー調査は、国立パラオ高校の講堂をお借りして行われた。教育省 Raynold Mechol 学校管理部部長からパラオの学校教育制度について講義をしていただいた。パラオ高校の日本語コースの生徒さん達と一緒に講義を聴講し、講義の後は、Mechol さんへのインタビューを行い、また、日本から持参したアンケートを各テーブルに配布し、パラオ高校の生徒さんからも質問調査を取ることができた。講義の後は、パラオ高校の生徒さんの案内で、公立学校の校内施設を見学させていただいた。(資料3を参照)



②保健省訪問・国立病院見学

保健省では、2 グループに分かれて病院施設の見学をさせていただき、その後ミーティングルームに場所を移して、インタビュー調査を行った。パラオの保健行政の中心におられる局長級の先生方に出席していただき、Omengkar Wally 氏の進行で本校生徒全員が英語で質問をした。事前に日本から送った質問に回答する形式での質疑応答をおこなった。保健省の先生方は、本校生徒のすべての質問に真摯に丁寧に回答して下さった。生徒たちもレコーダに録音しながらしっかりと情報の収集に努めていた。



③前駐日パラオ全権大使ウエキミノル氏の講演

前駐日パラオ全権大使で、医師でもあるウエキミノル先生を招いてホテルで講演をしていただいた。事前にお送りしていた生徒の質問リストを見ながらパラオの諸問題についてご説明していただいた。



(2) ミンゼンティ高校での学校交流とホームビジットによる現地調査

①学校交流

ミンゼンティ高校に到着し、校門に入ると、ミンゼンティの生徒さんがつくった花束のレイをかけてもらう歓迎をうけた。体育館で、両校代表生徒のあいさつ、学校紹介のセレモニーを行い、その後、ホストスチューデントとペアになって学校交流がはじまった。まずミンゼンティ高校でおこなわれる数学・英語・世界史・宗教・中国語などの授業を体験し、体育館で全校生徒とランチを食べた。この間、生徒各自でホスト生徒からアンケートの調査も行った。



昼食の時間は、ミンゼンティの生徒さんから日本語の歌のプレゼントがあり、高槻高校の生徒は、日本のラジオ体操を披露し、また両校生徒でフォークダンスを踊ったり、恒例のバレーボールの親善試合をするアクティビティーの時間を楽しんだ。学校交流は大変盛り上がり、その様子は、ミンゼンティ高校の学校新聞にまとめていただいた。(本校生徒の感想も取材され掲載されている：[資料5](#)を参照)。



②ホームビジット

ホームビジットとは、本校生徒が、ホストファミリーの中にひとり飛び込んで、パラオの各所に案内されながら、対話交流し課題研究について調査する研修の目玉企画である。およそ4時間の間、教員は同行せずホテルで生徒の帰りを迎える。生徒のアンケートによると、大統領の自宅、国会議事堂、リサイクル工場、など課題研究に資する場所に連れて行ってもらえた生徒もかなりいた。パラオの環境行政は、太平洋諸国でも先進的な取り組みを行っており、現地でリサイクル環境をサポートする日本人にあって話を聞くことが出来た生徒もいた。ホームビジットを通して、大半の生徒が、自分の英語力の向上を実感し自信と満足感が得られたようだ。

(3) 在パラオ日本国大使館への表敬訪問と講義・インタビュー調査

在パラオ日本国大使館を表敬訪問し、のち、日本国大使館荻野次席大使、百瀬書記官、現地職員アンナさんをホテルにお招きして講演をしていただいた。はじめにお父様が高槻高校の卒業生でいらっしゃる荻野次席大使よりご挨拶と課題研究活動への激励を頂戴し、次いで、百瀬書記官からパラオ共和国の概要、日本とパラオの関係、パラオにいる日本人、在パラオ日本大使館の仕事、パラオの自然と伝統文化についてスライドで講義をしていただき、現地職員のアンナさんから課題研究の質問や現地の暮らしについて詳しくお話しをいただきました。日本語での講演は、今までの英語での調査内容を復習する意味でも非常に有意義な時間となった。



(4) 現地のライフスタイルを学習する山村フィールドワーク（ガラルド州）

パラオ環境保護協会（PCS）のバーニーさん（Bernie Ngiralmu）のコーディネートで、バベルダオブ島北端のガラルド州にあるバーニーさんの実家を訪問させていただいた。バーニーさんの実家では、タロイモの葉っぱのスープやカニ、ココナッツなどの伝統的な食事を味わい、食後に山の中の畑や林に分け入って、タロイモ・タピオカ・ウコン・バナナなどの食用植物や薬用植物などについて詳しい説明を受け、伝統的なパラオの生活や食事を理解する貴重な体験をした。



我々のフィールドワークには現地の新聞社が取材同行し、その様子は『Island Times』（2019. 11. 15）にて紹介された。（資料6）を参照）

(5) ペリリュー島の戦跡学習フィールドワークと島民対話集会でのインタビュー調査

コロール島から高速船で1時間移動し太平洋戦争の激戦地ペリリュー島をたずねた。千人洞窟・海軍司令部・滑走路・零戦・軽戦車などむき出しで残る戦跡の姿は我々の心に強く印象に残った。天皇陛下が慰霊された平和記念公園では、それぞれの思いを胸に静かに黙祷を捧げた。現地では3班に分かれ行動した。うち1班は、パラオ地域社会行動局バシリウスさん（Leonard Gork Basilius）のコーディネートで、ペリリュー島島民との対話集会を行い、研究テーマに関する質疑を行った。



3. 事後学習

事後学習（研究要綱・ポスター発表など）の詳細は、**高2 課題研究の実践報告**を参照

(1) 「課題レポート」の提出

①パラオ・フィールドワークの成果についてレポート報告をする

生徒レポートは資料7を参照

②保健省のインタビュー調査のまとめ

保健省での質疑の様子を録音した音源を聞き取り、自分が質問した内容と保健省から得られた回答をまとめる。

(2) アンケート調査の集計・まとめ

現地で取ったアンケート結果を集計しまとめる。集計結果は、クラス全員で共有する。

(3) 下級生へのパラオ・フィールドワークの報告

(4) 研究要綱の作成

パラオでの調査結果を踏まえた研究要綱を作成する

(5) 課題論文の作成

〔3〕 総括と課題・成果

パラオの研修は、早朝よりはじまり、遅くまでつづく。この5日間の研修を全員が、病気やけがをすることなく無事に遂行できたことが、まずは第一の成果である。73期生は仲が良く、本当に団結力があり、与えられた課題や目標に向かってがんばって取り組んでくれた。準備段階で、実行委員を募ると、必ず何人も積極的に名乗り出てくれ、クラスをうまく引っ張ってくれた。徳野君・大槻君らが担当したフォークダンスも大いに盛り上がり、最高の学校交流になったと思う。ミンゼンティ高校の学校新聞に掲載されたのも初めてのことで、73期生が残した成果のあらわれである。

私は、パラオの引率が70期生の研修以来2度目になるが、研修の指導についても、これまでの経験と反省に学びながら、いろいろと新しいアイデアを出しながら「準備」を進めてきた。冒頭に、「11月のパラオのフィールドワークに向け、①事前学習の充実、②渡航までの「準備」の徹底を意識して課題研究を指導した。」と書いたが、事前学習の大切さと渡航までの準備をどのようにきっちり指導するかは、70期の海外研修での反省や経験から来ている。そういう意味で、今年の海外研修はいろいろな「準備」や「仕掛け」ができたと思う。

「準備が大事」これは、高1の台湾研修以来生徒たちにいい続けていることである。準備を万全にすれば、失敗しても得るものが必ずある。準備したらうまくいく、成長できる、ということを生徒ひとり一人が実感できると、大学入試や人生の目標に挑む心構えも定まるのではないかと、73期生に期待している。どの生徒も一様に自身の成長を感じられる海外研修であった。生徒の感じた成果は、事後レポートによくまとめられている。

〔課題と成果〕

課題 ・先輩の研究成果を後輩にどのように継承するか、学習の積み上げの問題。

・学年がかわる毎に、一から学ぶのではなく、下級生に蓄積される仕組みができないか。

成果 ・パラオの事前学習を1学期に前倒し、早めの意識付けをしたことはよかった。

・三田先生の「事前学習セミナー」や「JICAの先生に聞いてみよう」は生徒が楽しめ、かつ探求の地平を広げられるよい機会である。

・これまでの現地アンケートは、「特定の生徒が自分の研究のために」するものであったが、今回のアンケートは、研究テーマごとに各グループで作成したので「全員で共有できる調査資料」になった。

・携帯電話の録音機能（レコーダ）を積極的に奨励し、活用した。事後まとめて音源を聞き直すなどできて、資料の整理にはとてもよかった。

[4] 資料編

資料1 GW 課題

GW 課題 ～パラオ研修に向けて～ (教員用)



外務省HPを見て該当箇所を埋め、パラオを知ろう。

GW 明けの課題研究の授業 (5月7日5限) に必ず持ってくること。

2年1組 番 氏名

1

経済

主要産業	(観光業)
GNI	2.8 億米ドル (2017 年, 世界銀行)
一人当り GNI	12,530 米ドル (2017 年, 世界銀行)
経済成長率	3.7% (2017 年, 世界銀行)
物価上昇率	4.7% (2015 年, 世界銀行)
貿易総額	(1) 輸出 18.0 百万米ドル (2) 輸入 156.0 百万米ドル (2015 年, アジア開発銀行)
主要貿易品目	(1) 輸出 (魚介類) (2) 輸入 機械・機器、燃料、メタル、食料品
主要貿易相手国	(1) 輸出 ギリシャ、日本、グアム (2) 輸入 日本、グアム、中国
通貨	(米ドル)
経済概況	米国とのコンバクトに基づく無償援助に大きく依存しており、近年は台湾からの援助も増加している。日本、米国及び台湾からの無償援助に依存する建設業、(食料品・消費財)の輸入に依存する商業及び観光産業が主要産業となっており、それぞれの産業では(外国人労働力)への依存度が高い。また、パラオ人の過半数が(公務員)である。観光に関しては、日本や韓国、台湾から直行便が運行しており、2015 年には観光客数が 161,931 人に達した(内、日本人観光客数は 31,016 人)。製造業、農業、漁業、建設等は発達していないが、漁業に関しては、台湾資本を中心とした外国漁業企業がパラオ近海で漁業権を取得して、日本、台湾、中国にマグロを輸出している。食糧に関しては、(タロイモ)やキャッサバの生産及び近海漁業はあるものの、大部分を米国本土からの輸入に依存している。

※調べてみよう

「コンバクト」って何？

3

1. パラオ共和国基礎データ (トップページ>国・地域>大洋州>パラオ共和国)

一般事柄

面積	488 平方キロメートル (屋久島とはほぼ同じ)
人口	(21,729) 人 (2017 年, 世界銀行)
首都	(マルキョク) (2006 年 10 月, コロールより遷都)
民族	ミクロネシア系
言語	(パラオ語), (英語)
宗教	キリスト教

政治体制・内政

政体	大統領制
元首	トミー・E・レメンゲサウ・Jr. (Tommy E. REMENGESAU, Jr.) 大統領 (2017 年 1 月就任, 任期 4 年)
議会	二院制 (上院 13 名, 下院 16 名), 任期 4 年
内政	2001 年に就任, 2004 年 11 月に再選を果たしたレメンゲサウ大統領は、アメリカからの財政援助が終了する 2009 年までに財政自立を達成することを目標に、行政改革による政府の効率化、効率化とともに海外投資促進と観光による産業、水産業、観光業を中心とした経済活性化を目指してきた。また、「良いものは残し、そうでないものは改革しよう」というスローガンの下に緊縮財政を実施し、財政赤字の削減に取り組んできたが、依然として財政・経済とも外国からの援助に大幅に依存しており、自立経済達成は困難な状況にある。

外交・国防

外交	1994 年に国連加盟を果たし、国際機関 (WHO, IMF, UNESCO, FAO, IWC など) や地域機関 (PAP, PC, EFA など) に加盟している。1999 年には台湾と国交を結んだ。(米国), (日本), (台湾) との関係を重視。
国防	軍隊はない。コンバクトに基づき、パラオの安全保障・国防上の権限と責任に關しては (本国) が有する。アイライ州に小規模な米軍施設があるが、実効部隊は駐留していない。有事の際には米軍による土地利用が認められている。なお、コンバクトに基づき、パラオ国民が米軍軍人として数多く採用されている。

2

2. パラオ共和国の医療事情

(トップページ>海外渡航・滞在>海外安全対策>世界の医療事情>パラオ共和国)

衛生・医療事情一瞥

パラオ共和国は、東京の南 3,200 キロメートルの赤道付近に位置し、人口は約 2 万人、300 ほどの島から成り立っています。

熱帯海洋性気候に属し、年間平均気温は約 28℃で、一年を通してほぼ一定です。日本のような四季はなく、雨季 (5~10 月) と乾季 (11~4 月) に分かれているものの、乾季でもスコール性の雨が降るため、年間を通じて湿度が高く、細菌やカビなどが繁殖しやすい環境にあります。このため、食中毒やアメーバ赤痢といった消化器系の疾患が多く発生し、ときにデング熱の流行も認められています。

2016 年 11 月には、パラオ国内で初めて、(ジカウィルス感染症)の感染者が確認されています。

国内に医師は 30 名弱しかおらず、慢性的な医師不足が深刻な問題になっています。医療施設を有する総合病院も国内に (1) 所あるのみ、科によっては専門医不在で医療レベルは十分とは言えません。専門医受診を要する患者は台湾、フィリピン、グアム、ハワイなど (国外の病院を受診) するのが普通です。血液バンクもなく、必要な輸血用血液は (ボランティア) を募って確保しなくてはならず、輸血の安全性も確保されていません。

したがって、邦人が大きな怪我や病気で専門的な治療が必要となった場合は、国外 (日本など) へ緊急搬送することになり、その際には診療費や緊急移送費など多額の費用が必要となります。事故、病気に備え自己の負担を軽減するためにも海外旅行傷害保険への加入をお勧めします。

潜水病治療に用いる高圧酸素治療装置はパラオ国立病院に設置されていますが、担当医師不在やメンテナンス等の理由により使用できないことがあるので注意を要します。

かかりやすい病気・怪我

(1) (食中毒)
主に細菌やウイルスに汚染された飲食物を経口摂取することにより発症します。主な症状は腹痛、嘔吐、下痢ですが、発熱や倦怠感、血便を伴うこともあります。潜伏期間はまちまちです。人から人へ直接うつることはありませんが、吐物や排泄物を介して感染することがあります。
(2) (デング熱)
デングウィルスを有する蚊に刺されることで感染します。潜伏期間は 4~7 日間で、突然の高熱、頭痛、関節痛、発疹が主症状です。重症型のデング出血熱を発症すると、生命に危険が及ぶこともあります。予防は蚊に刺されないようにすることです。

4

Research Project Themes List 2019

1班：医療・衛生（8名）

Group 1 : Medical Treatment/ Public Hygiene

5	加藤 吹雪	パラオにおけるデング熱の予防法
	KATO FUBUKI	Prophylaxis of Dengue Fever in Palau
7	高橋 海聖	パラオの医師養成について
	TAKAHASHI KAISEI	Training Doctors in Palau
27	川村 昌平	地味な感染症予防による効果
	KAWAMURA SHOHEI	Effect of Moderate Prevention for Infectious Disease
29	木原 健	現代医療と伝統医療
	KIHARA KEN	Modern Medicine and Traditional Medicine
31	坂口 佳史	パラオで活かす沖縄のドクターヘリ
	SAKAGUCHI KEISHI	Applying Okinawan "Doctor Helicopter" System in Palau
34	田邊 賢誠	パラオにおける医療体制
	TANABE KENSEI	Medical System in Palau
43	湯川 創太	パラオにおける医師不足について
	YUKAWA SOTA	Doctor Shortage in Palau
44	渡部 篤弥	パラオにおいて最も良い病院の制度とは
	WATANABE ATSUYA	What is Best Hospital System in Palau?

2班：教育問題（5名）

Group 2 : Educational Problem

6	弘野 恵太郎	高等教育普及に向けてラジオ・TVを活用する術
	KONO KEITARO	Public and Private Funds for Remote Learning Offered on Radio and TV
10	田中 康太	高等教育普及に向けてラジオ・TVを活用する術
	TANAKA KOTA	Public and Private Funds for Remote Learning Offered on Radio and TV
12	原 大典	義務教育課程卒業後の教育機会を提供する方法とは
	HARA DAISUKE	To Provide Educational Opportunity after Finishing Compulsory Education
15	細川 陽平	高等教育普及に向けてラジオ・TVを活用する術
	HOSOKAWA YOHEI	Public and Private Funds for Remote Learning Offered on Radio and TV
38	成川 弘一	世界の「幸せ」の感じ方
	NARIKAWA HIROKAZU	Why Do You Feel Happy?

3班：肥満・食文化

Group 3 : Obesity/ Food Culture

2	石原 叶大	島嶼国の肥満問題
	ISHIHARA KANATA	Obesity Issue in Island Countries
8	瀧 涼太	食による健康被害
	TAKI RYOTA	Health Problem Caused by Food
11	徳野 竜也	幸せになるために～肥満問題解決の落とし穴～
	TOKUNO RYOYA	Pitfall of Solving Obesity
21	石田 卓大	パラオと食育の関係
	ISHIDA TAKUTO	Relationship between Palau and Food Education
24	内田 康太	食育の在り方～島国の健康のために～
	UCHIDA KOTA	Way of Food Education -To Have Good Health in Island Countries-
28	北田 脩人	食育を充実させるには
	KITADA SHUTO	How to Improve Dietary Education
36	津村 亮太	パラオの食生活について
	TSUMURA RYOTA	Eating Habits in Palau
39	西田 雄哉	パラオでの肥満を減らすには
	NISHIDA YUYA	How Can We Decrease Obesity Rate in Palau
41	前林 尚太郎	肥満の原因と改善
	MAEBAYASHI SHOTARO	Cause of Obesity and How to Improve Condition of People

Research Project Themes List 2019

4班：支援・開発（5名）

Group 4 : Aid/Development

1	青野 秀哉	日本のODAにおける支援のあり方
	AONO HIDEYA	Most Effective Mode of Japan's Official Development Assistance
13	平松 大知	日本における災害時の水不足対策
	HIARAMATSU DAICHI	Countermeasure against Water Shortage When Natural Disasters
33	田崎 隼平	被害地域、途上国への有意義な支援とは
	TASAKI SHUMPEI	What is Meaningful Support for disaster-affected Areas and Developing Countries
35	谷口 拓海	肥満問題は支援によって解決するのか
	TANIGUCHI TAKUMI	Can We Solve Obesity Problem? -From Point View of Support-
42	森脇 悠	ODAにおける非支援国の恩恵と日本の立場
	MORIWAKI YU	Benefits of Developing Countries Supported by ODA and Position of Japan

5班：環境・ゴミ問題（8名）

Group 5 : Environment/Waste Problem

4	岡田 拓己	島国における埋立地不足の解決策とは
	OKADA TAKUMI	Solution for Shortage of Landfill
14	古川 蒼一郎	効率的ゴミ処理方法
	FURUKAWA SOICHIRO	Efficient Garbage Disposal Method
17	森 崇樹	パラオと日本における観光公害
	MORI TAKAKI	Over-tourism in Palau and Japan
19	麻生 直矢	プラスチックごみをどうやって減らすか
	ASO NAOYA	How to Reduce Plastic Waste
20	伊賀 智志	パラオにおけるゴミ問題に対する意識の程度
	IGA SATOSHI	Degree of Consciousness for Waste Issue in Palau
23	植松 大翔	パラオをはじめとする島国で循環型社会を形成するには？
	UEMATSU DAITO	How to Form recycling-oriented Society in Island Countries Such As Palau?
25	大槻 高久	パラオの観光とゴミ
	OTSUKI TAKAHISA	Tourism and Waste Issue in Palau
26	梶原 玲唯	パラオにおけるプラスチックごみの対策
	KAJIHARA SHOHEI	Measures against Plastic Waste in Palau

6班：環境・水問題（9名）

Group 6 : Environment/Water Problem

3	石丸 悠一郎	水の安定供給のためにできること
	ISHIMARU YUICHIRO	What Can We Do for Steady Supply of Water?
9	武田 渉夢	パラオと日本の水への価値観の違い
	TAKEDA AYUMU	What is Difference in Value for Water between Palau and Japan?
16	松本 昂大	パラオにおける水と健康との関連性
	MATSUMOTO KOTA	Relationship between Water and Health in Palau
18	行田 慎司	安定した水の供給について
	YUKIDA SHINJI	How to Maintain Reliable Supply of Water
22	井之上 舜	パラオなどの島国での水不足に関する対策
	INOUE SHUN	Measures against Water Shortage in Island Countries Such As Palau
30	黒木 廣明	島国の水問題について
	KUROKI KOMEI	Water Problem in Island Countries
32	椎崎 賢太郎	島国であることを利用した国の発展とライフラインの向上
	SHIIZAKI KENTARO	Development of Lifeline in Island Countries
37	中村 宜弘	島国での水不足解消法
	NAKAMURA NORIHIRO	Solution for Water Shortage in Island Countries
40	浜野 伸一	島国における水不足解消法
	HAMANO SHINICHI	How to Solve Water Shortage in Island Countries

Questions for the Ministry of Health

Group 1

Medical Treatment/Public Hygiene		
No.	First Name	Last Name
5	Fubuki	KATO
7	Kaisei	TAKAHASHI
27	Shohei	KAWAMURA
29	Ken	KIYARA
31	Keiichi	SAKAGUCHI
34	Kenshi	TANABE
43	Sota	YUKAWA
44	Atsuya	WATANABE

Group 2

Educational Problem		
No.	First Name	Last Name
6	Keitaro	KONO
10	Kota	TANAKA
12	Daisuke	HARA
15	Yohai	HOSOKAWA
38	Hirokazu	NARIKAWA

Group 3

Obesity/Food Culture		
No.	First Name	Last Name
2	Kanata	ISHIHARA
8	Ryota	TAKI
11	Ryoya	TOKUNO
21	Takuto	ISHIDA
24	Kota	UCHIDA
28	Shuto	KITADA
36	Ryota	TSUMURA
39	Yuya	NISHIDA
41	Shota	MAEBAYASHI

Group 4

Aid/Development		
No.	First Name	Last Name
1	Hileya	AONO
13	Daichi	HIRAWATSU
33	Shunpei	TASAKI
35	Takumi	TANIGUCHI
42	Yu	MORIYAKI

Group 5

Environment /Waste Problem		
No.	First Name	Last Name
4	Takumi	OKADA
14	Sochiro	FURUKAWA
17	Takaki	MORI
19	Naoya	ASO
20	Satoshi	IGA
23	Daito	UEMATSU
25	Takahisa	OTSUKI
26	Rei	KAJIHARA

Group 6

Environment /Water Problem		
No.	First Name	Last Name
3	Yuchiro	ISHIMARU
9	Ayumu	TAKEDA
16	Kota	MATSUMOTO
18	Shinji	YUKIDA
22	Shun	INOUE
30	Komei	KUROKI
32	Kentaro	SHIZAKI
37	Norio	NAKAMURA
40	Shinichi	HAMANO

Questionnaire in Palau

Please choose your answer or fill in the blanks for each question below.

Education

Q1. At this moment, what is your plan after graduating from high school? Choose your best answer.
☐ Return Palau Community College ☒ Attend another college or university (not Palau Community College)
☐ Start to work in Palau ☐ Start to work in the U.S.
☐ Start to work (except in Palau or U.S.A.) ☐ Stay your house in Palau
☐ Others

Q1-1. If your answer for Q1 is ①②, What makes you decide to enter a college?

Choose ALL the choices to fulfill your opinion.
☐ Advantages for the future ☐ Want to study more
☐ Recommended by your family or friends to go ☐ For economic reasons
☐ Thrift for daily life or job ☐ Not to take tests and do things
☐ Others

Q1-2. If your answer for Q1 is ③④⑤, Why you don't want to go to a college?

Choose ALL the choices to fulfill your opinion.
☐ Not advantageous for the future ☐ Don't want to study more
☐ Recommended by family or friends NOT to go ☐ For economic reasons
☐ Not useful for daily life or job ☐ Not to take tests and do things
☐ Others

Q2. How often do you use Radio or TV? Choose the best answer.

☒ Every day ☐ Three or four times in a week ☐ Once a week
☐ Several times in a month ☐ Once or twice in a month ☐ Once or twice in a year
☐ There are no TVs or Radios ☐ Others

Environment

Q3. Do you know the action for the environment conducted by the Palau government?

☐ Yes ☒ No

Q3-1. If your answer for Q3 is YES, please write a specific example of the action that you know.

[Palau Pledge]

Q4. When you throw away garbage, are you sometimes separating trash?

☐ Yes ☒ No

Q4-1. Do you use recycled products?

☐ Yes ☒ No

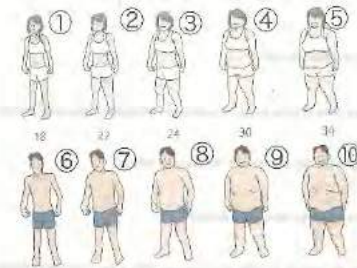
Dietary Education

Q5. A. Which is your ideal body shape?

Choose the number below: 7 (① ~ ⑩)

B. Which is like your body shape?

Choose the number below: 7 (① ~ ⑩)



Salad Bowl

Q6. What is your daily intake of vegetables?

☐ less than this ☐ about a half of this
☐ nearly same amount of this ☒ more than this

Q7. How often do you eat Taro in a week?

☒ I don't eat Taro. ☐ once or twice ☐ three or four days
☐ five or six days ☐ I eat Taro every day.

Q8. How much do you satisfy with your school lunch?

High 5 4 3 2 1 0 Low

Support

Q9. What kind of impressions do you have for support from Japan?

☒ I have a splendid image because Palau receives benefit from it.
☐ I don't have any images but I have a good impression on Japan.
☐ I don't have any images and I don't have a good impression on Japan.
☐ I don't have any impression.

Q10. If the water supply is off for three days, how many 500ml plastic bottles will you need to survive?

☐ 1 bottle or 2 bottles ☐ 5-6 ☐ 8-9 ☒ 11-12

Q11. Do you have a counterplan for water shortage in daily life?

☐ Yes ☒ No

If yes, what is it?

[]

Medical Treatment

Q12. Do you live in a remote island?

☐ Yes ☒ No

Q12-1. If yes, how long does it take to go to a general hospital from your house?

Q13. Are you satisfied with the service of the nearby clinic?

☐ Yes ☒ So-so ☐ No

Q14. Do you think you want to become a doctor?

☐ Yes ☒ No

Q14-1. If yes, are you dissatisfied with the current situation in Palau, where you don't have a medical school?

☐ Yes ☒ No

Q15. Could you tell us your age?

Age: (17)

Thank you for your cooperation!

このアンケートは、73期生の6つ班のメンバーで作成しました。

調査結果は、クラス全員で共有できるようにし、3学期の公开发表会では、調査結果のグラフを用いてポスター発表を行う生徒もいました。

Sports exchange with Takatsuki H.S.

Volleyball, folk dance, radio gymnastics

Students are dancing for the first time Radio gymnastics seen for the first time by MHS students



▲ Folk dance by students from both schools

On November 12th at 9 am, 43 students from Takatsuki High School and 5 teachers arrived at MHS by chartered bus. They received Ray's services from MHS students who were waiting. The students from both schools held a ceremony for opening an exchange party at the gymnasium. After greetings from both school principals, there was an exchange of souvenirs then the students from Takatsuki High School observed MHS classes in each classroom.

From 11:30 am, both school students ate lunch prepared by MHS. After that, songs by MHS Japanese class students

(Osaka Umaimon's song, Northern country spring, clapping hands if happy) , a folk dance by Takatsuki High School students, and radio exercises were performed. This year Takatsuki High School exhibits a demonstration that MHS has never seen before. Last year they showed various things such as jumping rope, and the students were very excited. After that, a volleyball match was held, and MHS took two sets, 14-2 and 15-8.

At 1:10 pm, Takatsuki solitary students were invited to spend the afternoon with their host families.

(To Page 2 & Page 3)

Helper (Adam, Antonio, Holden,Yoshimizu)



Shing Yu explaining MHS using a projector →

Shing Yu: The Takatsuki High School students were very polite and sweet, and I loved especially their energy and enthusiasm throughout the day. Although I didn't have the opportunity to get to know them, I had a lot of fun especially during the folk dance. I'm grateful that they were able to visit MHS, and I hope that they come again next year



▲ MHS wins Ibbuuch Smash

Kanata Ishikawa: There was a lunch for both schools. Everything was a great excitement. As expected, our team lost in volleyball game. But everything goes well and I thank everyone at MHS.

Keitaro Kono: When I arrived at the MHS, they gave me a lei and I was warmly welcomed and the tension was released. I was taught a class and was very surprised at the difference between Palau and Japan.



▲ The principals of both schools exchanging souvenirs

Yohei Hosokawa: I was happy and surprised to see you sing "Osaka songs" and "Japanese songs" well. Although folk dance was taught on the spot. The students enjoyed it.



Japanese class students singing Japanese songs ▲



▲ Lunch at the gymnasium

Kota Tanaka: What impressed me was the strong sense of solidarity between teachers and students. As soon as we entered the classroom, They prepared our seats, introduced us to the students, gave us interesting stories, and laughed.



Radio gymnastics seen for the first time by MHS students ▲

現地の日本語教師山上幸雄先生が、本校生徒を取材され、生徒感想を掲載してくれました。

Yuya Nishida: After a program at school, I enjoy Palau with their parents. I was especially impressed by the glass bottle recycling factory those bottles should be thrown away, but they recycled them.

Ryuya Tokuno: I talked with my host family schoolgirl about hobbies and I loved her. The fun time is fast. I give a souvenir at the time to break up. I said in my heart that I would come to Palau again.

Shunpei Tasaki: In my first experience of going to a foreign school, I had the challenge of speaking in English and having a conversation. I think this sense of accomplishment will be of great use in the future.

Masayo: It was a really good experience especially when it was the second time we hosted. First we went to RIC and then after we went to Etpison museum. we really enjoyed watching and learning from each exhibit. After going to the museum, we went to the glass recycling center at t-dock where the students learn how they recycle bottles and what they can make out of them.



▲ Host family pick up



Farewell to the host family (in front of the Palaisia Hotel)



Japanese students from Takatsuki High School during their 4-day tour.

Japanese students from Takatsuki High School are taken on a tour around Palau

BY TELIAKES VANO

Students from Takatsuki High School were taken on a tour around Palau on Thursday with the purpose of learning about Palau's history, landmarks, and cultural practices. The all-day trip started off with a bus ride going through the different states in Babeldaob. Along the way, Bernie Nigardman, who was the tour guide of the trip, informed the students about the different facts of each state starting from Aulal all the way to Ngardman. When they reached Chell, they

stopped by a house that belongs to one of Bernie's relatives. From there, the students got a chance to try ulukab (stuffed crab) and demok (corn leek soup). After that, Bernie issued them around her relatives' house and discussed the different types of plants ranging from mango, breadfruit, tamarind, ginger, along with rice.

Next, they were taken to one of the beaches at Chell, where they all explored, around and enjoyed what the beaches had to offer. Then they were taken to one of Bernie's favorite sites which is Chubokli. • JAPANESE, 10

▲ Takatsuki High School article (Island Times November 15th)



Naked performance

3 GAME WINNIG STREAK Boys' Basketball

Following the Cardinals' win over the PHS Yellow on November 8th, the Cardinals have won 3 consecutive games on the road to the playoffs. Cardinals won over EBHS Knights on November

12 by 5 points. (Final Score 38-33) They won their third consecutive game on Thursday November 14th against PHS Blue. Final score 53-50.

Points against EBHS Knights

Chance 10pts Marelang 10pts Holden 8pts Halens 8pts Sky 2pts

Points against PHS Blue

Landon 10pts Chance 9pts Halens 8pts Tomie 8pts Marelang 7pts Holden 4pts Bronson 3pts Saito 2pts

(To Page 4)



Japanese students from Takatsuki High School during their island tour.
(PHOTO BY TELBAKES YANO)

Japanese students from Takatsuki High School are taken on a tour around Palau

BY: TELBAKES YANO

Students from Takatsuki High School were taken on a tour around Palau on Thursday with the purpose of learning about Palau's history, landmarks, and cultural practices. The all day trip started off with a bus ride going through the different states in Babeldaob. Along the way, Bernie Ngiraimau, who was the tour guide of the trip informed the students about the different facts of each state starting from Airai all the way to Ngardmau.

When they reached Choll, they

stopped by a house that belongs to one of Bernie's aunties. From there, the students got a chance to try ukaeb, (stuffed crab) and demok (taro leave soup). After that, Bernie toured them around her aunties house and discussed the different types of plants ranging from mangos, breadfruit, tumeric ginger along with its uses.

Next, they were taken to one of the beaches at Choll, where they all explored around and enjoyed what the beaches had to offer. Then they were taken to one of Bernie's favorite sites which is Osebokl Ke-

♦ JAPANESE, 10

Island Times

November 15, 2019, p. 2

Japanese students ...

♦ FROM PAGE 2

dam (Hill of the Flying Kite). While there, they got the opportunity to look at the beautiful scenery and take pictures.

Then they stopped by Ngerlmud Capitol, where Bernie explained to them different functions of the government branches. Finally the last stop of the trip was to one of the traditional bai's. The particular bai that they got to see was Bai ra Rubak at Airai. Bernie talked about the history of the bai along with the roles of chief and women in Palauan society.

After the trip concluded, the students expressed their gratitude towards Bernie for taking the time to show them around Palau. When asked about their experience, they said that it was very fun. They thought that history behind the relationship between Japan and Palau was interesting. Additionally, they loved eating the traditional Palau food and visiting the sites.

These trips are conducted annually ever since 2014 and Bernie believes that by continuing with these trips then it could be good for Palau's tourism industry.

パラオでの研修を終えて～GA コースの集大成～

高校二年一組 武田渉夢

今回、GA コースの最後の課題研究として、私たちはパラオを訪れた。以下に自分がパラオで何を感じ、そして何を学んだのかを書いていこうと思う。

1. 講義と質疑、インタビュー調査から学んだこと

はじめにパラオで受けた多くのレクチャーのうち自分が学んだものが大きかったものを3つ紹介していきたいと思う。

一つ目は、パラオの保健省での質疑応答である。ここではレクチャーがあったというよりは何人かの専門家の方々に高槻生がそれぞれ持っているリサーチクエストンに対して一人一人答えてもらうといった形式であった。時間が大幅におすほど個々の質問に親身になってくださり大変有意義な時間であったのだが自分は自分のした質問に少し後悔をした。それは自分の質問があまりに抽象的な内容であり、更には聞く人によって大きく答えが異なるような質問であったからだ。どういうことかということ、自分がした質問の内容は「パラオ政府が最も早急に取り組まなければいけないと考えている問題は何か」というものだったのだがこれでは各省庁によって考えが異なるし、更には、あくまで保健省は保健省の管轄内の事情しか知らないのもので、政府としての意見は全く知らなかったからである。よくよく考えればわかることだったかもしれないが、これでは具体的な返答が返ってくるわけがない。これが今回の研修で最も後悔したと共に学びが大きかった出来事である。

二つ目は、ウエキミノル先生の講演である。ウエキ先生の講演でも最後に質問をする時間を設けていただき、その日あったホームビジットでの疑問点を質問することができた。そこでの回答は自分の知りたいことがそのまま返ってきたので、非常に満足のいくものではあったものの、最初英語で質問したときにはうまく伝わらず、最終的には日本語で質問することになってしまったのは少し悔しい。今後は英語の発音にも気をつけなければいけないと知れたのは収穫かもしれない。

三つ目は、ペリリュー島での島民対話である。島民対話に行くメンバーは前日に決まったため日本から準備してきた質問をぶつけるというよりかは、パラオで過ごして疑問に思ったことを質問できる時間であった。実際の現地の人の声というのは今後の研究で、とても意味のあるものであるため、ここでの情報は貴重なものであった。当初はペリリューに住む高齢の島民の方々に対して質問をし、実際に島に住む人ならではの回答をしていただく、という風に聞いていたため、ウエキミノル先生の講演での後悔を活かしてできるだけハキハキと喋ろうと密かに決意していた。しかし、蓋を開けてみると二十代から、一番上でも五十代の若い人たちに出てきていただいたため、ある意味、拍子抜けであった。しかし話を聞くと、若い人なりの考えなどを知ることができたので、予想以上に有意義な時間を過ごす事ができた。

その後の戦績巡りで特に印象に残ったのは、平和記念公園に日本政府が作った記念碑で、そこにはとても多くの意味が含まれていて、天皇も含めて日本のパラオへの思いを知ることができた。以前日本の天皇がパラオの平和慰霊碑を訪れた際にも現地の人に迷惑にならないように、ホテルを使用せずに狭い海上保安庁の船に泊まった、ということがとても意外であり、日本人として誇らしくもあった。その後に訪れた

千人洞窟では、あれほど狭く暗い空間に二ヶ月間ものあいだ食料や水なども十分でない極限状態の中を、死ぬことすらも許されずに戦い続けた日本人兵士の方が、何を思っていたのかを考えることができた。もちろん自分が想像するのは実際の日本人兵士の方の思いには遥かに及ばないかもしれないが、実際に現地に行き考えることができたのは非常に大きな経験であった。

そしてペリリュー島での最後のプログラムとして戦争博物館に行ったのだが、そこでもペリリュー島での戦いが日本兵にとってどれほど無謀なものであり、その中でも日本兵が地形を巧みに利用し、「耐えた」のかを学べた。つまり日本にとっても負けることを前提とし、あくまで足止めを目的とし、さらにはアメリカ兵も2日で終わらせられると考えていた戦いを、二ヶ月間続けるという最大限の成果を上げたということ。それは並大抵な心持ちではできないことであり日本の「強さ」の集大成であるように思われた。

2. ホームビジットについて

続いて、三日目にあった「ホームビジット」について書いていく。まず今回の「ホームビジット」は、自分にとって今までのGAの活動や参加した海外研修プログラムでした、様々な経験の集大成であったことは間違いない。そこまで言えるほど、今回のホームビジットの内容は素晴らしいものであった。では今回のホームビジットの内容について書いていく。自分たちのペアは、パラオのコロール州の議長の方のところへ行かせていただいた。研究内容は二人とも水問題に関することであったので、PPUCというパラオの水を管理する施設に連れて行っていただいた。そして、そこの職員の方に質問をする時間を取っていただいた。これがまず今まででは考えられないことで、今まで、最高でも生徒6~7人に対して大人の先生が1人つくというのが普通であったのに、今回は生徒2人に水問題の専門家の方が一人ついて、質問に答えてもらうという形式であった。それはとてつもなく贅沢な時間であったとともに、予想外の事態であった。どういうことかというと、自分達は、当初ホームビジットは水問題について少し詳しいホストの方にパラオの観光地を色々と連れて行ってもらったり、家に連れていってもらったり、車の移動や家の中などの短い時間に、水問題に関する意見やあまり専門的ではない質問に答えてもらうものだと考えていたのだ。そのため自分たちはあまり多くの質問を考えていなかったし、もっと言えば、その時間が課題研究を多く進められる時間だとは全く考えていなかった。つまり緊急事態であった。しかし、その緊急事態の中で今までの海外研修や体外発表などの多くの活動での経験値が活かしたのである。いや、むしろその緊急事態であったからこそ今までの経験が開花したのかもしれない。

何があったのかというと、自分達は、事前に日本で「準備」してきたことを総動員し、つたない英語の中で一時間もの間、質問をし続けたのである。そこにはホストの方にわざわざ連れてきていただいたのに、早々と質問を終わらせるわけにはいかないという自分たちなりのプライド（笑）と、せっかく時間を取っていただいたのにつまらない質問をする訳にはいかないという、高槻生としての使命感があったのだろう。その結果課題研究を更に大きく発展させることができるほどの多くの情報と、最後には名刺もいただき、いつでもメールして質問してもいいということまで言うてもらうことができた。これは今後の課題研究に専門のアドバイザーがついてくれたことを意味していてとてつもなく幸運なことである。実は、ここまで成功したのは職員の方が、数年前まで日本に留学していたので、多少は日本語でも大丈夫だったという秘密があるのだが、ここでは深く掘り下げないでおく。

その後も、パラオの下水処理場に連れて行ってもらったり、おみやげをもらったり、などととても楽しく有意義な時間であった。今回のホストの方たちには、感謝してもしきれないほど良くしていただきありがたいと思っている。

3. 総括

最後に今回の研修を通して学んだことを書きたいと思う。今回の研修今まで多くの海外研修プログラムに参加させてもらった中でも最も自分の成長を感じられたとともに、内容に満足した研修であったと思っている。それは先に述べたように、ペリリュー島での戦争の負の遺産を現地で見られたことであり、「ホームビジット」が大成功で終わったことである。もちろん反省しなければいけない点も多くあるがそれでも納得のいくものであった。

日本に帰ってからなぜこれほど研修がうまく行ったか、を考えたところ自分が考えつく要因は2つあった。

1つ目は、今まで非常に多くの海外研修に参加させていただいてきたということだ。もちろんそれぞれの研修には非常に多くのお金がかかっていることもわかっている。つまり自分が真っ先に感謝しなければいけないのは両親であり今回の成功の裏には両親の手助けが必要不可欠であったということだ。これほど多くの研修に参加できた自分がどれほど幸福であるかということに改めて気づくこともできた。

2つ目は、日本での「準備」をしっかりして研修にのぞめたということだ。その準備がなければホームビジットでの緊急事態にも対処できなかっただろう。「準備が大事」ということは、今後の学業やそれどころか就職してからの仕事にも共通して言えることであると思うので、今回の学びを今後にも活かしていきたい。今回の研修は何にも変えられないほど貴重な経験であり、その裏にはたくさんの人が関わっていることを知れた。

今回の研修に関わってくれたすべての方々、特に両親に感謝して今回の研修で学んだことを活かし受験勉強も頑張っていきたい。

(6) 総合学習「グローバル課題研究」の設置について（高校3年）

《(I)－①》[年間事業計画⑩]

報告者：松村 栄太郎（社会科主任）

1. 「グローバル課題研究」（高校3年）のねらい

この科目は平成29年度に新設された科目で、今年で3年目の実施にあたる。この2年間で個人の課題論文の完成と英文要旨を添付した「提言書」の作成という流れは完成した。GA課題研究の集大成として一人一人が研究論文を書き上げた後、さらにその成果をアジアの人びとの健康に寄与する「提言書」まで高めるというのが本時のねらいである。

2. 昨年度（2年生時）の72期生の取り組み

■ 1学期

4～5月 調べ学習（研究テーマを考えさせる）

6～7月 調べ学習（研究計画書の作成）

■ 2学期

9月～10月中旬 調べ学習（中間発表会の準備）

10月下旬～12月 中間発表会（4回実施）

■ 3学期

1月～2月上旬 課題論文要旨、課題研究発表会用ポスター作製

2月中旬～3月 課題研究発表会の準備、課題論文作成

72期生を指導する際の留意点として、最終目標である「提言書」作成を見据えて、個々人の研究テーマを徹底的に掘り下げさせたことが挙げられる。安易にテーマを選んだのでは、説得力のある「提言書」までたどり着くことは到底不可能である。そのため、「面談を重ねてのテーマ選び→研究計画書の作成→中間発表会でのブラッシュアップ→論文要旨の作成→ポスターづくり→論文作成」と丁寧に段階を踏んで指導し、一人一人に「なぜ自分はこのテーマを選ぶのか」ということを徹底的に考えさせた。これだけ時間をかけて指導したことは3年生時の指導にも大いに役立った。

3. 3年生時の学習活動

高校3年のグローバル課題研究では、受験勉強に配慮し、休日や夏休み中の課題は設けなかった。月曜4限の枠内で作業をし、提言書づくりを完結させられるように指導し、生徒の活動目標とした。生徒の進捗状況には個人差があり、2年生の段階で課題論文が完成している者もおればそうでない者もいたが、全員が1学期の前半には何とか課題論文（日本語）を完成させることができ、さらに1学期の終わりには英文要旨も全員が提出した。それを英語科の先生方に添削していただき、無事「提言書」を完成させることができた。以下に全員の課題論文タイトルを添付しておく。

■ 72期生研究論文タイトル一覧

石井 直樹「グローバル資本主義からどのように伝統文化を守るか」

梅本 将汰「海洋環境の保護～パラオでの取り組みを通じて～」

小野田 信「パラオにおける高血圧解決策の模索～継続・持続できる策とは如何に～」

金岡 大輝「サンゴについて～パラオから見た世界のサンゴ～」

小原 大輝「パラオ共和国における生涯学習～公共図書館を中心に～」

滋賀 勇佑「過労死を事前に予防するには～過労死大国日本とパラオでの比較～」
 新熊 璃久「日本の若年層のうつ病とその向き合い方
 ～フィールドワークを通して得たアイデアを応用し3つの力を利用しアプローチする～」
 杉藤 彰「パラオにおけるメンタルヘルス教育の報告～パラオと日本の相違点を見つけるために～」
 高谷 海斗「タラソセラピーのミクロネシア諸国への適用～パラオを研究対象にして～」
 竹内 瑛「地球温暖化への対策としての再生可能エネルギー～新たなる発電法～」
 武田 拓真「紫外線の有用性～紫外線は悪いだけではない～」
 東郷 潤也「欲望の資本主義」
 戸倉 峻久「西洋化と精神障害～パラオにおける精神障害の現状～」
 長江 遼馬「パラオにおけるゴミ処理問題と対策」
 西 遼太郎「パラオにおけるゴミ問題」
 橋本 剛「パラオにおける医療従事者不足の問題」
 前田 真宏「海の生態系の保全～パラオでのフィールドワークをもとに日本の海洋保全を考える～」
 前原 一仁「パラオにおける保健体育教育について～保健体育教育で我々は何を学ぶのか～」
 三谷 和輝「パラオにおける肥満～学校給食の改善～」
 宮迫 要「太平洋島嶼国における生活習慣病に取り組むために」
 山口 晃史「海水淡水化～生き延びよう～」
 山本 紘生「各文化依存症候群の原因と対策～文化の負の一面が人の心を歪ませる～」
 渡邊 太郎「貧困肥満」
 猪 裕貴「災害後の精神衛生～災害後、誰がどのような行動をとるべきか～」
 遠藤 聡一郎「移民の方との付き合い方～真の意味での時代に合わせた社会環境～」
 大矢 楓斗「世界のサンゴ礁を復活させるには
 ～パラオのサンゴ礁問題から見る世界のサンゴ礁問題～」
 岡崎 亮太郎「発展し続ける国際社会において必要とされる教育」
 金坂 知樹「パラオの習慣と生活習慣病の関係」
 岸田 隆希「マイクロプラスチックをなくすには
 ～世界の様々な国と地域における対策をもとに考える～」
 倉場 康太「太平洋島嶼国パラオでの政府が実施する非感染疾患対策及び改善状況～」
 古儀 佳祐「漂流ゴミによってもたらされる海洋動植物への健康被害及びその対策」
 下村 一馬「パラオにおける現地食材と輸入食品の競合」
 清家 一朗「パラオと日本における食中毒の違い～そこから分かる最適な食中毒対策～」
 長澤 晶輝「島嶼国の自然災害への向き合い方～日本との大きな違いは何か～」
 西尾 宇晃「ポイ捨てから景観を守る～アフターケアの仕方～」
 畑生 武寛「アジアのトイレ問題」
 原田 洋樹「サンゴ礁の減少とその対策」
 牧 龍男「島嶼国におけるゴミ問題
 ～パラオでのフィールドワークを活かして日本の方法を参考にしてアプローチしていく～」
 山崎 遼「パラオにおける次世代の防災のあり方」
 湯山 蒼介「デング熱を主とした蚊媒介感染症の新対策」

4. 課題論文の書式

72期生に指定した課題論文の書式は以下の通りである。

用紙：A4縦向き 文字の向き：横書き 文字・行数：40字×40行

活字の大きさ・フォントの種類等

タイトル：MSゴシック 16ポイント

副題：MSゴシック 12ポイント

章見出し：MSゴシック 14ポイント

節見出し：MSゴシック 10.5ポイント

本文：MS明朝 10.5ポイント

余白：上部余白 20mm 下部余白 25mm

右部余白 25mm 左部余白 25mm

最大字数の目安：ページ数は10枚程度とする。

写真や図について：グラフ、作図、フィールドワークで撮影した写真等を挿入してもよい。

但し、1つの図等はページの4分の1までが適当とする。

(73期生以降も基本的にはこの書式を踏襲している)

5. GAコース課題研究自己評価表の分析

高校3年においては高校1年、高校2年において使用したループリックとは異なり、GAコース行事がほぼ終了した2学期の文化祭終了後の段階で「GAコース課題研究自己評価表」による自己評価を実施した。この自己評価表は70期生から同じ書式でおこなっており、過年度と比較することでその年度のGAコース生の自己評価を定点観測して分析することができる。以下が今年度の結果と70期、71期生との比較である。

問1 課題研究では「グローバルヘルスの向上」をテーマとして探究活動を行いました。以下の5つの観点（調べ・発表・まとめ・提案・英語の活用）について、成果を発揮できたか自己評価してください。

- ① 「調べ」（研究テーマを自ら設定し、それを深く掘り下げ、多面的に日本以外の複数の国々の情報や事例を収集できたかどうか）

70期生	3.7	71期生	4.09	72期生	3.9
------	-----	------	------	------	-----

- ② 「発表」（パワーポイントやポスターに研究の要旨をまとめ、学内外での発表会で分かりやすく堂々と発表できたかどうか）

70期生	3.95	71期生	4	72期生	3.59
------	------	------	---	------	------

- ③ 「まとめ」（研究した事柄を論文・提言書という成果物にしっかりまとめることができたかどうか）

70期生	3.6	71期生	3.55	72期生	3.31
------	-----	------	------	------	------

- ④ 「提案」（グローバルイシューについて考える中で、他人の借り物の意見ではなく高校生らしい自分の提言、提案を見出すことができたかどうか）

70期生	3.28	71期生	3.64	72期生	3.33
------	------	------	------	------	------

- ⑤ 「英語で情報収集し、英語で資料を作成し、英語で発表できたかどうか」

70期生	3.03	71期生	3.64	72期生	3.38
------	------	------	------	------	------

問2 GAコースの課題研究での経験は、あなたにとって有用であったと思いますか。

70 期生 3.7 71 期生 4.55 72 期生 4.08

問3 G Aコースの課題研究は、あなたの卒業後の進路決定や将来の目標形成に影響を与えたと思いますか。

70 期生 3.23 71 期生 4.27 72 期生 3.26

問4 課題研究を通じて、自己の変化や成長を実感できたと思いますか。

70 期生 3.43 71 期生 4.27 72 期生 3.82

■分析

3年間を比較すると、いずれの項目でも71期生の満足度の高さが突出しているが、71期生については11名という少人数であったことを考慮する必要がある、比較対象としてはほぼ同規模（1クラス分）の人数の70期生のほうが妥当かと思われる。比較すると問1の②、③以外の項目で70期生の数値を上回っている。不本意ながらG Aコースを選択した者もいた70期生に対し、72期生は全員がG Aコースを希望して入ってきたことを考えれば当然の結果とも言え、むしろもう少し高い数字がでてよかったのではないかとも思える。とくに問1の②、③はかなり低い評価で70期生の自己評価をも下回っている。この結果を私なりに分析すれば、やはり高校3年になり受験勉強を本格的に進めなければならない状況の中で、課題論文や提言書作成に思う存分時間を割けないという葛藤の現れではなかったかと思う。「高校1、2年のときに課題研究に取り組んで研究が面白くなってきた。もっとやりたいが目の前の受験が気になって集中して取り組めない」というのが多くの生徒の本音ではなかったか。無論、彼らに有効な解決策を提示してやらなかったことは指導担当者の力不足でもあり、忸怩たる思いがある。一方で問2や問4の評価が高かったことは3年間のトータルで考えれば、彼らがG Aコースを選択してよかったと考えていることの証であり、担当者としては救われる思いである。問3の評価が低かったのは、彼らが現実に進路選択を迫られており、進路選択にG A課題研究が役立ったかどうかまで考える余裕がないということではないか。この文章の冒頭でも述べたが、71期生までは本校におけるコース制導入の過渡期であり、G Aコース生の人数にも年によってバラつきがあったが

72期生以降はG Aコースを第一希望にした生徒で1クラスを編成できるようになっており、自己評価表を用いた分析もより精緻に定点観測していくことが可能になるのではないかな。

6. まとめ

自己評価表の分析のところでも述べたように、高校3年においては受験勉強と課題研究の両立が大きな課題である。授業担当者としては「家への持ち帰りにはせず、出来るだけ週1回の授業（火曜日の4限）で完結できるよう計画的に授業を進める」「課題論文（日本語）については出来るだけ2年生までに完成させ、3年生で取り組むべきことは英文サマリーのみとする」といった配慮をおこなった。しかし課題研究の進捗状況には個人差があり、満足のいく仕上がりでの提言書を提出できなかった生徒も見られた。そもそも現行のように全員に課題論文を提出させるやり方についても、将来的には見直しが必要かもしれない。来年度はいよいよ高校課程が共学化され、高いモチベーションを持った女子がG Aコースに進んでくる。彼らに高い満足度で課題研究に取り組んでもらうためにも今年度の取り組みをしっかりと総括して来年度以降の更なる改善に取り組みたい。

(7) 他校との共同発表会への出場

《(I) - ①》[年間事業計画⑨]

報告者：社会科教諭 諭吉水真人

(1) パラオ・日本外交関係樹立25周年記念ワークショップ

「海でつながるパラオと日本のグローバルイシュー学生による市民アクション提案」

実施日 2019年10月26日(土)

実施場所 京都産業大学

参加生徒 高1 橋詰太陽、柳蒼太

高2 石原叶大、弘野恵太郎、細川陽平、植松大翔、谷口拓海、森脇悠

京産大 URL https://www.kyoto-su.ac.jp/news/20191113_news_ir.html

(2) パラオ・日本外交関係樹立25周年記念セミナー

～パラオと日本の未来を考える～

1. 実施概要

実施日 2019年11月9日(土)

実施場所 東京 世田谷美術館

参加生徒 高2 植松大翔

2. 学生優秀チームによる学生ワークショップによる市民アクション提案

発表者 高槻高校2年植松大翔(京都産業大学の大学生と共同発表)



(3) 未来を考える国際シンポジウム

1. 実施概要

実施日 2019年11月9日(土)

実施場所 清風南海高校

参加生徒 高1GAコース15名(3班)

2. 課題研究ポスターセッション

- ・NO MORE エボラウイルス(1班)
- ・脱!!不当労働～外国人技能実習生の裏側(3班)
- ・アジアにいる肥満の「あなた」に伝えたい。
高校生の考える、健康な体への第一歩。(6班)



(4) 2019年度 全国高校生フォーラム

All Japan High School Forum 2019

1. 実施概要

実施日 2019年12月22日(日)

実施場所 東京国際フォーラム

参加生徒 発表者 高2 平松大知、植松大翔、田崎隼平、
谷口拓海

テーマ別分科会司会 高2 内田康太、坂口佳史

アジア高校生架け橋プロジェクト留学生(2名): Trinh,Duc Uuy(ベトナム)

Phonpaseuth,Anouska(ラオス)



2. 課題研究ポスターセッション

発表者 平松大知、植松大翔、田崎隼平、谷口拓海

タイトル **Japanese Countermeasures against Water Shortage in Times of Disasters
- From Cases in Palau and Japan**

(日本における災害時の水不足対策～日本とパラオの事例から～)

3. テーマ別分科会ディスカッション

参加者 ポスター発表者4名と留学生2名

テーマ 自然環境と生活



(5) 京都大学ポスターセッション2019 (中止)

1. 実施概要

実施日 2020年3月20日(金)

実施場所 京都大学

参加生徒 谷口拓海、内田康太

2. 課題研究ポスターセッション

発表者 谷口拓海、内田康太

タイトル 伝統料理が肥満を減らす～太平洋の島国におけるタロイモの課題と可能性～

(6) WWL・SGH×探求甲子園2020 (中止)

1. 実施概要

実施日 2020年3月21日(土)

実施場所 関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス

参加生徒 高2発表者、中学3年1組(GAコース)、高校GAコース有志

2. 探求成果プレゼンテーション

発表者 弘野恵太郎、細川陽平、田中康太

タイトル **Higher Education in Developing Countries**

-Trinity Innovation with Radio and TV-

3. 探求成果ポスタープレゼンテーション

発表者 植松大翔、平松大知、岡田拓己、坂口佳史

タイトル **Sustainable Solutions for Waste Problems in the Pacific Islands**

**-From Investigation in Palau, the Most Ecologically-Minded Country
in the Pacific Islands-**

(太平洋の島国におけるごみ問題の持続可能な解決策)

4. ラウンドテーブル型ディスカッション

発表者 武田渉夢

テーマ 男性の育児休暇取得をさらに促進するための課題と解決策

(8) 国内高大連携事業の実施（京都大学グローバルヘルス学際融合ユニットを中心に）

《(Ⅱ) - ④》[年間事業計画⑨④]

報告者：滝藤 博史（SGH 推進部長）

SGH事業推進の一環として、高大連携授業を実施しているが、現在では京都大学医学部国際保健学講座（社会疫学分野）の木原正博教授が立ち上げた京都大学大学院グローバル学際融合ユニットに所属している留学生を派遣してもらい、セミナーを開講している。尚、この連携授業は5年前より実施しており、今年度の第1回目は累計で17回目に該当する。対象生徒は高校1、2年であり、更に中学3年のGA(Global Advanced)コース在籍生徒も参加している。講義や質疑応答は英語で行われ、また英語を母国語としない国から日本に留学している研究者であるため、英語の聞き取りに困難を感じる生徒もいたが、回を重ねるにつれて少しずつではあるが、生徒も聞き取りや発言に慣れてきている。英語は英語母語者だけのものではなく、世界共通語であるという認識を深く理解する機会にもなっている。講義の内容と自らの課題研究のテーマを照らし合わせた質問・議論も出ており、英語で考え、知識を深めていく学習が進められている。

(1) 第17回7月2日(火) [使用言語：英語]

講師：京都大学大学院 医学研究科 助教 Patou Musumari 氏（コンゴ）

テーマ：Global Health in Armed Conflict Zones: Case of Ebola in D.R. Congo

武装化された紛争地域のグローバルヘルス：コンゴ共和国におけるエボラ出血熱の事例
最初にコンゴ共和国について位置・人口・面積・言語・宗教・動物相・植物相・気候など国の紹介をしていただき、次に現在コンゴが健康という視点から抱えている問題を教えていただきました。今もコンゴには政情不安定な地方・地域があり、その原因の一つとして豊かな鉱物資源があげられ、それをめぐる紛争地域にエボラ出血熱が発症している場所があるということです。そのような地域での国際機関・医療従事者・地域住民の教育を含む様々な取り組みをお話いただきました。

(2) 第18回9月24日(火) [使用言語：英語]

講師：京都大学大学院 医学研究科 Swati Mittal 氏（インド）

テーマ：Smoking and its Effects 『喫煙とその影響』

最初にインドについて面積・人口・インダス文明やタージマハール・18の公用語・ヨガなどの紹介をしていただき、次に現在インドが抱えている健康問題についてお話をさせていただきました。その中でも特にタバコ・喫煙の問題から、それが人間の健康にどのような影響をあたえるのかについて詳しく取り上げていただきました。タバコは70種類以上もある植物であり、インドや中国では儀式的線香に使われ、1865年に今の紙巻きタバコが始まりました。タバコには様々な物質が含まれており、我々の体の中で脳、口腔、循環器官、内臓、骨、皮膚など様々な部分に悪影響を与えることが明らかにされました。また、タバコが環境に大きく影響することにも言及され、空気はもちろんそれが予想以上に土壌や水質汚染、水生生物に対しても影響があることは意外でした。最近喫煙も変化し電子タバコも出てきていますが、これが今後の研究対象になるとのことでした。

(3) 第19回10月29日(火) [使用言語：英語]

講師：京都大学大学院 薬学研究科 Mpumelelo Ntoga 氏（ボツワナ）

テーマ：Lessons learnt from Botswana's HIV/AIDS treatment programs

—ボツワナにおけるエイズ治療計画からの教訓—

今回のテーマであるHIV/AIDSに関しては、最初にその基礎としてHIVとAIDSの違い・感染経路・全世界の罹患人口・ボツワナでの過去の状況をスライドを使用して話され、このために平均余命が大幅に下がったこともあったとの説明でした。そのような危機的な状況を打開するためにボツワナではその対応に3段階の時期があり、特に第3段階での対策の中で“Masa”と呼ばれる抗レトロウイルス療法プログラムが非常に効果を上げ、その治療法を広め維持するためにどのようなことを行ってきたのか、そしてその対策が現在抱える問題と今後の目指す目標を詳しく講義していただきました。

(9) 「SGH 特別セミナー」の継続的な実施

《(Ⅱ) - ④》[年間事業計画④]

報告者：滝藤 博史 (SGH 推進部長)

⑨に挙げた国内の高大連携授業の実施と合わせて、SGH事業推進の一環として、セミナーを実施しているが、現在提携している大阪医科大学、大阪医科大学、京都大学医学部国際保健学講座(社会疫学分野)、大阪大学法学部国際公共政策学科、京都産業大学国際関係学部、神戸大学国際人間科学部、関西学院大学、Stanford 大学(フリーマンスポグリ国際研究所国際異文化教育プログラム)、国立臺灣大學(公衆衛生学教室グローバルヘルスセンター)、臺北市私立延平高級中學、NPO コペルニク(Kopernik)、他の中から、予定を調整し講師を派遣依頼し、本校で講義を実施している。同じく対象は高校1・2年、中学3年生である。講義の内容はグローバルヘルスに直接関連したものから、国際理解に関連したものまで幅広く扱うこととしている。自分達で考えて行動に移すためのステップとして知識や経験のストックが必要になるが、これらのセミナーはその一助となるよう設定している。尚、このセミナーについても本事業開始時から行っており、本年度は累計5回目から始まることとなる。

(1) 第5回 10月1日(火) [使用言語：英語]

講 師：スタンフォード大学 Gary Mukai 教授

テーマ：Early Japanese-American History and Global Mindsets

黎明期の日系アメリカ人の歴史とグローバルマインドセット

日系アメリカ人3世のゲイリー博士が、日本の移民1世がどのような思いでアメリカへと移り住み、どのような生活をしていたのか。その後続く2世たちが第二次世界大戦時やパールハーバー以降どのような扱いをアメリカ政府・アメリカ人から受けたのかを、ゲイリー博士のご家族の写真や当時の新聞記事などを資料として示していただき、日系アメリカ人の知られざる歴史のお話を伺いました。その中で、新聞や教科書には書かれていない別の物語について考えること、世界は相互に繋がっていること、そして周りにいる人に対して共感をすることが、グローバルマインドセットを身に付けていく際には重要になることを併せてお話しくさしました。

(2) 第6回 11月19日(火) [使用言語：日本語]

講 師：大阪医科大学 名誉教授 河野公一 先生

テーマ：グローバル社会における感染症のアウトブレイク ―パブリックヘルスの役割―

ロンドンでのコレラ流行時に疫学的手法を用いてデータを取り感染源と感染経路の解明を行い、コレラの蔓延を防いだジョン・スノウの話から始まり、そこから疫学(Epidemiology)という語の漢字の語源、英語の語源について話されました。感染症の流行の形態からくる用語の違い、様々な感染症と気候の関わりや媒介生物について詳しくお話をされました。更に代表的な感染症である、ペスト、エイズ、エボラ出血熱について基本的なことを分かり易く解説をしていただき、最後に空港や海港における検疫についても興味を引くお話をしていただきました。短い時間でしたが、公衆衛生の基本知識を幅広く知る機会となり、グローバルヘルスを課題研究している生徒にとって非常に有益なセミナーとなりました。

(10) 「グローバル課題研究」独自教材について

《(I)－④》[年間事業計画②⑤]

報告者：松村栄太郎（社会科主任）

昨年度（指定3年目）の本校SGH研究開発事業の重要な課題の一つが「グローバル課題研究」のための本校独自教材作成であった。このため年度当初から課題研究に携わる教員が集まって話し合いを重ねた。

まず独自教材で扱う内容としては、アソシエイト時代から蓄積してきたノウハウをもとに、

- 1 貧困問題と健康
- 2 水の問題と健康
- 3 ジェンダーと健康
- 4 教育と健康
- 5 公衆衛生と健康
- 6 環境問題と健康
- 7 経済格差と健康
- 8 難民・紛争問題と健康

の8つの章立てにすることを決めた。次に教材の構成に関しては、生徒に教材として持たせることも、教員がマニュアルとして共用することも、どちらも可能なものをつくるというコンセプトで、

- 1 その問題を学ぶ目的
- 2 その問題を扱う上での資料
- 3 学習指導案（例）
- 4 参考文献
- 5 授業時の配布資料（教材）

の5つを必ず盛り込むとした。そのようなかたちで書式を整え、更に意見を交換し合って内容を充実させ、目次や扉絵をつけ、学校長から巻頭言をいただき、ようやく完成させることができた。

今年度の取り組みとして、高校1、2年のGA課題研究の授業のなかで独自教材を利用した授業をおこなった。以下にその概要を記す。

■第7章「経済格差と健康」を活用した実践

実施日：2019年5月14日（火）6・7時限

対象クラス：高校1年1組

授業担当者：松村栄太郎

概要：独自教材の第7章を活用し、ファストファッションを足掛かりとして、先進国と発展途上国の経済格差について考えさせる授業をおこなった。まず生徒に身近なファストファッションのブランドを挙げさせ、自分たちの生活とファストファッションがいかに密接に関わっているかを気づかせた。さらに映画『ザ・トゥルー・コスト』を紹介し、ファストファッションの工場のある発展途上国でどのような悲惨な状況があるかを知らせ、ファストファッションの低価格は先進国と発展途上国の経済格差によって実現していることを理解させた。またこうした問題はファストファ

ッションのみならず、コーヒー・カカオ・スポーツ用品・油など多岐にわたっており、ファストファッションの問題はその一例に過ぎないこと、経済格差を解消する取り組みの一つとしてフェアトレード運動があることを紹介し、生徒に経済格差解消のため自分たちに出来ることは何かを議論させた。

■第2章「水の問題と健康」を活用した実践

実施日：2019年5月14日（火）5・6時限

対象クラス：高校2年1組

授業担当者：磯崎陽介

概要：独自教材の第2章を活用し、私たちの生活に最も身近な水の問題を通して、様々なグローバルイシューについて考えさせる授業をおこなった。最初にグループで3リットルの水が与えられたときの使途を考えさせ、水が自分たちにとっていかに大切なものを理解させた。さらにアフガニスタンでのペシャワール会の活動を紹介したり、映画『フロウ』を鑑賞させたりする中で、水の問題が経済格差や貧困、教育など様々な問題と結びついていることを考えさせた。

■第1章「貧困問題と健康」を活用した実践

実施日：2019年6月11日（火）6・7時限

対象クラス：高校1年1組

授業担当者：磯崎陽介

概要：独自教材の第1章を活用し、食料問題を足掛かりとして、広く貧困問題を考えさせる授業をおこなった。最初に様々な国の1つの家庭の1週間分の食料を紹介した写真を見せ、世界には慢性的に飢餓の問題に直面している国から飽食・肥満の問題を抱える国まで様々な国があることを理解させ、その格差はどこから生じるのかを考察させた。またアメリカの抱える貧困肥満の問題を紹介することで世界一の経済大国であるアメリカにも貧困や格差の問題が存在することを理解させ、日本の抱える諸問題についても考えさせた。

■第3章「ジェンダーと健康」を活用した実践

実施日：2019年6月25日（火）6・7時限

対象クラス：高校1年1組

授業担当者：松村栄太郎

概要：独自教材の第3章を活用し、日本も含めた先進国と発展途上国がそれぞれ抱えるジェンダーの問題について考察させる授業をおこなった。最初に生徒一人一人に今まで体験したジェンダーに関わる体験を挙げさせることで、ジェンダーは生まれつきのものではなく社会や文化の中で培われるものだということを理解させた。更に身近にある様々な例を挙げることで自分たちが知らず知らずに持っている固定観念について気づかせた。またマララ・ユスフザイさんの活動などを紹介し、世界には様々なジェンダー問題があることを伝えた。最後に男女共同参画社会の構築に向けて自分たちに出来ることは何かをグループで話し合わせた。

高校1、2年生とも下半期は自分たちの調べ学習が活動の中心になるため、独自教材を用いた授業は上半期に集中した。またセミナーや外部授業の関係で当初の授業計画が変更されることもしばしばあった。そのようなときに教材をゼロからつくるのではなく、独自教材としていつでも活用できるようになっていたことは非常に心強く、授業計画を立てる上で大いに役立った。

(今後の課題)

今回、独自教材を活用した授業をおこなったのは、もともと独自教材作成に加わったメンバーであり、既にノウハウを持ったメンバーであった。今回の独自教材作成のコンセプトは誰が担当になったとしても本校G A課題研究として、最低限これだけは生徒に伝えたいということであって、その意味ではこの教材の真価が問われるのは、授業担当者が代替わりして、新しいスタッフが授業を担当するようになったときかもしれない。その時には世界やわが国の情勢も、あるいは本校を取り巻く情勢も大きく変化して、この教材も更なるブラッシュアップが必要になるであろう。

4. 研究開発単位Ⅱの実施報告

(1) 総合学習「グローバルスタディーズ入門」「高1・高2グローバルスタディーズ」の設置について

《(Ⅱ) — ④》[年間事業計画①⑦⑧]

報告者：滝藤 博史 SGH 推進部長

中学3年から高校3年までの4年間の本校のコース制の中で、SGHを主軸とするGAコースのクラスに設定された総合学習『グローバルスタディーズ入門』を昨年度から担当した。この授業は、中学3年のGAコースの生徒に対して、実質、4年間のコースの全体像を示し、本校のSGH事業の仕組みを理解させるためのガイダンス的な役割も果たしている。コースの魅力をしっかりと伝えることによって、その後の生徒の「課題研究」取り組みへの意欲昂揚にもつながるため、この授業の重要性を意識しなければならない。

この授業ではグローバル 이슈やグローバルヘルスに関する英文を読み、それらに関する基本的な知識の習得と関連する英語表現を習得させるよう努めた。特に、前半の授業ではグローバルということ意識させる授業を展開し、地球規模でものごとを見て考えられるように授業を進め、また英語で新しい情報をつかみ取る練習の機会とした。もとより週1時間の配当であり、かつ時間割の都合上、この時間帯にGAコースの中3から高2までの3学年の生徒が一堂に会することができるように組んでいるため、グローバルセミナーや上級生の発表会など、SGHに関する特別プログラムが入ってくることも多く、そのためグローバルスタディーズのための時間を十分に確保できたとは言えない点是否めないが、この時間を使って行われた活動が全体として相互補完的な働きをして結果的にはうまく連携できて目的を果たしているように思う。生徒達はそれらの活動から上級生たちの活動を知り、それをロールモデルとしながら、これらの活動にも積極的な取り組みを行い、その結果は年度末のアンケート結果から知ることができる。「国際人として必要な教養が深まりましたか」「地球共同体の構成員であるという意識が高まりましたか」「国際共通語としての英語が身につきましたか」等の項目において、いずれも高い数字となった。日本を取り巻く情報を伝えることには、多くの時間を当てたことによると思われる。

高校1年生のGAコースの生徒に対しても、総合学習『グローバルスタディーズ』を担当した。内容的には、中学3年生に対するもので共通するものと、「グローバルヘルス」の概要、これの理解に必要な比較的専門的な英語の諸表現の習得に取り組むようにした。年度末の2月に、英語で「課題研究」の中間発表を台湾で行うことが決まっている彼らにとっては、やや医学系の専門的な英語の語彙や表現の習得ができるような英文を読み進めることとし、一定の成果があったものと受け止めている。しかしながら、今年度はコロナウイルスの影響のために高校1年生にとって課題研究の今年の集大成となるべき台湾研修が中止され、祖から体験し学び取るものの多くが実現できなかったことが、彼らにとって大きく影響をあたえていることがアンケート結果から読み取ることができる。ほとんどの項目において低い数値での推移となったことはそれを裏付けていると思われる。

高校2年生の総合学習『グローバルスタディーズ』に関しては、高校1年生の内容の継続として医学系の専門的な英語の諸表現の習得となるように医学関係の英文を読み進め、生徒の個人研究につながるように努めた。

今後も「グローバルスタディーズ」という名称の通り、「バランスのとれたグローバルマインドセットの育成」をめざす見地から、個人、社会、国家のレベルで、世界とどう向き合うかを一層掘り下げ、更に深く考える機会を提供していくことを目指していきたい。そのため、まずはその素材として、インターネットや各種のメディアから情報をできる限りキャッチするためのノウハウについて実践的な学習を進めることが必要であると考えている。更に、海外から日本に求められていることにも、これまで以上に意識を向けさせる必要があると思われるが、これらもこのような課題に取り組んでいきたいと考えている。

【2019 年度アンケート結果】

	●中学3年GAコース生徒	そう思わない	あまりそう 思わない	少しはそう 思う	そう思う
①	国際人として必要な教養が深まりましたか	8.1%	16.2%	43.2%	32.4%
②	地球環境の多様性に対する理解が深まりましたか	5.4%	10.8%	45.9%	37.8%
③	地球共同体の構成員であるという意識が高まりましたか	8.1%	18.9%	35.1%	37.8%
④	コミュニケーション能力が向上しましたか	10.8%	13.5%	35.1%	40.5%
⑤	リーダーシップが身につきましたか	16.2%	27.0%	35.1%	21.6%
⑥	論理的思考、合理的判断力を高めることができましたか	8.1%	24.3%	37.8%	29.7%
⑦	プレゼンテーションに自信が持てるようになりましたか	16.2%	10.8%	48.6%	24.3%
⑧	海外大学に対する興味や関心が高まりましたか	13.5%	10.8%	32.4%	43.2%
⑨	海外の学生、高校生との交流から自分の将来を考えるきっかけが得られましたか	16.2%	13.5%	37.8%	32.4%
⑩	国際共通語としての英語が身につきましたか	8.1%	16.2%	45.9%	29.7%

	●高校1年GAコース生徒	そう思わない	あまりそう 思わない	少しはそう 思う	そう思う
①	国際人として必要な教養が深まりましたか	25.6%	30.2%	30.2%	14.0%
②	地球環境の多様性に対する理解が深まりましたか	20.5%	38.6%	27.3%	13.6%
③	地球共同体の構成員であるという意識が高まりましたか	29.5%	34.1%	27.3%	9.1%
④	コミュニケーション能力が向上しましたか	22.7%	15.9%	47.7%	13.6%
⑤	リーダーシップが身につきましたか	34.1%	38.6%	22.7%	4.5%
⑥	論理的思考、合理的判断力を高めることができましたか	25.0%	31.8%	38.6%	4.5%
⑦	プレゼンテーションに自信が持てるようになりましたか	18.2%	27.3%	40.9%	13.6%
⑧	海外大学に対する興味や関心が高まりましたか	31.8%	40.9%	18.2%	9.1%
⑨	海外の学生、高校生との交流から自分の将来を考えるきっかけが得られましたか	38.6%	34.1%	22.7%	4.5%
⑩	国際共通語としての英語が身につきましたか	22.7%	34.1%	38.6%	4.5%

	●高校2年GAコース生徒	そう思わない	あまりそう 思わない	少しはそう 思う	そう思う
①	国際人として必要な教養が深まりましたか	2.4%	12.2%	61.0%	24.4%
②	地球環境の多様性に対する理解が深まりましたか	2.4%	14.6%	51.2%	31.7%
③	地球共同体の構成員であるという意識が高まりましたか	2.4%	31.7%	46.3%	19.5%
④	コミュニケーション能力が向上しましたか	7.3%	24.4%	39.0%	29.3%
⑤	リーダーシップが身につきましたか	9.8%	41.5%	31.7%	17.1%
⑥	論理的思考、合理的判断力を高めることができましたか	4.9%	29.3%	39.0%	26.8%
⑦	プレゼンテーションに自信が持てるようになりましたか	2.4%	12.2%	51.2%	34.1%
⑧	海外大学に対する興味や関心が高まりましたか	19.5%	39.0%	19.5%	22.0%
⑨	海外の学生、高校生との交流から自分の将来を考えるきっかけが得られましたか	9.8%	22.0%	51.2%	17.1%
⑩	国際共通語としての英語が身につきましたか	7.3%	14.6%	63.4%	14.6%

【2018 年度アンケート結果】

	●中学3年 GA コース生徒	そう 思わない	あまりそう 思わない	少しはそう 思う	そう思う
①	国際人として必要な教養が深まりましたか	0.0%	20.5%	61.5%	17.9%
②	地球環境の多様化に対する理解が深まりましたか	7.7%	17.9%	51.3%	23.1%
③	地球共同体の構成員であるという意識が高まりましたか	10.3%	53.8%	23.1%	12.8%
④	コミュニケーション能力が向上しましたか	5.1%	23.1%	53.8%	17.9%
⑤	リーダーシップが身につきましたか	10.3%	33.3%	48.7%	7.7%
⑥	論理的思考力、合理的判断力を高めることができましたか	12.8%	12.8%	30.8%	43.6%
⑦	プレゼンテーションに自信が持てるようになりましたか	0.0%	28.2%	51.3%	20.5%
⑧	海外の大学に対する興味や関心が高まりましたか	0.0%	23.1%	56.4%	20.5%
⑨	海外の学生、高校生との交流から自分の将来を考えるきっかけが得られましたか	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
⑩	国際共通語としての英語が身につきましたか	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

	●高校1年GA コース生徒	そう 思わない	あまりそう 思わない	少しはそう 思う	そう思う
①	国際人として必要な教養が深まりましたか	14.0%	37.2%	37.2%	11.6%
②	地球環境の多様化に対する理解が深まりましたか	18.6%	14.0%	34.9%	32.6%
③	地球共同体の構成員であるという意識が高まりましたか	18.6%	27.9%	39.5%	14.0%
④	コミュニケーション能力が向上しましたか	16.3%	23.3%	39.5%	20.9%
⑤	リーダーシップが身につきましたか	9.3%	18.6%	39.5%	32.6%
⑥	論理的思考力、合理的判断力を高めることができましたか	20.9%	27.9%	30.2%	20.9%
⑦	プレゼンテーションに自信が持てるようになりましたか	9.3%	23.3%	48.8%	18.6%
⑧	海外の大学に対する興味や関心が高まりましたか	9.3%	18.6%	53.5%	18.6%
⑨	海外の学生、高校生との交流から自分の将来を考えるきっかけが得られましたか	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
⑩	国際共通語としての英語が身につきましたか	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

	●高校2年GA コース生徒	そう 思わない	あまりそう 思わない	少しはそう 思う	そう思う
①	国際人として必要な教養が深まりましたか	10.0%	35.0%	32.5%	22.5%
②	地球環境の多様化に対する理解が深まりましたか	12.5%	12.5%	35.0%	40.0%
③	地球共同体の構成員であるという意識が高まりましたか	12.5%	30.0%	40.0%	17.5%
④	コミュニケーション能力が向上しましたか	2.5%	20.0%	52.5%	25.0%
⑤	リーダーシップが身につきましたか	7.5%	15.0%	47.5%	30.0%
⑥	論理的思考力、合理的判断力を高めることができましたか	25.0%	20.0%	32.5%	22.5%
⑦	プレゼンテーションに自信が持てるようになりましたか	12.5%	20.0%	32.5%	35.0%
⑧	海外の大学に対する興味や関心が高まりましたか	5.0%	17.5%	50.0%	27.5%
⑨	海外の学生、高校生との交流から自分の将来を考えるきっかけが得られましたか	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
⑩	国際共通語としての英語が身につきましたか	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

【2017 年度末アンケート結果】

	中学3年 GAコース生徒	そう思わない	あまりそう思 わない	少しはそう思う	そう思う
①	国際人として必要な教養が深まりましたか	0.0%	5.0%	70.0%	25.0%
②	地球環境の多様性に対する理解が深まりましたか	0.0%	5.0%	55.0%	40.0%
③	地球共同体の構成員であるという意識が高まりましたか	5.0%	40.0%	40.0%	15.0%
④	コミュニケーション能力が向上しましたか	5.0%	37.5%	27.5%	30.0%
⑤	リーダーシップが身につきましたか	5.0%	47.5%	37.5%	10.0%
⑥	論理的思考力、合理的判断力を高めることができましたか	0.0%	35.0%	45.0%	20.0%
⑦	プレゼンテーションに自信が持てるようになったか	12.5%	47.5%	22.5%	17.5%
⑧	海外の大学に対する興味や関心が高まりましたか	5.0%	10.0%	42.5%	42.5%
⑨	海外の学生、高校生との交流から自分の将来を考えるきっかけが得られましたか	19.4%	25.8%	35.5%	19.4%
⑩	国際共通語としての英語が身につきましたか	0.0%	22.5%	60.0%	17.5%

	高校1年 GAコース生徒	そう思わない	あまりそう思 わない	少しはそう思う	そう思う
①	国際人として必要な教養が深まりましたか	2.5%	10.0%	35.0%	52.5%
②	地球環境の多様性に対する理解が深まりましたか	5.0%	15.0%	42.5%	37.5%
③	地球共同体の構成員であるという意識が高まりましたか	7.5%	22.5%	37.5%	32.5%
④	コミュニケーション能力が向上しましたか	0.0%	15.0%	37.5%	47.5%
⑤	リーダーシップが身につきましたか	5.0%	25.0%	35.0%	35.0%
⑥	論理的思考力、合理的判断力を高めることができましたか	5.0%	5.0%	45.0%	45.0%
⑦	プレゼンテーションに自信が持てるようになったか	2.5%	5.0%	30.0%	62.5%
⑧	海外の大学に対する興味や関心が高まりましたか	7.5%	7.5%	37.5%	47.5%
⑨	海外の学生、高校生との交流から自分の将来を考えるきっかけが得られましたか	5.0%	7.5%	30.0%	57.5%
⑩	国際共通語としての英語が身につきましたか	2.5%	7.5%	57.5%	32.5%

	高校2年 GAコース生徒	そう思わない	あまりそう思 わない	少しはそう思う	そう思う
①	国際人として必要な教養が深まりましたか	10.0%	0.0%	50.0%	40.0%
②	地球環境の多様性に対する理解が深まりましたか	10.0%	20.0%	50.0%	20.0%
③	地球共同体の構成員であるという意識が高まりましたか	10.0%	40.0%	30.0%	20.0%
④	コミュニケーション能力が向上しましたか	10.0%	10.0%	40.0%	40.0%
⑤	リーダーシップが身につきましたか	20.0%	0.0%	70.0%	10.0%
⑥	論理的思考力、合理的判断力を高めることができましたか	10.0%	10.0%	70.0%	10.0%
⑦	プレゼンテーションに自信が持てるようになったか	10.0%	0.0%	70.0%	20.0%
⑧	海外の大学に対する興味や関心が高まりましたか	10.0%	30.0%	40.0%	20.0%
⑨	海外の学生、高校生との交流から自分の将来を考えるきっかけが得られましたか	0.0%	10.0%	40.0%	50.0%
⑩	国際共通語としての英語が身につきましたか	11.1%	0.0%	33.3%	55.6%

(参考) 【2016 年度末アンケート結果】

中学3年 GAコース生徒	そう思わない	あまりそう 思わない	少しはそう 思う	そう思う
① 国際人として必要な教養が深まりましたか	3.0%	0.0%	54.5%	42.4%
② 地球環境の多様性に対する理解が深まりましたか	3.0%	12.1%	48.5%	36.4%
③ 地球共同体の構成員であるという意識が高まりましたか	6.1%	27.3%	36.4%	30.3%
④ コミュニケーション能力が向上しましたか	9.1%	15.2%	39.4%	36.4%
⑤ リーダーシップが身につきましたか	15.2%	42.4%	30.3%	12.1%
⑥ 論理的思考力、合理的判断力を高めることができましたか	6.1%	21.2%	60.6%	12.1%
⑦ プレゼンテーションに自信が持てるようになったか	9.1%	39.4%	42.4%	9.1%
⑧ 海外の大学に対する興味や関心が高まりましたか	15.2%	9.1%	39.4%	36.4%
⑨ 海外の学生、高校生との交流から自分の将来を考えるきっかけが得られましたか	6.1%	9.1%	36.4%	48.5%
⑩ 国際共通語としての英語が身につきましたか	3.0%	9.1%	54.5%	33.3%

高校1年 GAコース生徒	そう思わない	あまりそう 思わない	少しはそう 思う	そう思う
① 国際人として必要な教養が深まりましたか	9.1%	9.1%	36.4%	45.5%
② 地球環境の多様性に対する理解が深まりましたか	18.2%	18.2%	36.4%	27.3%
③ 地球共同体の構成員であるという意識が高まりましたか	9.1%	27.3%	45.5%	18.2%
④ コミュニケーション能力が向上しましたか	18.2%	18.2%	27.3%	36.4%
⑤ リーダーシップが身につきましたか	27.3%	27.3%	18.2%	27.3%
⑥ 論理的思考力、合理的判断力を高めることができましたか	27.3%	27.3%	27.3%	18.2%
⑦ プレゼンテーションに自信が持てるようになったか	18.2%	18.2%	18.2%	45.5%
⑧ 海外の大学に対する興味や関心が高まりましたか	9.1%	0.0%	45.5%	45.5%
⑨ 海外の学生、高校生との交流から自分の将来を考えるきっかけが得られましたか	18.2%	0.0%	9.1%	72.7%
⑩ 国際共通語としての英語が身につきましたか	18.2%	9.1%	36.4%	36.4%

【資料 2019 年度 SGH 事業コース間アンケート調査結果】

中学3年		GA (SGHクラス)			GL			GS (SSHクラス)		
		はい	いいえ	無回答等	はい	いいえ	無回答等	はい	いいえ	無回答等
①	今年度、あなたは社会貢献活動（ボランティア）や自己研鑽に励みましたか？	54.1%	43.2%	2.7%	16.2%	83.8%	0.0%	30.8%	69.2%	0.0%
②	今年度、あなたは留学又は海外研修に参加しましたか？	54.1%	43.2%	2.7%	2.7%	97.3%	0.0%	30.8%	69.2%	0.0%
③	将来、留学をしたり、仕事で国際的に活躍したいと考えていますか？	86.5%	10.8%	2.7%	62.2%	37.8%	0.0%	71.8%	28.2%	0.0%
④	今年度、公的機関から表彰されたり、公益性の高い国内外の大会で入賞することがありましたか？	27.0%	70.3%	2.7%	2.7%	97.3%	0.0%	5.1%	94.9%	0.0%
⑤	外国人との交流の機会などを通して、海外の人が日本や日本人をどのようにとらえているか、イメージや感覚を持つことができましたか？	70.3%	24.3%	5.4%	35.1%	64.9%	0.0%	66.7%	33.3%	0.0%

高校1年		GA (SGHクラス)			GL			GS (SSHクラス)		
		はい	いいえ	無回答	はい	いいえ	無回答	はい	いいえ	無回答
①	今年度、あなたは社会貢献活動（ボランティア）や自己研鑽に励みましたか？	38.6%	61.4%	0.0%	41.9%	58.1%	0.0%	51.2%	48.8%	0.0%
②	今年度、あなたは留学又は海外研修に参加しましたか？	22.7%	77.3%	0.0%	27.9%	72.1%	0.0%	30.2%	69.8%	0.0%
③	将来、留学をしたり、仕事で国際的に活躍したいと考えていますか？	54.5%	45.5%	0.0%	48.8%	51.2%	0.0%	58.1%	41.9%	0.0%
④	今年度、公的機関から表彰されたり、公益性の高い国内外の大会で入賞することがありましたか？	2.3%	97.7%	0.0%	11.6%	88.4%	0.0%	9.3%	90.7%	0.0%
⑤	外国人との交流の機会などを通して、海外の人が日本や日本人をどのようにとらえているか、イメージや感覚を持つことができましたか？	34.1%	65.9%	0.0%	60.5%	39.5%	0.0%	44.2%	55.8%	0.0%

高校2年		GA (SGHクラス)			GL			GS (SSHクラス)		
		はい	いいえ	無回答	はい	いいえ	無回答	はい	いいえ	無回答
①	今年度、あなたは社会貢献活動（ボランティア）や自己研鑽に励みましたか？	36.6%	61.0%	2.4%	41.4%	58.6%	0.0%	45.0%	55.0%	0.0%
②	今年度、あなたは留学又は海外研修に参加しましたか？	61.0%	36.6%	2.4%	0.0%	100.0%	0.0%	50.0%	47.5%	2.5%
③	将来、留学をしたり、仕事で国際的に活躍したいと考えていますか？	56.1%	41.5%	2.4%	41.4%	58.6%	0.0%	47.5%	52.5%	0.0%
④	今年度、公的機関から表彰されたり、公益性の高い国内外の大会で入賞することがありましたか？	9.8%	82.9%	7.3%	6.9%	93.1%	0.0%	27.5%	72.5%	0.0%
⑤	外国人との交流の機会などを通して、海外の人が日本や日本人をどのようにとらえているか、イメージや感覚を持つことができましたか？	73.2%	17.1%	9.8%	31.0%	65.5%	3.4%	60.0%	40.0%	0.0%

【資料 2018 年度 SGH 事業コース間アンケート調査結果】

●中学3年		GA(SGHクラス)		GL		GS(SSHクラス)	
		はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
①	今年度、あなたは社会貢献活動（ボランティア）や自己研鑽に励みましたか？	13.2%	86.8%	14.9%	85.1%	30.5%	69.5%
②	今年度、あなたは留学または海外研修に参加しましたか？	41.0%	59.0%	15.6%	84.4%	14.6%	85.4%
③	将来、留学をしたり、仕事で国際的に活躍したいと考えていますか？	76.9%	23.1%	43.3%	56.7%	62.5%	37.5%
④	今年度、公的機関から表彰されたり、公益性の高い国内外の大会で入賞することがありましたか？	10.3%	89.7%	5.7%	94.3%	12.3%	87.7%
⑤	外国人との交流の機会などを通して、海外の人が日本や日本人をどのようにとらえているか、イメージや感覚を持つことができましたか。	82.1%	17.9%	47.1%	52.9%	51.3%	48.8%

●高校1年		GA(SGHクラス)		GL		GS(SSHクラス)	
		はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
①	今年度、あなたは社会貢献活動（ボランティア）や自己研鑽に励みましたか？	60.5%	39.5%	44.6%	55.4%	52.3%	47.7%
②	今年度、あなたは留学または海外研修に参加しましたか？	34.9%	65.1%	22.0%	78.0%	25.6%	74.4%
③	将来、留学をしたり、仕事で国際的に活躍したいと考えていますか？	72.1%	27.9%	35.0%	65.0%	62.8%	37.2%
④	今年度、公的機関から表彰されたり、公益性の高い国内外の大会で入賞することがありましたか？	7.0%	93.0%	3.0%	97.0%	9.3%	90.7%
⑤	外国人との交流の機会などを通して、海外の人が日本や日本人をどのようにとらえているか、イメージや感覚を持つことができましたか。	79.1%	20.9%	42.0%	58.0%	58.8%	41.2%

●高校2年		GA(SGHクラス)		GL		GS(SSHクラス)	
		はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
①	今年度、あなたは社会貢献活動（ボランティア）や自己研鑽に励みましたか？	30.0%	70.0%	24.3%	75.7%	42.2%	57.8%
②	今年度、あなたは留学または海外研修に参加しましたか？	85.0%	15.0%	4.5%	95.5%	78.3%	21.7%
③	将来、留学をしたり、仕事で国際的に活躍したいと考えていますか？	65.0%	35.0%	37.8%	62.2%	69.9%	30.1%
④	今年度、公的機関から表彰されたり、公益性の高い国内外の大会で入賞することがありましたか？	5.0%	95.0%	5.4%	94.6%	19.3%	80.7%
⑤	外国人との交流の機会などを通して、海外の人が日本や日本人をどのようにとらえているか、イメージや感覚を持つことができましたか。	70.0%	30.0%	21.6%	78.4%	73.5%	26.5%

【資料】2017 年度 SGH 事業 コース間アンケート調査結果

中学 3 年		GA (SGHクラス)		GL		GS (SSHクラス)	
		はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
①	今年度、あなたは社会貢献活動（ボランティア）や自己研鑽に励みましたか？	22.5%	77.5%	20.0%	80.0%	19.4%	80.6%
②	今年度、あなたは留学または海外研修に参加しましたか？	23.7%	76.3%	11.4%	88.6%	33.3%	66.7%
③	将来、留学をしたり、仕事で国際的に活躍したいと考えていますか？	80.0%	20.0%	60.0%	40.0%	61.1%	38.9%
④	今年度、公的機関から表彰されたり、公益性の高い国内外の大会で入賞することがありましたか？	18.4%	81.6%	5.7%	94.3%	8.3%	91.7%
⑤	外国人との交流の機会などを通して、海外の人が日本や日本人をどのようにとらえているか、イメージや感覚を持つことができましたか？	66.7%	33.3%	38.2%	61.8%	47.2%	52.8%

高校 1 年		GA (SGHクラス)		GL		GS (SSHクラス)	
		はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
①	今年度、あなたは社会貢献活動（ボランティア）や自己研鑽に励みましたか？	41.5%	58.5%	17.1%	82.9%	26.8%	73.2%
②	今年度、あなたは留学または海外研修に参加しましたか？	75.6%	24.4%	8.6%	91.4%	31.7%	68.3%
③	将来、留学をしたり、仕事で国際的に活躍したいと考えていますか？	78.0%	22.0%	40.0%	60.0%	63.4%	36.6%
④	今年度、公的機関から表彰されたり、公益性の高い国内外の大会で入賞することがありましたか？	12.2%	87.8%	8.6%	91.4%	15.0%	85.0%
⑤	外国人との交流の機会などを通して、海外の人が日本や日本人をどのようにとらえているか、イメージや感覚を持つことができましたか？	92.7%	7.3%	32.4%	67.6%	60.0%	40.0%

高校 2 年		GA (SGHクラス)		GL		GS (SSHクラス)	
		はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
①	今年度、あなたは社会貢献活動（ボランティア）や自己研鑽に励みましたか？	36.4%	63.6%	11.5%	88.5%	52.2%	47.8%
②	今年度、あなたは留学または海外研修に参加しましたか？	90.9%	9.1%	11.5%	88.5%	63.8%	36.2%
③	将来、留学をしたり、仕事で国際的に活躍したいと考えていますか？	90.9%	9.1%	42.3%	57.7%	44.7%	55.3%
④	今年度、公的機関から表彰されたり、公益性の高い国内外の大会で入賞することがありましたか？	9.1%	90.9%	7.7%	92.3%	25.5%	74.5%
⑤	外国人との交流の機会などを通して、海外の人が日本や日本人をどのようにとらえているか、イメージや感覚を持つことができましたか？	100.0%	0.0%	38.5%	61.5%	56.8%	43.2%

(1) 概要

グローバルスタディーズの授業では、国際関係、国際保健、比較文化、環境など、多分野にわたるトピックスを取り上げ、実践的な英語力と考える力を養成していく。社会問題に関心を持つことを通じて、日本と英語圏との比較をし、自分の意見を表現し、自分の考えを発展させて、議論を深める方法や技術を身につけることを目的とする。

(2) 授業のねらい

高槻SGHプログラムの総仕上げとして、研究開発テーマ「医科大学と一体化したアジア圏の人々の健康を支えるグローバルリーダーの育成」の一助となるよう、必要となる知識・表現の仕方を涵養していく。

(3) 授業実践例報告

授業のねらい：論説文に示されている問題点を見つけ出し全体の構造を読み取る。

- ① 目標の提示：英文について対比構造を見つけるよう指示した。その後、論点となるものは何か見つけるよう指示している。以下の英文では、地球環境の変化に伴い、海上に浮遊している Garbage Patch についての英文と、現代社会のありかたについての英文を扱っている。

(素材文)(<https://www.nationalgeographic.org/encyclopedia/great-pacific-garbage-patch/>)

Great Pacific Garbage Patch

The Great Pacific Garbage Patch is a collection of marine debris in the North Pacific Ocean. Marine debris is litter that ends up in the ocean, seas, and other large bodies of water.

The Great Pacific Garbage Patch, also known as the Pacific trash vortex, spans waters from the West Coast of North America to Japan. The patch is actually comprised of the Western Garbage Patch, located near Japan, and the Eastern Garbage Patch, located between the U.S. states of Hawaii and California.

These areas of spinning debris are linked together by the North Pacific Subtropical Convergence Zone, located a few hundred kilometers north of Hawaii. This convergence zone is where warm water from the South Pacific meets up with cooler water from the Arctic. The zone acts like a highway that moves debris from one patch to another.

The entire Great Pacific Garbage Patch is bounded by the North Pacific Subtropical Gyre. The National Oceanic and Atmospheric Administration (NOAA) defines a gyre as a large system of swirling ocean currents. Increasingly, however, it also refers to the garbage patch / a vortex of plastic waste and debris broken down into small particles in the ocean. The North Pacific Subtropical Gyre is formed by four currents rotating clockwise around an area of 20 million square kilometers (7.7 million square miles): the California current, the North Equatorial current, the Kuroshio current, and the North Pacific current.

The area in the center of a gyre tends to be very calm and stable. The circular motion of the gyre draws debris into this stable center, where it becomes trapped. A plastic water bottle discarded off the coast of California, for instance, takes the California Current south toward Mexico. There, it may catch the North Equatorial Current, which crosses the vast Pacific. Near the coast of Japan, the bottle may travel north on the powerful Kuroshiro Current. Finally, the bottle travels westward on the North Pacific Current. The gently rolling vortexes of the Eastern and Western Garbage Patches gradually draw in the bottle.

The amount of debris in the Great Pacific Garbage Patch accumulates because much of it is not biodegradable. Many plastics, for instance, do not wear down; they simply break into tinier and tinier pieces.

For many people, the idea of a “garbage patch” conjures up images of an island of trash floating on the ocean. In reality, these patches are almost entirely made up of tiny bits of plastic, called microplastics. Microplastics can’t always be seen by the naked eye. Even satellite imagery doesn’t show a giant patch of garbage. The microplastics of the Great Pacific Garbage Patch can simply make the water look like a cloudy soup. This soup is intermixed with larger items, such as fishing gear and shoes.

The seafloor beneath the Great Pacific Garbage Patch may also be an underwater trash heap. Oceanographers and ecologists recently discovered that about 70% of marine debris actually sinks to the bottom of the ocean.

While oceanographers and climatologists predicted the existence of the Great Pacific Garbage Patch, it was a racing boat captain by the name of Charles Moore who actually discovered the trash vortex. Moore was sailing from Hawaii to California after competing in a yachting race. Crossing the North Pacific Subtropical Gyre, Moore and his crew noticed millions of pieces of plastic surrounding his ship.

Marine Debris

No one knows how much debris makes up the Great Pacific Garbage Patch. The North Pacific Subtropical Gyre is too large for scientists to trawl. In addition, not all of the trash floats on the surface. Denser debris can sink centimeters or even several meters beneath the surface, making the vortex’s area nearly impossible to measure.

About 54 percent of the debris in the Great Pacific Garbage Patch comes from land-based activities in North America and Asia. The remaining 20 percent of debris in the Great Pacific Garbage Patch comes from boaters, offshore oil rigs, and large cargo ships that dump or lose debris directly into the water. The majority of this debris—about 705,000 tons—is fishing nets. More unusual items, such as computer monitors and LEGOs, come from dropped shipping containers.

While many different types of trash enter the ocean, plastics make up the majority of marine debris for two reasons. First, plastic’s durability, low cost, and malleability mean that it’s being used in more and

more consumer and industrial products. Second, plastic goods do not biodegrade but instead, break down into smaller pieces.

In the ocean, the sun breaks down these plastics into tinier and tinier pieces, a process known as photodegradation. Most of this debris comes from plastic bags, bottle caps, plastic water bottles, and Styrofoam cups.

Marine debris can be very harmful to marine life in the gyre. For instance, loggerhead sea turtles often mistake plastic bags for jellies, their favorite food. Albatrosses mistake plastic resin pellets for fish eggs and feed them to chicks, which die of starvation or ruptured organs.

Seals and other marine mammals are especially at risk. They can get entangled in abandoned plastic fishing nets, which are being discarded largely due to inclement weather and illegal fishing. Seals and other mammals often drown in these forgotten nets—a phenomenon known as “ghost fishing.”

Marine debris can also disturb marine food webs in the North Pacific Subtropical Gyre. As microplastics and other trash collect on or near the surface of the ocean, they block sunlight from reaching plankton and algae below. Algae and plankton are the most common autotrophs, or producers, in the marine food web. Autotrophs are organisms that can produce their own nutrients from carbon and sunlight.

If algae and plankton communities are threatened, the entire food web may change. Animals that feed on algae and plankton, such as fish and turtles, will have less food. If populations of those animals decrease, there will be less food for apex predators such as tuna, sharks, and whales. Eventually, seafood becomes less available and more expensive for people.

These dangers are compounded by the fact that plastics both leach out and absorb harmful pollutants. As plastics break down through photodegradation, they leach out colorants and chemicals, such as bisphenol A (BPA), that have been linked to environmental and health problems. Conversely, plastics can also absorb pollutants, such as PCBs, from the seawater. These chemicals can then enter the food chain when consumed by marine life.

Patching Up the Patch

Because the Great Pacific Garbage Patch is so far from any country's coastline, no nation will take responsibility or provide the funding to clean it up. Charles Moore, the man who discovered the vortex, says cleaning up the garbage patch would “bankrupt any country” that tried it.

Many individuals and international organizations, however, are dedicated to preventing the patch from growing.

Cleaning up marine debris is not as easy as it sounds. Many microplastics are the same size as small sea animals, so nets designed to scoop up trash would catch these creatures as well. Even if we could

design nets that would just catch garbage, the size of the oceans makes this job far too time-consuming to consider. The National Ocean and Atmospheric Administration's Marine Debris Program has estimated that it would take 67 ships one year to clean up less than one percent of the North Pacific Ocean.

Many expeditions have traveled through the Great Pacific Garbage Patch. Charles Moore, who discovered the patch in 1997, continues to raise awareness through his own environmental organization, the Algalita Marine Research Foundation. During a 2014 expedition, Moore and his team used aerial drones, to assess from above the extent of the trash below. The drones determined that there is 100 times more plastic by weight than previously measured. The team also discovered more permanent plastic features, or islands, some over 15 meters (50 feet) in length.

All the floating plastic in the Great Pacific Garbage Patch inspired National Geographic Emerging Explorer David de Rothschild and his team at Adventure Ecology to create a large catamaran made of plastic bottles: the Plastiki. The sturdiness of the Plastiki displayed the strength and durability of plastics, the creative ways that they can be repurposed, and the threat they pose to the environment when they don't decompose. In 2010, the crew successfully navigated the Plastiki from San Francisco, California, to Sydney, Australia.

Scientists and explorers agree that limiting or eliminating our use of disposable plastics and increasing our use of biodegradable resources will be the best way to clean up the Great Pacific Garbage Patch. Organizations such as the Plastic Pollution Coalition and the Plastic Oceans Foundation are using social media and direct action campaigns to support individuals, manufacturers, and businesses in their transition from toxic, disposable plastics to biodegradable or reusable materials.

- ② 展開1：本文に関して読み取った大まかな内容をペアで共有し、ペアごとに発表させる。その際に要点の読み落としがないかどうか、発表内容について質問を入れる。
- ③ 展開2：全体で英文の内容を大まかに確認し、理解をしているか生徒ごとに英文を確認させる。ペアで確認をした後、英文で提示されている問題について全体でディスカッションを行った。ここで、意見が画一的なものに誘導されないよう留意した。
- ④ 展開3：関連テーマに関するスピーキングとライティングを課した。
What do you plan to tackle some garbage problems of World Heritage in Palau?
(*生徒のフィールドワーク先でパラオに高校2年次に訪問)

(4) ループリック評価

	そう思わない	あまりそうは思わない	少しはそう思う	そう思う
英文の構造をつかむ意識は身についたと思いますか。	0	5	19	16
知識を使って表現する能力が上がったと思いますか。	0	3	17	20
議論の分岐点をつかめるようになったと思いますか。	0	3	17	20
地球環境に対する理解が深まりましたか。	0	3	17	20
国際人として必要な知識・技能が得られましたか。	0	4	15	21

(2)「(外国語) グローバル英語表現Ⅰ」(高校1年生)の設置について

《(Ⅱ)－⑤》[年間事業計画②]

報告者：英語科教諭 明翫吉宜

1. 概要(目標)

この科目は、生徒の思考力や英語によるコミュニケーション能力を高め、生徒が次世代リーダーとして国際的な視野を持つことができることを目標とする授業である。授業内容は、学習指導要領の「英語表現Ⅰ」に加え、それと並行しながら英語で発表を行うにあたっての英語力を養いながら、発表そのもののスキルをも磨き、3学期に予定されている海外での発表活動に向けて十分な練習を行うというものである。

2. 授業の目標と実践報告

(1) 1学期の授業実践報告

5月半ばから開始したプレゼンテーション学習は、少ない授業時間の中ではあったが、まずは生徒たちにプレゼンテーションとはどういうものなのかという導入から始めた。プレゼンテーションの定義、プレゼンテーションを行う上で大事な要素、日本語と英語のプレゼンテーションの違いや、スライドの作り方について資料を通して学んでいき、実際に上手くプレゼンテーションをしている学生たちの画像やビデオを見せながら、良いプレゼンとはどういうものかを伝えた。2学期に日本語でグループでのプレゼンテーションをすることを各自念頭に置き、4～5人のグループを作り、生徒たちが役割分担をして、発表のテーマ設定に取り組ませた。トピックは「台湾」に関わることなら何でも良いものとし、ただし、何かの説明やただの紹介プレゼンテーションにならないよう、必ず自分たちの意見や推考をその中に入れることを条件とした。

適切なテーマ設定ができるように、マインド・マップという手法を用いて、テーマ設定を個人レベルで実践し、各班内で各自持ちより、話し合いのもとで各班のテーマを設定した。テーマ一覧を作成、配布し、助言を加えてテーマの修正をさせて、発表資料の制作に取り組ませた。

(2) 1学期の授業成果と課題

プレゼンテーションの成功は、聴衆の興味を抱くようなテーマ設定が重要である。協同作業を通じてテーマ設定に取り組ませたが、適切なテーマ設定をするのに苦労していたようである。しかしながら、これらの課題こそが、1学期見つけることができた大きな収穫と言える。彼らがこれから、グループ単位で、または個人での課題研究が本格的に始まっていく。課題研究においてもプレゼンテーションにおいても、何をテーマとするのが大切であるのか、テーマを探すことがいかに難しいのかを実感したようだ。

2学期以降はプレゼンテーション実践に移る。まず母語である日本語でプレゼンテーションをし、次にそれを英語で相手に伝える練習に、より一層習熟できるよう指導していく予定である。

(3) 2・3学期の授業実践報告

1学期での発表の方法についての基礎知識を踏まえ、2学期に入り、日本語と英語によるプレゼンテーションの練習を開始した。9月では、2月に実施される台湾研修に向けて、台湾についてグループ内で調べて発表を行い、11月では同じテーマを英語で発表を行った。授業内にて、生徒は英語を用いての発表に欠かすことのできない単語や語句を復習し、その学んだものを生かしながら、11月には希望した数名の生徒が、他校のSGHシンポジウムに参加し、初めて学外で発表するという経験を積んだ。3学期に入ると、2月末に行う台湾研修での英語発表に向けて、授業内に留まらない様々な英語発表活動に取り組んだ。2月中旬には、課題研究のテーマごとに分かれた8つのグループが、自分たちの研究内容を英語で発表するために、発

表用の英語資料も作成した上で上級生や英語科・社会科の教員に対して10分間の発表を行った。2月末には課題研究発表の仕上げとして、本校で行われたSGH事業公開発表会にて数グループ発表した後、台湾研修にてそれぞれの課題研究の成果を発表した。

(4) 2・3学期の授業成果と課題

2・3学期の授業実践を通して、彼らの英語発表における態度が向上した。当初、英語発表活動に対する生徒の態度は自信がないためか消極的なものであった。しかし、2学期に英語で発表する基本的な枠組みを理解し、3学期に課題研究を英語で発表する経験を何度もすることにより、多くの生徒が英語で行うプレゼンテーションに徐々に前向きに取り組むようになった。

＊1：ループリック評価の結果

ループリック評価の結果（2016年度）

観 点	具 体 的 観 点	評 価 （人数）					合計人数
		1	2	3	4	5	
テーマ選 定	的確な選 定ができ たか	0	1	7	3	0	11
英語表現	語彙・文 法・語法	0	3	5	3	0	11
	構成力	0	1	6	4	0	11
	発音・抑 揚	0	2	7	2	00	11
プレゼン テーショ ンについ て	内容	0	6	3	2		11
	ツール及 び資料	0	1	7	2	1	11
	話し方	1	1	7	2	0	11
	動作	0	4	5	2	0	11

※評価基準：1＝努力不足 2＝もう少し 3＝普通 4＝まあまあ 5＝良い

ループリック評価の結果（２０１７年度）

観 点	具 体 的 観 点	評 価 （人数）					合計人数
		1	2	3	4	5	
テーマ選 定	的確な選 定ができ たか	0	1	12	14	14	41
英語表現	語彙・文 法・語法	0	0	13	16	12	41
	構成力	0	1	13	15	13	42
	発音・抑 揚	0	1	15	16	10	42
プレゼン テーショ ンについ て	内容	0	1	17	8	15	41
	ツール及 び資料	0	1	10	15	16	42
	話し方	0	3	10	14	15	42
	動作	0	0	11	14	17	42

※評価基準：1＝努力不足 2＝もう少し 3＝普通 4＝まあまあ 5＝良い

ループリック評価の結果（２０１８年度）

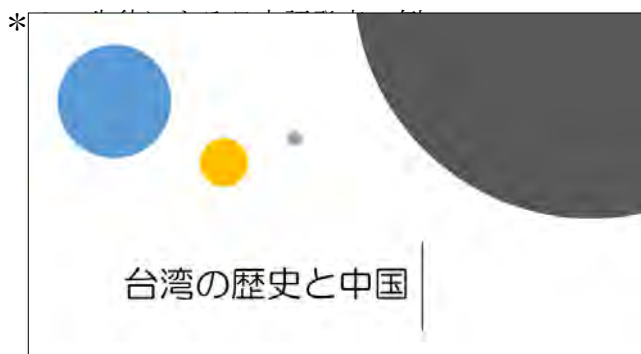
観 点	具 体 的 観 点	評 価 （人数）					合計人数
		1	2	3	4	5	
テーマ選 定	的確な選 定ができ たか	0	0	17	20	6	43
英語表現	語彙・文 法・語法	0	1	17	21	4	43
	構成力	0	2	11	26	4	43
	発音・抑 揚	0	0	22	19	2	43
プレゼン テーショ ンについ て	内容	0	3	17	20	3	43
	ツール及 び資料	0	1	10	25	7	43
	話し方	0	2	21	15	5	43
	動作	0	8	18	15	2	43

※評価基準：1＝努力不足 2＝もう少し 3＝普通 4＝まあまあ 5＝良い

ループリック評価の結果（2019年度）

観 点	具 体 的 観 点	評 価 （人数）					合計人数
		1	2	3	4	5	
テーマ選 定	的確な選 定ができ たか	0	3	8	21	13	45
英語表現	語彙・文 法・語法	0	1	12	17	15	45
	構成力	1	1	8	23	12	45
	発音・抑 揚	1	7	19	13	5	45
プレゼン テーショ ンについ て	内容	1	1	8	23	12	45
	ツール及 び資料	1	0	16	15	13	45
	話し方	1	7	19	10	8	45
	動作	2	12	15	9	7	45

※評価基準：1＝努力不足 2＝もう少し 3＝普通 4＝まあまあ 5＝良い



民族

先住民：3%

漢民族：97%（本省人：85% 外相人：13%）

※本省人…台湾の日本統治時代終了以前に台湾に移り住んだ人々
外相人…台湾の日本統治時代終了以降に台湾に移り住んだ人々

台湾の歴史 ー先史時代、オランダ統治時代ー

原住民が多く暮らしていた時代。

16世紀に明によって開発される。

周辺国との関りも増える。

東インド会社が台湾南部を制圧し台湾初の政権が誕生した。首都：台南

台湾の歴史 ー鄭氏政権時代ー

大陸では明が滅び、清が誕生する。

明の復活を望んだ鄭成功（日中ハーフ）が清に戦いを挑むが敗れる。

鄭成功は台湾に退き、オランダは追い出されて鄭氏政権が誕生する。

台湾の歴史 ー清朝時代ー

清は鄭成功を倒すために台湾に軍を派遣。

鄭氏が敗れ、清が台湾を領有。

清は台湾を福建省の一部としたが、化外の地として放置した。

日本との戦争（日清戦争）に敗れて台湾が日本に割譲された。

多くの人が大陸から来る（本省人）

台湾の歴史 ー日本統治時代ー

清は長い間放置していたので、目立った産業もなかった。

台湾の気候を利用し当時高級品の糖業を発展させる。

ある時は国家予算の3分の1ほどを台湾に使った。

台湾の歴史 一日本統治時代2ー



義務教育を本土よりも先に導入

帝国大学を大阪大学以前に創設

多くの言語が存在し、行く学校も別々であつたので日本語を公用語として教える。

台湾の歴史 一日本統治時代3ー



華南平野に世界最大級の巨大なダムを建設。

気候的に農業が難しかった華南平野はダムで米の生産高が30万トンから180万トンに

技術者である八田與一は地元住民と信頼関係を築き台湾で最も尊敬される日本人となっている。

大東亜戦争がはじまると台湾人も日本人として戦った日本が敗北したことで、台湾は放棄される。

台湾の歴史 一戦後から現在一



戦後にGHQの委託を受けて中華民国が台湾を管理する

しかし、内乱で国民党軍が共産党軍に負けたので国民党軍は帰る場所がなくなり今日に至っている。

なぜ台湾と中国はもめているのか



日本は大東亜戦争で敗戦後、サンフランシスコ平和条約を結ぶ。

日本は朝鮮の独立を承認したが台湾については権利、権限及び請求権の放棄とだけになっている。

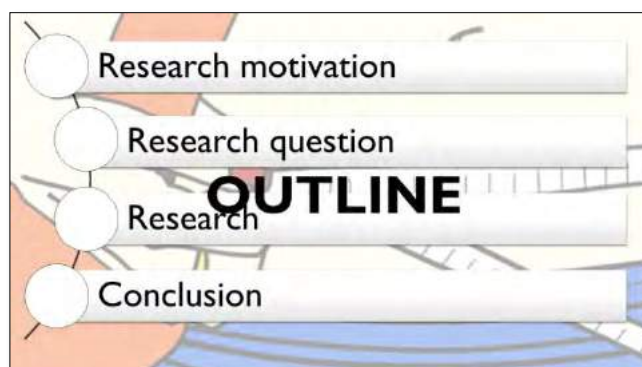
なぜ台湾と中国はもめているのか

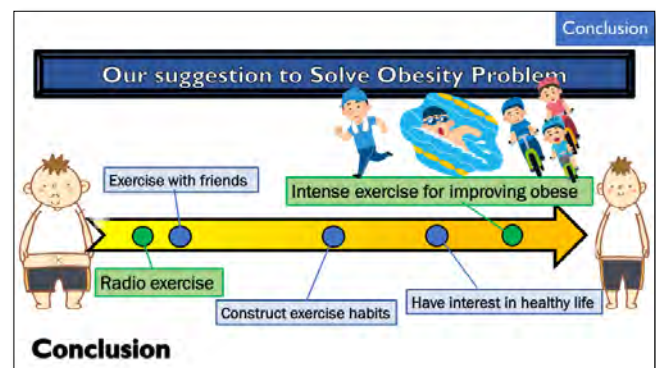
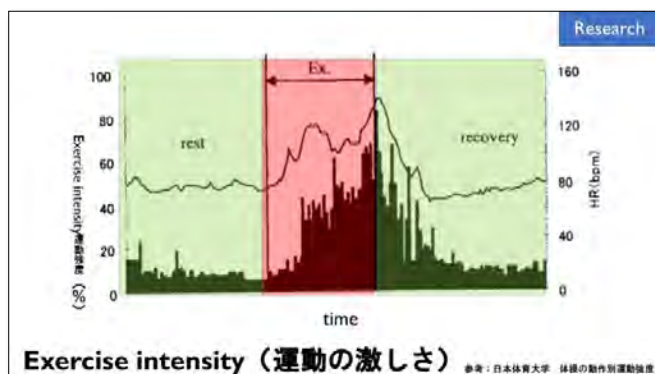
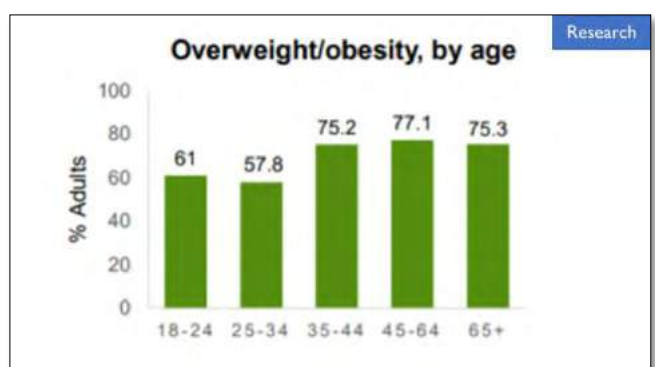
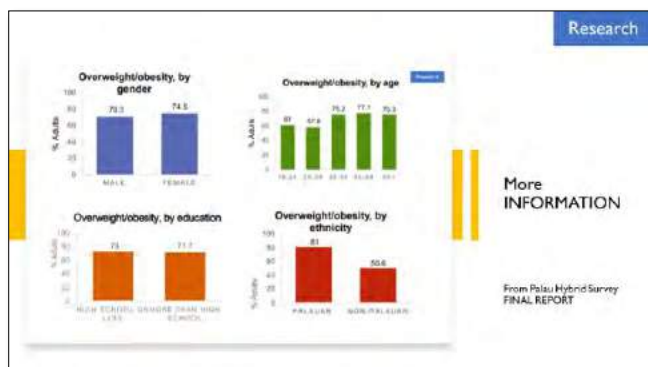
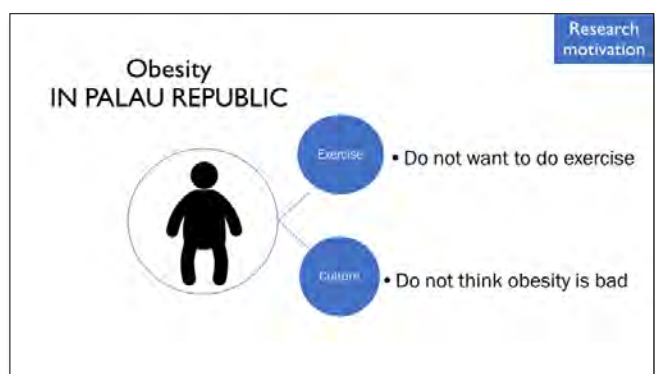


放棄はしたが、どこに返すのか
・カイロ宣言
・サンフランシスコ平和条約
・ポツダム宣言
にも書かれていない

それゆえに台湾は
・中国のもの
・中華民国のもの
・独立した国家
という主張がある

* 3 : 生徒による英語発表の例





(4)「(外国語) グローバル英語表現Ⅱ」の設置について(高校2年生)

《(Ⅱ)－⑤》[年間事業計画③]

報告者：英語科教諭 加藤廣太

(1) 概要(年間目標)

SGH 事業の一環として、「研究課題」以外に学校設置科目として取り組んでいる「グローバル英語表現Ⅱ」について報告する。この科目は、本校のスクールミッション「Developing Future Leaders With A Global Mindset」(卓越した語学力や国際的な視野を持って、世界を舞台に活躍できる次世代リーダーを育成する)に掲げられたグローバルマインドセット(global mindset)を身に付けるためのカリキュラムの一部となっている。「グローバル英語表現Ⅱ」では、学習指導要領の「英語表現Ⅱ」に加え、英語によるプレゼンテーションやディベート活動を行う際に必要な英語力を培う。また、自らの考えをまとめ英語で発表し、ディベート活動へと展開できるよう、相手の意見を理解して反論する基本的スキルの習得も目指した。

(2) 1 学期の授業実践報告

自分の考えをまとめ英語で発表するには、英語の知識を深め、正しい英語運用能力を身につけることが必要である。そのため 1 学期は、生徒の発信知識を深めるために、日本人が英語を発信する際に間違いやすい主語の決定や時制、関係代名詞などについての知識を深め、さらに日本語に対応した英語を実際書いてみることで、その知識の定着を図った。また、今後の発表の際に必要な様々な表現(目的・理由・数の表現)についても学んだ。加えて、生徒は英語のパラグラフライティングの際に注意しなければならことを学んだ上で、5つのエッセイライティングに取り組み、個々のエッセイは添削を受け、それをさらに書き直した。

生徒達はディベート自体が未経験の者が多く、そのため 1 学期はディベートの形式に慣れるという目的で、日本語によるディベートを行った。トピックはこれまでの課題研究などで得た世界の健康問題に関する知識を活用できる「e スポーツはスポーツか。」というものにした。生徒達はこれまでに培ってきた様々な健康問題に関する知識に加え、個々に調べた情報も活用しながらディベートを行っていた。

(3) 1 学期の授業成果と課題

1 学期の授業において、生徒は様々な日本語の文を英語に直していくという取り組みを通じて、正しい英語を書くための知識を深めることができた。だが、正しい英文を書けるようになるには、まだまだ知識が不足しており、練習量も足りていなかった。2 学期、3 学期も継続して 1 文ごとの英作文の練習に取り組む必要があった。生徒は 5つのエッセイに取り組み、その添削をさらに書き直すことで各々のパラグラフライティングの能力を高めた。2 学期・3 学期も 1 学期の取り組みを継続すると共に、アジアフィールドワークの現地調査に向けての質問項目の作成や、英語を用いた発表に向けた原稿作りを通してライティング能力の伸長を図る必要を感じた。1 学期、生徒はディベートの形式を学び、論理的に物事を考えることを体験した。1 学期の経験を踏まえ、2 学期・3 学期には英語を用いたディベートに挑戦し、英語で意見をまとめたり、反駁したりするという英語の技能向上を目指した。

(4) 2・3 学期の授業実践報告

2 学期・3 学期も 1 学期同様に、英語の 1 文 1 文を正確に書くことを主に目標とした授業を実践した。生徒達は日本人が英語を書く際に間違いやすいポイントを中心に学び、1 学期に学んだ基礎的な内容を生かしたやや難易度の上がる英作文に取り組んだ。担当教員が添削したものをクラスで共有することで、生徒は自分が英語を記述する際に注意する点を確認した。加えて、様々なエッセイライティングの課題にも 1 学期同様取り組むことで、パラグラフライティング能力の向上を目指した。

英作文に加えて、2 学期・3 学期の授業内では継続的にディクテーションの活動を行った。扱った教材は、アメリカ ABC のニュースやイギリスの BBC が提供しているグローバルヘルスに留まらない SDGs に関連する題材を幅広く選んだ。複数の英文の書き取った後、生徒達は個々の題材、気候変動やクリーンエネルギーの使用、技術革新などの題材のテーマに関してクラス内で英語を用いて話し合った。その際、生徒達には PREP 法「Point(主張) - Reason(理由) - Example(具体例) - Point(再主張・結論)」という型で自分の論旨をまとめるように指導した。

2 学期のアジアフィールドワークに向けて、パラオ共和国の教育省や病院、訪問先の高校で質問する内容を

考え、何度も推敲を重ねて英語による質問を作り上げることを2学期に行った。

(5) 2・3学期の授業成果と課題

本授業を通して生徒は、正しい英文を書くために必要な知識を身につけ、その知識に基づいて正確な英文を徐々に書けるようになっていった。また、これまで取り組む機会が少なかったエッセイライティングの課題にも繰り返し取り組むことで、英語の文章構成を理解し、形式に沿った書き方を理解することができるようになったと思われる。本年度は継続的にグローバルヘルスを含めたSDGsに関する題材をリスニング活動内にて扱った。これにより、生徒達のSDGs（特にグローバルヘルスに関する）問題意識が高まり、関連する語彙などの知識も増えたと考えられる。

今後の課題は、英語を使用する際の基本的な論理展開であるPREP法をいかに生徒達に定着させるかということである。2学期に行ったアジアフィールドワークや3学期のグローバルヘルス高校生フォーラムへの参加を通じて、生徒達は英語を用いて論理的に自分の意見を伝え、他者と考えを共有しながら1つの結論を導き出すことの難しさを感じていた。パラグラフライティングやディスカッション、ディベートなど様々な活動を用いて、生徒達がPREP法を運用できるようになるための練習を繰り返す行うことが必要である。

ルーブリック評価の結果（2019年度）

観点	項目	評価（％）				
		1	2	3	4	5
テーマの問題意識	①テーマへの取り組み具合	0	0	25	34	41
英語表現	②語彙・文法・語法	0	0	41	34	25
	③構成力	0	0	42	35	23
	④発音・抑揚	0	0	42	41	17
プレゼンテーション力	⑤話し方・動作	0	2	35	43	20
ディベートへの基本スキル	⑥反論する力	2	5	26	42	25

評価基準：5＝良い 4＝まあまあ 3＝普通 2＝もう少し 1＝努力不足

(1) 概要

この授業ではグローバルイシューとグローバルヘルスに関する英文を読み、自らの意見を英語で表現することを主軸として行った。とりわけ、社会的コンセンサスに関していまだに一致を見ていないトピックについて書かれている英文を読み、自ら意見を表現する。

(2) 授業のねらい

第一段階として、英文から対比構造を読み取る訓練をした。次に、英文中に現れている2つの対立する立場を丹念に整理し、一体なぜなる価値判断が下されているかを読み取る訓練を行った。生徒たちが自分で気づけるようなきっかけを教員、ときには生徒同士のディスカッションを契機に引き出せるよう心がけた。このように自分で読み取った内容をもとに、高校2年3年時と習得しているパラグラフライティングの技能を運用し、自己表現を行なった。

(3) 授業実践報告

授業のねらい：筆者の批判の対象とその理由を読み取り表現する。

- ① 目標の提示：まずは本文を要約し、その過程で対立構造を読み取ることを目標として提示した。以下で示される素材文では、近年アフリカの若い女性は肌を白くするための化粧品を多く使うようになっている現象を扱っている。しかし、そのような若い女性に対しては健康上の理由から国内の批判も多く国家を二分する問題であることも指摘されている。まずは読解することにより以上のような大まかな内容を掴めるようにする。

(素材文)

- [1] Toning. Lightening. Brightening. Whitening. While the marketing slogans promoting skin enhancement in Africa might be varied, the underlying effects are pretty identical. Although I do not use skin lightening products, I live in Nigeria where millions of women do.
- [2] On offer in my local shops are a wide variety of products designed to make dark skin lighter: Kojic acid* soaps, fade creams, hydroquinone* creams, whitening shower gels made from goat milk, and, for the more determined, skin lightening injections.
- [3] So when last month Vera Sidika, a popular Kenyan model, publicly admitted to spending tons of money bleaching her skin, **she added fuel to an already smoking hot fire**. Just one admission was enough to re-ignite the fierce debate about Africans' perception of beauty.
- [4] Sidika says she is proud of the way she looks and thinks African societies are hypocritical on this problematic issue. But her honesty roused the anger of many social media users across the continent.
- [5] Passions inevitably run high among Africans whenever someone brings into play racial issues. On the topic of skin whitening, emotionally charged slogans such as "black is beautiful" are often employed in an attempt to make women like Sidika feel as if they are somehow betraying their race. Such women are then accused of having inferiority complexes towards white people.
- [6] In Nigeria, where 77 per cent of women use skin lightening products, according to a recent World Health Organization report, the mainstream African media, which is mostly male-dominated, projects a strong bias against the practice. I myself am a dark-skinned Nigerian woman who does not use whitening creams or soaps, but I feel that while there are valid health concerns as to the side-effects of skin lightening products, it should remain an individual's right to be who or what they want to be.

[7] Yes, black is beautiful, but so also is white, brown, yellow and the many shades in between. When white people use tanning lotions, tanning rooms and other methods to darken their skin, it is treated as natural and other white people don't feel the need to remind them that "white is beautiful". In fact, such a statement would likely be regarded as racist by members of other races. Yes, I understand that there was a specific historical context in the US and elsewhere which, at the time, required the use of the "black is beautiful" slogan in order to boost black people's sense of self-worth and identity, but this is 2014 and we should have gotten beyond that by now. Or are self-affirming slogans going to be needed by black people forever?

[8] People's desire to have a particular skin tone, be it a darker or lighter one, comes from them wanting to be more attractive and noticed by others. And more often than not, in the case of an individual who has undergone skin lightening here in Africa, it works. The critics might be unwilling to admit this publicly, but the harsh truth is that in Africa, lighter-skinned girls do get more attention and are more appreciated than darker-skinned women.

[9] It is not unusual to often hear Nigerian men say things like: "Oh, I met this beautiful girl the other day, she had a great body. . . and her skin was so light." But then these same men would hypocritically be outraged if a Nigerian woman, especially one in the public eye, openly admitted to bleaching her skin. If skin tone didn't matter at all to Nigerian men, skin lightening creams and soaps wouldn't be flying off the shelves over here as they are right now. In Nigerian music videos too, one can notice a glaring preference for lighter-skinned females. The slight suspicion remains that my society is more confused about questions of identity and its perception of beauty than it cares to admit.

[10] Physical attraction is instinctive and lighter-skinned women are bound to attract more attention from men in a dark-skinned society such as Nigeria — just like darker-skinned people do in mainly white societies. Such interest does not have to be due to any sort of complex and is often simply mere curiosity of the different. Skin lightening should not be automatically regarded as an individual's outright rejection of their race. If a woman feels that lightening her skin will make her prettier or more confident, then society should let her be and not impose itself as judge and jury on her concept of beauty. It is high time Africans stop being hysterical and overly defensive about issues of their self-worth and identity.

- ② 展開 1 : 本文の読み取れた内容をもとに要約を作成し、ペアで共有する。その際、筆者が何を批判しているのかを最低限確認するよう指示する。この素材文において筆者が批判しているのは、男性目線で作られた美意識であり、それを読み取るには第 8 パラグラフの太線部に注目する必要がある(生徒配布のプリントでは太字にしていない)が、読み落とすものが多い。したがって、意見が分かれるペアが数多く発生する。
- ③ 展開 2 : 価値判断に関わらない大まかな部分に関して簡潔に説明し、もう 1 度読む時間を確保する。その後再びペアワークを行った上で、クラス全体でディスカッションを行った。その際、英文中の根拠を明示するよう注意を促せた。
- ④ 展開 3 : 関連テーマに関するスピーキングとライティングを課した

"Is it possible to change ideas and standards of male and female beauty, or are they natural?"

(4) ルーブリック評価

観点	項目	評価 (%)				
		1	2	3	4	5
テーマの問題意識	①テーマへの取り組み具合	0	5	15	60	20
英語表現	②語彙・文法・語法	0	7.5	25	60	5
	③構成力	0	5	10	70	15
	④発音・抑揚	0	5	32.5	52.5	7.5
プレゼンテーション力	⑤話し方・動作	0	5	45	47.5	2.5
ディベートへの基本スキル	⑥反論する力	0	12.5	40	45	2.5

評価基準：5＝良い 4＝まあまあ 3＝普通 2＝もう少し 1＝努力不足

全体として、前年度と比較して肯定的な評価をしているものがほとんどであるが、その中で⑤と⑥の項目については評価4・5の部分で数値が低くなっているのが気になるところである。特に、⑤「話し方・動作」については、これまでは自己評価として高かったが、やはり校内外を問わず上手なプレゼンテーションを見る機会が多くなることによって自己評価が低くなってくる傾向がある。

⑥については、極僅かの差ではあるが、評価2をつけているものが増えており、ディベートのスキルを身に付けさせることの難しさが表れていると思われる。

(4)「(外国語) グローバル時事英語」の設置について

《(Ⅱ)－⑤》[年間事業計画④]

報告者：英語科教諭 藤田 和也

1. 概要と目標

本校のスクールミッションは、卓越した語学力や国際的な視野を持って、世界を舞台に活躍できる次世代リーダーの育成である。その目標を達成すべく、本授業では、国際的に活躍できるリーダーに求められる英語コミュニケーション能力を養いながら、国内外の様々な課題に対して英語を通して学ぶことを目標としている、英語を母語に持つ教員による英会話の授業である。

2. 授業実践報告

過年度同様、テキスト「Shaping Modern Japan」(Cengage Learning)を使用し、多様な時事英語の単語や語句に触れ、各レッスンで扱われているテーマに基づいた文章を読んだ後、自分の意見を主張する練習を教員やクラスメイトと共に行った。この単語・語彙については、授業の初めに口頭練習を帯活動で行い、その習熟に努めている。基本的には昨年度と変わらない授業の進行であった。

1 学期：

①基本的語句の学習

活動：生徒同士が身近なトピック（例：テレビゲーム・子育てなど）についてそれぞれ、賛成・反対の立場で意見を述べ合う。

表現：「意見を述べる」I am certain that ... / It might be possible that ...

「賛同・否定」I completely agree. / I agree but ... / I completely disagree.

②地震について

活動：地震が発生した後、自分たちは何をすべきか、何ができるかを考え、ディスカッションする。その後、自分の意見を書いてまとめる。

表現：「助言」You have to ... / You must ... / You should ... / You could / If I were you, I would ...

③日本における核燃料の問題

活動：様々なトピックを通して、物事を比較し、お互いに意見を交換する。（例：住むならどこがよいか。どの燃料資源が最適か）

表現：「比較」... is better than ... / ... is worse than ...

2 学期：

④日本経済

活動：世界の通貨について復習したのち、商品の値段設定の基準や自分のお勧め商品などについてディスカッションする。

表現：「推奨」Would you recommend ... / Yes, I would recommend it. / No, I wouldn't recommend it.

⑤日本産業

活動：日本における様々な産業についてディスカッションしたのち、自分はどの分野に将来、進んで行きたいか意見交換する。

表現：「意見表明」 In my opinion, ... / I believe that ... / In my view ... / I think that ...

⑥日本における女性の社会進出

活動：日本における女性の社会進出についての教材を読み、他国とも比較しながら、この問題における日本の良い点・悪い点についてクラスで意見を出し合ったのち、この問題に関する自分の意見をクラスメイトの前でスピーチする。

表現：「スピーチ」 Today I'm going to talk about ... / As you know ... / First, Second, and Finally ...

特に、自分の意見を述べる際には、

①Point（ポイント、総論：I think ～）

②Reason（理由：Because ～）

③Example（事例、具体例：For example, ～）

④Point（ポイント、結論の反復：So ～）

この構成で自分が意見を述べるときに意識し、その確認をペアワークで行ったりクラスの前で発表したりしながら確認をすることを行った。

更に、

⑤Answer

⑥Add detail

⑦Ask a question

以上の観点を加えながら、会話を進めていくことをペアワークで行った。

3 学期：

⑦日本の高齢化社会について

活動：発表における力を高めるために、効果的に棒グラフ・円グラフ・折れ線グラフといった視覚資料を使っている表現を学んだのち、自分でグラフを作成し、他の生徒へ発表する。

表現：「視覚資料の説明」 increased / decreased / stayed the same ... from ... to /
has increased / decreased / stayed the same since ...

⑧日本の政治システムに関して

活動：日本の政治の現状について学んだのち、自分はどのような変化を加えていきたいかを視覚資料も用いながら発表する。

表現：「主義主張」 The government should ... / I want to ... / I promise to ...

3. 評価

評価は、学期ごとに異なる研究課題の達成度と授業への参加度合いの主に2つの点から行われた。学期ごとの研究課題はディベート・スピーチ・プレゼンテーションと別れており、各学期末に生徒は一人ひとり、教員に発表した。研究課題の評価は流暢さ、文法的正確さ、語彙力、アイコンタクトやジェスチャーに見られるコミュニケーションを取ろうとする態度、そして題材の理解度というそれぞれの項目を総合して評価された。

授業への参加度は、授業内にて積極的に発言したり、活動に取り組んだりしているかなど、日ごろの学習に対する意欲や貢献度を評価した。

4. 総括

本授業で生徒達は、様々な分野に関して英語で情報を得たのち、その題材について自分なりの考えを発表することを求められていた。日本語でも自分の考えをまとめることが難しいテーマに関しても、生徒達はペア活動やグループ活動、そして教員との英語での対話の中で自分の考えをまとめ、英語で他者に対して自分の意見を表明するということを繰り返し訓練していた。この授業により、生徒は少しでも自分の意見を持ちそれを今持てる自分の英語力を使って、多様な領域でディスカッションをする基礎を養うことができた。

(8)「グローバルリーダーシッププログラム(英国研修)」
「次世代リーダー養成プログラム プレコース(米国研修)」

《(Ⅱ)－④》[年間事業計画⑮]

「グローバルリーダーシッププログラム(夏期英国研修)」

報告者：英語科教諭 明翫 吉宜

1. 経緯

英語教育を特色とする教育を推進するため、2012年度7月より英国研修を行っている。本年度はケンブリッジ大学内のカレッジを拠点に研修を実施した。

2. 目的

本校のミッションである Developing Future Leaders with a Global Mindset(卓越した語学力や国際的な視野を持って、世界を舞台に活躍できる次世代のリーダーの育成)を実践するために次の3点の教育の充実を図った。

リーダー研修：次世代におけるリーダーの育成を目指し、渡英前研修・渡英後研修を含めた英国研修プログラムを通して、国際的な舞台で必要なコミュニケーションの基礎を習得し、プレゼンテーションの方法を学び、異文化理解と異文化間コミュニケーションを実践した。

英語研修：将来の進路、教育システム、英国におけるスポーツ、医療、科学と倫理、環境問題など様々な問題について考えを深めながら、グループディスカッションやプレゼンテーションというアウトプットを特に意識した活動を行った。

大学寮生活体験：複数のケンブリッジ大学の学生メンターと一緒に食事を取るなど多くの時間を共に過ごす中で、様々な事柄についてケンブリッジ大学生とコミュニケーションを図った。

3. 実施日時

事前研修 【第1回】3月16日(土)

【第2回】5月11日(土)

【第3回】6月15日(土)

【第4回】6月22日(土)

本研修 7月25日(木)～8月4日(日) 11日間

事後研修 9月7日(土)

4. 実施場所

事前・事後研修：本校

本研修 研修地：Selwyn College, University of Cambridge

ステイ先：Selwyn College, University of Cambridge

訪問先：ケンブリッジ大学・オックスフォード大学・ロンドン

5. 日程・行程・主な活動内容

事前研修

【第1回】3月16日（土）

- （内容）
- ・手続き関連の説明
 - ・キックオフガイダンス
 - ・グローバルリーダーとは
 - ・生徒による1分間スピーチ（参加目的等）

【第2回】5月11日（土）

- （内容）
- ・異文化コミュニケーション研修

【第3回】6月15日（土）

- （内容）
- ・イギリスの文化
 - ・ロンドン、ケンブリッジ、オックスフォードについて
 - ・イギリス英語とは

【第4回】6月22日（土）

- （内容）
- ・出発前オリエンテーション（出入国手続き、持ち物等）
 - ・研修スケジュールの確認と準備
 - ・出発にあたっての決意表明（1分スピーチ）

本研修 7月25日（木）～8月4日（日）11日間

第1日 移動日 関西国際空港→ドバイ空港経由ロンドンへ

第2日 午前：ヒースロー国際空港に到着。セルウィンカレッジへ移動。

午後：ケンブリッジキャンパスツアー

夜：オリエンテーション、ダックスフォード博物館の事前講義

第3日 午前：英語研修（ブリティッシュマナーについて）

午後：ダックスフォード帝国戦争博物館見学

夜：ニュートン・ダーウィンをテーマに議論

フォーマルディナー

第4日 午前：英語研修（科学倫理について）

午後：サイエンスワークショップ

ニュートン・ダーウィンをテーマに議論

夜：グループ・プロジェクトの準備

第5日 1日：オックスフォード1日研修

（オックスフォードウォークツアー・Christ Church College・Bridge of Sigh・

オックスフォード博物館など）

第6日 午前：英語研修（英国のスポーツについて）

午後：パンティング および スポーツ体験

ニュートン・ダーウィンをテーマに議論

夜：大学の研究者によるセミナー

第7日 1日：オックスフォード1日研修

（ビックベン・テムズ川クルーズ・バッキンガム宮殿・ピカデリーサーカス・大英博物館）

第8日 午前：英語研修（プレゼンテーションの準備）

King's Chapel 訪問

午後：グローバルリーダーシップセミナー（アントレプレナー&バイオメディカル）

夜：グループプロジェクト 発表

第9日 午前：最終スピーチの準備

午後：ファイナルスピーチ・終了書授与式

ケンブリッジ市内観光

夜：フェアウェルパーティー

第10日 ヒースロー国際空港へ移動。ヒースロー→アムステルダム経由、大阪へ。

第11日 関西国際空港、到着。解散

事後研修 9月8日（土）

- （内容）
- ・帰国後ワークショップ
 - ・研修の振り返り
 - ・将来への決意表明

6. 成果・振り返り

参加人数は、2012年が37名（高校1年30名、高校2年7名）、2013年度が28名（高校1年24名、高校2年4名）、2014年度が30名（高校1年28名、高校2年2名）、2015年度が31名（高校1年31名）、2016年度は21名（高校1年19名、高校2年2名）、2017年度は40名（高校1年40名）、2018年度は40名（高校1年37名、高校2年3名）、そして今年度は40名（高校1年40名）が参加した。

（1）生徒アンケートより

《プログラム全体について》

今回のプログラムを後輩に勧めたいと思いますか：

とてもそう思う 45% そう思う 45%

今回のプログラムは今後の人生において役立つと思いますか

とてもそう思う 51% そう思う 37%

このプログラムに参加して、将来の新たな目標ができましたか。

とてもそう思う 32% そう思う 50%

《英語について》

英語力、プレゼンテーション力など向上したと思いますか。

とてもそう思う 32% そう思う 55%

積極的に英語でコミュニケーションを図りましたか。

とてもそう思う 47.5% そう思う 40%

最終のプレゼンテーションでは、思い通りにできましたか。

とてもそう思う 30% そう思う 47.5%

《ケンブリッジ生との関わりについて》

ケンブリッジ生はグループの良きリーダーでしたか。

とてもそう思う 82.5% そう思う 10%

ケンブリッジ生とのディスカッションはどうでしたか。

満足 72% ほぼ満足 25%

レッスン以外に、ケンブリッジ生と積極的にコミュニケーションが取れましたか。

とてもよく取れた 32.5% ほぼ取れた 50%

ケンブリッジ生はあなたの将来のロールモデルとなれましたか。

とてもなった 20% なった 67.5%

《ケンブリッジ/オックスフォードのキャンパスツアーについて》

メンターとのロンドン1日研修はどうでしたか

満足 70% ほぼ満足 17.5%

メンターとのオックスフォード1日研修はどうでしたか。

満足 75% ほぼ満足 25%

(2) 引率教員の感想

本研修を通じて生徒が成長できたのではないと思われる点は主に2点ある。1点目は彼らの行動面であり、2点目は彼らの英語力である。

事前学習では、イギリスの文化や異文化コミュニケーションなどを学び、渡英に際して必要な知識を身につけた。加えて、自ら積極的に行動していくことの重要性が事前研修では強調されていたが、イギリスに到着した当初は緊張や不安からケンブリッジ大学生のメンター達とあまり話すことができていなかった。しかし、メンター達の優しく、根気強い働きかけにより、生徒たちの緊張も徐々に解け、授業のディスカッションにおいても、質問があるときは質問をし、分からないときは分からないと自分の意思を相手に伝えようとする意欲が見て取れるようになった。メンターのなかには、ケンブリッジ大学の体育会での「ブルー」と呼ばれる称号を得ている者もあり、文武両道の理想をすべきリーダーの手本として、生徒たちは尊敬し、慕った。研修の後半では、食事中や自由時間にも積極的にメンター達と話している様子が見られ、自ら行動することの重要性を意識できるようになっていた。生徒たちが英国研修中に英語をたくさん話そうとより意欲的になったのも、メンター達が生徒たちに繰り返し丁寧に教えてくれ、じっくりと彼らの言葉を辛抱強く聞いてくれたおかげである。生徒たちはメンター達から学習に対する姿勢はもちろんだが、人と接する態度など本当に様々なことを学んでくれたと思う。

生徒たちは教育システム、生命・倫理問題といった難しいテーマのディスカッションやプレゼンテーションの課題に取り組む中で、英語力、特にその運用能力を高めていた。研修の集大成となった最終スピーチでは、個々の生徒が自分の言葉で堂々とした英語でのスピーチを披露していた。

多くの生徒にとって実りの多かった英国研修となったことであろう。イギリスに行き、本物を見ることで、英語をもっと使えるようになりたいという思いも強く持った生徒も多くいた。今回の研修で学んだことを心に留め、今後も継続的に努力し、彼らがますます成長することを期待したい。

7. 今後の課題

今回は第一日目の飛行機の便が変更になり、行程が組み直したことで、タイトなスケジュールとなったが、その分、濃密な研修期間となった。今回のようなスケジュールのように少々負荷加えたほうが海外研修に没頭できるように思われる。また、グローバルヘルスや生命倫理といった本校の取り組みにより即した内容を

盛り込むことができれば、生徒は学校での学習と本研修をより密接にリンクすることができると思われる。
来年度の研修日程は、2021年の予定である。

添付資料



フォーマルディナー



グループプレゼンテーション



バッキンガム宮殿



ファイナルプレゼンテーション



グループプレゼンテーション



セルウィンカレッジチャペル



大英博物館

「次世代リーダー養成プログラム プレコース 夏期米国研修」

報告者： 英語科教諭 前田 愛

1. 経緯

将来、世界を舞台に活躍する生徒を育てるための教育推進のため、夏期語学研修を実施することを決定。2011 年度に業者選択を行い、ISA(International Student Advisers of Japan)と「次世代リーダー養成プログラム プレコース」を作り上げた。2012 年度 7 月第 1 回目のプログラムを開始。今年度で第 8 回目を実施した。

2. 目的

本校のミッションである Developing Future Leaders With A Global Mindset (卓越した語学力や国際的な視野を持って世界を舞台に活躍できる次世代のリーダーの育成)を実践するために下記 3 点を主眼とした。

- ①リーダー研修 次世代リーダー育成のために、事前研修、本研修、事後研修を通してコミュニケーションの基本を習得し、プレゼンテーションの方法を学び、求められるリーダー像について思索する。
- ②英語研修 現地で米国人による授業やワークショップに参加し、実践的な英語力の向上を図る。
- ③ホームステイ ボストン・近郊の各 1 家庭に生徒はペアで滞在し、生活・文化・異文化理解と異文化間コミュニケーションを学ぶ。

3. 対象

当初は高校 1・2 年生を対象に実施していたが、2014 年から中学 3 年生・高校 1 年生に移行し、2017 年度からは中学 3 年生のみを参加対象にしている。(本校で並行実施の夏期英国研修は高校生が対象である。)今年度は本校が共学になって初めての研修となった。(中学 3 年生男子 22 人・女子 22 人計 44 人が参加)。

4. プログラム日程・実施場所

- (1) 事前研修 本校
第 1 回 3 月 16 日 (土)
第 2 回 4 月 20 日 (土)
第 3 回 6 月 22 日 (土)
第 4 回 7 月 6 日 (土)
- (2) 本研修 Boston および New York (訪問先など詳細は後述)
7 月 26 日 (金)～ 8 月 5 日 (月)
- (3) 事後研修 本校
9 月 7 日 (土)

5. 行程・主な活動内容

(1) 事前研修

第 1 回 3 月 16 日 (土) 「キックオフガイダンス」90 分

- グローバル社会とは？

- 10代で身につけておかなければいけないこと
 - 生徒による1分間スピーチ（研修参加目的など）
 - 渡航手続き関連の説明
- 第2回 4月20日(土) 「コミュニケーション研修」120分
 ～アナログコミュニケーションの基本を学び習得する～
- 一言自分から言葉を交わす（挨拶・お礼・謝罪・お願い）
 - ノンバーバルコミュニケーションを発揮する
 - アナログ交流を意識する
- 第3回 6月23日(土) 「異文化ワークショップ」「ホームステイオリエンテーション」
- 異文化理解の促進
 - 自分の考えを持ち、他者の理解、コミュニケーションの理解
 - 現地で気をつけなければいけないこと
 - ケーススタディ
- 第4回 7月6日(土) 「出発前オリエンテーション」〈保護者同伴〉
- 研修スケジュールの確認と準備（出入国手続き・持ち物など）
 - 出発にあたっての決意表明スピーチ（各自1分）

（2）本研修

- 第1日目 7月26日(金)
 京都駅集合 →中部セントレア空港 →デトロイト経由 →ボストン着
- 第2日目 7月27日(土)
 午前) ホテルで研修 午後) ホストファミリーと対面 ホストファミリー宅へ
- 第3日目 7月28日(日)
 終日 ホストファミリーと過ごす
- 第4日目 7月29日(月)
 午前) 英語研修 @CLC study center
 午後) Harvard 大学見学
- 第5日目 7月30日(火)
 午前) MIT ラボ研究員による science workshop @CLC study center
 午後) 英語研修 @CLC study center
- 第6日目 7月31日(水)
 午前) 英語研修 @CLC study center
 午後) MIT 大学見学 午前) 英語研修@CLC スタディセンター
- 第7日目 8月1日(木)
 午前) 英語研修 @CLC study center
 午後) ボストン美術館見学
- 第8日目 8月2日(金)
 午前) 英語研修 Final Presentation @CLC study center
 午後) ボストン市内観光

第9日目 8月3日(土)

午前) ボストン空港 → New York JFK 空港へ

午後) New York 市内観光 (タイムズスクエア・自由の女神・ダウンタウン)

第10日目 8月4日(日)

午前) JFK 空港 → シアトル経由帰国の途へ

第11日目 8月5日(月)

午後) 関西国際空港着 (解散)

(3) 事後研修

9月7日(土) 「研修の振り返り」

□ 帰国後ワークショップ

□ 将来への決意表明 (英語でスピーチ各自約2分)

6. 成果・振り返り

(1) 生徒のアンケートより

- ・ 全体的に見て今回のプログラムは易しかったですか？
とてもそう思う 9% そう思う 20%
- ・ 英語クラスは易しかったですか？
とてもそう思う 11% そう思う 30%
- ・ 今回のプログラムは今後の人生において役立つと思いますか？
とてもそう思う 89% そう思う 11%
- ・ このプログラムに参加して、将来の新たな目標ができましたか？
とてもそう思う 57% そう思う 32%
- ・ 将来英語が必要だと感じましたか？
とてもそう思う 91% そう思う 7%
- ・ ホストファミリーとは有意義な時間を過ごせましたか？
とてもそう思う 59% そう思う 25%
- ・ ハーバード生とのキャンパスツアーは有意義なものでしたか？
とてもそう思う 89% そう思う 9%
- ・ MIT 生とのキャンパスツアーは有意義なものでしたか？
とてもそう思う 89% そう思う 2%

(2) 引率教員の感想

アンケート結果を見てわかるように、決して易しくない、ハードルの高いプログラムに、中学3年生の彼らが挑戦する姿は、目を追って目を見張るものがあった。この研修で向き合うべきものは、自分自身であり、自分の英語力である。ホームステイ、毎日の地下鉄やバスでの通学、文化の違い・・・英語が得意である生徒たちでさえ、戸惑いや苦労があったはずである。この研修の課題である「リーダーシップとは何か」を考えながら、最終日の **Final Presentation** までの時間をカウントダウンする。

この研修で、生徒たちが刺激を受けたことの一番は、日本人がこれだけ海外で活躍している様を目の当たりにしたことではないだろうか。同じ日本で育ち、大学を出た日本の若者や先輩が今、目の前の **Harvard** で、**MIT** で学んでいる。また現地の日本人スタッフガイドの活躍ぶりは生徒たちの心の拠り所であっただろう

し、その姿に憧れ、心を揺さぶられていた。「論理的に物事をとらえること」「興味のあるものを加速させてくれるような一流のものに触れること」、そう助言された生徒の一人は、帰国してからの自分の周りへの関わり方が積極的になった、と自分の変化に気づいたという。在学中、彼らがますます成長していくことを期待している。最後に、このプログラムの企画実施にあたり ISA 関西支社様、現地プログラムのコーディネーターである GPI スタッフの皆様にご心から感謝を申し上げたい。

7. 今後の課題

毎年、プログラムの見直しを重ねとても濃密な研修内容である。さらに実りを求めるため、今回課題となったのは次の2つであった。1つは事前学習において、現地大学生との交流で話すための質問づくりや自分を表現する用意をしておくこと。「質問力」を育成することは、普段の授業の中でも意識しなければならないだろう。2つ目は、ツアー中に生徒たちがリーダーシップを行動として起こすことを喚起することである。リーダーシップについて学び、スピーチをすることに終始するのではなく、研修ツアーの中で、点呼や集合の場面など、小さくても色々な主体的な活動の場面を次回は意識させたい。一朝一夕でリーダーシップが身に着くものではないが、次回は、もっと生徒たちが自分で考えて、前に立てるような場面を作りたい。

8. 研修アルバムより



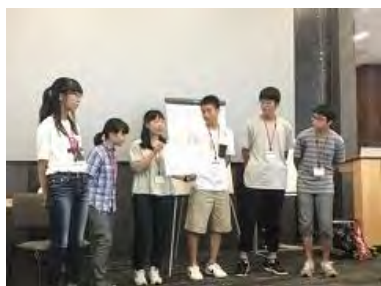
ホームステイ先へ



通学・地下鉄のホームで



英語研修の様子



英語研修の様子





ハーバード大学にて



MITにて



サイエンスワークショップにて

ボストン美術館見学



最終プレゼンテーション

授賞式



ニューヨーク



自由の女神の前で



ウオール街



タイムズスクエアで

【資料】 1. 運営指導委員会 記録

令和元年度 学校法人大阪医科薬科大学 高槻高等学校・中学校

令和元年度 第1回 SGH 運営指導委員会

[1] 日 時

令和元年 8 月 23 日（金） 午後 1 時 30 分～2 時 30 分

[2] 出席者

【運営指導委員（50 音順）】

子安 増生 委員（甲南大学 文学部 人間科学科 特任教授）

【法人・学校】

岩井 一（法人常務理事）

工藤 剛（学校長・法人理事）

滝藤 博史（国際教育部・SGH 推進部長）

松村栄太郎（SGH 推進副部長・社会科主任）

佐塚 琢司（事務部課長）

[3] 次 第

司会：SGH 推進部副部長 松村栄太郎

☆ 資料の確認・出席者紹介

- | | | |
|----------------------|-----------------|-------|
| (1) 主催者挨拶 | 法人常務理事 | 岩井 一 |
| (2) 学校長挨拶 | 校 長 | 工藤 剛 |
| (3) 31 年度前期 SGH 事業報告 | 国際教育部・SGH 推進部長 | 滝藤 博史 |
| (4) 研究開発 1 班 事業報告 | SGH 推進副部長・社会科主任 | 松村栄太郎 |
| (5) 研究開発 2 班 事業報告 | 国際教育部・SGH 推進部長 | 滝藤 博史 |
| (6) 運営指導委員による指導・助言 | | |
| (7) 31 年度後期 SGH 事業計画 | 国際教育部・SGH 推進部長 | 滝藤 博史 |
| (8) 謝 辞 | 法人常務理事 | 岩井 一 |
| | 校 長 | 工藤 剛 |

[4] 発言要旨

〔挨拶〕

○岩井常務理事

本 SGH 事業も 4 年目を迎えておりますが、新たな形でいろいろとご提案いただきまして、あと 2 年間しっ

かり取り組んでいきたいと考えておりますので、宜しくお願い致します。

○工藤校長

運営指導委員の方ですが、いつも来ていただいております公益財団法人 高槻市都市交流協会のこれまで委員をしていた方が人事異動になり、その後任の方に連絡は取っておりますが、新たな委嘱ができておりませんで、本日は欠席となっております。次回の委員会には出席いただけたと思います。宜しくお願い致します。

3年目を終えまして中間評価に関しましては一定の評価をいただきましたが、最後の所でSGH事業を国はもう継続しないということで終わることになります。これに代わって高校生のための国際教育は3つの大きなパターンに分けて進めようとしています。

その1つはWWLで、ワールドワイドラーニングコンソーシアムという新しい枠組みです。これについては、すでに他の文部科学省の研究開発の指定を受けている場合は重複して指定を受けることはできないと国が決めており、本校はこの春にSSHの2期目の指定をいただいたということです。そちらの方には入れません。その場合どうするかというと、WWLはいくつかの高等学校を国が指定して、その指定した高等学校を拠点としていくつかの高等学校と連携しながら、それは国内・国外の高等学校と連携しながら国際化を推進していくというものです。本校は関西学院大学高等部がWWLの指定を受けられまして、その協力校として文部科学省には登録をさせていただいております。本校の国際教育もそれに部分的に他校との連携の中でやっていくというのが1つのやり方であります。

それと今後国際教育の軸をどのように作っていくかということでもう1つ大きな問題点です。それは高槻中学・高校の教育の柱がスクールミッションにあるグローバルマインドを持ったグローバルリーダーを育成するということですので、それを中心軸に据えているのがSGH事業であつたわけですが、その後をどのように引き継いでいくかということの中で1つ今英語の教育というものを新たな形で変えていくことを次年度の中学1年生から新しい形を作っていく予定です。国際教育の一環ということで、今の大学入学試験における外部試験の導入というのが今取りざたされていますが、残念ながら迷走している状態であります。文科省が決めたこと、それから国立大学がそれをどう受け入れるか学校ごとに受入れがまちまちになっています。そういう状況にあっても、英語の学習、英語を身に着けるということは本来環境がどうであれ筋を通すことができるはずであり、やはり英語の学習の大本になるのはイギリスにあるオーセンティックな英語の教育スタイルということで、ケンブリッジイングリッシュスクールというケンブリッジ大学の一部局である英語教育機構があるわけですが、それに準拠した形で本校がその指定を受ける形で持っていき、教材も全部それを使ってやっていき、試験はケンブリッジ英検という英検で、セファールの指標も全部出てくるという形で、来年度からやっていくことを計画しています。

そういう形にしないと、共学化してですね、今年でもう中学が完全共学化しましたが、もはやすでに中学のこの段階で中学3年の共学の1期生との中学1年の3期生とではすでに中に入っている生徒のポテンシャルが、だんだんと高まってきています。そういう高まってきているポテンシャルを潰してしまうことなく活かしていこうと思ったときに、提供する教育のメニューも一段、二段と高くしていく必要があるだろうということで新しい形に切り替えていきたい。それを軸にして、ケンブリッジ大学プレスの出されている本の中にクリティカルシンキングもそうですし、プレゼンテーションもそうですし、あるいはグローバルヘルスもそうですし、色々な科学的なこともそうですし、全部そういうものの教材はあちらの中に全部含まれておりますので、そういうものを各授業の中に落とし込んでいくことでグローバル教育ということが、引き続きSGH事業がなくなった後も継続してやっていけると考えております。そのあたりのことについては、また始まりましたらまた先生方にもアドバイスをいただいてやっていきたいなと思っております。

〔前期事業報告〕

○SGH 推進部長（滝藤）

研究開発構想図の1部変更について申し上げます。学校法人大阪医科大学とこれまでなっておりましたところを現在の学校法人大阪医科大学薬科大学に変更いたしましたことと、アジアフィールドワークでお世話になっておりました大阪大学グローバルコラボレーションセンターの三田貴先生が京都産業大学国際関係学部の教授となられて移られましたので、変更を致しております。

今年度文部科学省に提出を致しました研究開発実施計画書につきましては、平成30年度の「グローバル課題研究」に関する「独自教材」の開発から今年度はそれを使用した学習活動の実践、更には探求的な社会科授業の実践ということで、指導要領も改訂されることに伴ってそういうものに対応した形で独自の教材を使って行っていく、その点から他校教員との「グローバル課題研究」等の公開授業と研修会ということで、他校に見学に行ったり、本校では他校の生徒を招待してフォーラムを行うことを計画しております。その中でこれまでのことが活かしていけるであろうと考えております。

それに引き続き、前回の運営指導委員会後の活動についてご報告いたします。平成31年3月16日には京大ポスターセッションに参加して参りました。高大接続・高大連携事業として京大が主催し全国の高校生が集いポスター発表を行うものです。今回はグローバルヘルスの中でもメンタルなテーマとして、鬱についての研究発表となりました。次に、その年度のまとめとして関西学院大学が主催をします全国SGH課題研究発表会「SGH 甲子園」のプレゼン部門、ポスター発表部門、ディスカッション部門に参加いたしまして、ポスター発表英語部門におきまして最優秀賞をいただきまして、これまで行ってきたことが成果となって表れてきたのではないかと考えております。

4月1日から3日まで「IYLAP2019」が、新高校1年生が本格的にGAコースの学習を始めるにあつた最初の研修となります。

7月には今年初めての「若手外国人研究者によるグローバルセミナー」が行われ、『武装化された紛争地域のグローバルヘルス：コンゴ共和国におけるエボラ出血熱の事例』でコンゴ出身の京大大学院助教方から講演を聴き、最後には高2の生徒からも質問がなされた。

GAコースの生徒だけでなく一般の生徒も参加して、高1生を中心に英国研修と中3生対象の米国研修が行われました。英国については、昨年に引き続きケンブリッジ大学で行い、研修の目的をしっかりと果たし、年毎に充実した内容となってきています。米国研修は今年度から共学学年が参加することになり、こちらもこれまでよりももっと積極的に参加する態度が見られたとの報告を受けています。

第2回アジア高校生架け橋プロジェクトでベトナム、ラオスからの2名の男子学生の受け入れを行います。期間としては8月26日（月）～翌年3月25日（水）の予定です。

第5期となるスタンフォード大学オンライン講座が9月28日（土）～翌年3月13日（金）に実施されます。これ以降、11月10日（日）～15日（金）高校2年生パラオフィールドワーク研修、12月22日（日）文科省主催SGH・WWL・グローバル型全国高校生フォーラム、1月25日（土）第2回グローバルヘルス高校生フォーラム、2月25日（月）～28日（木）高校1年 台湾研修旅行、2月22日（土）SGH事業公開発表会を例年通り実施する予定であります。

〔研究開発第1班〕

○社会科主任（松村）

研究開発第1班ということで行っておりますグローバル課題研究におきます社会科の取り組みについてご説明いたします。

すでに4年目ということで、実施するスタイルについては固まってきておりまして、高校1年時に行います課題探求Aにつきましては、前半では講義が中心となりグローバルイシューとは何かということを生徒た

ちに教えていくこと、ただし一方的な座学ではなく調べ学習、グループ学習を通して探究のノウハウを伝えていく事に重点を置いております。後半においては各人の課題研究のテーマを決定させて、高校1年ではグループでの調べ学習に取り組ませていくことになります。そして中間発表の機会として3学期における台湾研修を目標として学習を進めていくことになります。

高校2年時におきましては、課題研究Bということで、高校2年では年度末に課題論文を完成させることを大きな目標として調べ学習を進めていくこととなります。その資料収集として、フィールドワークとして11月のパラオ研修をメイン行事として位置づけて実施しています。このパラオフィールドワークによって各自の研究を完成させ、年度末に課題論文を完成させると、また本校の研究発表会或いはSGH甲子園など対外向けの機会を活かして、自分たちが調べたことをアウトプットしていくという形で自分の課題研究を完成させていくということになります。

高校3年におきましては、これまで2年間かけて取り組んできましたことを提言としてまとめることを目標としております。この大きな流れは、これまでと変わってはおりません。ただ今年度の新たな動きとしては、高校1年・2年の探究に関わる社会科のスタッフが多く増えておりますことと、そして高1・高2双方に関わるスタッフが複数おります。社会科の教師が探究学習に関わるのが、自分のこととして考えるようになってきていることが、今年の1つの特徴であります。

本年度よりワーキンググループという体制ができ、社会科、英語科を中心に本校教員の約1/3が何らかの形でGAコースに関わるということになりました。そのことによって特に英語指導に多くの英語教員が関わり協力する体制をとれることとなりました。研究内容を最後には英語での発表にするためには、英語科の協力が必要でありましたが、この体制ができ大きく負担の偏りがなくなりやり易くなりました。

他校でもよく言われていますが、SGHというけれども特定の教員が頑張って学校全体の動きにはなっていないのではないかと批判が良くされますが、本校においては学校全体の動きとなりつつあるという段階であります。多くの教師に関わっていただいておりますし、何をやっているのかを分かっている段階に来ております。

それともう1つ今年度の特徴として、新図書館の全面的協力ということが挙げられます。図書館がリニューアルされて書籍はもちろんのこと電子データという面でも、特に新聞データをタブレットに落とし込む計画も立てております。司書教諭を中心として図書館により調べ学習に協力をいただいております。そのような面で学校から強く支援を受けていると今年は実感できております。

若い先生方がパソコンなどのデバイスをよく利用しており、生徒の提出物に関してもどんどんデータ化していったって、生徒が入力したものを直接アウトプットして対外的な発表にも送信したり、そのまま論文にしたりと、この面において数年前に比べ格段にレベルアップしています。

その他1学期までの取り組みについては資料にある通りです。特に今年は、パラオフィールドワーク事前研修を1学期に1回、2学期に1回と行い、より充実したフィールドワークになるように計画しておりますし、WWLの連携校として関西学院大学で行われました主にAIを活用したワークショップに高1生が参加を致しました。WWLの最初の滑り出しが順調に行われました。以上が社会科における前期の活動報告となります。

〔研究開発第2班〕

○SGH推進部長（滝藤）

本校の場合は英語科におきまして「グローバル英語表現Ⅰ・Ⅱ」を行っておりますが、SGHでの研究成果を英語で発表しなければならないということがありますので、高1の場合はプレゼンテーションで使う英語表現をしっかりと習熟していこうということで行っております。1学期には授業実践報告にありますように、プレゼンとは一体どういうものであるのかという定義ですとか、プレゼンを行う上での重要な要素、日本語

と英語のプレゼンの違い、スライドの作り方などというものを実際に上手にプレゼンしている学生の画像やビデオを見せながら、どうすることが良いプレゼンとなるのかを学んでいきました。それと実際に自分たちが作るときに、テーマをどのように決めて行くのかということで、台湾研修に行きますので、台湾をいろいろな視点から見て、台湾についてのテーマを決めていく。その際に、マインドマップを使いながら各班でテーマを決めていくこととなります。このような過程の中で、聴衆が興味・関心を持つテーマ設定とはどうあるべきかを学び、またその難しさも理解しました。

それを受けて2学期初めに日本語でのプレゼンを行い、それをさらに英語にして今課題研究で行っていることに結び付けて、どのようにすれば伝えなければならないことが最も伝わるようになるかを2学期にまとめ、それを踏まえて3学期の台湾研修での発表に結び付けていくこととなります。

高校2年生の方では、それを更に進める形で自分の考えを英語でまとめ発表し、更には質疑応答などでのディスカッションやディベートへと展開をしていくことを念頭に学習を進めています。相手の意見を理解し、それを踏まえて反論するスキルの習得を目指した形で考えています。1学期ではやはり英語が書けなければならないという点から、英作文の上でよく行われる間違いについて学習をし、その練習を行いました。また、パラグラフライティングの観点から5つのテーマでエッセイに取り組み、実践的なライティング指導を行いました。ディベートに関してはまだまだ慣れていない生徒が多く、その基本的なスキルを習得することを1学期の目標として授業を行いました。

〔指導・助言〕

○子安委員

パラグラフライティングの指導は具体的にはどのようなことをされているのでしょうか。

○SGH 推進部長（滝藤）

いわゆる前提があり、本論があり、結論があるという3段論法というものがありますが、そのような定型のものをどのようにすれば、きちんとできるようになるかを指導することになります。全体の組み立てをきちんとすることを考えての指導となります。

○子安委員

私たちも英語の発表や論文の指導のときに、パラグラフという概念が実は日本人にはない。どういうことかというワンパラグラフでは1つのことしか言えないという事が、なかなか理解できないということを話して、結局スライドということはそういうことなんですね。パラグラフというと一つのスライドと対応関係があって、一つのスライドの中に一つのアイディアを書き込むという対応関係をきちんとしなさいということを説明していました。

また、日本人の書く英語では頭の接続詞が多いですね。andなどの使い方で「また」などを付けますがそれはいらないということを結構何度も話しをしているところです。

英語のパワーポイントが使われるときには、フォントは何を指定されているのですか。

○SGH 推進部長（滝藤）

特に指定することはしていません。

○子安委員

英語でも日本語でもどういうフォントを使うかは大事でして、そういう共通理解はどこかでなされた方が良いと思います。

○SGH 推進部長（滝藤）

以前に子安先生からそのような資料をいただいておりますので、それを参考にさせていただきたいと思います。

○子安委員

普通日本語ですと、明朝とセンチュリーですけれども、センチュリーは良いのですけれども外国で使われていないものもありますので、その辺の意識はしておかれた方が良いでしょう。私が作成する場合は MSP ゴシックと Arial です。それはどうしてかという、i も 1 文字 o も 1 文字というのに違和感があるということです。そういう細かな所から、形から入ることも大事だと思います。

大きなテーマで言いますと、アジアとなっておりますが、アジアは中近東までアジアです。その辺の感覚を実際行かなくてもいいし、その土地の人を呼んでくる必要もないのですけれども、アジアの範囲というのが、私たちが考えているのとグローバルで話されているのとは、実はずれがあります。その辺のことについてはどのように話されているのでしょうか。

○SGH 推進部長（滝藤）

本校ではグローバルセミナーというのがございますが、次で 18 回目となり講師はインド出身の方で喫煙についての影響についてお話になります。昨年ですとアフガニスタンの方がマタernalヘルスについて妊産婦の死亡をいかに減らすかについて講演をされ、アジア圏内の方々には来ていただいてお話をしていただいております。そういうところから、アジアの範囲の広がりについて理解されていくと思います。

○子安委員

ドバイも UAE もアジアであるということはいかなければわかりませんし、行ってもわかりません。やはりアジアというものの感覚、どこまでがアジアなのかという感覚がつかめないで、その辺りを最初に、まああちらから見てオリエン特ですか、その辺の概念を学ぶことも大事なかなと思います。新聞をオンラインで見られるというのはアメリカやイギリス、外国のものですか。

○社会科主任（松村）

日本のものです。過去から現在までのものを見られるようにと考えています。

○子安委員

やはり外国のものも読むようにし、自分の知っている内容・知識のものを英語で読むというのが取っかかりとなり大事なかなと思います。

○社会科主任（松村）

今後の目標にしていきたいと思います。

○子安委員

これまでこのようにやってこられて、生徒さんが持っている成果を活かすということで、例えば京大では特色入試をやっておりますが、このようなものに対する取り組みなどはどのようになっているのでしょうか。

○SGH 推進部長（滝藤）

特に今年の高3生は優秀な生徒が多く、SGH 甲子園で最優秀賞を獲得した生徒やその他にも自分の学びを活かした形で入試に取り組みたいと担任教師と相談しながら進路について進めている生徒も出てきております。

○子安委員

是非とも、取り組んでいただき。これだけのことをやっているのですから、是非いろいろな学部で取り組んでいただきたいと思います。

〔後期事業計画〕

○SGH 推進部長（滝藤）

後期の事業に関しましては、先ほど前期の事業報告の中で合わせて申し上げた通りで、4年目を迎えこれまでにやってきたことに合わせて、更にそれに何を付け加えていくかを考えながら進めていこうと考えています。

パラオフィールドワーク事前研修であれば、2回目の研修はJAICから講師を招聘し、更に深い内容となるよう計画をし、グローバルヘルス高校生フォーラムについても前回の反省を生かして生徒のワークショップである議論の部分をスムーズに、そして掘り下げたものになるように考えていく予定であります。これまでやってきたことから着実に一歩前へ踏み出せるようにしていきたいと考えております。

〔謝辞〕

○岩井常務理事

いろいろとアラカルト的にお話をいただきましたが、先ほど工藤校長がお話をしました通り、これから本校に入学してくる生徒たちは本校の取り組みについて十分理解をして入ってきますので、新たな形を模索していく必要がある。その為には、今行っている流れの中でもう一度それを超えたような、例えば東京の学校ではとがった形で伸ばしていく教育をされておるところがありますので、本校もこれからある程度能力のある生徒に対してもっといろいろな機会を与えて、SGHの取り組みだけではなく、学校教育全体として新しいアイデアを出していく必要があるのではないかと考えております。またこの辺りについてのご指導をいただきたいと思います。宜しくお願い致します。

○工藤校長

子安先生、本日はどうもありがとうございました。

3点ほど補足をさせていただきたいと思います。まず京都大学の特色入試についてですが、昨年も実は相当出したんです。だけれども全部アウトという結果でした。私たちの一つの課題はやはりいろいろな取り組みをしても、もっとアピールを上手にしないと入試のときに見ていただく先生に伝わらないと思うのです。その為、学内において用語一つにしても、この言葉で本当にその入試の書類を読む先生に伝わるのかどうかを含めて再考するようにやっております。今の高3生では課題研究でも実績を出した生徒でもあるので、この生徒たちが大学入試で東京大学、京都大学などの特色入試、推薦入試で効率よくアピールできるようにと考えています。

次にスタンフォード大学の講座については、ちょうど5期目になります。これまでに培ってきたものが多いとありますが、このスタンフォード大学オンライン講座 e-takatsuki というものの他にスタンフォード大学がいろいろな高等学校を対象に行っているスタンフォード e-japan というものもあります。昨年度 e-takatsuki を修了した者で e-japan に応募したい者が出てきまして、これが秋学期が始まりますので高校2年生が挑戦いたします。今まで e-japan の修了書をもらった生徒は3人しかおりません。それを引き続きや

っていくことになります。折角スタンフォード大学との連携が取れているので、岩井先生のお話にもありましたように、なにも GA コースだけではなく GS や GL コースに波及していくということを考えています。1 つは GL コースで今年初めて行いますが、アメリカ西海岸でのアントレプレナーシップ研修というのを 2020 年の 3 月から 4 月にかけて SGH、SSH ではない高校生対象の研修を行います。1 年目は無理ですが、2 年目からは是非このご縁をいかした形でスタンフォード大学にも入れさせてもらって、別途プログラムをはめ込んで GL コースの生徒もそこで研修発表できるような機会を作っていきたいと考えています。

それから新聞のデータベースの話がありますが、朝日新聞や日本の新聞の話がありますが、今やインターネットがこのように普及していますから、子安先生がおっしゃるようにワシントンポストにしてもニューヨークタイムズにしても全部データを取ることができますので、グローバル英語表現もそうですし、あるいはグローバルスタディーズという総合学習の授業があるので、そういう授業の中でウェブ上でアクセスをして、欧米のメディアにも触れて行くという機会を持つことをもっと積極的に入れていきたいと思います。入学してくる生徒のレベルが上がってくると、そう行こうことが普通に回るようになってくるかとも思います。それと自分がやっている取り組みが、外国から見たらどうなのかということを知ることには当然できると思いますし、そういう角度からの指導も進めていく必要があると思います。

課題はまだまだいろいろありますが、この 3 年でやってきたことの上に、よりハイレベルのものを積み上げていきたいと思っております。引き続き先生には、ご指導の程、どうぞ宜しくお願い致します。

令和元年度 第2回 SGH 運営指導委員会

[1] 日 時

令和2年2月22日(土) 午後3時00分～4時00分

(於: L1 教員研究室)

[2] 出席者

【運営指導委員(50音順)】

子安 増生 委員 (甲南大学 文学部 人間科学科 特任教授)

西口 雅則 委員 (公益財団法人 高槻市都市交流協会 主査)

松下 佳代 委員 (京都大学高等教育研究開発推進センター 教授)

【法人・学校】

工藤 剛 (学校長・法人理事)

滝藤 博史 (国際教育部・SGH推進部長)

松村栄太郎 (SGH推進副部長・社会科主任)

佐塚 琢司 (事務部課長)

[3] 次 第

司会: SGH 推進部副部長 松村栄太郎

☆ 資料の確認・出席者紹介

(1) 学校長挨拶	校 長	工藤 剛
(2) 31年度後期期 SGH 事業報告	国際教育部・SGH 推進部長	滝藤 博史
(3) 研究開発1班 事業報告	SGH 推進副部長・社会科主任	松村栄太郎
(4) 研究開発2班 事業報告	国際教育部・SGH 推進部長	滝藤 博史
(5) 運営指導委員による指導・助言		
(6) 令和2年度 SGH 事業計画	国際教育部・SGH 推進部長	滝藤 博史
(7) 謝 辞	校 長	工藤 剛

[4] 発言要旨

[挨拶]

○工藤校長

先生方、いつもどうもありがとうございます。お陰様でSGH事業は今年で4年目を終わろうとしております。SGH指定は平成26年度指定、27年度して、28年度指定の3つしかなかったのですが、来年度になりますと、この28年度指定の11校のみが残るといふ、本校も大変貴重な学校になるということです。

文科省は、SGH 事業の後は WWL 事業というものを行っているのですが、SSH の指定を受けている学校はこれに応募することができない、すなわち税金を使うのは 1 校につき 1 種類だけということなので、本校の場合は関西学院大学高等部が WWL を行っており、その連携校という形で今現在やらせていただいております。本校ではこれまでの 4 年間の積み重ねがありますので、それで指定が終わった後、来年度が締め括りの 5 年目に当たりますが、それが終わった後もこのカリキュラムをやって行くことにしています。

先生方には、本日の発表を見ていただく時間はあまりなかったと思いますが、私が午前中ホールで中学 3 年、高校 1 年、高校 2 年の発表を見ましたが、だいぶ上手になったなど、相当に充実した形でやっておりました。特に中学 3 年生の発表は、共学学年の 1 期生ですが、積極性はやや乏しいですが、やってみないかと言われて指名を受ければ、なかなか相当な仕事をやり遂げる生徒が、つまりポテンシャルが高い生徒がいて、非常に楽しみだと思えます。

パラオフィールドワークにしても台湾研修にしても根付いてきました。ここで申しておかなければならないことは、週明け 2 月 25 日から 28 日の 4 日間、高 1 の GA コースの生徒が台湾研修へ行くことになっておりましたが、昨日の時点で私が中止の決定を致しました。2 月に入ってからコロナウイルス関係のことで台湾の学校、大学とずっとメールでやり取りを行ってございましたけれども、色々プログラムを動かしながら、何とか実施の方向でと思っていたのですが、研修は生徒 45 名で 8 グループを受け入れてもらい発表をすることになっているのがメインなのですが、そちらの学校の先生からメールがありまして、どうしても難しくなったということでもあります。その理由というのは、台湾から見ると日本の方が感染が酷い、要するにすでに 700 人以上の感染者がいるという地域からその学校に日本から 45 人の生徒が来る、別に高槻が感染しているわけではないのですが、向こうの学校の保護者会、理事会、台湾の教育省が日本から受け入れて、いくらいろいろなスクリーニング、マスクをする、消毒をする、検温をするなどを行うといっても避けてほしいという要請がありまして中止という決断をしました。生徒にとっては、発表の準備も全部で来ていたので、残念ですし、私も行くつもりをしておりましてのですが、それができなくなりました。これがいわゆるグローバルの実態というのはこういうことなのだと生徒にも話しておりました。このプログラム自体は良くなってきております。

それと今年の高校 3 年生は、今日の発表会には入っておりませんが、高槻中学校に入学するときにすでに SGH や SSH のコースがあると知って入ってきた生徒たちです。それよりも上の学年は、入学してからコース分けがあるが言われ、そんなことは聞いていませんでしたという話であったのですが、今の高 3 はそういうことがわかって入ってきた。その学年が遂に京都大学の特色入試で薬学部で現役で、1 浪ですが教育学部に、この生徒は京都大学が初めて行いました一昨年のポスターセッションで 3 位に入賞した者です。また、この生徒は慶応大学の一般推薦でも合格しました。他には、GA コースの生徒が、推薦で現役で東京外大、それと筑波大学の医学部にも推薦で合格しました。この GA コースの特色は、文理融合クラスになっていることです。通常、高 2 で文理と別れますが、グローバルな社会問題というのは理系のものもあるし文系のものもあります。結局、高 3 まで 1 つのクラスに文系の生徒も理系の生徒も混在する形で最後まで学べるというのは 1 つの面白さというか、早くに文理で分けししまわないで行くので、中 3 から高 3 まで同じ顔触れで行くというのは飽きるのではないかというネガティブな面もあるのかなと思いますが、文理が 1 つの所にいることによって法学部や教育学部に行く者もいれば、医学部に行く者もいるというのが、同じクラスにいるというのは非常に珍しいし、ある意味こういうのも良い形かなと思っております。

今聞くとこでは中学 2 年生がもうすぐコース分けの選択をするわけですがけれども、相当に GA コースの希望者が多くて、なかなか厳しい競争になるとのことを聴いております。また、人気も出てきているのかなとも思っております。

ある生徒は京大の薬学部で特色入試を合格しましたが、課題研究でいたるところで発表をやりつくすほど行っている感がありましたが、それを存分に入試にも生かして進学していくということになりました。

学校としてもこういうことをやってきて良かったなと思っており、やってこなかったならば、そういう入口からは入りませんので、先生方のご指導を以て進めてきたことが成果になって来ていると思っております。また、楽しみにしているのは松下先生が入ってくださってずっと行ってきておりますアクティブラーニングの手法で指導していくということで、特に今の共学学年にはこのことが沁み込んできていますので、その生徒が来年度から高校に入ってきますので、彼らが更にどういう形で勢いづけてくれるかということを楽しみにしたいと思っております。

少々長くなりましたけれども、これまで順調に来ておりますので今後ともご指導いただきたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

○子安委員

中学の入試の結果はどうなったのでしょうか。

○工藤校長

入試の結果につきましては、総志願者数は昨年度+100名です。大阪府下の私学では一番多い志願者となりました。今年の特色としては、男子の志願者が昨年度より100名ほど増加し、女子が減少したことがあります。成績も今年の新入生は良かったですし、定員は270名ですが、合格者は274名となり、来週に新入生オリエンテーションの2回目があり、春休み中の課題などについて話をする予定です。このように入試についても、無事に終わったと思っております。

〔平成31年度・令和元年度事業報告〕

○SGH推進部長（滝藤）

資料に基づきまして、お話をさせていただきます。

今年度2回目になります「アジア高校生架け橋プロジェクト」により、ベトナム、ラオスから各1名の男子留学生を受け入れております。8月26日から翌年3月21日終業式まで預かることとなります。

本校の場合は日本語教師免許を持っておられる講師がおりますので、その先生と共に日本語講座と、その先生は合気道6段の免許も持たれているので、合気道をしながら日本語を学び、更には一定時間を超えて合気道の練習をしますと5級の認定書も渡すことができるということで、異文化交流も兼ねながら受け入れを行っているところです。

第5期の「スタンフォード大学オンライン講座」を今日も行いましたが、今日で7回目を終え、愈々次回3月13日が最終回となり、総括と修了書の授与を行うこととなっております。世界レベルで研究や活動をされている方々の生の声を聴くという、本当に充実をしたプログラムとなっております。生徒にとっては英語をずっと聞いているということは辛いことですが、ぜひ最後まで頑張って、全員が修了証を手にすることができるようにと頑張らせているところであります。今年は、定員45名のうち40名以上が修了書をもらえたと考えております。

「第2回パラオフィールドワーク事前セミナー」ですが、パラオフィールドワークに先立ちいつも一月前に京都産業大学国際関係学部教授の三田先生に来ていただいて、パラオの基本知識についてお話をさせていただくのですが、それだけではなかなか深い研究にならないだろうということで、今年は1学期にパラオについて基本的なことを教えていただき、今回の事前セミナーでは三田先生にアドバイザーになっていただき、JICAの太平洋諸島に行かれた方々を講師としてお招きし、経験されたことをお話しいただいて、それではパラオではどうなのであろうかということで自分の研究に繋げていくことを目標としてこの事前セミナーを行いました。そこでの課題をもって資料にありますように、パラオフィールドワークに行ってまいりました。

本校のSGHG事業の柱にもなっておりますのが、「外国人研究者によるグローバルセミナー」でして、京

都大学 大学院医学研究科木原教授の研究室から外国人研究者の方々に来ていただいて、グローバルヘルスに関わる問題を生徒たちに聞かせていく。中3～高2までが聴講しておりますが、生徒のことを考えグローバルヘルスの基本的なことや質疑応答などで理解を確かめるようにしていただいたりしております。本日の発表では、中学3年生がここから何を学んだかを発表しておりましたが、GAコースで学ぶ上で非常に重要な影響をここから受けていることが良く分かり、これがSGH事業にとって本当に大事なものになっていることが感じられます。

それに対して、「SGH 特別セミナー」は定期的なものではありませんが、グローバルヘルスやグローバルイシューについての関心を深めるということで行っております。今年は、1つはスタンフォード大学でオンライン講座を中心に行われているゲリー・ムカイ教授ですが、この方は日系三世であり、アメリカの地においての自己のアイデンティティーとグローバルマインドセットについて黎明期の日系アメリカ人の歴史とグローバルマインドセットのテーマでお話をいただきました。もう1つは、大阪医科大学 名誉教授 河野公一先生からパブリックヘルスの中でグローバル社会における感染のアウトブレイクについてお話をいただきましたが、ご高齢にもかかわらずエネルギーに、そして生徒に対する思いがあふれるような講義をいただきました。感染の中でも検疫についてもっと詳しく話を聴きたいということで、後日、高1の感染の研究グループが先生のお宅にまでお邪魔してお話をお聞きすることもございました。

「全国高校生フォーラム」につきましては、文科省が主催をして行っているものですが、全国のSGH、WWL、グローバル型の高校が集まりグローバルな問題をどのように解決していくかの意見交換を行うということでポスターセッションを行いました。

我々のSGH事業のもう一つの柱になるものに、「グローバルヘルス高校生フォーラム」というものがあります。生徒が主体的に運営をしていくこともありますし、グローバルヘルスにかかわる様々な問題に対して高校生の視点から世界の人々の健康問題や健康の向上を考える機会とし、その中で同年代の他校の生徒と意見交換をしながらバランス感覚の取れた次世代のグローバルリーダーを育成することを目標で行っているものであります。本年度は、基調講演につきましてはWHO神戸センターのサラ・ルイズ・バーバー所長に行ってください、グローバルヘルスにおけるWHOの役割についてお話していただきました。そのあと健康を中心にした8つのテーマに基づき16グループがワークショップとして話し合いを行い、その問題解決のための提言を発表しました。その各グループには京都大学グローバルヘルス学際融合ユニットから来ていただきました外国人研究者の8名の方々にファシリテータ役をしていただき進めていき、最後に講評もいただきました。

次に、本日ありましたのが、「SGH 事業 公開発表会」でした。

また、先ほど学校長からもありましたが、海外中間研究発表会である「台湾研修」はコロナウイルスの影響のためちゅうしとなりましたので、残りの行事としてあります関西学院大学主催の「SGH・WWL×探求甲子園」と「京都大学ポスターセッション」については、是非とも参加したいと考えております。

以上です。

〔研究開発1班の報告〕

○社会科主任（松村）

研究開発1班は、主に社会科のスタッフが担当しております。お手元の資料の5ページから20ページまでの多くの資料になっておりますので、要点を掻い摘んでお話ししたいと思います。5ページは社会科が取り組んでおりますグローバル課題研究の総論の部分に当たります。高校1年生の1学期はグローバルヘルスとは何かという講義で、単なる座学の講義ではなく生徒に興味を持たせるような調べ学習、グループ学習を取り入れ、その中で生徒たちが能動的に自分の研究テーマを選んでいくということになります。そして2学期後半からは、グループごとにテーマを決定し本格的な調べ学習が始まり、その目標として本日のポスターセ

セッションと台湾研修があり、本来であれば台湾研修と報告レポート作成で高校1年の課程は終了ということになります。残念ながら今年は台湾研修が中止ということになりまして、彼らのモチベーションを高2までのようにつなげていくかが、我々スタッフの当面の課題となります。

高校2年生については、高校1年での成果を活かしてグループ学習から1人1人のテーマを決めて課題論文に取り組んでいくということになります。パラオフィールドワークにおいて各人が資料収集など、そして課題論文のブラッシュアップという形でフィールドワークを終えて、それぞれの課題研究を完成させる。そして、今日のポスターセッションで各自が発表を行い、最終的には課題論文を仕上げるところまでが2年生の実践となっています。

高校3年生では、それに英文サマリーを付け加え、提言書として完成させる。以上が大きな流れで、高校2年生については大体順調に来ており、論文作成を行っているところです。高校3年生は提言書を完成させて、最終的にはループリックを実施しました。高校3年生のループリック分析については、あとでまた報告を致します。今年の研究開発班1班の特徴としましては、ここ数年課題探求の環境が良くなってきております。まず、スタッフの増員で、最初は社会科の数人で始めましたが、現在はスタッフが増え、現在はワーキンググループという形で教職員の1/3が何らかの形でGAコースに関わっていることになっています。特に英語科スタッフの多くがこの研究開発1班にもかかわっており、特に英語発表を行う、あるいはポスターや論文を英語化する際に複数の英語科教員の添削指導を受けることができ、これは数年前には考えられなかったくらい充実しております。

最近図書館の全面協力を得まして、毎回のグローバル探究の授業で図書館を贅沢に使用できる。それとパソコンについては、数年前までは調べ学習をしようと思えば、いわゆる情報教室のパソコンの取り扱いという状況がありましたが、今は1人1台パソコンを持っておりまして、いつでも調べ学習ができるというICTの環境の面でも充実してきています。当然生徒たちの満足度も上がってきていると分析しております。資料の7ページ以降は高校1年生の今年1年の取り組みについてです。多くの資料となりますので、詳細については控えさせていただき、ご一読いただければと思います。本来であれば、台湾研修の成果を加筆して校了ということになりますが、この部分については修正をしなければならないこととなります。高校2年生については、今日の時点では資料が出ておりませんが、今後パラオフィールドワークを含めた事業報告書が出てまいります。14ページからは高校3年生の取り組みの総括と16ページから17ページに高校3年生による自己評価ループリックの分析となります。

高校3年生については、ここ数年同じループリックを使用しております。高校1年生、2年生が使用するループリックとは少し異なっており、より詳細な自己評価表になっております。同じ質問項目で70期生から聞いておりますので、彼らの満足度が定点観測できることになっています。数字を見ていきますと、それぞれの項目でこれまでの3年生が5点満点で評価しておりまして、その平均点で見えております。それで見えておりますと、71期生の満足度が非常に高いことが各項目ともに見られますが、その期の生徒は少ない人数で11名しかおりませんでした。本当にGAコースをやりたいという生徒だけしかいないこととなり、単純な比較対象にはならないと思います。70期生と72期生はほぼ同人数で、72期生と比較していただければと思います。若干70期生に下回る数字の項目も出ていますが、全体的には70期生よりも高い満足度を示しております。コースをよく理解して入ってきている生徒でしたので、高い数字が出てくることは予想で来てはおりました。それであればもう少し高い数字が出てきても良いのですが、高校1年生では課題研究に対してどの生徒もしっかりと取り組んできましたが、高校2年生からは生徒によっては温度差が出てきて、受験勉強との両立の難しさという点が出てきています。高1での台湾研修で課題研究の面白さがわかり、それを追求しようとするややはり他の勉強との兼ね合いがあり、なかなかのめり込むまでにはいかない生徒も出てきております。そのことが、最後の満足度で数字となって出てきているのかと思われます。

全体的に見れば72期生は、対外的な発表でも高い評価を得ましたし、推薦入試でも結果を出した生徒も

多いので優秀な生徒が多かったのですが、それゆえにやはり受験の方も気になる、その両立に悩むという面もあったのではないかと思います。

やはりこのことはGAコースの人気の高まって、74期生、75期生と優秀な生徒がGAに来るという傾向にありますので、この問題は当然出てくるし、やはり高校2年生、3年生になった時に受験勉強とどのように両立させていくかということが課題になっていくと思います。その中で、高2、高3まで課題研究を熱心にやっていた生徒が、やはり受験でもよい成果を出してきているということが今後の励みになってくるのではないかと考えております。今年の成果は、本当に後輩のためになると思います。

○松下委員

ループリック評価は満足度調査のためにやっているのではなく、その項目に対してできたかどうかを自己評価するために行うこととなります。

○社会科主任（松村）

ループリックの各項目の内容については実施報告書には付けて出す予定ですが、ここには付けておらず申し訳ございません。高校3年生については自己評価したものを、平均値にして満足度を見ていることとなります。

18ページから20ページからは独自教材についてになります。昨年度オリジナル教材を作成しました。SGH3年目に独自教材を作ることを目標にしておりましたので作成し、それに基づいた授業も高校1年生の上半期の実践において使用しました。その際の分析となっております。オリジナル教材の真価が発揮されるのは、これを作成したスタッフから次の代のスタッフへと代替わりした時に、その教材をどう使用するかというところで現われると思います。また、その時にブラッシュアップする必要も生まれてくると思います。今年はオリジナル教材を使つての実践を行ったことが成果と言えると考えております。

〔研究開発2班の報告〕

○SGH推進部長（滝藤）

ここではグローバル英語表現について、ご報告させていただきます。これは学習指導要領にあります英語表現にSGHで行っていることがつながっていくようにカリキュラムを考えていったものです。高校1年生ではプレゼンを行うという目標がありますので、英語でのプレゼンをどのようにしていくかをメインにしながら英語表現の授業を進めていくこととなります。1学期ではプレゼンとはどういうものであるのかを理解させまして、2・3学期の授業実践におきまして日本語と英語によるプレゼンの練習を行いました。台湾研修がありますので、最初は台湾について調べそれを日本語でプレゼンを行い、それから課題研究で行っているテーマについて英語プレゼンを作成して行っていくこととなります。その際に、パワーポイントのスライドの作り方などを指導し、実際にできたものが資料の25ページから27ページにある通りです。ループリックの結果が出てきていますが、2018年度の結果は今の高2になります。高2の生徒諸君は、英語は不得意な生徒も多いものですからこのような結果になっていると考えられます。

○子安委員

この結果は何に由来するものなのでしょうか。

○工藤校長

コースの選択ですが、例えば24ページの下は2019年度ですが、これは現在の高1なのです。中3に上がるときのコース選択でGAの第1希望が殺到して、かなり上の成績で入ってきていますが、そうすると

やはり英語力にも自信があります。今の高2は人間味がすごくある生徒たちですが、必ずしも英語がそんなに得意ではなくて、第2希望で回ってきた生徒も入っているというのが現状です。今の高3は先ほども述べましたようにコース制が分った上で入ってきているのですが、実際にコース選択のタイミングのときに上級生がどういうモデルであるかということによって、これよりも上のときにブレがあって、どっちにしようかというときにまだ確定していない部分があります。ですから、今の高1から下はかなり固まってきたところなんです。

○松下委員

表の書き方の問題で、0のところもあれば空欄もありますので、きちんと0と記入していただきたいと思います。

○SGH 推進部長（滝藤）

承知致しました。

次に高校2年生の英語表現Ⅱについてですが、高1で行いましたプレゼンテーションからディベートなど自分の考えをまとめて発表すること、更には発表されたことに対して反駁もできるように基本的なスキルを習得していこうというのが高2での目標であります。特に、2・3学期の授業実践ですけれども、英語の1文1文を正確に書くことを主に授業を行いました。担当教員が添削したものをクラスで共有することで、生徒が英語を記述する際に注意すべきところを確認していきました。それに加えてディクテーションの活動を行い、何が英文記述で大切であるかを確認していきました。PREP法（主張・理由・例・再主張）で論旨をまとめるように指導もしてきています。授業時間数の少ない中でこれに取り組むことは難しいと思いますが、全体としては英語を用いて論理的に自分の考えを伝え、他人と考えを共有しながら1つの結論を導き出すなどの難しさを生徒は感じていました。パラグラフライティングやディスカッション、ディベートなど様々な活動を用いて、生徒達がPREP法を運用できるようになるための練習を行うことが必要であるということで、まだまだ我々が考えているところまでには達していないですけれども、これに向けで努力をしてきているところです。

高3のグローバルスタディーズにつきましては、これも英語科の教師が担当しておりますので出しておいたのですが、グローバルイシューについての多岐にわたるトピックについて実践的な英語力と思考力を要請するために、いろいろなソースから題材をとって英文を読み、問題点を早く見つけだし、英文の全体構造を早く読み取り理解していくことを目標に行いました。1つ1つの題材を丁寧に読みながらそれらのことを実践してきたこととなります。1つの例として、英文を掲載してあります。

〔指導・助言〕

○子安委員

コース制に対する希望の分布のようなものが、そのクラス編成に如実に出ていたなと思いますし、新しく中学に入ってこられる方はもっと学校の体制が分かって入ってこられるので、その辺は改善されていくのかなと思います。

台湾の件ですけれども、そもそもグローバルということが地球的なことです。また、歴史的に言うともまずナショナルがあって、ウェストファリア体制からフランス革命あたりの国家の政治体制があって、インターナショナルはどこからかというと、例えば赤十字社の戦争の後、倒れた人たちを国籍に関わらず助けるべきだという観点からその概念が出てきて、そして国境に関係なくいろいろな状況が出てきて、例えば大気汚染や海洋汚染もそうですし、金融の流れも非常にグローバルですし、そして今一番大きな問題は感染症の問題です。感染症のこれまでの一番の大きな問題はスペイン風邪で、5千万人からの人が亡くなっています。そう

いうものには1国だけでは追いつけない体制を作っていくことになるのですが、台湾へ行けなかったということ自体が学習であったのではないかと思います。そういう点で、我々日々グローバルな中で生きているということが体感できている、それをいかに学習に活かしていくかというか、それがたくさんあるというのがグローバルなのかなと思います。

○西口委員

今日は朝から見させていただいておりましたので、感想をお話しできたらと思います。午前の部の発表は、英語であれ日本語であれ調査がしっかりと行なわれておりました。もちろん、フィールドワークでインタビューをされた上での作成であったりして、調査がしっかりと行っていると思います。課題に対しても提案やその解決法などを発表するだけでなく、現地で何が受け入れられるかまで考えた上での内容であって良かったと思います。私の仕事の上でも、現地で何が受け入れられるなど、こちらが考えていたことと異なることを感じるがあるので、文化の違い、習慣の違いなどその辺のことはあるのかなと思います。午後のオンラインの講座を見ましたが、あれだけ長くの英語をしっかりと聴いていないと後で質問もできませんが、質問も多く出て有意義なものであったと思います。英語圏だけではなく、ガテマラのスペイン語圏のことについても取り組まれていて、グローバルに取り組まれているのだなと思いました。

私が日々感じていることですが、ローカルな場面でグローバルなことを感じるが多くなっています。その中で英語の重要性が増していることはよくわかっているのですが、多言語が非常に重要になってきていて、医療や保健の分野でもそうですし、行政や警察でもそうなのですが、そのような流れがあると思います。そういう中で日本語の在り方も非常に重要になってきています。要は『優しい日本語』というものです。日本在住の外国の方も多くなっている状況で、定住の外国人の方で日本語の方がわかる方が多くなっている状況だと思います。10年前のデータでも日本語のわかる定住者の方は60何パーセントいるとのことで、英語は40パーセントくらいしかいなかったりします。しかし、様々な所でサービスを提供する際の日本語は難解な日本語で書かれて、すごく分かりにくかったりします。日本語の在り方も、英語や多言語の対応と同様にグローバルなこととして考えていくのは、大きな問題というか視点であると思います。地域に住んでおられる外国人の方のリアルな声を拾ってみる、そういうことも今されているいろいろな取り組みの基盤にもなり得るようなことになると思います。

○松下委員

先週のアクティブラーニング研修会のときにGAコースの発表と今日はポスター発表を見させていただきました。最初にある生徒さんの発表を見て、ぜひ薬学部の特徴入試を受けるようにと言っていたのですが、実際にその生徒さんが合格できてとても嬉しいです。今、薬学部の先生方と一緒にアクティブラーニングを行っており、それをサポートしている仕事を大学ではやっているのです。特徴入試で入った学生は博士課程まで行って、研究者になってほしいという強い思いが先生方にもおありなので、たぶんその生徒さんであればその道を歩んでくれるのではないかなと大変期待しております。

今日のポスター発表で詳しく話を聴いたのが、ごみ問題で埋め立て地、つまり日本もパラオも大きさはだいぶ違います、同じ島国ということでそのごみ問題をどうするかということです。埋め立て地も限られている中でどうするかというものでした。あと災害時の水の確保をどうするかというのを聴きましたが、両方とも日本とパラオの比較研究の形で行っていて、今日はGL・GSもそれぞれ発表をやっていましたので、比較しながら見ていたしたが、SGHのポスター発表を見て良かったなと思うところがありました。SSHの中でもSGHの中でも研究目的、研究動機が書いてあって、仮説があって結論があるというのが多かったのですが、リサーチクエスションを書いていないものが結構ありました。本来は問いがあって、それに対して仮説があって方法があって結果があって、考察があって最後に結論となるのが論文にしてもポスターにし

でも1つの研究の型なので、これを高校生段階で身に着けていることは非常に良いことなのです。けれども、おそらく2/3のくらいはリサーチクエストがないものがあって、話を聞いたものにはそれがちゃんとあってよかったなと思っています。SSHとSGHを比べた場合は、致し方ないのですが、SGHの場合は英語で表現するところと、尚且つそこに研究的な面も入れなければならないというところがあるので、研究に関してはSSHほど徹底したものになっていないかなというところがあります。データの取り方、データの解釈では少し甘いところもあります。しかし、そこを英語で表現していることに頑張っているわけですし、先日のSGHのグループ発表は感染症の問題で、非常にタイムリーで良かったです。あれはエボラ出血熱の発表で、調べてうまく英語で纏めて発表という形で、論理的な構造はしっかりしたものになっていました。自分たちで実験を行ってというものではないのでオリジナリティーで勝負するということではないのですが、英語で論理的な構造を踏まえてちゃんと纏まった問いに対して答え発表する形になっていました。限られた時間で何に重きを置いて生徒たちが学んでアウトプットまでもっていくのかというのは、それぞれのコースによって違うと思いますが、SGHは英語に力を入れておられることが見ている者にもよくわかる成果となっていると思います。

○社会科主任（松村）

リサーチクエストについては課題探求の授業の中では、論文作成のメソッドとして行っております。しかし、今回高校2年生は1人1枚ポスターを作成することで精一杯の生徒もあり、そこまでなかなか手がまわらなかった者もありました。

〔来年度事業計画〕

○SGH推進部長（滝藤）

資料にありますのが、文部科学省に提出いたしました令和2年度実施計画書になります。その中で特に付け加えたものについてご報告したいと思います。

平成30年度、この事業の3年目に当たりますところから行っておりますことを、更に充実した形で実施していきたいと考えております。特に、これはで行ってございました、グローバルヘルス高校生フォーラムですが他校の生徒と成果発表を行っていくのですが、新年度の場合はそこに海外からの高校生も招待をして、他校の高校生、本校生とも加えた形で実施したいと考えているところです。

独自教材を更に充実したものに完成度をあげて、実践していくこと進めていきたいと考えております。

また、それと高大接続については、学校長も申し上げました通りなのですが、理系文系を問わず課題研究のテーマからその解決には、経済、政治、法律、社会制度など多方面のことが関係していることが分かり、その中でも自分の興味・関心のあることが学べる学部を持つ大学への進路選択を考えている生徒が、他のコースと比べ著しく多い傾向となっていると言えそうです。

簡略な報告になりますが、以上です。

〔謝辞〕

○工藤校長

松下先生よりSGHとSSHを比べたときにオリジナリティーのことでご指摘をいただきましたが、そのオリジナリティーをどのように担保するかということで、実はパラオフィールドワークがあります。フィールドワーク手法というのは、SSHは要するに実験室で実験をやるということですが、屋外でやることもあるのですが、パラオの場合はフィールドワークということで、今日の午前の発表でよく出ていたのですけれども、例えば実際にパラオの肥満問題を考えるときに、どのくらい実際に肥満があるのか、あるいはどのくらい肥満を許容しているのか、許容していないのか、それは本で調べても載っていないのです。その場合どう

するかというと、向こうの生徒にアンケートを取らせてくださいと言って、それも持って行って配って回収する。それはもちろんパラオ社会の一部にすぎないかもしれないけれど、少なくとも訪れたミンゼンティー高校とパラオ高校の高校生は肥満についてこういう意識を持っている、こういうスタイルがスマートであるという、スマートの意識も結構幅広くあるというのが今日わかりました。このようなものを出すと、おそらくどこにもないと思います。あるいはペリリュー島へ行って島民の方と伝統的医療がどれくらい有効なのか、近代的な医療をどのくらい受けているのか、ということインタビューして直接生の声を聴き取って、それを自分のレポートの中に入れるということで、自分の脚で稼ぎに行っておそらく他にはないものができる。それを更にロジカルにここで何を問うか、その結果が出たらそれをどう分析するかをはめ込んでいくと、他にはないものができていくと思います。

パラオは大阪大学のグローバルコラボレーションセンターの方に紹介していただいて、遠くもなく、安全で、親日であり、人口2万人で国家の体をなしている国で、高校生にも調査しやすいということで決定しました。最初生徒は何でパラオとっていましたが、今では世界遺産でもあり海のきれいなパラオに行くことを本当に楽しみにしています。

今日のオンライン講座ですが、第7回でスタンフォード大学医学部のポール・ワイズ先生が講師でした。この方はガテマラの方なのですが、ガテマラの山村部での小児医療を担当されておられて、お人柄的にも素晴らしい方で、高槻高校創立80周年記念式典で基調講演者にはこの先生をお招きして、21世紀に生きていく若者の世代にメッセージをお話していただこうと思っております。今日の講座が始まるのに先立ちそのようなことを生徒にも話し、講義を聴いてもらいました。

進学実績にこの事業が反映されてきたということで、非常にうれしく思っているところです。そこで今年は企画できるかなと思っていることがありまして、特色入試や推薦入試で道を切り開いた生徒を一堂に集めて座談会をやりたいと考えています。それで後輩に向けてのメッセージを、どういうところが大変であったとか、ここは良かったとか、勉強もやるけれどもこういうこともやるなどを先輩の言葉で伝えてもらいたいと思っています。

このように少しずつですが、先生たちのお陰で道が見えてきたかなと思っております。引き続きこれからも宜しくお願い致します。

【資料】 2. 高槻高等学校版 SGH ルーブリック等

年 組 番 氏 名	研究テーマ：							
評価基準	具体的特徴	1	2	3	4	5	自己評価	理由
課題設定	探求の手続きが分らず、探求を進められない	課題の設定が漠然としていて、課題設定の糸口が見えない。	課題設定は概略的だが、そこからどのように論証していくか明確でない。	自らの興味関心に基づいて具体的に課題を設定し、問題設定を行うことができる。	個々の探求の手続きを理解して探究活動を行っている	一連の探求の手続きを理解して探究活動を行っている	一連の探求の手続きを理解し、省察しながら探究活動を行っている	
	課題を的確に設定できたか	課題の設定が漠然としていて、課題設定の糸口が見えない。	課題設定は概略的だが、そこからどのように論証していくか明確でない。	自らの興味関心に基づいて具体的に課題を設定し、問題設定を行うことができる。	個々の探求の手続きを理解して探究活動を行っている	一連の探求の手続きを理解して探究活動を行っている	一連の探求の手続きを理解し、省察しながら探究活動を行っている	
	グローバルヘルスとの関連性が見いだせない。	グローバルヘルスとの関連性が見いだせない。	グローバルヘルスとの関連性が薄い。	グローバルヘルスとの関連性がある。	グローバルヘルスとの関連性がある。	グローバルヘルスとの関連性が高い。	グローバルヘルスと密接な関係がある。	
資料の収集・分析	先行研究を調べ、課題の背景や問題点を整理できているか	問題意識を持たず、資料収集の際に先行研究を無視していた。	先行研究は調べたが、自らの課題研究につながる資料収集とはならなかった。	先行研究を一通り調べることができた。自らの課題につながる意識でできた。	先行研究を丁寧に調べることでできた。	先行研究を丁寧に調べることができ、その研究に共通する課題を捉えられた。	先行研究を網羅的に調べあげ、先行研究にはない新たな学問的背景や問題点を発見し、課題研究につなげられた。	
	社会的科学的または統計的に資料の収集・分析ができているか	課題テーマに対してどのような方法で資料を収集していいかわからない。不十分な収集に終わっている。	必要資料を自分で考え収集し、分析しようとしているが、課題テーマへの理解が一貫しておらず、適当ではない。	資料の比較ができていて、データの出現を丁寧に確認している。	複数の資料を多角的に検討し、分析している。公的機関が発表しているデータを丁寧に確認し、中立的な視点で分析・整理できている。	複数の資料を多角的に検討し、分析している。公的機関が発表しているデータを丁寧に確認し、中立的な視点で分析・整理できている。	複数の資料を多角的に検討し、分析している。公的機関が発表しているデータを丁寧に確認し、中立的な視点で分析・整理できている。	
	信用に足る資料分析ができているか	資料の比較を全くせず、出典不明なデータを自分の都合のいいように分析している。	資料の比較ができていて、データの出現を丁寧に確認している。	複数の資料を多角的に検討し、分析している。公的機関が発表しているデータを丁寧に確認し、中立的な視点で分析・整理できている。	複数の資料を多角的に検討し、分析している。公的機関が発表しているデータを丁寧に確認し、中立的な視点で分析・整理できている。	複数の資料を多角的に検討し、分析している。公的機関が発表しているデータを丁寧に確認し、中立的な視点で分析・整理できている。	複数の資料を多角的に検討し、分析している。公的機関が発表しているデータを丁寧に確認し、中立的な視点で分析・整理できている。	
課題解決	課題解決案が創出できているか	課題解決案が創出されておらず、事実を切り貼りしただけに終わっている。	課題解決案は提出されているが、先行研究に使うばかりで、独自の視点が出ていない。	結論は構成されているように見えるが、一方的な主張に過ぎず、妥当性がない。	結論を構成し、妥当性のある形を導き出すことができた。	結論を構成し、妥当性のある形を導き出すことができた。	結論を構成し、妥当性のある形を導き出すことができた。	
	研究の結論が妥当であるか	結論が構成できていないため、妥当性もない。	結論は構成されているように見えるが、極めて抽象的な文章に終止している。	調べたデータに基づいて結論を導き出すことができた。	先行研究を複数比較したうえで、個人の結論と今後の課題を、自己の主張を織り交ぜて論述することができた。	先行研究を複数比較したうえで、個人の結論と今後の課題を、自己の主張を織り交ぜて論述することができた。	先行研究を複数比較したうえで、個人の結論と今後の課題を、自己の主張を織り交ぜて論述することができた。	
	結論に導き出された結果が妥当であるか	事実の羅列のみで、結論が形成できていない。	結論は書かれているように見えるが、極めて抽象的な文章に終止している。	調べたデータに基づいて結論を導き出すことができた。	先行研究を複数比較したうえで、個人の結論と今後の課題を、自己の主張を織り交ぜて論述することができた。	先行研究を複数比較したうえで、個人の結論と今後の課題を、自己の主張を織り交ぜて論述することができた。	先行研究を複数比較したうえで、個人の結論と今後の課題を、自己の主張を織り交ぜて論述することができた。	
課題発表	論文やプレゼンテーションを通じて発表できたか	支離滅裂な内容で、満足に発表できなかった。時間を無駄に浪費され、質疑応答の回答もまったく出なかった。	発表は滞りなく続けたが、内容に不備があり、素直な感想を述べたにもかかわらず、質疑応答の回答も十分でなかった。	発表は行うことができたが、問答を繰り返す時間が多く、意図的に結論が導き出されなかった。	原稿にほとんど目を通さなくて、時間を守り、丁寧に発表を行うことができた。質疑応答の回答を導き出すことができた。	原稿にほとんど目を通さなくて、時間を守り、丁寧に発表を行うことができた。質疑応答の回答を導き出すことができた。	原稿に頼らずその場の状況に応じた適切な発表を時間内に行うことができた。質疑応答も質問者の意図をよくとらえて、的確に対応することができた。	
	海外研修の成果	海外研修に消極的で、現地でもまったく学ぶことなく研修を終えた。自身の課題研究にも影響を及ぼすことはなかった。	海外研修を一通り修了したが、事前準備が不十分で自身の課題研究と結びつけることができなかった。	問題意識をもって海外研修に臨み、積極的に研修を行い修了することができた。課題研究に海外研修の経験を活かせることができた。	問題意識をもって海外研修に臨み、積極的に研修を行い修了することができた。課題研究に海外研修の経験を活かせることができた。	問題意識をもって海外研修に臨み、積極的に研修を行い修了することができた。課題研究に海外研修の経験を活かせることができた。	問題意識をもって海外研修に臨み、積極的に研修を行い修了することができた。課題研究に海外研修の経験を活かせることができた。	問題意識をもって海外研修に臨み、積極的に研修を行い修了することができた。課題研究に海外研修の経験を活かせることができた。

GAコース課題研究自己評価（高校3年）

SGH推進部

※GAコースの取り組みは、具体的には高1～高3の総合学習の時間の課題研究、海外研修（台湾・巴拉オ共和国）、各種講演・発表会を指します。広義の取り組みには、次世代リーダー養成プログラム（米国研修・英国研修）、スタンフォード大学オンライン講座、ベルリッツ英会話授業など本校の行う国際教育もありますが、このアンケートではGAコースの課題研究（狭義の取り組み）について質問します。

問1 課題研究では「グローバルヘルスの向上」をテーマとして探究活動を行いました。以下の5つの観点（調べ・発表・まとめ・提案・英語の活用）について、成果を発揮できたか自己評価してください。

①「調べ」

（研究テーマを自ら設定し、それを深く掘り下げ、多面的に日本以外の複数の国々の情報や事例を収集できたかどうか）

5	4	3	2	1
あてはまる	ふつう			あてはまらない

②「発表」

（パワーポイントやポスターに研究の要旨をまとめ、学内外での発表会で分かりやすく堂々と発表できたかどうか）

5	4	3	2	1
あてはまる	ふつう			あてはまらない

③「まとめ」

（研究した事例を論文・提言書という成果物にしっかりまとめることができたかどうか）

5	4	3	2	1
あてはまる	ふつう			あてはまらない

④「提案」

（グローバル 이슈について考える中で、他人の借り物の意見ではなく高校生らしい自分の提言、提案を見出すことができたかどうか）

5	4	3	2	1
あてはまる	ふつう			あてはまらない

⑤「英語の活用」

（英語で情報収集し、英語で資料を作成し、英語で発表できたかどうか）

5	4	3	2	1
あてはまる	ふつう			あてはまらない

問2 GAコースの課題研究での経験は、あなたにとって有用であったと思いますか。

5	4	3	2	1
あてはまる	ふつう			あてはまらない

問3 GAコースの課題研究は、あなたの卒業後の進路決定や将来の目標形成に影響を与えたと思いますか。

5	4	3	2	1
あてはまる	ふつう			あてはまらない

問4 課題研究を通じて、自己の変化や成長を実感できたと思いますか。

5	4	3	2	1
あてはまる	ふつう			あてはまらない

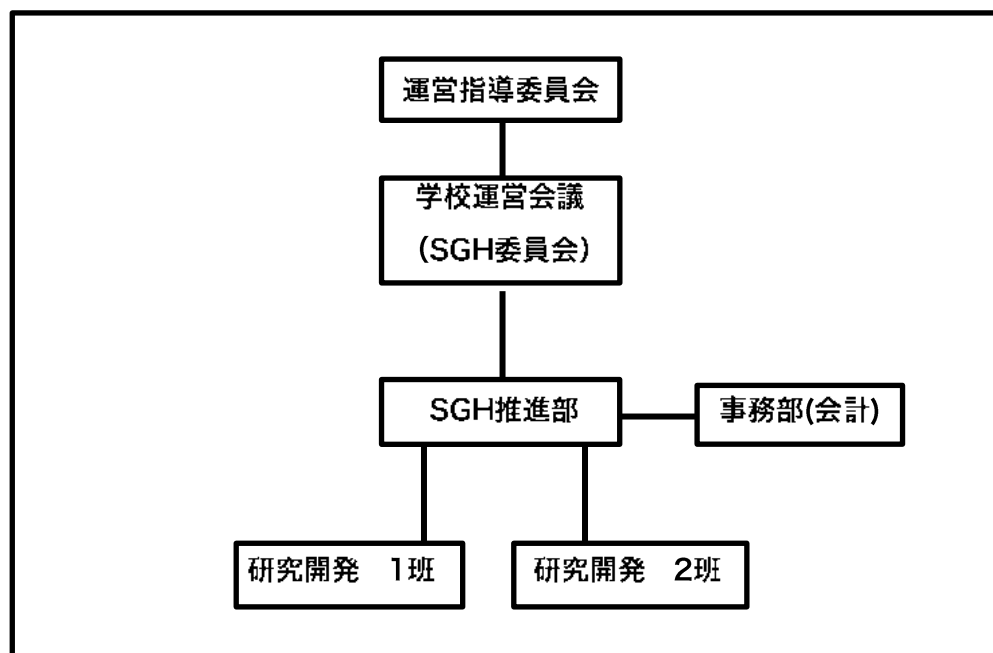
質問は以上です。

H	No.	Name		プレゼンターマ:					自己 評価	理 由
		評価基準	具体的観点	1	2	3	4	5		
英語表現		評価観点 プレゼンターマ選定の について	課題を的確に選定 できたか。	課題の設定が偶然としてい て、課題設定の糸口が見え ない。	課題設定は個別的だが、そ こからどのように論証して いくかが明確でない。	自らの興味関心に基づいて 具体的に追加設定し、問題 提起を行うことができる。	自らの課題の意義が明確 で、プレゼンを通してそれ を伝えることができる。	問題提起が練り上げられ、 綿密な論理性の元でそれを 理解しやすく伝えることが できる。		
			語彙・文法・語法	語彙力がなく、文法・語法の 運用力もなく、コミュニケ ーションが全く成立してい ない。	語彙力が乏しく、使用語彙 にも限界があり、さらに文 法・語法上の誤りも多くコ ミュニケーションを成立さ せるにはやや困難である。	語彙力がやや低く、使用語 彙も限られる。文法・語法上 の多々あるが何とかコミュ ニケーションは成立する。	語彙力には特に問題はな く、使用語彙もやや限られ る。文法・語法上の誤りも少 しあるがコミュニケーショ ンに支障はない。	語彙力も豊富で、場面に応 じて適切に使用語彙を使い 分けることができ、文法・語 法についても運用上申し分 ない。		
			構成力 (論理性・結束性)	自分の考えを伝えることが ほとんどできていない。コ ミュニケーション不全	自分の考えを伝えるうえで は、論理性には欠けるが、何 とか断片的な情報を伝える ことはできている。	自分の考えを最小限の情報 ではあるが、論理的に、相手 に伝えようとする意欲があ る。	やや不自然な点はあるが、 自分の考えをある程度論理 的に結束性を持って、伝え ることができる。	自分の考えを論理的に結束 性を持って、相手を納得さ せることができるように的 確に伝えることができる。		
			発音・抑揚	全くコミュニケーショ ンが成立しない。	不適切な部分が多く、コ ミュニケーションを成立さ せるにはやや困難である。	やや不適切な部分がある が、おおむね自然であり、コ ミュニケーションは成立す る。	適切であり、コミュニケー ションを円滑に行うことが できる。	不自然な部分が全くなく、 ネイティブ並みのコミュニ ケーションを行うことがで きる。		
		内 容		プレゼンの内容の知識に乏 しく内容に関する質問に答 えられない。	プレゼン内容の知識に自信 はないが、初歩的な質問に は答えられる。	プレゼン内容についてすべ て答えられるが、更に詳しく 説明できない。	プレゼン内容の知識を十分 に実証し、質問に答えるこ とができる。	プレゼン内容の知識を十分 に実証し、質問に答えるこ とができさらに詳しく答え ることができる。		
プレゼンテーション について		プレゼン用ツール 及び資料		文字のみで図表を使ってい ない。	図表を使っているが、プレ ゼンの内容を支持していな い。	プレゼン内容を支持する図 表を使っている。	プレゼン内容を支持し補強 する図表を使っている。	プレゼン内容を支持し補強 する図表を使い、ツールの 調査・活用にも習熟してい る。		
		話し方		声が聞きずらく、相手に伝 える意思が感じられない。	声が聞きずらく、相手に伝 わりにくい。	明瞭な声で、相手に伝える 意思を持っている。	明瞭な声で、相手に伝える 意思を持ち、メリハリのあ る話し方である。	明瞭な声で、相手に伝える 意思を持ち、メリハリのあ り、適切な間のある話し方 である。		
		動 作		資料を読むだけで、アイコ ンタクトがない。	資料を読みながら、アイコ ンタクトをとる。 が、ほとんど資料を見てい る。	よくアイコントクトをとる が頻繁に資料に戻る。	しっかりとアイコントクト を取りほとんどの資料を見な い。	アイコントクトを取り、適 切にボディランゲージもと れる。		

H - No. Name								
評価基準								
評価観点	具体的観点	1	2	3	4	5	自己評価	理由
英語表現	発表するテーマについて、多角的に考え、問題意識を持って取り組んだか。	テーマについて、背景知識もなく、積極的にそのテーマについてを考えるとする姿勢が感じられない。	テーマについて、背景知識は少ないが、何とかそのテーマについてを考えるとする姿勢は感じられる。	テーマについて、背景知識もあり、そのテーマについて多角的な観点から考えよとする姿勢が感じられる。	テーマについて、背景知識もかなりあり、そのテーマについて様々な観点から考え、さらに情報を収集しよとする姿勢が感じられる。	テーマについて、背景知識も豊かで、そのテーマについて様々な観点から考え、積極的に情報を収集しよとする姿勢が感じられる。		
	語彙・文法・語法	語彙力がなく、文法・語法の運用力もなく、コミュニケーションが全く成立しない。	語彙力が乏しく、使用語彙にも限界があり、さらに文法・語法上の誤りも多くコミュニケーションが成立させるにはやや困難である。	語彙力がやや低く、使用語彙も限られる。文法・語法上の多々あるが何とかコミュニケーションは成立する。	語彙力には特に問題はななく、使用語彙もやや限られる。文法・語法上の誤りも少しあるがコミュニケーションに支障はない。	語彙力も豊富で、場面に応じて適切に使用語彙を使い分けることができ、文法・語法についても運用上申し分ない。		
	構成力 (論理性・結束性)	自分の考えを伝えることがほとんどできていない。コミュニケーション不全。	自分の考えを伝えるうえで、論理性には欠けるが、何とか断片的な情報を伝えることはできている。	自分の考えを最小限の情報ではあるが、論理的に、相手に伝えようとする意欲がある。	やや不自然な点はあるが、自分の考えをある程度論理的に結束性を持って、伝えることができる。	自分の考えを論理的に結束性を持って、相手に納得させることができるように的確に伝えることができる。		
プレゼンテーションについて	発音・抑揚	全くコミュニケーションが成立しない。	不適切な部分が多く、コミュニケーションを成立させるにはやや困難である。	やや不適切な部分があるが、おおむね自然であり、コミュニケーションは成立する。	適切であり、コミュニケーションを行うことができる。	不自然な部分が全くなく、ネイティブ並みのコミュニケーションを行うことができる。		
	話し方や動作が適切であるか	声が聞きえずらく、相手に伝わる意思が感じられない。原稿を渡すだけで、アイコンタクトがない。	声が聞きえずらく、相手に伝わりにくい。時折アイコンタクトをとるが、ほとんど原稿を見ている。	明瞭な声で、相手に伝わる意思を持っている。よくアイコンタクトをとるが頻繁に原稿に戻る。	明瞭な声で、相手に伝わる意思を持ち、メリハリのあつた話し方である。しっかりとアイコンタクトを取り、ほとんど原稿を見ない。	明瞭な声で、相手に伝わる意思を持ち、メリハリのあつた話し方である。アイコンタクトを取り、適切にボディランゲージもとれる。		
ディベートに向けた基本的スキルの習得について	相手の主張に論理的かつ説得性を持って反論する力	相手の主張を全く理解できていないため、反論できない。	相手の主張を理解することはできるが、適切に反論することができない。	相手の主張を理解し、何とか必要最低限の情報を相手に反論できる。	相手の主張を理解し、やや不適切な部分はあがるが相手に反論できる。	相手の主張を理解し、著早く的確に相手に反論できる。		

【資料】 3. 本校SGH 事業の研究開発組織

本校SGH 事業の研究開発組織



(1) 運営指導委員会

SGH の企画、立案、運営に関し、第3者の委員が専門的助言と指導を行う

(2) SGH 委員会（※「学校運営会議」の一部として実施）

校長、教頭、各教科主任、各校務分掌部長を構成員とする月例の「学校運営会議」において「SGH 委員会」を設定し、SGH 事業の企画実施にあたり、他行事との調整、終了したSGH 事業に対する評価と改善点等を集約する

(3) SGH 推進部

毎週、定例会議を開き、SGH 事業の企画・立案・運営を行う

（構成：国際教育部教員、社会科教員、英語科教員 他）

(4) 研究開発 1班

研究開発課題Ⅰを担当 …「課題研究」を中心とする教育課程の開発

（構成：社会科主任（班長）、社会科教員、英語科教員、情報科教員 他）

(5) 研究開発 2班

研究開発課題Ⅱを担当 …「課題研究」外のグローバル人材育成のための教育課程の開発や学校行事の研究

（構成：英語科主任（班長）、英語科教員、国語科教員 他）

【資料】 4. 教育課程について

教育課程及び教科科目単位数（GAコース）

平成29年度入学生

教科等	類 型		GA	GA文系		GA理系		合 計	備 考
	科 目 (学)…学校設定科目		1 年	2 年	3 年	2 年	3 年		
国 語	国 語 総 合		5					5	
	現 代 文 B			2	4	2	2	4～6	
	古 典 B			3	3	3	3	6	
	(学) 古 典 特 論				2			2	
地 理 歴 史	世 界 史 A					2		2	2年文系は世界史B必須で1科目選択。 2年理系は世界史A必須で1科目選択。日本 史B・地理Bは3年で引き続き履修する。 3年文系は2科目選択。 3年理系は1科目選択。
	世 界 史 B			4	3			4～7	
	日 本 史 A								
	日 本 史 B			4	3	3	3	3～7	
	地 理 A			選(4)		選(3)	選(3)		
	地 理 B			4	3	3	3	3～7	
公 民	現 代 社 会		2					2	
	倫 理								
	政 治 ・ 経 済								
数 学	数 学 I		3					3	
	数 学 II			3	2	4		4～5	
	数 学 III						6	6	
	数 学 A		2					2	
	数 学 B			3	3	3		3～6	
	(学) 数 学 特 論						2	2	
理 科	物 理 基 礎		2	2				2～4	学校設定科目 ・SS生命科学Iは生物基礎の代替 ・SS生命科学IIは生物の代替 ・SS地球科学は地学基礎の代替 2年文系は2科目選択。ただし、物理基礎・ SS生命科学Iという組み合わせを除く。 2年理系は化学基礎と1科目選択。 3年文系は2科目選択。 3年理系は化学と1科目選択。
	物 理					3	4	7	
	(学) 物 理 演 習				2			2	
	化 学 基 礎			2		3		3～4	
	化 学						4	4	
	生 物 基 礎								
	(学) S S 生 命 科 学 I		2	2	選(4)			2～4	
	生 物								
	(学) S S 生 命 科 学 II					3	選(3)	4	
	(学) 生 物 演 習				2	選(4)		2	
	地 学 基 礎								
保 健 体 育	体 育		2	2	3	2	3	7	
	保 健		2					2	
芸 術	音 楽 I		1	1		1		2	1年・2年で1科目選択。科目は連続して履 修すること。
	美 術 I		1	選(1)		1	選(1)	2	
	工 芸 I		1	1		1		2	
	書 道 I		1	1		1		2	
外 国 語	コミュニケーション英語 I		4					4	学校設定科目 ・グローバル英語表現 I は英語表現 I の代替 ・グローバル英語表現 II は英語表現 II の代替
	コミュニケーション英語 II			4		4		4	
	コミュニケーション英語 III				5		5	5	
	(学)グローバル英語表現 I		2					2	
	(学)グローバル英語表現 II			2	2	2	2	4	
	(学)グローバル時事英語		1					1	
家 庭	家 庭 基 礎		2					2	
情 報	社 会 と 情 報		2					2	
の な 総 時 学 合 間 習 的	グ ロー バ ル 課 題 研 究		2	2	1	2	1	5	
	グ ロー バ ル ス タ デ ィ ー ズ		1	1	1	1	1	3	
特 別 活 動	ホ ー ム ル ー ム 活 動		1	1	1	1	1	3	
学 校 外 学 修	大 学 講 座			1 選(0～2)	1 選(0～1)	1 選(0～2)	1 選(0～1)	0～2	・大阪大学公開講座（2年） ・スタンフォード大学オンライン講座（2 年・3年）
	高 大 連 携 S S 探 究			1 選(0～1)	1 選(0～1)	1 選(0～1)	1 選(0～1)	0～1	
	ボ ラ ン テ ィ ア 活 動			1 選(0～1)	1 選(0～1)	1 選(0～1)	1 選(0～1)	0～1	
単 位 数 合 計			36	36～39	37～40	36～39	37～40	109～113	

教育課程及び教科科目単位数（GAコース）

平成30年度入学生

類 型		G A	G A 文系		G A 理系			備 考		
教科等	科 目 (学)…学校設定科目	1 年	2 年	3 年	2 年	3 年	合 計			
国 語	国 語 総 合	5					5			
	現 代 文 B		2	4	2	2	4～6			
	古 典 B		3	3	3	3	6			
	(学) 古 典 特 論			2			2			
地 理 歴 史	世 界 史 A				2		2	2年文系は世界史B必須で1科目選択。 2年理系は世界史A必須で1科目選択。日本 史B・地理Bは3年で引き続き履修する。 3年文系は2科目選択。 3年理系は1科目選択。		
	世 界 史 B		4	3			4～7			
	日 本 史 A									
	日 本 史 B		4	3	3	3	3～7			
	地 理 A		選(4)		選(3)	選(3)				
	地 理 B		4	3	3	3	3～7			
公 民	現 代 社 会	2					2			
	倫 理									
	政 治 ・ 経 済									
数 学	数 学 I	3					3			
	数 学 II		3	2	4		4～5			
	数 学 III					6	6			
	数 学 A	2					2			
	数 学 B		3	3	3		3～6			
	(学) 数 学 特 論					2	2			
理 科	物 理 基 礎	2	2				2～4	学校設定科目 ・SS生命科学Ⅰは生物基礎の代替 ・SS生命科学Ⅱは生物の代替 ・SS地球科学は地学基礎の代替 2年文系は2科目選択。ただし、物理基礎・ SS生命科学Ⅰという組み合わせを除く。 2年理系は化学基礎と1科目選択。 3年文系は2科目選択。 3年理系は化学と1科目選択。		
	物 理				3	4	7			
	(学) 物 理 演 習			2			2			
	化 学 基 礎		2	2	3		3～4			
	化 学					4	4			
	生 物 基 礎									
	(学) S S 生 命 科 学 Ⅰ	2	2	選(4)			2～4			
	生 物									
	(学) S S 生 命 科 学 Ⅱ				3	選(3)	4		選(4)	7
	(学) 生 物 演 習			2	選(4)				2	
	地 学 基 礎									
(学) S S 地 球 科 学		2	2	3			3～4			
地 学					4		4			
保 健 体 育	体 育	2	2	3	2	3	7			
	保 健	2					2			
芸 術	音 楽 I	1	1		1		2	1年・2年で1科目選択。科目は連続して履 修すること。		
	美 術 I	1	選(1)	1	選(1)		2			
	工 芸 I	1	1		1		2			
	書 道 I	1	1		1		2			
外 国 語	コミュニケーション英語Ⅰ	4					4	学校設定科目 ・グローバル英語表現Ⅰは英語表現Ⅰの代替 ・グローバル英語表現Ⅱは英語表現Ⅱの代替		
	コミュニケーション英語Ⅱ		4		4		4			
	コミュニケーション英語Ⅲ			5		5	5			
	(学)グローバル英語表現Ⅰ	2					2			
	(学)グローバル英語表現Ⅱ		2	2	2	2	4			
	(学)グローバル時事英語	1					1			
家 庭	家 庭 基 礎	2					2			
情 報	社 会 と 情 報	2					2			
の な 総 時 学 合 間 習 的	グ ロー バ ル 課 題 研 究	2	2	1	2	1	5			
	グ ロー バ ル ス タ デ ィ ー ズ	1	1	1	1	1	3			
特 別 活 動	ホ ー ム ル ー ム 活 動	1	1	1	1	1	3			
学 校 外 学 修	大 学 講 座		1 選(0～1)	1 選(0～1)	1 選(0～1)	1 選(0～1)	0～1	・スタンフォード大学オンライン講座（2 年・3年）		
	高 大 連 携 S S 探 究	1 選(0～1)	1 選(0～1)	1 選(0～1)	1 選(0～1)	1 選(0～1)	0～1			
	ボ ラ ン テ ィ ア 活 動	1 選(0～1)	1 選(0～1)	1 選(0～1)	1 選(0～1)	1 選(0～1)	0～1			
単 位 数 合 計		36～38	36～39	37～40	36～39	37～40	109～112			

教育課程及び教科科目単位数（GAコース）

平成31年度以降入学生

類 型		G A	G A 文系		G A 理系		合 計	備 考
教科等	科 目 (学)…学校設定科目	1 年	2 年	3 年	2 年	3 年		
国 語	国 語 総 合	5					5	
	現 代 文 B		2	4	2	2	4～6	
	古 典 B		3	3	3	3	6	
	(学) 古 典 特 論			2			2	
地 理 歴 史	世 界 史 A				2		2	2年文系は世界史B必須で1科目選択。 2年理系は世界史A必須で1科目選択。日本 史B・地理Bは3年で引き続き履修する。 3年文系は2科目選択。 3年理系は1科目選択。
	世 界 史 B		4	3			4～7	
	日 本 史 A							
	日 本 史 B		4	3	3	3	3～7	
	地 理 A		選(4)		選(3)	選(3)		
	地 理 B		4	3	3	3	3～7	
公 民	現 代 社 会	2					2	
	倫 理							
	政 治 ・ 経 済							
数 学	数 学 I	3					3	
	数 学 II		3	2	4		4～5	
	数 学 III					6	6	
	数 学 A	2					2	
	数 学 B		3	3	3		3～6	
	(学) 数 学 特 論					2	2	
理 科	物 理 基 礎	2	2				2～4	学校設定科目 ・ S S 生命科学 I は生物基礎の代替 ・ S S 生命科学 II は生物の代替 ・ S S 地球科学は地学基礎の代替 2年文系は2科目選択。ただし、物理基礎・ S S 生命科学 I という組み合わせを除く。 2年理系は化学基礎と1科目選択。 3年文系は2科目選択。 3年理系は化学と1科目選択。
	物 理				3	4	7	
	(学) 物 理 演 習			2			2	
	化 学 基 礎		2	2	3		3～4	
	化 学					4	4	
	生 物 基 礎							
	(学) S S 生 命 科 学 I	2	2	選(4)			2～4	
	生 物							
	(学) S S 生 命 科 学 II				3	選(3)	4	選(4)
	(学) 生 物 演 習			2	選(4)			2
	地 学 基 礎							
保 健 体 育	体 育	2	2	3	2	3	7	
	保 健	2					2	
芸 術	音 楽 I	1	1		1		2	1年・2年で1科目選択。科目は連続して履 修すること。
	美 術 I	1	選(1)	1	選(1)		2	
	工 芸 I	1	1		1		2	
	書 道 I	1	1		1		2	
外 国 語	コミュニケーション英語 I	4					4	学校設定科目 ・ グローバル英語表現 I は英語表現 I の代替 ・ グローバル英語表現 II は英語表現 II の代替
	コミュニケーション英語 II		4		4		4	
	コミュニケーション英語 III			5		5	5	
	(学) グローバル英語表現 I	2					2	
	(学) グローバル英語表現 II		2	2	2	2	4	
	(学) グローバル時事英語	1					1	
家 庭	家 庭 基 礎	2					2	
情 報	社 会 と 情 報	2					2	
の な 総 時 探 合 間 究 的	グ ロー バ ル 課 題 研 究	2	2	1	2	1	5	
	グ ロー バ ル ス タ デ ィ ー ズ	1	1	1	1	1	3	
特 別 活 動	ホ ー ム ル ー ム 活 動	1	1	1	1	1	3	
学 校 外 学 修	大 学 講 座		1 選(0～1)	1 選(0～1)	1 選(0～1)	1 選(0～1)	0～1	・ スタンフォード大学オンライン講座（2 年・3年）
	高 大 連 携 S S 探 究	1 選(0～1)	1 選(0～1)	1 選(0～1)	1 選(0～1)	1 選(0～1)	0～1	
	ボ ラ ン テ ィ ア 活 動	1 選(0～1)	1 選(0～1)	1 選(0～1)	1 選(0～1)	1 選(0～1)	0～1	
単 位 数 合 計		36～38	36～39	37～40	36～39	37～40	109～112	

2019年度 中学校 教育課程表

区 分		第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年
各教科の 授業時数	国 語	160	140	140
	社 会	105	105	140
	数 学	210	210	210
	理 科	140	140	140
	音 楽	45	35	35
	美 術	45	35	35
	保 健 体 育	105	105	105
	技 術 ・ 家 庭	70	70	35
	外 国 語	280	280	280
道 徳 の 授 業 時 数		35	35	35
総合的な学習の時間の授業時数		50	70	70
特 別 活 動 の 授 業 時 数		35	35	35
総 授 業 時 数		1280	1260	1260

**平成28年度 スーパーグローバルハイスクール
研究開発実施報告書〈第4年次〉**

発行日 2020年 3 月 31日

編集 高槻高等学校・中学校 SGH推進部

発行者 学校法人 大阪医科薬科大学

〒569-8505 大阪府高槻市沢良木町2-5

TEL : (072) 671- 0001

FAX : (072) 671-0081